
Atonement

T α k α

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A t o n e m e n t

【Nコード】

N 0 7 3 7 U

【作者名】

T a k a

【あらすじ】

人類とポケモン達が文明を築き上げた世界アルセリア――
二つの大戦を経て世界には平和が訪れ、人間とポケモンは落ち着いた日々を過ごしていた。

だが、そんな平和な日々を脅かす存在が、水面下で動き始めていた。
神々や、それに仇なす者。
そして、眷族と呼ばれる存在。

彼らが求める結末は、何なのか――

中世〜近世の文明が築かれた世界を舞台としたファンタジーです。
気軽に読んでいただけたらなと思います。

擬人化要素を多く含むため、苦手な方の閲覧はご遠慮ください。
ゲーム上のシステム（属性の相関や、性格によるステータス補正など）は出てきませんので、ご了承ください。また、完全なオリジナルの世界となっているため、アニメや漫画の登場人物は出てきません。

第1話 昼下がりの若者達

インフィニティア大陸中北部に位置する国家、メルクリア王国の西部の国境付近に、シエルクという都市がある。四方を堅牢な壁により囲まれているのは、隣国ルインスタイル共和国との冷戦状態にあった頃の名残だろう。

特に大きい都市ではないものの、ルインスタイル共和国との国境に位置しているため、訪れる者は多い。特に、国交が回復してからは二国間の貿易の拠点として非常に重要な都市となっている。

国境警備隊と有志の団体が協力して見回っているため、治安も非常に安定しているのが特徴だ。ここ数ヶ月の犯罪も、数える程度しか起きていない。

そんな町の一角にある、小さな食事処《鉄蛇亭》。少し寂れており、木でできた看板の一部は腐食しており、窓ガラスのヒビもテープで無理矢理補強してある。木造の建物自体にも年季が入っているのが解るが、数ヶ月間このままの状態が続いていることから、改装する気が無いのが窺える。商売つ気が無いのかもしれない。

店の扉が開き、上につけてあった飾りが乾いた音を立てて揺れた。

「んだよ、お前からか……」

グラスを拭きながら、エプロンを着た中年の男が面倒くさそうに溜息をついた。店主のようだが、他に店員らしき人物がいないのを見ると、どうやら一人で店を切り盛りしているらしい。

服の上からでも、筋骨隆々とした身体つきが窺え、顔立ちからは豪快さが窺える。もし知らない者が彼が喫茶店の店主だと聞くと、驚くに違いない。身の丈ほどある大剣を背負って、傭兵として敵と戦っているようなイメージが強いのだ。

彼の視線の先には、二人の男女がいた。

男の方は肌が色白で少し幼さの残る顔つきだ。まだ少年としての幼さが抜けきっていない印象を受けるが、何処か達観した雰囲気も

あるために、子供らしさはない。肩まで伸ばされた黒髪は、伝統工芸の職人でも作りだせないような美しい光沢を放っている。

服装は至って普通である。黒のパーカーに、デニム生地のスボン。あまり派手さは無いものの、特におかしな格好ではない。年頃の若者が好みそうな格好ではあるが、着こなし方はラフで、悪く言えば少しだらしない。

「悪い、バウアーのオッサン。邪魔だったか？」

口は悪いがやや高めの澄んだ声で、若い男は店主、バウアーに言った。

「いや、そういうわけじゃないけどよ。どうせなら、乳のでつけえ美女に来てもらいたいんだがな」

つまらなさそうな表情で、バウアーは肩を竦める。

「こんな明るい時間からボロ店に来る女なんて、そうはいねえよ」

「夜までお預けつてか。ところで、仕事は終わったのか？」

「ん、ああ。夜から一仕事あるんだけどな。今日は帰れそうにないぜ」

「そうかい。いつも大変だな」

言って、アイスティーの注がれたグラスを差し出した。若い男がそれを受け取ると、傍らの少女に手渡した。

「ありがと」

少女は素っ気ない態度でグラスを受け取った。

真直ぐに切り揃えた青い髪は何処か幼さを感じさせるが、その表情は凜としている。体型はやや小柄で、胸や腰のラインは少女らしさが抜け始めている。発展途上といったところか、大きさはやや控えめといったところだ。彼女にはまだ、少女という言葉の方がまだ相応しいだろう。

胸元に濃紺のリボンが揺れる純白のブラウスに、青色のロングスカート。そして、小さな皮靴と、年頃の少女にしてはやや落ち着いた印象だ。本人に自覚があるかどうかは解らないが、大人らしさを出すために少し背伸びをしているようにも見えて、微笑ましくもあ

る。

可愛らしい少女だが、彼女は人間ではない。姿形は人間のそれではあるが、兎の耳のように頭の上にピンと突き出した澄んだ水色の長い耳を見れば、誰もが解るだろう。

『ポケモン』と呼ばれる存在である。

謎多き生命体だ。内には人間には有り得ない力を秘めており、例えば火炎や水流を操ったり、激しい衝撃により大地を揺らしたり、疾風の如く飛翔したりと、様々な能力を有している。当然それは種によって異なり、数百種もの種族からなっているとされている。この少女は、その数百種もの種族のうちのひとつ、グレイシアと呼ばれる種だ。

そして、人間の形をしているものの、それとはかけ離れた特徴のある、その姿形だ。普通、ポケモンは人間とは程遠い。魔物といったら語弊があるが、そのような姿をしている。しかし、中には人間の姿形を取り、ポケモンの一部の特徴が表れている個体も存在する。此処にいる少女も、その一人だ。

デミ・ヒューマン
亜人種と呼ばれる個体だ。人間たちの生活に順応すべく、自らの意思で人の姿形を取っているのだ。

「んで、この時間帯に帰ってきたってことは飯だろ？ まあ、すぐに作っちゃうから座ってな」

彼に言われるまま、若い二人はカウンターの席に着く。ニツと歯を見せて笑うと、バウアーは厨房へと入っていった。

壁の時計を見ると、午後二時を回ったところだ。昼食を取るにしてい、やや遅めと言ったところだろう。尤も、彼らの職業上、それは仕方のないことである。

「ハーヴィ」

少女が、静かに口を開いた。ハーヴィと呼ばれた青年は、グラスを置いて応える。

「何だ、れいしゃ 零紗」

「さっき情報を集めていたら妙な噂を聞いたんだけど……《タルタ

ロス》の動きが活発になってきているらしいわ」

「ああ、俺も聞いたよ。十数年まえにあった邪神大戦の時に暗躍した奴らだろ？ 壊滅したって聞いてたけど、各地で動いているらしいな」

《タルタロス》——大戦時から暗躍していたと云われている邪教団である。大陸では邪神とされているポケモンを崇拜し、その復活を望んでいると云われているが——

その邪神自体が人々の間では伝説に過ぎないのだ。しかし、信仰の厚い《エリュシオン》教徒や古き伝説を語る老人達の間では、彼らの動きを恐れている者が多い。特に、教圏であるメルクリアの中心部では、正規軍が動き始めているらしい。

「何か引つかかるのよね……」

「町の中は安全だろうが、辺境に仕事に行くときは、気を付けた方がいいだろうな」

暫くすると、厨房からバウアーが出てきた。彼の持っている大皿には軽く五人前はあるだろうと思われるサンドイッチが盛られており、別の皿には鳥の唐揚げとフライドポテトが溢れんばかりに盛られている。

とても、二人で食べきれる量では無いだろう。その上、このハーヴィと澪紗は、線の細さから推測できるように、あまり食べるようなイメージが無く、少食であるイメージの方が強い。そのためか、大量の料理を目の前に、二人は啞然としていた。

「えっと、オッサン。流石にこの量はねえよ……」

「……こんなに食べられないわよ」

「ああ、俺もこれから昼飯なんぞな。ついでに一緒に食っちゃおうかと」

そう言うや否や、バウアーはサンドイッチを大きな手でひよいと掴むと、思いきり齧り付いた。彼の外見のイメージにぴたりと合う、豪快な食べ方である。二人は彼の食べっぷりをよく見ているのだが、やはり驚きは隠せないようだ。

バウアーが筋肉質な手をサンドイッチに伸ばそうとした時、店の扉が開き、一人の少年が入ってきた。

手入れされていることが窺えるダークブラウンの髪を束ね、銀製の鎖帷子に身を包んでいる。鎖帷子の上には空色の外套を羽織っているものの、その出で立ちが街——それも昼下がりの喫茶店には不釣り合いにも程がある。

年齢はハーヴィより若いだろう。彼よりも少年としての幼さがハッキリと出ている。中性的な顔立ちであるが、パツチリとした緋色の瞳が彼の覇気を感じさせる。外套の乱れもなく、真面目で誠実そうな雰囲気も窺える。しかし、今まで全力で走ってきたのか、少し息が上がっている。

「んお、こんな時間に珍しいな、シデン」

「はあ……はあ……、取り込み中にすみません！ ジュノン隊長を見ませんでしたか？」

呼吸を落ち着かせながら、シデンと呼ばれた少年はバウアーに尋ねた。どうやら、人探しをしているらしい。

「いや、見てねえが……。どうした、あいつまたサボってんのか？」
バウアーは特に驚いた様子はなく、むしろ「ああ、またか」といった感じで半ば呆れていた。

「集合時間がもうすぐなのに、何処に行ったのやら。あの人はいつも……」

「まあ、あいつも女だからなあ。商業区で買い物でもしてんじゃねえか？ あまり堅いこと言わずに、多めにみてやれよ。ガキのうちから堅いこと言つてると禿げるぜ？」

助言しつつも軽い冗談を言うのが、バウアーらしい。しかし、シデンはこの世の終わりだと言わんばかりの絶望的な表情で、頭を抱えている。外見から窺えるように、本当に真面目なのだろう。

「まだ、商業区をすべて回ったわけではないので、探してみます！ お忙しいところ、失礼致しました！」

ビシッと敬礼を決めると、歳の割に気苦労の多さが窺える少年は

ダッシュで店を出ていった。相当慌てているのか、露店に激突しそうになっていたのが窓の外からでも見る事ができた。

一体何があったのか。ハーヴィはサンドイッチを手に持ったまま茫然としていた。漑紗は特に気にした様子はなく、もきゅもきゅと食事を楽しんでいるようだ。

「なんなんだ、今の騒々しい奴は？」

バウアーに嵐のように過ぎ去っていった少年について話しかけると、ハーヴィはサンドイッチを一口だけ齧り、飲みこんだ。

「ああ、メルクリア王国の《リヒテン・フリーゲル聖光の翼》の騎士だよ。良い奴なんだが、真面目すぎんだよなあ……」

「真面目すぎというより、世渡りが下手そうな感じだな。ありゃあ、近いうちに上司や出世を妬む同僚からいじめられるぜ」

初対面——というよりも、軽く見かけただけの人物を皮肉ってしまつのは、彼の癖である。そのためか、過去に何度か見ず知らずの人間と争いを起こしてしまったこともあるらしい。

「あなたと違ってしっかりとるんじゃない？」

「悪かったな」

漑紗の突っ込みに、ハーヴィは少しばつが悪そうに俯いた。

《聖光の翼》とは、大陸ではその名を知らぬ者はいないと言われる程の、強力な軍団である。五国戦争時代——メルクリア王国と南のデイヴァーン帝国の戦いが激しかった頃、国境付近の防衛線で僅か五百の兵で一万のデイヴァーンの軍勢を退けた事実、歴史書にはつきりと記されている。

飛行能力を持ったポケモンに乗り、上空から華麗に降下して槍を振るう姿には、敵味方関係なく見惚れたらしい。大きな戦乱の無い今では、王国内の治安維持や魔境のポケモンの討伐、邪教徒の摘発などが主な仕事であるが、それでも騎士団であることは一種のステータスであり、憧れの対象となっている。

「ガキの頃は憧れたけどな」

ハーヴィも例外では無かったようだ。しかし、それは過去形に過

ぎない。

何故なら――

「でも、俺には最高の相棒がいるからな。強くて可愛い相棒が……」
ニヤリと笑みを見せて、ハーヴィは自分のパートナーの肩に手を置いた。しかし、それはすぐにそっけない態度で、払われてしまう。
「褒めても何も出ないわよ」

あっさり和一蹴してしまうところが、彼女らしいと言えば彼女らしいのだろう。しかし、ハーヴィもその言葉を気にした様子もない。
「それに、貴方に騎士や軍人なんて向いてないわよ。規律を守りそうもないし」

「はは、手厳しいな……」

まあ、事実なので仕方がない。

軍に入ったところで、規律をきっちりと守りながらやっていくという気は、ハーヴィにはないのだが。

「ああ、そうだ。お前ら、夜まで暇なんだよな？」

「ん、まあな……」

「ちと、頼みたいことがあるんだがいいか？ 食い終わったらでいいからよ」

「ああ、いつものか。任せときな」

ハーヴィは笑顔で、バウアーからの頼みを快諾した。零紗もまた肯定を意味するかのような微笑を浮かべている。

報酬も何もない仕事ではあるが、いつも世話になっているバウアーからの頼みということ、そして、これが二人の日課であるため、苦ではないのだ。

いや、報酬はあるのだ。だが、それは二人にとって何よりも嬉しいものであった。

「さて、それじゃあお仕事といくか」

第2話 昼下がりの若者達2

辺境都市シエルクと王都グランダルトを結ぶアウゼン街道を外れ、半時は歩いただろう。道はあるものの、それはまさに獣道と言っべきもので、左右には木々が鬱蒼と茂り、地面のところどころから根が突き出している。

日の光もあまり届かず、まだ昼だと言うのに薄暗い。当然、街灯もないために夜になれば灯りは欠かせない闇となるに違いない。それに、街道を外れると言うことは、いつ野生のポケモンやならず者に襲われてもおかしくないということでもある。そのため、わざわざ街道を外れるのは、魔境のポケモン討伐を頼まれた者が、余程の命知らずくらいじゃないだろう。

しかし、そんな獣道を進んでいるのは、二人の若い男女である。バスケットを持っているため、ピクニックに行くかのように思えるが——周囲から見れば、危険な場所に自ら歩んでいくこと自体が信じられないだろう。

それでも——二人には目的があった。また、道中で敵に襲われたとしても、太刀打ちするだけの力量は備わっていると、彼らは自負している。

「……気をつけて」

何かに気付いたのか。ハーヴィを守るかのように澪紗が前に出た。そして、背を向けたまま手に持っているバスケットをハーヴィに手渡す。

「ん？」

「持つてて。私一人で充分よ」

ポケモンの五感は、人間のそれを遥かに凌いでいる。ハーヴィも、澪紗の注意により何者かに狙われていることに、ようやく気付く。しかし、荷物で両手が塞がっているために、腰に帯びている剣を抜こうとしたが出来ない。尤も、その必要はないことを彼自身解って

いたが。

「来るわよ。すぐ片付けるけど、いざというときは、荷物を置いてでも剣を抜いて」

「その必要はないだろ。信頼してるぜ」

「ふん、怪我しても知らないわよ」

そんなやり取りをしつつも、二人は集中を解いていない。

細い腕を前に伸ばし、掌を上に向ける。小さい手の上に青白い光が宿り、収束していく。

「そこっ！」

少女の双眸が鋭くなる。叫ぶと同時に、姿を現した敵に向けて、光を放った。

球状を成していた青白い光は、放たれると同時に夜空を引き裂く電光の如く迸った。しかし、電撃とは明らかに質の異なるそれは、少女の胸を貫かんとばかりに放たれた硬質な円錐型の凶器を空中で静止させた。

静止した巨大な針はすぐに地面へと落下した。硬質な地面では無かったが、巨大な針は硝子のような音を立てて粉々に砕け散る。

「なめられたものね……」

「大丈夫か？」

「ええ。敵は大した強さじゃないわ。ただ、少し数が多いわね……」
再び、氷のような鋭い視線で針が飛んできた方向を睨みつける。

すると、そこには巨大な針を放ったとみられる敵の大群が姿を現していた。

数は、軽く十体を超えているだろう。両手に巨大な馬上槍——ランスを思わせるかのような針を携えた蜂の姿が、そこにはあった。スピアーと呼ばれる種族のポケモンだ。両腕の針には毒を宿していると言われており、刺されれば一溜まりもない。しかし、それでも——。澪紗は戦慄さえも覚えていない。それどころか、氷の如く鋭い視線には闘志が宿っていた。

襲われる覚えは無いのだが——おそらく、知らず知らずのうちに

彼らの縄張りに足を踏み入れていたのだろう。人間と共に過ごしているポケモンなら別だが、縄張りに足を踏み入れると言うことは、敵対行動のひとつとして捉えられてもおかしくはない。故意に踏み入れたのではないにしろ、スピアーたちにとって二人は自分たちの領域を侵した敵に過ぎないのだ。

侵略者を排除すべく、蜂の大群は針を一斉に射出した。しかし、澪紗はその針に向けて青白い閃光を放ち、次々と撃ち落としていく。直線的な軌道のため、相手の攻撃を読むのは彼女にとって容易なことだった。しかし、それでも矢のような速度のある弾を撃ち落とすには、集中力と判断力、そして精神力がどれだけ必要であることが――。

「一気に片付けるわよ」

澪紗の周囲の空気が冷えていく。しかし、急激な気温が低下したにも関わらず、ハーヴィは特に驚いた様子もない。何故なら、これが彼女の得意としている技のひとつであることを知っているからだ。突然真冬になったかのような感覚に、スピアーたちは戸惑いを隠せずにはいたようだ。そんな彼らに追い討ちをかけるように猛吹雪が発生し、激しい冷気が打ち付けていく。

冷気を司るポケモン、グレイシアであるからこそ出来る芸当である。彼女にとつては苦ではなく、それこそ肌にとまった鬱陶しい羽虫を叩き潰すが如く容易いことである。

極度の低温は、あらゆる物質や生物の動きを停止させる力を持っている。それは生命活動だとしても例外ではない。スピアーたちは次々とその生命活動を停止し、ボトボトと地面に落ちていった。落ちたスピアーはその衝撃と共に、四肢を粉々にして砕け散っていた。

「終わったわよ」

すべてのスピアーが絶命したのを確認すると、澪紗はフツと微笑を浮かべて振り返った。

「相変わらず、容赦ないな」

*

獣道を進んでいくと、やがて広場のような場所に出た。そこでは、十人余りの子供たちが、走り回ったり木登りをしたりと、元気に遊んでいるのが窺える。

広場の奥の方には、朽ちかけた建造物があつた。動かなくなった時計に、錆びた女神の像。《エリユシオン》の教会であるが、大戦後から放置されたのか、あるいは長年の風雨で劣化したのかは解らないが――

「いつも通りだな」

「ええ……」

今は孤児院として機能しているのだろう。今でこそ、メルクリア王国では大きな戦乱は無いが、それでも不幸な子供たちは多い。親に捨てられたり、病気などで親を失ってしまう子供たちは、いつの時代でもいるのだ。それでも、子供たちの表情は明るいものだった。明るく振舞っているだけかもしれないが、同じような境遇にいる仲間たちと共に過ごすことで、傷を少しずつ癒しているのかもしれない。

二人に気付いたのか、子供たちが一斉に走ってきた。ハーヴィも手を振り、走ってきた子供たちを笑顔で迎える。相当慕われているのだろう、二人のもとに集まった子供たちはとても嬉しそうである。

「よお、よくきたなっ！」

「タク、駄目じゃないのっ！ もっとしっかりした挨拶しないと……」

「うるせーよ、マオ。ハーヴィにいちゃんはそのなの気にしないもんな！」

「ふえええん、ジエイがぶっ！」

「そんなことしてないもん！」

「おなかすいたのー……」

などなど、挨拶しに来たのは解るが、それぞれが己の感情を素直に表している。

「ようこそいらっしやいました」

子供たちの後方から、修道服を纏った一人の女性が現れた。

外見上の年齢は、二十代中盤といったところだろう。若々しさの中にも何処か落ち着きがあり、優しく包み込むような温かさを感じられる。顔立ちも美しいが、何よりも慈愛に満ちた母親のような雰囲気があるのが解る。

服の上からでも解るが、かなり華奢な身体つきだ。しかしながら、弱々しさはまったくといっていいほど無い。

「こんにちは、エレインさん」

「いつもありがとう」

清楚な修道女は、やわらかな笑みを見せてハーヴィと澪紗から食べ物の入ったバスケットと袋を受け取った。

二人はよくバウアーから受け取った食べ物を送り届けていた。国からの援助もあるとはいえ、それだけで十人余りの子供たちを養っていくのは厳しいのだ。戦乱が収まり、大局的に見れば食料に悩むことがまず無くなったメルクリアではあるが、貧富の差は深刻なものとなっているのだ。

「お仕事は捗っていますか？」

「ん、ぼちぼちってとこかな。おっさんにも面倒見てもらってるし」
「そう……」

ふと、エレインは何処か悲しげな表情を見せた。

いつも自分に見せるこの悲しげな表情の原因を、ハーヴィはよく解っていた。

「……やっぱり、不安？」

「勿論です。今は大きな戦乱は無いとはいえ、魔境に行けば強力なポケモンに襲われることもあります……」

そう、彼女はハーヴィの身を案じているのだ。

特に、ハーヴィは孤児院に世話になったというわけではない。し

かし、バウアーの依頼で食料を届けているうちに親しくなったのだ。今ではすっかり、子供たちにも好かれている。身を案ずるのも当然のことと言えるだろう。

「ま、寝床もらってるわけだし、自分の食い扶持くらいは自分で稼がないと」

「そうですか……」

ハーヴィには、親がいなかった。傭兵だった父親は彼が産まれる前に東国の戦場にて散り、母親も彼を産んですぐに、世を去ったのだ。そこを、彼の父と親しかったバウアーが引きとったのだという。彼の性格は、誰からも好かれるものだった。そのためか、周りともすぐに打ち解けていき、実の親はいなかったものの決してつらい生活ではなかった。歳の割に、意外にしっかりとしていたところがあったのだろう。今でも、人気者というわけではないものの、誰とでも良い関係を築いている。

「ハーヴィにいちちゃん、一緒に遊ぼうぜー」

「あー、解った。解ったから引つ張るなって！ というわけで、ちよつと付き合ってくる」

子供たちに服を引つ張られ、ハーヴィは小走りで彼らについて行った。

「ごめんなさいね、貴女のパートナーなのに」

「いえ、気にしないでいいわよ。なんだかんだいって、彼も楽しいみたいだし……」

子供たちの中に一人の青年がいるために浮いているようにも思えるが、不思議と違和感がない。子供にも好かれやすいのかもしれない。早速振り回されているハーヴィを見て、漣紗は微笑を浮かべた。

第3話 二人の少女剣士

香茶の上品な香りが、部屋の中に充満している。決して上質な茶葉ではないものの、午後の一時を満喫するには十分すぎるだろう。貴族達には嘲笑されるかもしれないが、庶民にとっては茶菓子も合わせれば、少し贅沢な気分になれる。

寂れた孤児院とはいえ、部屋の中は清潔感が漂っていた。外側から見れば少しみすばらしいものの、部屋全体を見渡すとしっかりと清掃されており、物が散らかっている様子も感じられない。子供達の世話と共にこのようなことも一人でやっているというのだから、彼女——エレインはなかなか凄い者なのかもしれない。慣れていない者がこれだけの仕事量を毎日こなせば、過労で倒れてしまうに違いない。

「悪いわね、忙しいのに上がらせてもらって」

「いいですよ」

まさに慈愛に満ちた聖母といった感じの微笑み。見ているものの心の闇を振り払い、明るく照らし出す光のように思える。

——相変わらずね、と澪紗は独りごちる。

王国が冷戦状態にあった十数年前に比べれば、だいぶ平和になっただろう。それでも、世界全土という範疇で見れば、その平和も各国間の均衡の上でギリギリ成り立っていると言っものには過ぎない。共和国とは国交が回復しているとはいえ、冷戦時代を過ごしていた者にとっては、やはり信頼できる相手ではないと言っのが事実だ。

仮初の平和とでもいうのだろう。治安状態が安定しているメルクリア王国であるからいいものの、他国で生きていくにはエレインの性格はあまりにも優しくすぎる。

——いや、国に限ったことではない。いつの時代も、心優しき者というのは悪意ある者に貶められていくのだ。汚れひとつない白を

見れば、誰もが黒で汚したくなるように。しかし、彼女のような者がいるからこそ、こうして不幸のどん底にいた子供達の明るい笑顔が見られるのかもしれない。

そう考えると、自分はどれだけ汚れているのだろうか――

「どうしました？」

「いえ、何でもないわ……」

私らしくない――

自分の過去を思い出してしまったのか、少し情けなくなってくる。しかし、誰にも触れられたくないために、何とか込み上げてくる感情を抑え込む。

そう。これは自分自身の問題なのだから。

「隠さなくてもいいんですよ」

この人に隠し事は通用しないか――

澪紗は深い溜息をつくとき、香茶をゆつくりと啜った。

「貴方には敵わないわね……」

「誰にでも、心の闇というものはありますよ。それに、過去に犯した罪というものは決して消すことはできない……。生きていく上では、必ず背負わなければなりません」

「そうね……。礼拝堂あいてるかしら……？」

「はい。いつでもどうぞ」

ほんの気休めにもならないというのは解っていた。しかし、いつもエレインは悩める時に、神に祈ることを勧めてくる。敬虔な《エリュシオン》の信者なのだろう。澪紗には信仰するものは無かったが、断るのも悪いためか、礼拝堂で祈ることは日課となっていた。

現実的な者から見れば、神という存在に縋るのは馬鹿馬鹿しく思えるだろう。それでも、誰もが悩める時には、知らず知らずのうちに頼ってしまうのは事実である。目に見えない何かに――神という精神上の存在に縋ってしまうのは、生けるものの性なのかもしれない。

（《創世神アルセウス》か……。神様なんていても、無慈悲なものよね……）

*

淡い月光と無数の星々が、漆黒の夜空を彩っている。空気が澄んでいるため、北の空の中央に位置する《綺羅星ジラーチ》の輝きも、一層に強く感じられる。

《創世神アルセウス》ほどの頻度ではないが、その名は《エリユシオン》の聖典にも出てくる。彼の星が中央から動いたときに厄が起きる、また、強く念じることにより願いが叶う——といった内容の話が記されているが、結局は作り話でしかない。其れを真に受けるのは、少し捻くれた占星術師か、寝物語にそれを聞いた幼い子供達くらいだろう。熱心な信者でさえも、法話のひとつとして覚えておくくらいだ。

勿論、二人にとってもただの作り話でしかない。伝説の名を冠している綺羅星も、方角を確認するためのものでしかないのだ。

方角を知りたいと言う願いは叶っているのかもしれないが。

尤も、星空が美しいのは事実である。親しい者同士で大地に背を預け、満天の星を見えるというのもロマンがあって良いだろう。尤も、依頼者のいる場所へと向かっている彼らには、そのようなことをしている暇などない。

アルテ山の旧街道には、人の姿が見られない。時間が夜というものもあるが、治安の悪い辺境の道を好んで歩く者は少ないだろう。それに、現在は新たな道も作られており、獣道となりつつある旧街道を態々通るとするのは、実に馬鹿げた選択だ。

「面倒な依頼を受けたものね」

澪紗は深い溜息をつき、パートナーたる青年に抗議の視線を向けた。グレイシアの特徴の出た細長い耳も、少し垂れている。ご機嫌斜めのようなのだ。

無理もない。アルテ山は、シエルクから遠いため、交通の便が良
いとはいえない。運び屋のギャロップに頼まなければ、到着するこ
ろには日付が変わっていただろう。孤児院で長く寛ぎすぎてしまっ
たというもあるが、それは致し方の無いことだ。

山岳地帯にはギャロップで入るのは厳しいため、目的地へ向けて
は徒歩でいくしかなかった。上り坂ではあるが、然程急ではないた
め、体力的な面では特に問題はなかった。

「悪いな。もうちょっと場所とかも調べとくべきだったか」

ハーヴィもまた、少し反省しているようだ。しかし、つい依頼を
受けてしまうのは、彼の性格故か。よろず屋として生計を立ててい
る二人だが、汚れ仕事以外は基本的に受けている。尤も、オフアー
してくるのはハーヴィなのだが。

「詳しく聞いてなかったけど、依頼はどんなものの？」

「遺跡の調査の護衛だそうだ。依頼者とは、現地で待ち合わせして
るが……」

依頼内容の書かれた紙を懐から取り出し、軽く目を通す。筆跡を
見ると癖のある乱雑な字で、文の右側が上がったり下がったりして
いる。言ってみれば、字が下手糞なのだ。何とか読める範囲なのが
救いだろう。

「えーっと……、エルダイン山岳遺跡ね。特に目ばしいものは見付
からず、今は捨て置かれているみたいだけど……。そんなところを
調査するなんて、何のつもりかしら？」

「さあな。でも、そんなところだからこそ、凄いものが眠ってるっ
てこともあるんじゃないか？」

メルクリアに限らず、大陸——いや、世界中には、無数の遺跡が
ある。その多くは領国の調査隊によって掘り起こされており、学者
の間でも様々な研究がされている。エルダイン山岳遺跡もそのひと
つであるが、大きな発見もなかったために、また、交通の便という
のも理由に、調査が打ち切られている。

「もつと詳しい話は聞かなかったの？」

「ああ。冒険者ギルドの仲介で受けた依頼だしな。その依頼者の面もまだ見ていないさ。この筆跡からすると……性格は捻くれていそうだな。依頼者は、冴えない学者野郎——研究で家族を顧みない遺跡オタクってところか」

再び、下手糞な字を目で追う。

「よく解るわね」

「職業はともかく、字には性格が出るからな」

「ふうん、性格ね。貴方は素晴らしい性格なんでしょうね」

「……………」

どこか信じられないような視線で睨まれたような気がしたが、何事もなかったかのようにスルーをする。澪紗には敵わない——。それを充分に理解しているのだ。

何だかんだ言って、二人の相性は抜群に良いのだ。このようにお互いを気にせずに言えるということは、それだけ強い絆で結ばれているということがよく解る。

「依頼者の名は……、フィン・ヴェールか。果たして、俺の推測は当たってるのか……。せめて、外見上の特徴とかも書いておいて欲しいがな」

「こんなところにいる人なんて限られるわけだし、すぐ見つかるんじゃない？」

「ま、それもそうか」

早くこの面倒な仕事を終わらせよう——。そのような思いを胸に、二人は目的地へと向けて足を早める。途中、岩肌に化けていたイシツブテやゴローンといったポケモンたちが二人を阻んだが、それらを難なく撃破していった。

十分ほど歩くと、異様な気配を二人は察知した。道中で何度かポケモンとの戦闘はあったものの、それとはまた異なる——人の気配だ。

「何だ……？」

ハーヴィは片手剣の柄に手をかけ、澪紗は右手に冷気を帯びた光

球を収束させた。いつでも戦闘に移れるだろう。

今までは比較的フラットな道だったものの、岩の柱が増え、入り組んだ地形になってきている。そのためか、周囲の状況が把握しづらい。岩陰からの奇襲があることを警戒しながら、二人は足を進めた。

「おい……、マジかよ」

「酷いものね……」

一人の男が倒れていた。服装を見ると、盗賊か何かの類だろう。身体中から血を流している。血の色を見る限り、まだ傷は新しいものの――呼吸は停止し、瞳孔も開いていた。既に事切れているだろう。

死因は失血死と見て間違いなさそうだ。傷口の開き方を見ると、普通の剣で斬られたような跡ではなく、棘のようなものでズタズタに引き裂かれているのが窺える。このような芸当は、人間には不可能だ。

「チンピラ同士の争いか？ お国のお偉いさんは何やってんだか。面倒に巻き込まれないよう、とっとと行こうぜ？」

「そうもいかないみたい」

周囲に小さな氷塊を浮遊させつつ、漣紗はため息をついた。

「何だつてんだ……」

漣紗の呼びかけに応じ、彼女のもとに行く。

そこにあつた光景は――

ガラの悪い男達に囲まれた、二人の少女の姿だった。

二人の少女は互いに背を預け、自分たちを包囲している盗賊達と対峙していた。

一人は、縦にロールした金髪の少女だ。澄ましているというわけではないものの整った顔立ちで、鋭い碧眼からは気の強さのようなものが窺える。まるで、何処かの貴族の娘のような気高さもある。

右手には細身の剣――レイピアが握られており、舞うような動作で敵を次々と倒していく。片手剣の中でも扱いが難しいと言われて

いるレイピアを軽々と使いこなす辺り、相当な場数を踏んできているというのは、素人が見ても解るだろう。

もう一人は、ツインテールの銀髪娘だ。その髪型のため容姿には幼さがあるものの、赤と青のオッドアイには、彼女のパートナーであるう金髪の娘に勝るとも劣らない闘志が宿っている。

こちらは亜人種のポケモンだろう。波打った刀身が特徴的なフラインベルクを掲げながらも、手から光の球を放ったり、茨を地中から召喚したりと、人間には不可能な戦い方で、敵を倒していく。

攻撃方法や、両手のガントレットを彩る赤と青の薔薇を見れば、彼女の種族がロズレイドであることが解る。先程の無惨な死体も、彼女の攻撃によるものであることは明らかだろう。

「凄いな。相当なやり手ってところか。だが……」

限界だろう――

旗色は決して悪くない。少女でありながら、戦い方を見る限り戦闘の経験は豊富だろう。しかし、多勢に無勢。如何に優れた一騎当千の猛者といえど、多数の相手と対等に戦うのは難しい。事実、彼女達の表情には、疲れの色が見え始めていた。

「どうするの？ 助けに行くの？」

どうすべきか、澪紗はハーヴィに尋ねた。

もっとも、返ってくる答えは解っていたのだが。

「どっちの？」

答えは決まっていたが、ハーヴィは敢えて澪紗に尋ねる。

「本気で言ってる？」

容赦ない突っ込みに苦笑しつつも、ハーヴィは小振りの片手剣――グラディウスを構え、敵へと突貫した。

乱戦であったため、二人の存在は感づかれていなかったようだ。そのため、ハーヴィによる奇襲は功を成し、敵の間に動揺が広まった。

「なっ、何ですか、貴方達は！？」

金髪の少女が声を上げる。

それにより少し集中が乱れたのか、振り下ろされてきた刃に僅かに反応が遅れる。しかし、すぐに体勢を整えてバランスを保つと、敵の攻撃をすぐに受けて弾き返した。

「いいから今は敵に集中しろっての。とっと片付けるぞ」

斬りかかってきた盗賊の攻撃を身を擦じらせて回避し、隙が出来たところを背中から斬り伏せる。赤黒い液体を撒き散らしながら、盗賊は下品な悲鳴を上げて絶命した。

横からの殺気。しかし、大した速度ではないために問題なかった。グラディウスの刀身で相手の刃を受け止め、急所に向けて蹴りを入れる。盗賊のバランスが崩れたところに、研ぎ澄まされた氷刃が降り注ぎ、喉元に深々と突き刺さった。

「旅のお方か？　ともかく、助太刀感謝する！」

ロズレイドの少女は戦い慣れしているようで、敵を見据えたまま加勢に入った二人に礼を言った。

「お喋りは後よ。今は、敵を倒すことに集中しましょう」

戦いの最中に於いても、澪紗は冷静さを失っていないかった。次々と氷刃を放ち、接近された敵に対しては、ダガーで応戦する。

「……そうだな」

容姿とは何処かけ離れた——やや男勝りとも思えるような口調で頷く。

葉の刃を切り抜けて接近してきた敵の腹にフランベルクを突き刺し、呻いたところに光の球を直撃させる。炎とは異なる強力な熱を持ったそれは敵の肌を爛れさせ、波打った形状の刃により抉られた傷口からは、夥しい量の血液が噴出した。

「させないわよ」

攻撃後の隙を狙いつて斬りかかってきた敵に、至近距離で冷気的光線を放った。光線の直撃を受けた盗賊は悲鳴すら上げずに全身が凍結し、一体の氷像となる。そこに、無数の葉の刃が降り注ぎ、氷像を粉碎した。痛みを感じる暇すら無かっただろう。

「よし、こんなところか」

最後の一人を倒し、刀身についた血を拭き取って辺りを見渡す。

四人の周りには、二十人ほどの盗賊の死体が転がっており、一部の者は戦闘力に圧倒され、逃げ出したようだ。

温まった身体に、夜の涼風が心地よくさえ感じられた。

「何処の何方かは存じませんが、助かりました」

「ありがとうございます。我々だけでは、少々骨が折れた」

金髪の少女はスカートの裾を掴んでお辞儀をし、ロズレイドの少女は騎士を連想させるかのような敬礼で、二人に感謝をした。

何処かの貴族だろうか———と思ったが、突っ込まないことにする。

「まあ、とりあえず怪我も無いみたいだし、良かったんじゃないか」
服や肌のところどころに返り血がかかっているくらいで、特に傷と見られるものは無い。闘っていた相手が弱かったというのもあるが、いらぬ心配であったようだ。

「それじゃ、俺達は依頼があるから行くぜ？」

「あ、あの！」

「ん？」

「依頼つてもしかして……」

まさか———

「よろず屋のハーヴィー・アステールさんですか？」

依頼者は、この少女だった。

第4話 三流トレジャーハンター

遺跡の中は、異様な臭気に満ちていた。日の光が届いていないためか、黴が繁殖しているのだろう。

石畳のところどころにはヒビが入っており、老朽化も進んでいるようだ。調査も打ち切られているだけあつてか、修繕されたような跡もない。

未知の文明が栄えていた頃のものであるらしいが、朽ち果ててしまった今では、それを知る術もない。このような場所を調査する意味なんかあるのだろうかと疑問に思いながらも、ハーヴィは依頼を遂行することに集中する。

「トレジャーハンター？」

「はい。まだ始めてから間もないんですけど……」

話によると、少し前に王都を発ってから、此処まで来たようだ。トレジャーハンターを名乗るには、まだまだ甘いだろう。王都の情報屋から仕入れた情報を頼りに此処まで来たらしいが、態々大したものが見えないようなところを初めから狙う辺り、素人と言われてもおかしくない。

しかし、戦闘技術は目を見張るものがあつた。刃の形状から攻撃が単純になりがちなレイピアを使いこなし、多勢が相手でも怯まずに戦っていた。彼女のパートナーであるロズレイドの少女——名をジャンヌと言うらしいが、彼女との連携もしつかりとしているのだ。多勢の敵に囲まれていた先程のことを考慮しなければ、護衛する必要などなかったに違いない。

「何か、そっちも苦労しているらしいな」

「ああ、解るか？　だが、私はエル……こほん、あの方に一生ついて行くと決めたのだ」

先行するフィンに聞こえないような小声で、ジャンヌに話しかける。彼女も少し苦労しているようで、微苦笑を浮かべてそれに応え

た。

何か言いなおしたのが気になったが、ハーヴィは敢えて詮索しないことにする。自分達の目的は彼女達の手助けをすることであり、素性を調べる立場ではない。

「不器用な奴だな」

「貴方みたいな適当な人ばかりじゃないのよ、世の中は」

容赦ない突っ込みに、ハーヴィは肩を竦める。

「お二方は仲が良いんだな」

フツ、とジャンヌが笑みを見せる。高飛車そうな雰囲気ではあったが、その微笑みはまだ幼い少女のものだ。

「よく言われるけどな」

ふと、澪紗が足を止めた。

「待って。此処って人目に触れず、ずっと放置されてたわけよね」

「そうみたいですけど……それが何か？」

怪訝そうに尋ねるフィン。

「そのような場所だからこそ、敵襲に警戒した方がいいんじゃないかしら？」

「そうだな。警戒するにこしたことはないってか」

少し慎重になり過ぎではないかと思っただが、今まで澪紗の慎重さに何度も助けられてきたために、彼女に従うことにする。

ハーヴィと澪紗はフィンとジャンヌを守るかのような布陣で、歩くスピードを抑える。彼女達の腕前なら問題ないだろうが、依頼人に怪我があつては色々と面倒なことになるからだ。

「それにしても、二人とも結構やるんだな」

ハーヴィが訪ねたのは、剣術のことだ。先ほどの戦いを見る限り、フィンとジャンヌは只者ではないことを窺わせる。

「幼い時から、家の習わしで剣を仕込まれていたの。旅を始めたのは、つい最近なんですが……」

「家の習わし、ねえ……」

何処かの上流階級のお嬢様といったところだろう。堅苦しい家庭

に嫌気がさして抜け出てきたか、それとも追い出されたかのどちらかだろう。事実、貴族の令嬢が家出をするという事件は珍しくない。尤も、それについて詮索する気など毛頭ないのだが。

優れた戦力を持つていながら護衛を頼んだのも、それなら理解できる。万が一というのものもあるが、単に冒険する仲間が欲しかったというのもあるに違いない。

「うーん、珍しいものが眠っていると聞いて来たんですが……、なかなかそのようなものは見当たりませんね」

「……………」

トレジャーハンターがどのような仕事かまだ解っていないらしい。まだ搜索を始めてから時間が経っていないのに、お宝の心配をしている辺り、素人なのだろう。その辺りは経験を積みばなんとかなるのだが、フィンの行動を見てみるとあまりにも警戒が足りていない。そこは、彼女のパートナーであるジャンヌがカバーしてくれているのだろうが、過信しすぎるというのも考えものだ。

通路を暫く進むと、広い場所に出た。この先には道は続いているようだ。

「行き止まり……ですね……」

フィンが残念そうに呟く。

「いいや、このような場所は案外怪しいもんだぜ」

ハーヴィは瓦礫を退かしたり、壁の様子を調べ始めた。

「特に此処とかな。見るからに怪しい」

地面を見ると、擦り減ったような跡があつた。それも自然によるものではなく、何か固い物同士で擦れたような跡だ。よく見ると、何者かが踏み荒らしたかのような跡もあり、それがまだ新しいことも窺える。

「こついつとところを調べてみると……ほらな」

「隠し扉か？」

フランベルクの柄に手をかけて、ジャンヌが興味深そうに覗いてくる。

「だな。古典的だが、解りづらい場所に仕掛けてやる」

壁の奥から聞こえた風の音を聞き、この先に隠し通路があることを推測する。案の定、壁には扉が隠されており、更に奥へと続く道が発見された。

一行はより警戒心を強め、その通路の先を進んでいった。

「明らかに誰かがいるって感じだな。それも大勢か」

「シュヴェルトベルクの時みたいに、敵陣に突撃とかごめんだわ」

「そこまで浅はかじゃねえよ」

澪紗の忠告を軽く受け流しつつ、ジメジメとした通路を進んでいく。

道中では、明らかに今までとは違う雰囲気漂っていた。壁はしっかりと補修されており、先程まで充満していた黴の臭いも無い。ところどころに、ゴミが落ちているということからも、何者かがこの先にいるということを示している。

「ビンゴ……」

曲がり角の先には、先程の広場の十倍はあるだろう、大きな空洞が広がっていた。そこには、先程の盗賊達の仲間だろう、同じような格好をした男達がうろついているのを窺える。

「おいおい、盗賊団のアジトってのは想定外だぜ？」

「あまり首を突っ込まない方がよさそうね……」

相手に気付かれぬよう、壁際に身を隠して、盗賊達の様子を窺う。何やら、物品類の取引をしているようだ。彼らの間では特に珍しい光景ではないものの、法律では禁じられた物品の取引も行われていることが多い。特に最近では、邪教団との繋がりも深刻な問題となってきた。

男達の中に知った顔があったのか――、彼らの中の親玉と見られる人物を見て、フィンは驚愕の表情を見せた。

「あの人は……。私に……情報を……」

「なんだって？」

「私、あの人から此処の情報を貰ったんです」

なるほど――

一目見れば、フィンが良いところの出だということは解る。それを狙って、人質を取り、金を巻き上げようという考えなのだろう。もしくは、女というのを理由に、いかがわしいことを考えているのかもしれない。

どちらにしろ、二流三流の盗賊団がやりがちな手口である。あまりにも稚拙で、解りやすい手口だ。簡単な誘いに乗ってしまう辺り、フィンが騙されやすすぎる――真っ直ぐすぎるというのもあるだろう。

良くも悪くも、字体による性格と人物像の判断は外れたなど、ハ―ヴィはため息をついた。

「どうしたものか……。あまりにも数が多すぎる。先程の二倍以上はいるぞ？」

ジャンヌはいつでも戦闘に入れるよう、右手をフランベルクの柄に手をかけ、左手には魔力を帯びた葉の刃を漂わせている。しかし、相手の数の多さに、踏み込むことを躊躇しているようだ。

「流石にあの数は厳しすぎるわ。例え倒せたとしても、無傷では済まない」

「だな。俺もこんなところに墓標を建てられんのはごめんだ。フィンさんには悪いが……」

「退いた方が良さそうね……」

一行は乗り込むことを諦め、来た道を引き返すことにする。

盗賊団のアジトを見つけてしまっただけに、来た道を引き返すのは至難の業だった。襲撃は無いものの、何度も後ろを振り返って追手がいないかを確認しなければならないからだ。また、後ろだけではなく、前方にも気をつけなければならない。他の仲間が帰ってくるといふことも考えなければならぬからだ。単純な構造は、このような時に不便なものである。

「さっきのどうするかね……」

ハーヴィは深い溜息をついた。

「私の方から、警備の方に伝えておきます」

「そうかい。何も盗られちゃいないが、事前に言つといた方がいいだろうな。取引していたブツに、麻薬や兵器があるつても考えられるからな」

少し不安ではあったが、しっかりとしているジャンヌがいるために問題ないだろう。

「あ、報酬ですが……」

「ああ、いいよ。前金だけでも十分貰ってる」

事実、前金だけでも一週間の生活費を超えるだけの金額だった。これで残りの金まで貰ったら、相当な金額になるだろう。

普通なら此処で貰うのだろうが、事実それほど働いたような感じはしない。それに、報酬にがつくほどハーヴィは欲深い人間ではなかった。

「……恐れてた通り、誰か来たようだぜ」

通路に響く足音。それも、ただならぬ人数ではない。恐らく、数十人はいるだろう。

「このまま戻っても、進んでも大軍にぶち当たるわけか……」

「ごめんなさい、私が依頼をしたばかりに……」

「こればかりは仕方無いだろ。澪紗、悪いな。また突っ込むことになりそうだ」

グラディウスを抜刀し、通路を走りだすハーヴィ。彼の後を、ジャンヌ、フィン、澪紗の順でついて行く。

予想通り、はち逢わせたのは盗賊達だった。先ほどよりは人数が少ないため、突破するのは容易いだろう。

ハーヴィはあまり物音を立てぬよう、そして一撃で相手を絶命させることが出来るように、盗賊達の急所を狙ってグラディウスを振り翳した。彼らは反撃も出来ずに、喉元に刃を突き刺され、血を噴き出しながら絶命する。

彼の突撃を潜り抜けてきた者には、後続の者達の援護攻撃が待っていた。ある者はレイピアを眉間に突き立てられ、またある者は葉の刃により細切れに、そしてある者はそのまま二度と動かぬ氷像と化していく。

「なんか妙だな……」

「ああ。あまり戦意が感じられない」

ハーヴィとジャンヌは前線で敵を突破していったが、違和感を覚えていた。盗賊達の様子を見ると、先程とは明らかに違う。普通、彼らならば敵を見かければすぐに襲いかかってくるだろうが、そういった動きが殆ど見られないのだ。

顔を見ると、恐怖や焦りに染まっていた。まるで、何者からか逃げるかのような――。

「……何か来るわ」

後方から氷弾によるサポートをしていた澪紗が、ピクリと耳を動かした。

「ああ、この足音は盗賊の連中のものじゃねえな」

人間の足音だということは解る。しかし、それには激しい金属音を含んでおり、皮製の靴で鳴るような音ではない。

「かと言って、このままアジトに引き返すってわけにもいかないからな。このまま突っ切るぞ」

「そうね。そろそろ、奥にいた連中が騒ぎを聞きつけて来るかもしれない」

「……走れるか？」

フィンは無言のまま頷く。

敵中を突破するには、相手にするのは最低限の敵だけでいい。無駄に戦えば、それだけ無事に帰還できる確率が低下してしまう。

四人は武器を掲げたまま、足を速めた。徐々に、金属音が近くなっていく。もしそれが敵だとするなら、戦闘は避けられない――

丁度、曲がり角を曲がろうとしたときだった。

待ち受けていたのは、プレートメイルに身を包んだ集団だった。

腰には両刃の長剣を装備しており、鎧の胸にはメルクリア王国の紋章である交差した槍と翼が刻まれている。

「……おいおい、なんで軍隊が」

規模から察すると、小隊だろう。パートナーであるポケモン達も、守備に重きを置いた屈強そうな者が多い。亜人種と原型はまちまちであるが、どれも優れた能力を持っているに違いない。

「お嬢様、ジャンヌ殿。こちらでしたか」

部隊のリーダーと思しき者が前に出る。若い男だ。緋色の鋭い瞳に、腰まで伸ばされた美しい銀髪。一見優男のようにも見えるが、彼が纏っているのは武人らしい堂々たる覇気。

従えている亜人種のポケモンは、見たことのない種だ。全体的に露出が多い女性だ。スタイルもかなり良く、最低限の部分を鈍色の鋼鉄で守っているだけのため、正直目のやり場に困る。美麗な銀髪の美女だが、緋色の虚ろな瞳からは生気が感じられない。

淡々とした声だ。敵意は無いものの、決して受け入れやすいとはいえない。

「探しましたよ。いつも申し上げておりますが、勝手に城を抜けるようなことは控えていただきたい」

男はそういうと、部下達をフィンとジャンヌの傍らにつけた。そして、二人は部隊の中へと連れ添われていった。途中で二人は振り向き、ハーヴィ達に申し訳なさそうな表情を見せるが、部下に咎められたのかすぐに背を向けてしまった。

「なんか物々しいが……、俺にも解るように説明してほしいものだな」

この者達の素性はだいたいは解っていたが、どうも態度が気に入らなかった。ハーヴィは苛立ちを覚えながらも、銀髪の男に尋ねる。「話はあとで聞こうか」

男の声は冷たかった。

そして――

ハーヴィと澪紗を取り囲むかのように、男の部下がつく。フィン

とジャンヌを相手にした時よりも、乱暴な扱いだ。
「連れていけ」

第5話 小さな決意

城塞都市レイナード。首都グランドルトや国境の都市シエルクから徒歩で半日ほどの距離にある都市で、先には未開の地が広がっている。

地理的にも決して恵まれていない都市のためか、ほぼ完全な軍事基地となっている。宿屋や酒場などもあることはあるが、グランドルトやシエルクのような大きなものはない。訓練を終えた兵士達が、同僚と愚痴る程度の粗末な店が数軒ある程度だ。

薄暗い部屋――

黴臭い布団に、頑丈な鉄格子。壁には無骨な鉄板が打ち付けられており、床には地味な配色の石畳が敷き詰められている。灰色一色のその空間は、その場にいる者の雰囲気陰鬱にさせるものだった。鉄格子の先には、同じような狭い部屋がいくつもあり、通路にはハルバードを背中に担ぎ、サーベルを腰に帯びた兵士達が徘徊している。

「おい、直接じゃないとは言え盗賊退治に協力してやったつてのに、何で俺達まで捕まんだよ」

「依頼者は、武家のお嬢様で行方不明。その状態でアジトと一緒にいたのを見られたんじゃ、盗賊の仲間と疑われても無理ないわよ」

鉄格子にしがみついて抗議するが聞き入れられず、ハーヴィの声は牢屋の中に空しく反響しただけだった。そこに容赦ない濤紗の突っ込みが入るため、彼はますます空しい気分になった。喚いたところで無駄だと気付くと、ハーヴィは軽く舌打ちをして、粗末な寝台に身を投げ出した。

彼らがいるのは、王国の都市レイナードの監獄だ。此処に連れてこられたのは、単なる誤解であった。フィンの言葉も聞き入れられず、盗賊の仲間だったという疑いも晴らせなかったのだ。

一般人が行方不明になったとしても、国にとっては大したことで

はないだろう。しかし、貴族の令嬢が行方不明にでもなれば、それは国にとっては大騒ぎになる。貴族社会が根強く残っているメルクリアでは、これが現実なのだ。

また、国だけではなく、その家の名誉にも関わってくる。

貴族社会というものは、外部からの圧力にも強く、権力を振りかざすだけでやっていけるような、至極単純な物のように思えるが、それは間違いである。人によるスキルや実力の違いはあるとはいえ、誰か一人が欠けるだけで機能しなくなるのだ。

また、貴族同士の確執というものもある。表向きは親しくとも、裏ではお互いに権力を握るために様々な系力を張り巡らせていることも珍しくない。尤も、現在はそれも落ち着いてきているのだが、それでもネームが重要となってくる貴族にとっては、一大事となりうるのだ。

「畜生、これで誘拐疑惑までかけられたら……」

「良くて鞭打ち、最悪の場合処刑ね」

「……よく冷静でいらんな、お前」

「私は事実を言ったまですよ」

確かに、そうかもしれない。しかし、こんなところで死ぬのはごめんだと思っている。まだやり残したことがどれだけあるか――

それならば――

「逃げるしかねえな」

心の内を見透かしたかのように、ハーヴィが言う。しかし、武器は取り上げられており、監獄の結界の力によって澪紗の魔力も完全に抑えられている。そうになると、脱獄は難しいだろう。それに、辺りを調べたが抜け穴のようなものはない。壁を壊して進むという強行突破も、賢いと言える手段ではない。

小窓はあるものの、位置が高すぎる上に、とてもではないが人の通れるようなスペースではない。

その時、鉄格子の扉が鈍い音を立てて開いた。

そこには、一人の若い男――いや、少年が立っていた。

ダークブラウンの髪を後ろで束ねており、顔立ちは中性的。服装や装備は他の兵士達と同じであるが、この少年には不釣り合いに見える。それも、彼には武器を持って戦っているようなイメージが浮かばないのだ。

「失礼します！」

ビシッと敬礼を決めるが、顔立ちの幼さと比較的小柄な背丈もあってか、やはり似合わない。それでも少年は健気に振舞っている辺りが微笑ましい。

そう。この少年を二人は知っていた。しかし、当時の彼はそれどころではなかったため——気付いていないようだ。

名は確か、シデンといったか——

「エルフィーナ」ヴェルセリエス様の証言により、貴方達の無実が証明されましたよ」

事務的に振舞おうと思っているのだろうが、少年の態度は軍人としてはやや拙い。無理矢理自分を押さえこもうとしているのが見え見えだ。

「そいつはありがたいな。で、俺達の無実を証明してくれたヴェルセリエス様ってのは？」

「一人しかいないと思うけど」

「解ってるけどよ……。やっぱ、挨拶くらいしないと駄目だろ。取り次げないのか？」

「申し訳ありません。エルフィーナ様は、お家の都合で……」

少年は申し訳なさそうに俯いた。

「……ま、そりゃそうだろうな」

*

比較的標高の高い都市のためか、風が冷たく感じられる。夜は完全に更けて、街の者の殆どは寝静まっている。地味な配色の路地を闊歩しているのは、武装した兵士達くらいしか見当たらない。その

ためか、比較的ラフな格好であるハーヴィと澪紗は、何処か浮いているように思えた。

夜の街は慣れていたものの、此処まで堅苦しい街は初めてだった。他の街ならば、その辺りに酔っ払って寝ている中年男や仕事を終えて帰路につく娼婦、博打の結果に一喜一憂しているギャンブラーなどの姿が見られる筈なのだが、そのような者は一人もいない。

治安は最高に良いのだろう。しかし、娯楽が無いというのも考えものだ。治安の良さと娯楽を兼ねそろえたシエルクの居心地の良さを、ハーヴィは改めて認識せざるを得なかった。

衛兵に通行許可証を見せ、街のゲートを潜って街道に出る。手続きはすぐに済んだものの実に淡々としており、人としての温かさのようなものはまったく感じられなかった。

「……なんか、しけた奴ばかりだったな」

「彼らも疲れてるんじゃないかしら」

「それもそうか……。貴族のお嬢様が抜け出して、その搜索を何日も続けてりゃあな」

つい先程まで共に行動していた少女を思い出す。今思い直してみると、庶民とは異なる豪華な衣裳だったうえ、得物のレイピアも派手な装飾が施されている業物だった。

まさか——とは思ったが、武家の名門のひとつであるヴェルセリエス家の令嬢だとは思いもしなかったのだ。依頼に使ったフィンという名も、身分を隠すためだったのだろう。

「俺達には関係ないけどな……」

貴族の事情など、知ったことではない——そう思いながら、街道を進むと、やがて木々が鬱蒼と茂る森林地帯が見えてきた。

緑豊かなメルクリア王国は、街道が森林地帯を横切っていることが多い。自然が残っているとも言えるが、時としてそれは旅人の行く手を阻む要害となる。特に、夜になればそれは非常に危険な道となる。最近では警備も強化されつつあるようだが、町から離れた場所ではそれを信頼していいわけではない。

「シエルクに帰るには、此処を突っ切るしかないが……夜明けを待つべきだな。やっぱ、街で宿を探しておいた方が良かったな。だからといって、今からまたあの街に戻るのも気まずいぜ」

「そうね。一度、此処で休みましょう」

漑紗も賛成のようだ。

森の入口で立ち止まり、乾燥した枝を集め始める。幸い、月と星の明かりがあるため、火種を探すのに時間はかからなかった。

集めた枝に火を付けると、二人は向かい合って地べたに腰を下ろした。

「ほらよ」

「ありがと」

カチカチに干からびたパンを漑紗に投げて渡す。決して美味しいと言えるものではないが、小腹を満たすには充分だ。

街を離れると、どうしてもこのような粗末な食べ物になってしまいが、それは仕方がないことだ。よろず屋稼業を始めた頃の頃は慣れなかったものの、今では大して気になるものではなかった。

「こんな不味い飯より、アップルパイやシュークリームをいただきたいとこだが、贅沢も言ってられねえか……」

パンに齒を立てて、思いきり食いちぎる。もう少し質のいいものを買っておけば良かったかと、溜息をついた。過去に依頼によって街の外に出ては、このように野宿することはあった。そのため、このような不味い食事には慣れているものの、やはり贅沢はしたい。

それは、自分が満たされていないからだろうか――

いや、今の生活には充分満足している。このようによろず屋をやっていないくても、バウアーにはしっかりと面倒を見てもらっている。

家事の手伝いをするくらいで、何一つ不自由ない生活を送れているでは、何故こんなことをしているのか――

食い扶持は自分で稼ぎたいというのもあるが、他に何か理由があるのは間違いなかった。あてもなくこのようなことをする筈がない態々、危険な街の外に出るのも馬鹿馬鹿しいだろう。

「……考えても答えは出ねえな」

「どうしたの？」

「独り言さ。気にすんな」

くだらない――

そう思うと、目的とかそのようなものはどうでも良くなってくる。

「悪い、ちよつと寝る……。見張り頼む……」

ハーヴィが寝静まってから、どれくらいの時が経ったのだろう――

星の位置を見る限り、大して時間は経過していない。半時経っていないだろう。このようにただ単純作業を繰り返すだけの時間は、誰にとっても長く感じられるものだ。普段は交代で見張りをするのだが、今日のハーヴィを見る限りそれは無理そうだ。本人は表に出していないつもりなのだろうが、かなり疲労していることが窺えた。夜に街の外を出歩くには、警戒を怠るべきではない。特に、森林地帯や山岳地帯には、国の治安が行き届かない場合が多く、ならず者や強力な野生ポケモン達の巣窟になっていることが多い。

「……」

街の外は、安心できない――

そう呟いて、澪紗は茂みの方を睨みつける。

敵意は無いというのは解る。しかし、それでも警戒をしておいて正解だったと、彼女は悟った。

「隠れてないで、出てきたら？」

淡々とした言葉に従い、茂みからひとつの影が現れる。小柄な少女――いや、幼女という言葉の方が相応しいかもしれない。町ではしゃぎ回るような子供と同じような背丈なのだ。

彼女の格好は、この地方では少し珍しい服装だった。白い衣に緋色の袴、そして草履。その姿は、メルクリアでも東端のカムイラ地方や、東国のオウラン連邦で見られるものだ。そこでは、巫女装束と呼ばれているらしいが――

九つの尾と頭からちょこんと突き出した耳を見れば、この少女がキュウコンの亜人種だということが解る。普通なら東国風の衣装には合わないブロンドの髪も、この少女の場合は違和感がまったく無いと言っているほどマッチしていた。

「なんじゃ、相変わらず冷たい小娘じゃのう」

外見の年齢とは明らかにかけ離れた古風な口調で、キュウコンの少女が言う。装束の袖を口元に当ててにまにまと笑う仕草は、何処か可愛らしくも見える。

敵意は微塵も感じられず、恨んでいるわけではない。しかし、信用できる相手でもないのだ。敵でも味方でもなく、また、ある程度知った顔というのは、ある意味一番厄介な存在でもあるのだ。曖昧な立場の者ほど、その厄介さというものは顕著になる。如何に強い相手でも、それが事前に敵だと解れば対策のしようがある。逆に、その強い相手が中立などの立場にいと、どのように動けばいいか深く悩まされるのと同じだ。

「何の用かしら、華鈴^{かりん}」

澪紗は華鈴を警戒したまま、彼女に対して尋ねた。

「其奴が今のお主の相棒か。むふふ、なかなか良いおのこではないか」

「馬鹿言っていないで、早く用件を言いなさい」

少し苛立ちを覚えながらも、冷静に対応する。

「……彼奴は生きとるぞ」

「嘘……」

「情報屋のアズライトが言っておった。間違いない」

信じられない——しかし、それでも心の隅でその情報が正しいものであることを望んでいる自分がいた。

もし、それが事実なら——

「お主にとつては嬉しい情報じゃからな。わらはそれを伝えに来ただけじゃ」

「そう……」

正直、事実なら嬉しい。だが、それでも澪紗は自らの感情を抑え、淡々と対応した。

「貴方は大丈夫なの？」

「なに、心配することないぞ」

「貴方は楽しくても、パートナーは大丈夫なの？」

「うむ。彼奴はすぐ倒されるほど、柔な奴じゃないぞ」

「そう……」

自分のパートナーのことは、自分自身が一番よく知っている。やや自信過剰にも思えるが、華鈴自身がそう言うのだから、気にすることはないだろう。また、知り合いとはいえ今は味方と言える立場ではないため、彼女達がどうなるかと知ったことではなかった。

情報を貰っておきながら、冷たい対応をしている自分が少し嫌になる。だが、それでもそのような感情を抱いてしまうのは、彼女との共通の過去にあるからかもしれない――

尤も、素っ気ない態度を取られても華鈴はまったく気にしている様子はなかった。

「さて、わらわはそろそろ帰るとするか。情報を得たら、知らせに来るぞ」

そう言つと、華鈴は青白い炎に包まれ、その場から姿を消した。彼女がいなくなると、再びその場に静寂が満ちる。

「……が……生きてる……か……」

第6話 プレリユード

焦りや恐怖などはなかった。

ただ本能に従い、襲いかかってきた相手に対してグラディウスの刀身を振るった。肉の裂かれる音とともに敵は断末魔の叫びを上げ、傷口からは赤黒い液体を垂れ流しながら、地面に崩れ落ちる。

仕留めたのを確認し、相棒へと目で合図を送る。しかし、その必要はないようで、彼女は既に動いていた。

背後からの気配。一つではあるが、攻撃には相手を確実に仕留めるだけの殺気が籠っている。回避するのは容易い。サイドステップで相手の刀身をかわすと、掌から氷の刃を放ち、敵の身体を串刺しにする。

森を抜ける際に敵の襲撃は想定していたものの、朝っぱらから休む間もなく襲われたことに、ハーヴィは軽い苛立ちを覚えていた。

「おいおい、何なんだよこいつら……」

全ての敵を斬り伏せたのを確認し、ハーヴィは血を拭きとってグラディウスを鞘へと納めた。

街の外で襲われることは決して珍しいことではないのだが、今回は何処か様子が違った。敵の死体を見ると、装備がしっかりとしているのだ。無駄な装飾を省きながらも、威力の高い武器を装備しており、防具も決して高価ではないが、傭兵が着るようなものよりは上質なものであることが窺える。

そして――連れているポケモンだ。今回相手にした者は、三つに連なった球状の身体を持つマタドガスに、一対の翼に大きな顎を持ったゴルバット、鋭利な毒牙を持つハブネークだ。どれも毒という手段を使う辺り、相手を仕留めることを前提としているのだろう。また、ポケモン自体の強さも中堅クラスのため、周囲から見た場合もあまり目立たないという利点もある。

「……………」

「……どうした？ 怪我でもしたか？」

「あ、いえ……。何でもないわ」

ダガーを力無く引つ提げたまま敵の死体をジッと見つめていた漑紗に、ハーヴィは心配そうに尋ねた。彼女は彼の言葉にハッとして我に返る。

外傷もなければ、毒に侵された様子も無い。しかし、彼女の様子を見る限り、様子がおかしいのは明らかだった。第三者から見れば何も無いように思えるものの、長年付き合ってきたハーヴィにとつては、やはり気になる場所があった。

「お前さ、何か隠してるだろ」

「……何も隠してなんていないわ。私は大丈夫」

見抜かれている――？

――いや、まさか。

何とか焦りを抑え込み、平静を保つ。

「ま、それなら何も言わねえさ」

ハーヴィにも詮索する気は無かったのか、漑紗の言葉を少し疑う素振りを見せたが、特に気にする様子もなく歩き始めた。この時ばかり、彼女は彼の適当な性格に感謝した。

これは自分の問題だ。誰かに頼るようなことではない。

昨夜に華鈴が言っていたことを思い出しながらも、漑紗はダガーを納めるとハーヴィの後をつけた。

*

シエルクに着く頃には、既に日が落ちていた。

レイナードとの距離があるというのも一つの要因ではあるが、途中で謎の武装した不審者との戦闘が何度かあったというのも大きい。それも、ただの盗賊や賞金稼ぎのような相手ではなく、しっかりと訓練されたことの窺える者ばかりであった。そのため、戦闘に要した時間が多くなってしまったのだ。

普段から鍛えていたために然程疲れてはいなかったため、二人はバウアーのもとで店の手伝いをしていた。昼間は閑古鳥の鳴いている《鉄蛇亭》であるが、夜は一転して多くの客で賑わうため、経営の面では困ったことはないようだ。今夜も大繁盛といったところで、様々な客が訪れたために、ホールでの仕事に精を出した。

日付が変わり、客が帰ってからは、二人はテーブルや床の清掃を続けていた。慣れている仕事のために容易いものではあるが、ハーヴィは物足りなさを感じていた。

十二分に恵まれて充実した生活をしているのは解っている。経済的には裕福ではないものの、幸せではある。

それでも何かが足りない。だが、それが何なのか解らない——。
「手が止まつてるわよ」

澪紗はモップで床を拭きながら、天井を見上げたままボーツとしていたハーヴィを指摘した。彼女の言葉を聞くとテーブルを拭く手を動かし始めるが、やはり何処か気の抜けたような顔は変わっていないかった。

「……昨日の夜から、貴方少し変よ？」

ああ、確かにそうかもしれない。昨日の夜から——いや、本当はそれより前から思っていた。

何かを求めている自分がいる。

「だな。何かを求めているが、それが解んねえんだ……」

自分で言ってみて馬鹿馬鹿しい。そう思いつつも、澪紗に打ち明ける。

「こつやって手伝って生活してりゃあ、無難に生きていける。オッサンにも面倒見てもらってるし、依頼もちよこなことなしてるでもよ、何か足りないんだよね……。充実した生活だったのに、これ以上求めている自分が嫌になるぜ」

刺激が欲しい、色々を知りたいことがある——というのが、最も近い答えなのだろう。

最近の世界の情勢を知りたいというのは勿論、朝にあった何者かの

襲撃。彼らがただ者ではないことは身を以て知った。

そして、何かを隠している彼女のことにも気になる。本人は何でもないと言っていたものの、彼女の様子を見れば見抜くことは容易い。長く付き合ってきた身としては、心の底から心配であった。詮索をする気などない。しかし、いつまでも黙っているのは耐えられない。「変なのはお前もだろ？ ……話してくれてもいいんじゃないか？」

テーブルを拭く手は、完全に止まっていた。ハーヴィの視線は、ただ黙々と床の掃除をしている澪紗に向けられていた。しかし、彼に気付かなかったのか、あるいは無視しているのか——澪紗は彼とは視線を合わせずに、モップをかける手を休めていない。

ハーヴィは立ち上がると、澪紗の方へと向けて歩き始めた。結構意識して足音を立てたが、やはりそれでも彼女は振り向かない。

ついに、ハーヴィは痺れを切らした。

「おい」

「あつ……」

背後から澪紗の肩を掴み、力づくで自分と向かい合わせる。突然のハーヴィの行動に驚きを隠せなかったのか、彼女はモップを地面に落とし、きょとんとした表情でハーヴィを見上げた。

そこにいたのは、いつものような凜とした彼女ではなかった。

「独りで悩んでんじゃねえよ」

「……私は……」

「俺が信頼できないのかよ？ 確かに、あの時はワケアリだと思っただが、力になるって言っただろ」

ハーヴィの言葉に気圧されて澪紗は気まずそうに俯く。

「違うの……。これは、私の問題だから……」

「やっぱ独りで抱え込んでんじゃねえか。お前の悪い癖だ」

それは貴方もでしょう——そう言いかけて、澪紗は出そうになった言葉を飲み込んだ。ここは、素直に隠していることを打ち明けるべきなのかもしれない。

なるべく、ハーヴィを巻き込みたくない。でも——それでも、い

つかは話さなければならぬことは解っている。それは、このように常日頃から共に行動をしている立場としての義務だろう。

「ごめんなさい……私……」

「探してる奴がいるってとこだろ？」

そう言つて、漑紗の肩から手を離す。少しやりすぎたかとハーヴィは後悔の念に圧されそうになるが、彼女も特に気にした様子は無かつたようだ。

「え……何で……」

「……キュウコンのガキと話してただろ？」

「起きてたのね……」

「たまたま目覚めたただけだったの。まあ、誰だかは詮索する気はねえけどよ」

ハーヴィ自身も、漑紗には色々事情があることを理解していた。十数年前に彼が依頼でシエルクの近くの森を訪れた時に、倒れている彼女を発見した。衰弱していた彼女を助けた時が二人の出会いだった。この時点で彼は既に何か事情があるのだらうと察知していた。元々、彼は詮索をするような性格ではなかつたため、何事も無かつたように共に過ごしてきたのだ。

彼がよろず屋を始めたのは、その少し前のことだった。自分の食いつ持は自分で稼ぎたいというプライドもあつたが、日々のあまりにも安定した生活に退屈をしていたというのもある。また、出来れば街を離れて、旅に出ることも考えていた。それは漑紗を助ける前から計画してあつたことだが、やはり自分の剣術だけでは限界がある。しかし、強力な冷気を操ることのできるグレイシアという種族である漑紗がいれば話は別だ。初めは二人の間に溝があつたものの、長きに渡る時間が二人を結びつけたのだ。

そんな関係だからこそ、ハーヴィとしては悩みを打ち明けてほしかつた。しかし、だからといって詮索するほどのしつこさは持ち合わせていない。

それに、自分の中ではある決断をしていた。その決断の内容は、

恐らく漑紗もよく解っているに違いない。二人はもう、お互いの考
えていることは大体解ってしまうのだから。

「お前はどーすんの？」

「解って聞いてるでしょ？」

漑紗は落ち着いて、しかし何処か恥ずかしそうに微笑んだ。

「この年齢にもなつて、ガキみたいだよなあ、俺も……」

「貴方らしくていいんじゃないかしら？」

「そうかもな……」

既に答えは出ていた。

翌朝――

「つたく、これだからガキ共は……」

朝食を済ませた後、パウアーは皿を洗いながらブツブツと文句を
垂れ流している。しかし、彼も特に変に思っではないのか、口元
が綻んでいるのが解る。

「おいおい、オッサン。そこは「頑張れよー！」とか、そんな感じ
で励ますもんだろ？」

「ケツ、お前らがいつちまうと、仕事が増えんだよ……」

何だかんだ言つて、やはり少し寂しいようだ。それでも引き留め
る気は無いというのが、彼らしいとも言えるだろう。

住まわせてもらっている身だったが、二人は決心した。

「んじゃ、そろそろ行ってくる」

「行ってくるわ。今までありがとう」

「おい、漑紗！ もう帰つてこないみてえな言い方はねえだろー！」
ついに、パウアーの本性が出る。

「ふふ、そうね。宛もなく旅をするつもりみただけど、たまには
顔を出すわよ。そうでしょう、ハーヴィ」

「まあな。孤児院の奴らのこともあるし、たまには顔出さないと
適当に目ぼしいもん見つけたら送るから、期待しといてくれ」

そう言うと、二人は玄関から出ていった。

外に出ると、朝の冷たい風が頬を撫でた。

何の情報もなく、ただ適当にふらつくだけの旅になるかもしれない。それでも、ハーヴィにとっては構わないことだった。また、宛は無くとも旅の中で漣紗の探している何かを見つけることができるかもしれない。

澄み渡る青い空は、二人の旅路を祝福しているのか、それとも嵐の前の静けさなのか。

今までのように、依頼をこなしていたのとは違う、何かが待ち受けているかもしれない。

第7話 王都入り

メルクリア王国の中南部には、小さな町や村が数多く点在している。他の国内の都市に比べるとどこか寂しい感じがするものの、メルクリア王国の食糧庫として重要な地域でもある。普段、王国に住む人々が口に使っているパンや野菜は、この一帯で採れたものがほとんどである。この辺りが世界でも有数の農業地帯なのは、土地が非常に肥沃なことが理由のひとつだろう。世界でも、オウラン連邦のセイリヨウ、ディヴァーン帝国のラボツカと並ぶ三大農業地帯に含まれる。その三大農業地帯でも最も大きいために、世界的に見ても一目置かれている。

三大農業地帯でもこれ程肥沃な土地になったのは、近くに《地神グラードン》の祀られた遺跡があるのが関係しているかもしれないと云われている。地元の住民や《エリュシオン》の一派では、《地神グラードン》による加護があるからだと信じられているが、それも言い伝えに過ぎない。現在は、学者や国の情報部が地脈の調査をしているらしい。

くだらない――

彼はただ、そう思った。

彼とて、神を信じていないわけではない。如何なる者も追い込まれれば神頼みするように、彼も今まで生きてきた中で死地に瀕した時は、心の何処かで救いを求めていた。具体的な対象は無いにしろ、生ある者は知らず知らずの内に精神的なものへと依存してしまうのは、致し方の無いことである。

尤も、今の彼にとっては信仰などはどうでも良かった。他人からどう思われようが、知ったことではないのだ。名目上はある集団の幹部ではあるが、結局それは――

「はい、まいどー」

寂れた酒場の片隅のテーブルに、麻袋が叩きつけられた。衝撃で

テーブルが揺れてグラスの酒が少し零れたが、彼は気にしなかった。テーブルに袋を叩きつけた相手は既に立ち去っており、彼が興味を持っていたのは、麻袋から顔を覗かせている硬貨だからだ。

安い酒を一口飲むと、男は笑みを浮かべたまま硬貨を数え始めた。「んー、三万アウルかー。もっと欲しかったけど、帝都に赴いて力ジノで増やせば……」

「愚か者」

「あ」

硬貨同士がぶつかり擦れる音と共に、手元が軽くなった。見てみると、袋ごと九つのふさふさとした尾を持つ小柄な少女に奪われていた。キュウコンの娘はぶすつとした表情で、金を数えていた男を睨みつけている。

「ああ、華鈴おかえりー。いつ戻ったんだい？」

キュウコンの娘——華鈴の視線にも怖じずに、男は軽い口調で相棒の帰還を確認する。

「お主が金を受け取ってる時から、向かいに座っておったぞ」

華鈴の存在に気付かなかったのは、男が周りをあまり気にしないことと、華鈴の背丈が小柄だったというのが理由だろう。尤も、華鈴の白い衣に緋袴という格好は、この地方では珍しいのだが――。

彼女の相棒の男の方は、フードを被っているために、顔立ちは窺えないが、声色から推測すれば若いことは窺える。それも、何処か適当な——間延びした感じがある。

「んで、お偉いさん方は何だつて？」

重要な話であるのだろうか——緊張感が全く無い。しかし、華鈴はそんな彼を指摘しようともせず、ただテーブルの上のつまみをもぐもぐと食べながら聞いている。

「王国の連中や《エリュシオン》の上層部を引き続き探れ、だそうじゃ。他の仕事も並行していいみたいじゃぞ」

「地味な仕事だねー。ま、オッサンはお金さえ稼げればそれでいいんだけどね」

「ふふん、お主にはお似合いだと思っぞ、妾^{わいわ}は」
華鈴は衣の袖を口元に当てて、むふふと笑った。

＊

王都グランダルト――

メルクリア王国の首都であり、中央には《天龍^{ヒンメル・ドラゴン}》の二つ名で有名なグリューネ城が聳え立っている。その存在感は圧倒的で、五国戦争時代や邪神大戦時代の威厳を誇示している。戦争が終わってから、その壮麗たる城を見るべく、訪れる者も多い。そのため、グランダルトは常に多くの客で賑わっているのだ。

時刻は六時を回った頃だろうか――

空は深く暗い青色に染まり、星が輝き始めている。太陽は西の山にぼろ沈みかけており、東の空はより暗い色に染まりつつあった。

王都の宿屋《飛蠍亭》の一室で、ハーヴィと澪紗は寛いでいた。旅を始めてから一日しか経過していないのだが、二人の顔には何処か疲れ果てたような色が出ていた。というのも、殆どどの宿が満室で、長時間にわたる宿探しと交渉の結果、ようやく一室を取るこ
とが出来たのだ。

「まさか、宿ひとつ取るのにこんなに苦労するなんてね……」

「ああ……」

ベッドに仰向けになっているハーヴィは深い溜め息をつくど、傍らの台に置いてある皿の上から菓子を一粒取って口に放り込み、ワザとらしくボリボリと音を立てた。

一方、澪紗は床に座り込み、ハーヴィと共に集めてきた情報の整理をしていた。「貴方も働きなさい」と言わんばかりの視線を、度々ハーヴィに向けている。しかし、彼はそんな視線に動じず、ボリボリと菓子を食べ続けていた。

「貴方が集めてきた情報だけど……」

「……んあ」

「依頼の方は、なかなか目ぼしいものが無いわね。同業者も多いし、此処を拠点にするのは厳しそう……」

「ん……」

ハーヴィは話を聞いているのか聞いていないのか解らない返事をした。

そして、枕元に置いてあった雑誌を取り、読み始めた。

——やはり、聞いていないらしい。

そんな彼に屈せず、澪紗は集めた情報の確認を続けた。

「やっぱり、王都でも治安が乱れ始めてるのは、事実のようね」

「わーお」

「……そんなに厭らしい格好の女の人が好き？」

「サンダースのレオナちゃんとか、エネコのみいちゃんとか可愛いぜ」

「……」

丁度開いているページには、あらもない姿にされてしまっている亜人種のポケモン達の姿が描かれていた。俗に言う、スケベ本というやつだ。

パートナーがいかかわしい雑誌を読んでいることに腹を立てたのか、あるいは話を真面目に聞いていないことに腹を立てたのか——
「いい加減にしないと、凍らせるわよ」

澪紗は手元に、青白い光を放つ球を帯びた。離れたベッドからでも、そこから恐ろしいほどの冷気を感じたため、ハーヴィは雑誌を閉じてベッドから半身を起こした。

「……悪かったよ。冗談だった」

疲れているために、あまり深いことは考えたくないというのがハーヴィの本音だった。しかし、だからといってこのまま曖昧な態度を取り続けたら、本気で澪紗に氷像にされかねないと思い、真面目に応じることにした。

——普段からクールな澪紗をちょっとからかってみたいという気持ちもあったのだが。

「南部の農業地帯で、小規模な地震が群発しているらしいわね。あと、日差しが強い日が続いているみたい」

「ああ、酒場にいた冒険者が言ってたな。原因は解らないらしいが、自然現象の一言で済む話だろ……」

「そうだと良いけど」

「気になるか？」

「ええ」

澪紗は何処か引つかかったような思いを抱きつつも、他の情報を確認し始める。

「……そういや、見つかったか？」

「莫迦ね。そう簡単に見つかりはしないわよ。それに、まだ旅を始めてから一日よ？」

「強いな、お前は」

果たしてそうだろうか――

澪紗は自分の過去を思い出し、憂いを帯びた表情でハーヴィから視線を逸らした。

「強くなてないわよ……」

「ま、お前のことに深く入り込む気は無いが、あまり深く考えるなよ。話したくなったら、いつでも遠慮なく言いな」

そう言つと、ハーヴィはベッドから勢いよく立ちあがると、立てかけてあった剣の鞘をベルトに固定した。

「さて、それじゃあ飯買ってくるぜ。何か食いたいもんあるか？」

「任せるわ。でも、お菓子ばかり買つてこないでよ？」

*

夕闇に舞う二つの影。その影が上空から大地へと向けて疾風の如き速さで急降下していく。

一閃――

その影は、地上を駆け抜けていた別の影を引き裂き、再び上空へ

と舞い戻る。突然の上空からの襲撃に、地上にいた者達は、狼狽を隠せずにいるようだ。血液をドロドロと垂れ流している仲間を見て、武器を持つ手はガタガタと震えている。

彼らのポケモンも同様だ。一瞬にして数を減らされたことに対し、怯んでいる。

何かが碎ける音と共に、ポケモン達が崩れ落ちる。彼らの頭には巨岩が落とされており、頭を潰される形で絶命している。

「ジュノン隊長、敵集団は撤退し始めたようです！」

「ご苦労、シデン」

空を飛ぶ影の一つ——一对の翼に長い尾、そしてあらゆる獲物を噛み砕く牙。岩のような灰色の身体を持った翼竜、プテラに乗った少年は再び急降下による攻撃を行った後、上空に戻った。そして、すぐ傍を巨竜カイリユーに乗った女性の前でビシッと敬礼を決める。鎖帷子に蒼き外套。そして、背中に担がれたハルバード。その装備は、この中性的で優しそうな雰囲気のある少年には、あまりにも不釣り合いだ。

「追撃は……する必要は無いな。よし、戻るぞ」

「はいっ！」

女性の顔立ちは、深く被った外套のフードで窺うことは出来ない。しかし、女性としては低めで威厳のある声は、彼女の気の鋭さを感じさせる。フードの下には、美しくも冷厳な、女騎士としての顔があるに違いない。

《シリシデン・フリーユージェル聖光の翼》隊長、セリカ＝ジュノン。それが彼女の名だ。

今、セリカと共にいるシデン＝グラナートにとって、彼女は憧れの対象だった。彼女にチラチラと視線を向けているが、それがとても輝かしい。嫌らしい意味ではなく、正義のヒーローに憧れる純粋な子供のような、濁りひとつない視線だ。

「どうした、シデン。何か気になるのか？」

「あ……、すみませんっ！」

シデンは慌てて、へこへこと頭を下げた。その反動でプテラから

ずり落ちそうになったが、何とかバランスを保つ。

何も悪いことをしていないのに謝ってしまうのは、彼の性格のためだろう。セリ力は特に気にしていなかったのだが、シデンはあまりにチラチラと彼女を見ていたために、彼女が気を悪くしたと勘違いしたのだ。

「いや、何も責めていないぞ」

「は、はあ」

「前から思ってたが、お前は真面目すぎるのが欠点だな。出世を望んでいるのか、それとも素なのか……まあお前の場合は素だろうな。たまには肩の力を抜け」

「はい、解りました。以後、精進致します！」

それが駄目なんだ、とセリ力は苦笑した。

「それにしても……。最近、先程のような妙な集団を見かけますが、一体何者なのでしょうか？」

「他国の斥候のようにも思えるが、西のルインスティルや南のデイヴァーンでも奴らの姿が目撃されているらしい。此処最近活動を見せ始めている邪教団タルクロスとの関係もあるかもしれないが、どうなのかは解らん……」

「物騒ですね……」

シデンは何処か深刻そうな顔立ちで俯いた。

事実、最近では、大陸が不安定になりつつあった。二人も、メルクリア南部にて妙な集団を見かけようになったという情報を得て、見回りにきたのだ。すると、そこで情報通りに妙な集団と遭遇、さらに相手からの襲撃もあったために戦闘を展開する羽目になったのだ。

相手の戦闘力は高かったが、名高き《聖光の翼》である二人にとつては苦戦するほどの相手ではなかった。戦闘開始から五分も経たずに、撃退することが出来た。

「今考えても仕方ないだろう。王都に戻ってから、上に報告しよう」「はい」

第8話 黒衣の者達

ハーヴィは買い物済ませ、宿へ帰る途中だった。

屋台に好物の菓子が売っていたために立ち食いをした結果、少し遅くなってしまっていた。そのことを後悔しながら、足を少し早める。

空を見上げると黒く染まっており、無数の星の瞬きも強くなっている。南西の空に赤き光を放つ《地神グランドン》が、いつもより妖しい輝きを放っていることが気になっていたが、それよりも彼は、漣紗に対する言い訳のネタを考えることに集中していた。このように寄り道をして彼女を怒らせたことは、初めてではないからだ。

——変なところでうるさいからなあ。そう思い、ハーヴィは苦笑した。

しかし、そのようにお互いに遠慮なく小言の一つや二つを言えるというのは、それだけ深い絆で結ばれているということだ。それを肴にして、安価な蒸留酒をちびちびと呑むのも悪くない。

路地裏を進み、宿への道に入ろうとした時、ハーヴィは何者かを見つけた。

「なんかキナ臭えな……」

黒い外套を纏った者が二人、宿とは別の路地へと入っていった。一見、旅人のようにも見えるが——ただ者ではないことをハーヴィは悟った。特に根拠があるというわけではないが、以前、森で襲ってきた謎の男達と雰囲気似ている——そう思ったのだ。

ハーヴィは気付かれぬように、二人の後をつけることにした。

壁に身を預け、木箱や樽などの物陰に隠れながら、慎重に、付かず離れず二人を追う。彼らはこちらには気付いていないようだが、ハーヴィは緊張を解かずに動きを監視する。

（やっぱ、ただ者じゃねえな）

酒場の樽の陰に身を隠し、分かれ道で立ち止まった二人の様子を

窺う。

ハーヴィ自身、相手がどのような者であるかを読むことに、特別優れているわけではない。しかし、そんな彼でも今までの経験で、その者の雰囲気のようなものを察知することは出来た。第六感と言えは聞こえがいいかもしれないが、何の根拠もない、ただの勘に過ぎない。彼が二人を追っているのは、勘でしかない。

それでも、勘というものは、時には事前に計算するよりも恐ろしいほどの精度で結果を齎すこともある。事実、戦闘においても、相手の全てを正確に計算しているだけではまず勝つことはできない。勿論、戦闘にはある程度の計算は必要ではある。だがしかし、最終的に重要になるのは、自分自身の力量だ。

（動いたか——）

二人が動いたのを確認し、樽の影から出る。しかし、この動作が誤算であつたことを、ハーヴィは次の瞬間に悟つた。

「っ——、あつぶねえ！」

咄嗟に頭を下げ、体勢を低く取つた。すると、彼の頭上を鈍い光沢を放つ何かが通り過ぎていき、近くにあつた鉢植えの植物の葉を切り裂き、壁に突き刺さつた。

片刃で小振り、柄がかなり短いことから、投擲用の短剣、ダークであることが解る。ナイフの一種だが、戦闘においてはこのように投げることを主としている短剣である。

「ちっ、気付かれていたか……」

もし、この場から動けば、再び刃が飛んでくるに違いない。だからといって動かずに留まるというわけにはいかないだろう。相手が立ち去ると思えないし、もう一人が間合いを詰めてくる可能性は大いに有り得るからだ。

その予想は、見事に的中した。もう一人がハーヴィの目の前に現れ、ギラリと光る刀身を振りおろしてきた。咄嗟にハーヴィは荷物を投げ捨て、腰から肉厚の刀身を持つグラディウスで受け止める。

「にやろっつ——！」

強い――

臂力が優れているだけではなく、刀身は確実にハーヴィの急所を捉えてきている。

このまま身を低くした体勢で鏢迫り合いを続ければ、何れ力負けをする。そう考えたハーヴィは体術を駆使し、相手の足元に蹴りを入れた。

手応えが無かった。相手もハーヴィの蹴撃を紙一重のタイミングで回避し、距離を開けたのだ。すぐにハーヴィは立ち上がり、再び自分を目掛けて放たれたダークを刀身で弾いて叩き落とした。

このままではまずい――

まず、場所が路地裏であることだ。人通りが極端に少ない上に、狭いために思うように動くことが出来ない。また、相手の攻撃を回避するのが難しくなり、特に遠距離からの投擲が厄介となる。

そして、数だ。一人で二人を相手しなければならぬうえ、相手も実力者だ。また、澪紗もいないために普段通り戦えるという保証もない。せめて、一人なら倒すことが出来る相手なのだが……

近距離で戦っている相手の方は、一撃のひとつひとは重いものの、受け流す、あるいは回避するのは容易い。しかし、問題はもう一人だ。次から次へと投擲をしてくるため、そちらにも気を遣わねばならない。このままでは、的になっているようなものだ。

攻めなければやられる――

そう判断したハーヴィは、芳しくない戦況を打開すべく、斜め上方向――相手の首筋を狙い鋭い突きを放つ。飛んできた短剣は身体を捻ることにより回避し、とにかく数を減らすことに彼は集中する。突きは紙一重のところで、相手の刀身によって受け流された。しかし、ハーヴィはすぐに隙をリカバリングし、中段――相手の脇腹に回し蹴りを入れた。

「なっ――」

相手もそれを読んでいたのか、蹴りは軽々と避けられた。

何なんだよこいつら――

戦闘経験は非常に豊富であるに違いない。ハーヴィ自身、特に戦闘の上手い下手を評価できるほど経験があるとは言えないものの、今まで闘ってきた相手の中では、強さが格段に違う。更に、場所があまりにも戦いに適していないので、始末が悪い。

少し前に、森で遭遇した黒衣の者達と同じようだ。あの時は澪紗がいたために難なく撃破することが出来たものの、今回は彼女がいない。ハーヴィは澪紗が如何に優れた戦力であることを知り、また、自分自身の不甲斐無さに軽い苛立ちを覚え始めた。

（つたく、こんなところで死ぬなんてごめんだぞ！？）

バランスを崩し、膝をついてしまう。

その隙を突き、相手は一気に走り寄って間合いを詰めてきた。間に合うが、もし回避しようものなら、後方のもう一人が投げってくる短剣に当たってしまう――

「くそつたれ……！」

万事休す――

そう思った時だった。

「身を伏せて！ そのまま動かないください！」

何処からか、若い男、少年とも取れる声が響いた。

ハーヴィは突然の声に驚いたため、結果的にその声に従うこととなっていた。

そして――

何かが砕ける音と共に、ハーヴィに向けて走り寄ってきた敵が倒れた。

ふと視線を移すと、自分の目の前に無骨な形状の岩が数個、浮遊していた。ただの岩ではないようで、ところどころに鋭利な針のようなものが突き出ている。すべてが岩で出来ているようだが、充分な凶器となり得るだろう。

相手がぶつかったのは、その浮遊している岩塊だった。死んではないようだが、最早戦うことはできないようだ。それに怖気づいたのか、投擲で戦っていたもう一人の敵は、その場から立ち去って

いった。

よく解らないが、助かったようだ。ハーヴィは大きく息を吐くと、剣を鞘へと納め、置いてあった荷物を拾った。

「大丈夫ですか!？」

自分に身を伏せるように叫んだ者と、同じ声だ。屋根に登っていたのか、近くの建物から軽い身のこなしで飛び降りてきた。それと同時に、浮遊していた鋭利な岩塊はフツと消え去った。

「お怪我はありませんか……って、貴方は確か……」

「怪我はねえよ。……助かったぜ、ありがとな」

「い、いえ！　僕は^{リシデン・フリーユゲル}《聖光の翼》として当然のことをしたまでです！」

そう言つて、少年はビシツと敬礼を決めた。

親しいわけではないが、知った顔だ。

ダークブラウンの髪に、ぱつちりとした瞳。ハーヴィは、仕草のひとつひとつに何処かぎこちなさと初々しさが残っているこの少年を知っていた。

「それにしても、こうやってまたお逢いするとは、何か不思議な感じですね」

「まあ、そんな感じはするな。しかし、辺境都市に牢獄、そして王都の路地裏か。色んなとこに回されるんだな、騎士様つてのは……」

「いえ……。本来なら、辺境の警備が僕達《聖光の翼》の仕事なんです、僕はまだ若輩者でして……。勿論そういった仕事もやらせてもらえるのですが、雑用を回されることなんて珍しくないんです。今日も、本当はもう仕事は終わってるんですが、王都内の見回りを頼まれているので……」

何処か自嘲気味に、少年——シデンは苦笑した。その間にも、倒した相手を捕縛しているところから、任務に対する集中力は長けているようだ。

ハーヴィの推測は、ある意味当たっていたようだ。実力はあるのだろうが、面倒な仕事を押し付けられてしまうのは、若さとシデン

の性格が大きく関係しているのだろう。尤も、彼自身は嫌々やっているわけではなさそうなので、問題はないのだろうか――

やはり、軍人としてやっていくには、この少年の性格はあまりにも優しすぎて、あまりにも甘すぎる。

「ところで、王都にいらっしゃったということは、何か新たな依頼を見つけたのですか？」

「仕事の詮索をするのも、騎士様の仕事か？」

詮索されるのが嫌なわけではないが、少しからかってやりたい気分分ハ―ヴィは言った。

シデンのことを嫌っているわけではない。むしろ、ハ―ヴィは彼に対してそれなりに良い印象を持っている。しかし、このような性格だからこそ、いじってやりたくなるのだ。

「あ……。い、いえ、違うんです。少し気になったので……。すみません、出過ぎたことを……。気を悪くされたようでしたら、申し訳……」

「そついうつもりで言ったんじゃないよ。」

予想通りの反応だった。

なるほど、これは絶対に苦勞するタイプだなと、ハ―ヴィは改めて思い知らされる。

「俺が此処にいるのは、何て言ったらいいんだ……。まあ、宛もなく旅をしてるってとこか。依頼も旅を続ける中で、受けていくつもりだけどな。どうだ？　今のところフリーだし、何か簡単な仕事があるなら受けるぜ？」

「すみません……。では、お言葉に甘えさせていただきます。僕の妹が南の町ミルフエルトにいます。彼女に、手紙とお金を届けていただけますか？　最近物騒ですし、民間の配達屋に頼むのも不安なので。ですが、貴方なら強いでしょうから」

ミルフエルトは、王国南部の農業地帯にある町の一つだ。

メルクリア王国には徴兵制がないため、田舎から出稼ぎに来て軍人となったのだろうか。そう考えると、農業で生きていくというの

は大変なのかもしれない。今回の依頼も、肉親を気遣つての仕送りといったところだろう。

「大して面識のない俺を信用していいのか？　そのまま金をかつぱらつて逃げるかもしれないぜ？」

「その時は、その時。僕の見る目が無かったということです。それに、貴方がそのようなことをする方とは思えません。なので、お願いします！」

「そりやどうも……。オーケー、その依頼、承ったぜ。手紙と金は、《飛蠍亭》って宿まで頼んだぜ」

「はい！」

そう言つと、シデンは明るい笑顔を見せて、深々とお辞儀をした。「おい、いつまで油売ってるんだ！　あたしは腹が減ってるんだ！　早く仕事を終わらせろっ」

突然、上空から響いた甲高い声——おそらく少女のものだろう。

それを聞いて、シデンは少し気まずそうに頭を抱えた。

声が響いてから、一秒足らず——まさに電光石火とも言える速度で、それは姿を現した。

「ごめん、琥珀……」

岩肌のような灰色をした一对の翼に、深い紫色の翼膜。同じく灰色の長い尻尾。銀髪のセミロングの可憐な少女で、口元から見えている八重歯が可愛い。

古のポケモン、プテラだ。亜人種であることから、シデンのパートナーなのだろう。先程の鋭利な岩塊も、彼女の技によるものであることは間違いない。しかしながら、優れた敏捷性と破壊力を有していることから恐ろしいポケモンであるのは事実だが、こうして亜人種の姿を見ると、何処か拍子抜けしてしまう。

「大体お前はいつもいつも……。これだから……。むづう……。」

顔を真っ赤にして、プテラの少女はぽかぽかとシデンの腹を叩いている。ぶつぶつと文句を言っているところも可愛いのだが——「ったく……。胃を痛めんなよ……」

「いえ、いつものことなので大丈夫……痛い、ちょっと痛いってば、琥珀……！」

パートナーのポケモンにまで振り回されているシデンが、何処か哀れで仕方がなかった。

第9話 見えない未来

案の定――

「まったく、何処で油売ってたの？」

「悪い、寄り道してパイ食ってた」

部屋に戻ってみると、零紗はご機嫌斜めだった。可愛い耳と尻尾も、如何にも怒ってますと云わんばかりに不機嫌そうに揺れている。

黒衣の二人組を追っていたというのが遅くなってしまった原因なのだが、そもそも初めから屋台でアップルパイなどを食べていなければ、トラブルに巻き込まれなかったに違いない。しかしながら、ハーヴィとしては好物の甘いものに対する欲求は抑えられないもので、心の奥深くから囁く甘い悪魔の声に逆らうことなど至難の業であった。それならいつそのこと、欲望に身を任せてしまおうということと寄り道をしたのだが、その結果がこれだ。

どう見ても彼が悪いのだが、そこで開き直ってしまう辺りが彼らしいと言えば彼らしい。彼自身反省はしているものの、態度を見るとそんな様子は微塵も感じられない。

「どうせ、その後ゴロツキかなんかに喧嘩売られてたんでしょう？」

ゴロツキではないが、襲われたのは事実であって――

「……よく解ったな」

「手に土がついているし、かすり傷もあるわよ」

「おっと、いけね。よく洗って手当しておかないとな」

そういつつも、ハーヴィはベッドの方に歩きだし、そのまま身を投げ出そうとした。しかし、ベッドに氷の塊――それも先端が鋭利な刃物となっており、美しくも恐ろしい凶器となつて降り注いだ。そのまま身を投げ出せばザックリと刺さっていただろう。

突然であつたために、ハーヴィは背筋が凍るような感覚に襲われた。

「おい、澪紗。冗談にも程が——」

「本当のことを話さない」

どうせ、その辺りの女の子をナンパしていたと思ってたんだろ。

嫉妬すんなよ——と言いかけて、ハーヴィはそのまま言葉を飲んだ。

目がマジだ。本当のことを言わなければ、氷漬けにされかねない。

澪紗にいらぬ心配をかけたくないというのが彼の本音である。しかし、これからの宛もない旅のことを考えると、話しておいた方が良いに決まっている。そう悟ると、彼は深い溜息をつき、本当のことを話すことにした。

「前にレイナードから帰る時に、変な三人組に襲われただろ？あの時の奴らと雰囲気の似たのがいてな。そいつらをこっそり尾行してたらか付かれて、そのまま戦う羽目になっただけさ」

「戦う羽目になっただけって……」

「こうして無事だったんだからいいだろ」

「莫迦……」

相手は人間二人だったが、流石に無茶だったということは、ハーヴィ自身はその身を以て理解した。相手の素性が何なのかは解らないが、あまり単独で行動しない方がいいだろう。

しかし、彼自身の中で旅の目的のようなものが少し見えてきたような気がしていた。

「ああ、それと依頼をひとつ受けてきたぜ」

「どんな内容？」

「故郷にいる妹に手紙と金を届けてくれ、だそうだ。依頼者は、明日の朝一で此処まで来る」

ハーヴィは汚れた手を拭くと、買ってきた食べ物を取り出しながら、澪紗に依頼内容の詳細を話した。

「農業地帯の町ミルフェルトね……。此処からだ、一日足らずつてところかしら」

「そうだな。大して遠いところじゃない。それに丁度いいだろ、お前の気になることってのもあるんだからな」

依頼を受けたのは成り行きであり、そこまで考慮したわけではない。それでも、何かしらの手掛かりが掴めるというのなら、そのような過程などはハーヴィにとってはどうでも良い。

厄介事に巻き込まれたくはない——そう思っていたが、好奇心の強い彼のことだ。また、澪紗の力になれる可能性もあると考えれば、この依頼——間接的ではあるが、決して無意味なものではないと、彼は思っている。

「依頼の方は解ったけど、その黒衣の奴らってのが気になるわね。どうするの？」

澪紗はハーヴィに尋ねる。

「下手に考えても無駄だろ。絡まれりゃ、相手してやればいいだけだ。売られた喧嘩は買ってやらないとな」

「貴方の場合は、考え無さ過ぎるとおもうけど」

あまりにも適当といえるハーヴィの意見に、澪紗は肩を竦めた。

「まあ、気にすんな。それより、飯にしようか。安物だが、酒もあるぜ」

「そうね。貴方がなかなか帰ってこなかったから、お腹が減って仕方無いわ」

*

緋色の絨毯が敷かれた長い廊下。一定の距離ごとに古代のポケモンを象った彫像が置かれているものの、やはり何処か物寂しい。このようなつまらない場所にはいつまでもいたくないために、とつとと走って他の場所へと出たいのだが、今の彼女達にはそのような余裕など無かった。

彫像の影に身を隠し、二手に分かれた廊下の先を窺う。

視線の先には、プレート・メイル板金鎧に身を包んだ衛兵が一人、徘徊している。

赤いサーコートに、腰に帯びたブロード・ソード。王立騎士団ドラ《天龍の盾》である。城内の警護及び治安維持が、彼らの仕事だ。

しかしながら、辺境を担当する《聖光の翼》^{リヒテン・フリューゲル}や諜報部の《暗黒の瞳》^{アウゲ}より高い地位に位置するため、実質この二つの隊も《天龍の盾》の麾下にあるといっても過言ではない。そのためか、この二つの隊に介入することも珍しくないのだ。

実際、辺境で自分達を連れ戻したのは、彼らだから――

「うう、困りましたね……。どうしましょう、ジャンヌ」

縦にロールした金髪の娘が壁に背中を貼りつけながら、隣にいる両腕のガントレットに赤と青の薔薇を携えた銀髪の娘に尋ねる。ジャンヌと呼ばれたロズレイドの娘も、現状を芳しく思っていないように、何とか息を整えている。

先程からずっと同じような状況だが、コソコソと隠れながらも、二人は現状を打開すべく策を考えていた。

「エルフィーナ様、やはり抜け出すのは無謀かと……」

「解っています。解っているんですが、私はこんな自由もない生活にはウンザリなんです」

このまま諦めて戻るとというのが、最善の選択なのだが――エルフィーナにはそのような選択肢は初めから無かった。

少し我が儘なお嬢様にジャンヌは半分呆れていたが、長年付き合ってきた身としてはほぼ慣れきっていた。

エルフィーナが城を抜け出したくなるのは無理もないだろう。貴族の娘であり、王位継承権もある。そのため、あまり自由に暮らすことが出来ないのが現実だ。生活自体は裕福ではあるが、日々の剣の修行や勉強、礼儀作法などに、エルフィーナはいい加減飽き飽きしていた。

少し前までは、簡単に城を抜け出すことが出来たのだが、遺跡を探検している時に自分を探しに来た《天龍の盾》に遭遇してしまい、連れ戻されてしまった。そして、それ以来、自分の身の回りの警備が強化されたのである。

「ジャンヌ、貴方の睡魔を誘う技で何とかありませんか？」

「私も考えましたが、少し厳しいですね。この距離だと届きません」

「うう……どうしましょう？」

強行突破という手段もあるが、現実的ではない。剣にはそれなりの自信はあるものの、相手の方が強い。また、もし深手を負わせようものなら、自分の身も危うくなる。

「ん、あれは……」

ふと、ジャンヌが何かの気配に気づく。

後方からとぼとぼ歩いてくる一人の男。板金鎧にブロード・ソード、そして赤いサーコートから、《天龍の盾》の者であることが解る。しかし、理解できなかった。殆どの者は、既に仕事を終えて兵舎へと戻っているはずだ。

「ええっ、後ろからも見張りが……んぐぐぐ」

思わず大きな声を出してしまいそうになったところを、ジャンヌによって止められる。

隠れて、若き騎士の動向を探る。

よく見ると、ポケモンを同行させている。珍しく、城内で原型の形を取っており——黄金の毛並みに九つの尾、狐のような顔立ちから、種族はキュウコンであることが解る。

「あー、ったくもう。何でこんな面倒なこともやらないといけないんだ……。仕事やめようかな」

何やら、愚痴っているらしい。しかし、《天龍の盾》という名誉ある仕事を嫌がる者は、そうそういない。

出で立ちも、何処かおかしい。髪の毛はあまり手入れされていないようで、黒髪がぼさぼさになっており、適当に後ろを結んでいる。鎧とサーコートの着こなしも整っておらず、歩き方もがに股と、とても騎士とは思えないような態度だ。

突然、男は二人が隠れている彫像の近くで止まり、片膝をついた。

「っ——！」

見つけた——

明らかに、視線がこちらに向いている。

だからといって、自分の身を傷つけられるわけではない。抜け出

したことがばれたために、再びこのように隠密に行動するのが難しくなってしまうのが気がかりなのだ。

騎士の男は、遠くから見ると若く見えたが、近くから見ると中年の男のような印象がある。しかし、顔立ちは整っており、顎に生えている無精髭も、不思議と不潔さを感じさせない。声質も若々しいが、何処か憂えたような印象があり、言われなければ年齢が解らないだろう。

「……書斎の右奥の本棚、下から五段目。引く」

「え？」

「抜けた先は、街の外、東の下水道。んじゃ、そーいうことで頑張れー」

そう言うのと騎士は立ち上がり、さっきよりも軽い足取りで先へと進んでいった。

「なるほど、隠し通路か……」

何かを思い出したかのように、ジャンヌが言う。

「どういうことです？」

「大戦時のことを考慮してか、この城には避難用の隠し通路がいくつかあると聞いたことがあります。もし、今の男の言っていたことが本当ならば、抜け出せるかもしれません」

「行ってみましょう。書斎に行くならば、怪しまれない筈です！」

嬉しそうに走り出そうとするエルフィーナ。しかし、ジャンヌはそんな彼女を手で制する。

「お待ちください。本当のことを言っていたとは限りません。信じるのですか？」

相手は、自分達を連れ戻した者だ。彼が直接連れ戻したわけではないのではあるが、やはり鵜呑みにしていいものではない。勿論、本当のことを言っている可能性もゼロではないのだが、この場合、逆に疑ってかかった方が良い。

それ以前に、ジャンヌとしては、エルフィーナを城の外に出したくないというのが本音だ。身分上の問題もあるが、まだ外の世界を

知るには早いし、戦闘経験も彼女から言わせればまだまだ浅い。

しかし、それでも――

エルフィーナの望みが叶うのならば、力になってやりたかった。

「ええ。行ってみるしかないと思います！」

「ふ、解りました。何処までもお供いたします」

そして、二人は来た道を引き返し、書斎へと向かうことにした。

彼女達は、自分達がこの先大きな事件に巻き込まれていくということ、この時ばかりは予想していなかった。

「ま、上手くやるんだよ」

二人が去ったのを、胡散臭い騎士は振り返って確認した。

「まったく、お主も物好きじゃの」

傍らから、キウコンが半ば呆れた口調で言う。

「仕事には含まれてないんだけどねー。やっぱり、未来を背負う若者のためには、一肌脱いでやらないと。それに、運命を免れたとしても騎士団を率いる身になる子だし、もっと今の世界情勢を知る必要があるでしょー」

「やれやれ。お家騒動にでもなったら、どうするつもりじゃ」

「その時はその時。あの子自身のことだし、あの子自身で決着つけないと。それに、あのロズレイド――ジャンヌちゃんって言ったわけ。あの子と運命を共にするのなら、こんなところに籠っているわけにはいかないさ」

よく、周りの人間からは何をしたいのかが解らないと言われる。

実際、自分でもその辺りのことがよく解らない。

「とりあえず、めんどっちい仕事終わらせちまおうぜー」

第10話 秘め事

王都を出てから半日。ハーヴィと澪紗は依頼を遂行すべく、王都と農業地帯、そして南のデイヴァーン帝国へと続く街道を進んでいた。

街道の左右に広がる新緑の草原のところどころには畑が見られ、様々な作物がそこで育てられている。そこでは、幾人かの農夫達が自らの作物を極上のものに育て上げるべく、汗水を垂らしながら働いているのが窺える。

依頼の内容は簡単なもので、一人の若き騎士の妹に、手紙と金を届けるというものだ。運び屋のギャロップやカイリユーに乗れば、半日足らずで終わらせることのできる依頼なのだが、敢えて二人は徒歩で行くことにした。

元々はその場の雰囲気で始めた旅なのだ。それならば、ゆっくり楽しめばいい。そう考えた結果である。

日は高く昇っており、肌を撫でる緑風は優しく爽やかに感じられる。冒険といっってはやや言い過ぎかもしれないが、旅をするには絶好の天候だ。以前、《鉄蛇亭》に訪れた吟遊詩人が歌っていたサーガを思い出し、ハーヴィはメロディだけを口ずさみ始めた。

大陸ではありふれた冒険譚だ。若者が旅を始めて、様々な困難に巻き込まれ、時には罪を背負いながらも、健気に冒険を続けていくという、陳腐で他愛も無い話。大まかな内容しか覚えていないが、そんな感じだった。

「ご機嫌ね」

「俺はいつもどおりだけだな」

澪紗に話しかけられたため、ハーヴィはメロディを途中で止める。「依頼が終わった後はどうするの？」

「そうだな。王都に戻って、オウランに行くか、シエルクを超えてルインスタイルに行くか、このまま真つ直ぐ南に行ってデイヴァー

ンに行くか……。いや、わざわざ街道に沿って進むこともねえか。冒険者つてのは、道無き道を行くもんだしな。この歌の主人公もそうだろ」

予め敷かれている道を行っても、それは冒険とは言えない。その『道』というものは、今歩いている街道などを現す道そのものでもあり、人生——生き様においても当てはまる。普通に平穩で無難な日々を過ごすというのも悪くはないが、敢えてそんな道から外れてみるのも面白いかもしれない。

なるべく面倒なことは避けたいが、全てが順風満帆では、それは冒険とは言えないだろう。山があり、谷があるからこそ、冒険というのが成り立つ。

吟遊詩人のサーガ通りにならなくても、それでいい。どんな旅になるかどうか、今のハーヴィには知る由もないが、自分自身のやり方で道を探していくつもりだ。

「結局、何がしたいのか解らないわ」

半ば呆れたように肩を竦める漣紗。

呆れられるのも仕方ないだろう。冒険者という職業がないわけではないが、二十歳を超えてから憧れるようなものではない。

妙に大人びているところもあれば、このように子供らしい一面もある。そこがハーヴィの良いところでもあり悪いところでもある。それを漣紗はよく解っているのだが。

でも、こうして自分が旅に出たのには、目的があった。

しかし——、それはまだ打ち明けるべきではない。

「何考えてんだ？」

ハーヴィが漣紗に声をかける。

「いえ、何でもないわ」

心の中で思っていたことなので、その内容を打ち明けずに漣紗は言った。

「さてと、そろそろ昼飯にしようぜ。少しのんびりしたとしても、夜にはミルフェルトに着くだろ」

街道の傍らにある小さな建物を見て、ハーヴィは提案した。

簡素なつくりの休憩所だ。食事は勿論、宿泊をすることも出来る。このような休憩所が街道に設置されていることは珍しくない。旅人は此処で休憩を取り、旅を続けるための体力を蓄えるのだ。

お世辞にも豪華と言えるような食事や寝床にありつくことはできないものの、軽い休憩を取るには充分であり、料金も非常に格安なために、利用する者は多い。

建物の中に入ると、そこは多くの客で賑わっていた。見られる顔は街の酒場とは異なり、旅人や傭兵、遊歴中の《エリュシオン》の神殿騎士といった者の顔立ちが多い。中には仕事の休憩を取っている農夫と見られる者もいるが、やはり全体で見ると少数に過ぎない。

隅の方にあるテーブル席が空いていたため、二人はそこに腰を降ろすことにした。

「何食う？」

「グリーンサラダ」

「んじゃ、俺はパンケーキでメイプルシロップとクリーム多めにするか」

「甘いものばかり食べていると、太るわよ」

「動いてるから平気だっての」

「そういう問題じゃないでしょう」

「悪かったな、今度から気を付ける」

いつものようなやり取りで、二人の注文は決まる。

ウェイトレスに食べたい物を告げると、二人は運ばれてきた水をちびちびと飲み始めた。

「ん……？」

突然、テーブルがかたかたと揺れ出す。澪紗が揺らしているのかと思ったが、彼女はそのような行儀の悪い真似はしないし、彼女自身もその揺れに気づき、戸惑いを覚えた。

周りの者も揺れに気付いたのか、騒がしかった店の中が少しばかり静まりかえる。しかし、特に深刻な顔をしている者は殆どおらず、

僅かな戸惑いの後は、テーブルの上の食事到手をつけたり、グラスに注がれた液体を流し込んだりと、普段の酒場で見られるような様子に戻る。

「そういや、なんか小さな地震が起こつてるとか言つてたな」

「誰もそれほど気にした様子ではないわね」

この辺りで地震が起きた頃は、誰もが驚きを隠せずにいたが、今は慣れてしまっている者が多い。しかし、その内大きな揺れが来るかもしれないと不安がる者も少なからずいるため、現在は調査が続けられている。

元々、土地の関係上、この辺りは地震が多い。大地の力が強く宿っているのが原因らしいが、真相は定かではない。しかし、それを考慮しても、この地域での地震が多発しているのだ。今のところ被害はないものの、一部の遺跡の壁が崩れるなどの報告も上がっているのが現状だ。

「俺は気になるけどな」

「行ってみる？」

「お前も気になるんだろ？」

「ええ……。根拠は無いんだけど、どうも妙な感じがするのよ」

澪紗は口元に手を当てて俯き考え込む。

根拠は無いのだが、彼女がよく言う「妙な感じ」というのは、よく当たるのだ。未来予知の力や超能力を持っているわけではなく、勘のようなものだ。

「お前がそう言つてんのなら、何かあるんだろうな。依頼終わったら行ってみるか」

暫くすると、注文した品が運ばれてきた。

新鮮な野菜に惜しみなくドレッシングがかけられたグリーンサラダに、形は不揃いだ焼きたての香ばしい湯気が立ち上るパンケーキ。こちらには、生クリームとメイプルシロップも大量にかかっている。どちらも豪華なものではないが、軽い食事としては充分だろう。

二人は「いただきます」と言うと、それぞれの皿の料理に手を付け始めた。

「美味しいな」

「ええ」

口をもきゅもきゅと動かしながら、漣紗は微笑んだ。

「ゆつくりしていきたいが、そうもいかねえか。泊まるくらいの金は充分あるが、色々やりたいこともあるしな」

ハーヴィは口に含んでいる物を水で流しこみ、言った。

「焦っても仕方ないと思うけど」

「それもそうか。とりあえず、今は食うことに集中しようぜ」

ハーヴィ自身も焦っているという自覚はあった。しかし、誰だつてやりたいことは早くやってみたいという気持ちになる。ハーヴィほどの年齢の者なら、尚更そうであろう。漣紗もそれを指摘はしているものの、決して悪いことだとは思っていない。

だが、結局は焦ったところで仕方無いのだ。出来ることから、少しずつやっていけばいい。誰もが焦りはするが、最終的にはそれに気付く。

今、二人に出来ることは、空きつ腹を食べ物で満たすことだ。何気ない会話を交えながら、二人は食事を続けることにする。

しかし、食事以外にも二人には今、やるべきことがあった。

会話をしながらも、周りの者達の談笑に耳を傾ける。

そう。情報収集だ。

依頼を終えた後、二人は《地神グランド》の祀られている遺跡へと足を運ぶつもりでいる。《エリュシオン》の聖地でもあり、また危険な場所であるため、何の情報も無しに足を踏み込むのは自殺行為に等しい。

直接誰かに聞くという手もあるが、遺跡を荒らす邪教徒や盗賊に間違われたり、情報の対価に金などを求められてはたまったものではない。そのため、盗み聞きと言えば聞こえが悪いが、二人はこの手段を選んだのだ。

「なかなか良い情報が聞こえてこねえな。つたく、好みの女とか誇張した冒険譚とか、知りたくもねえっての」

旅人が多いために有力な情報が掴めると思ったのだが、聞こえてくるのは世間話ばかりだった。ある程度のことは覚悟して、直接聞いた方がいいのかもしれない。

「仕方ない、ちょっと聞き回ってくるか——」

「そこのお二方。もしかして、《地神グラードン》が祀られているテラ神殿に興味があるのですか？」

ハーヴィが立ち上がるうとした時だった。

二人が座っていた席の近くに、一人の青年が立っていた。

顔立ちは少し気が弱そうな感じで、中性的だ。紺色のコートにフエルトハットという大人びた格好はしているものの、全体的に線が細いために、やや頼りなくも見える。一応武装はしているようで、腰のベルトには肉厚な片刃剣、ファルシオンが佩刀されている。

後ろに流された紺色の髪は、何処か女性的だ。また、色白の顔に円らな黒い瞳は、とても男のものとは思えない。

コートの裾からは、緋色の尾羽が顔を覗かせている。首元には、白くふさふさとした羽毛が生えており、これらの特徴から、彼が亜人種のドンカラスであることが窺える。

「どうやら盗み聞きされていたのは、私達のようなね」

気弱そうではあるが、只者ではないということを二人は悟っていた。

「あ、別に私はそんなつもりじゃなかったんですが……。ただ、貴方がたの会話がたまたま聞こえただけです。……失礼、私はアズライトと申します」

アズライトと名乗ったドンカラスの青年は、帽子をとってぺこりと頭を下げた。

「おい、マジかよ……」

《情報屋アズライト》——

ハーヴィは今までの仕事で幾度もその名前を聞いていた。

冒険者の間では、その名を知らぬ者はいないといってもいい。特に宛もなく大陸を周りながら、必要とする者に情報を与えることにより生計を立てているという、情報屋だ。

このご時世珍しい職業ではないものの、割安で正確な情報を提供してくれるため、冒険者の間では頼りにされている存在だ。尤も、誰もがこの気弱そうで女性的な青年を見て、彼がアズライトであることを知ると、驚きの声をあげるのだが。

「下手に盗み聞きして変な情報掴むよりは、安い金で正確な情報を得た方がいいか……」

「そうね。依頼料も貰っているし、懐には充分余裕があるわ」

言って、澪紗は懐から銀貨を取り出そうとする。

「いえ、今回は代金は結構です。先日、とある貴族の方から、情報の十倍以上ほどのお金をいただいたので、お金には困っていません。それに、私も仕事というよりも趣味で情報屋をやっているようなものなので」

「まあ、お前にどんな事情があるかは知ったこっちゃねえが、タダで情報をくれるってのならありがたいな」

そう言つと、ハーヴィはパンケーキの最後の一切れをひよいともみ、口に放り込んだ。そして、水を一気に流し込むと、席から立ち上がり、店の外へと歩いていった。

「あ、情報は……」

「私が聞いておくわ。……座ったら？」

ハーヴィが店の外に出たのを確認すると、澪紗はアズライトに座るように勧めた。彼は「では失礼します」と一言ことわり、静かに椅子に腰を下ろした。

「悪いわね……」

少し哀しげな笑みを見せて、俯く澪紗。

「もう、気付いているのでは？ 彼が席を外したのも、私達を気遣つてのことでしょうし。彼とは初対面ですが、なかなか洞察力に優れていますよ」

ただの偶然かも知れないが、ハーヴィが周りの人物の心情を読み取ることに長けているのは事実だった。それを悟ってか、アズライトはずっと様子を見られていたことに苦笑する。

「そうかもしれない。でも、詳しいことまで話したら、絶対に無茶をするから……。それに、私自身の問題だから」

改めて、漣紗は真剣な表情でアズライトに向き直る。哀しげな表情は消えており、いつものような氷の如く凜とした表情に戻っていた。すぐに切り替えることができることから、アズライトは漣紗が如何に心の強い少女であるかを実感した。

「そうですか……。解りました」

アズライトも彼女の心情を悟ったのか、彼女とハーヴィの関係などについては詮索しないことにする。

「華鈴からも聞いたし、それがあなたの情報だということも聞いたわ。あまり疑いたくはないけど、本当なのね？」

「ええ」

アズライトの表情も、真剣そのものだった。

「ただ、あまり良い状況とは言えません。邪教団と絡んでいるところを目撃していますし、詳しい動きもこちらからは読めません……。せめて、彼女に貴女のことを伝えたいのですが、どうも周りに厄介なのがいて、なかなか近付けないのが現状です。力に慣れないのが、申し訳なく思います」

「いえ、あなたも無理しないで」

「ありがとうございます。ですが、全力でお力になるつもりです。私も少なからず、関係してましたからね」

そう言って、アズライトは苦笑する。

そう。二人は以前から面識があった。元々親しい間柄ではないものの、互いに信用できるという関係だ。以前森で出会った華鈴との関係に近くはあるが、こちらは誰とも争うような人柄ではないことを漣紗はよく知っていた。

「失礼、話を戻しましょうか。彼女のことですが、テラ神殿で目撃

されたという情報があります。申し訳ないですが、これはやや古い情報なので、信用度は低いですが……」

「……いえ、それでもありがたいわ。行けば、何か解るかもしれないから」

第11話 没落貴族

ミルフェルトに着いたのは、翌日の昼になってからだった。

一日で到着する予定だったものの、夜に家に上がるのは悪いと考え、休憩所で一泊をすることにしたのだ。

農業地帯の一角にある街だけあって、牧歌的な雰囲気包まれている。暮らしを見た感じ、あまり豊かとはいえないものの、誰もが自分の仕事に誇りをもっているような——明るく温かな表情を見せている。

二人は住人にシデンの妹が暮らしている家の場所を尋ね、上がらせてもらっていた。今は母親と二人で暮らしているらしく、農作業をしている母親に代わり、家事全般は彼女の仕事らしい。

そのためしっかりしているのか、部屋の中は片付いており、床やテーブルも綺麗にされている。また、お茶の入れ方も上手で、味と香りがしっかりと生きていた。

シデンの妹は、名前をハヤテといった。

兄の性格から、大人しくて何処か弱々しい少女という人物像を想像していたが、実際に会ってみると、イメージとは違った。家事をしつかりとこなしているあたりの真面目さは兄と似ているが、それ以外の性格では、とても似ているとは思えない。

艶やかなダークブラウンの髪とパッチリと見開いた緋色の瞳、そして色白で幼さの残る顔付きは、兄とそっくりだ。しかし、兄のような頼りなさや気の弱さはなく、振る舞いや雰囲気からはしっかりと印象を受ける。

「もう、お兄様ったら無茶していないかしら……」

手紙を読んで、ハヤテは深い溜め息をついた。あの性格の兄なのだから、ハヤテが心配したくなるのも無理はないだろう。

此処に来る途中、ハーヴィはちらっと手紙を読んだ。光に翳して封の中の手紙が見えないかどうか試した時に、軽く見えてしまった

だけなのだが。あまり他人の手紙を読むのはマナーとして相応しくないのは解っていたが、どうも彼の中にある好奇心のようなものが勝ってしまったようだ。

内容は、妹を氣遣ったものだった。

しつかりとご飯を食べているか。身体を壊したりしていないか。周りの人たちとは仲良くやっているか。などなど、ハヤテからすれば、そのままシデンに返したい言葉ばかりであるに違いない。確かに、彼女が手紙を読んでいるとき、「こっちがいたいわ、お兄様」などとぶつぶつ言っていた。

「俺も奴とは親しいわけじゃないが、話していると結構真面目な印象を受けたけどな。あいつになりて上手くやっていると思うぜ」

事実、ハーヴィとて彼と親しくなるほど付き合ったわけではない。そもそも、偶然の出会いが何度かあり、まともな会話をしたのはそのうち一度だけだ。

「それならいいのですが、お兄様はいつも無茶をなさるので、心配なんです」

ああ、かなり愛されているんだな——ハーヴィはただ、そう思った。

ハヤテがシデンのことを語るときは、瞳が輝いていた。実の兄妹であるが、此処までお互いに愛し合っているのは珍しいだろう。

「いいお兄さんなのね」

静かながらも優しげに、漣紗は微笑んだ。

「何処か抜けているだけです、お兄様は」

そう言いつつも、何処か嬉しそうなのは、なかなか素直になれないようなタイプなのだろうか。少し顔を赤らめながらも、口元が綻んでいる。

「大体、お兄様は何でわざわざ騎士になどなったのか、私には解りません！ あのような性格で、軍人などやっていけるわけが……」

「ははは……」

確かに、ハヤテの言う通りだ。

ハーヴィはシデンとは親しくないとはいえ、何度か会ったうちで彼の人柄というものは大体掴んでいた。十六という若さで《聖光の翼》に抜擢されるだけあって戦闘力は恐らく高いのだろうが、如何せん性格に問題がある。決して嫌な人間ではないが、周りに気を遣いすぎ、そして優しすぎるため、軍人には向いていないだろう。騎士という立場にある程度必要ともいえる威厳やプライドも、彼には微塵も感じられない。

莫迦にされるではあるうが、嫌われるような人間ではない。それが、シデンだった。

「別に、騎士になどならなくても……。豊でなくても、平和に暮らしていければ、私はそれだけで嬉しいのに……。今では、邪教集団が動き始めているのに、そんな身を危険に晒すような職に就かなくても……。お家の復興などと、そんなこと……」

ハヤテ曰く、色々と理由があるらしい。

グラナート家――

かつては武家の名門として名高い貴族だったという。しかし、五国戦争、邪神戦争という二つの大きな戦を経て、没落。当主であった父も、十年前に亡くなったのだという。シデンが後を継ぐことになったのだが、当時はまだ幼かった故に、母親が現当主として台頭しているようだ。

日々の生活に困窮するほどではないのだが、貴族としては底辺、王国での発言力や地位も非常に低いものとなってしまっている。このような農業都市の一角に居を構えているのもそのためだろう。

それでも、やはり貴族のためか、庶民の家々とは比にならない程の屋敷だ。調度品の数々は高級そうな作りをしているし、暖炉には派手な装飾の施された長剣がかけられている。壁には、ペアシェイプカットされた石榴石と交差したハルバードが描かれた――グラナート家の紋章――旗がかかっている。

シデンが騎士となったのも、グラナート家にかつての威光を取り戻すためらしい。ヴェルセリエス家に並ぶほどの名門まで復興させ

ることが目標らしく、それは今は亡きシデンの祖父母の意思を受けて
継いでのことらしい。長男であるためか、そのような教育を受けて
きたことが窺えるが、結局それは理想論に過ぎないだろうと、ハー
ヴィはただそう思った。

しかし――

「いいじゃねえか、そういう目標があるってのは。もし俺がお前の
立場だったら、最高の兄として惚れこんでるぜ」

ぬるくなった茶を一気に飲み干してから、ハーヴィは言った。少
し冷めても味と香りが失われていないあたり、良い茶葉を使い、ま
た、ハヤテの茶を淹れるのが如何に上手いかということが窺える。

結局、シデンも殆ど宛のないようなことをしているのと何ら変わ
りは無い。グラナート家復興という目標はあるのだろうが、それは
短い年月で出来るものではない。それこそ、何度も武功を立て、多
くの人々に慕われるような存在にならなければならぬ。

一度落ちてしまえば、そこから這いあがるのは苦難の道だ。現実
的に考えれば、叶わぬ夢と言っても差支えない。そのため、宛がな
い旅とほぼ変わりがないのだ。

だからこそ、ハーヴィは好感が持てた。ある意味、自分に近いよ
うな存在なのかもしれないからだ。

「お兄様を高く評価しているんですね」

「俺は思ったことを言っただけだけどな」

ただ、世渡りはかなり下手だろう。真面目で純粹すぎる性格のた
め、自分を追い込みすぎてしまう傾向がある。

悪いことではない。しかし、純白のものを見ると黒い染みをつけ
たくなるように、周りの者が黙ってはいないだろう。《聖光の翼》
という、比較的身分の高い身でありながら雑用を回されるのは、彼
に対するちよつとした嫌がらせかもしれない。

「大体、お兄様は……」

やはり、不満があるのか――

ハヤテは次々とシデンに対する愚痴をこぼした。頼りないだの、

情けないだの、言いたい放題だ。しかし、それだけ遠慮なく言えるということは、余程彼のことを慕っているのだろう。

十分くらいは、「お兄様は、お兄様は……」と言っていただろう。あまりの兄に対する言葉に、二人は苦笑を浮かべていた。それを見て我に返ったハヤテは、顔を真っ赤に染めて俯いてしまった。

暫くすると、部屋の扉が開き、一人の女性が入ってきた。

柔和そうな女性だ。ダークブラウンの髪に、赤い瞳。農作業をしていたのか、服のところどころが土に汚れているが、落ち着いた彼女の雰囲気はみずばらしさを感じさせない。

「あらあら、お客さんかしら？」

「お母様！」

どうやら、この女性はハヤテの母親のようだ。とても二児の母とは思えないほどの若々しさだ。

改めてハヤテを見ると、母親と容姿が良く似ていた。今は此処にいないが、兄であるシデンも母親似だ。

「お邪魔しています」

澪紗は立ち上がると、女性に向けてぺこりと頭を下げた。彼女に小突かれて、ハーヴィも立ち上がってそれに倣う。

「よろず屋のハーヴィさんと澪紗さんです。お兄様からのお手紙を、届けていただきました」

嬉しそうに母親に報告するハヤテ。

「あら、そうなの……。ありがとうございます。あの子、真面目すぎるから無理してなければいいけど……」

「お母様、ちゃんと自己紹介しないと」

そう言くと、ハヤテは香茶を淹れなおすべく、台所へと向かっていった。

「あらあら、ごめんなさい。そう言えば、紹介がまだだったわね。わたしは、チトセⅡグラナートと申します」

そう言くと、チトセはぺこりと頭を下げた。

「オウラン出身……ですか？」

メルクリア王国ではあまり聞かない名前だ。ハーヴィは興味深そうに、慣れない敬語でチトセに尋ねた。ちなみに、オウランというのはインフィニティア大陸の東部の外海にある小さな島国だ。

「オウランというより、カムイラ方面よ。元々、わたしは冒険者だったんだけど……」

チトセ曰く、彼女は元々冒険者として生計を立てていたのだという。大陸中を旅しているうちに、メルクリア王国に落ち着き、そこで貴族の男性と結ばれたらしい。その貴族の男性というのが、シデンの父親だ。

初めは、周囲から散々に反対されたという。ただでさえ没落していたグラナート家だが、庶民——それも何処の馬の骨が解らないような冒険者——と結婚しようとしたのだから無理もない。色々複雑な事情があったようだが、何とか結ばれたようだが。

「あなた達も冒険者みたいね」

「まあ、そんなところです」

淡々と、ハーヴィは答えた。

「でも、まだまだね。旅を始めてから一週間も経っていないってところかしら。顔を見れば解るわ」

「え？」

人の纏う雰囲気で判断できるのだろうか。それなりに長く生きていくということもあるが、このチトセという人物は、名前は聞いたことは無いが、意外に名声の高い優れた冒険者だったのかもしれない。

「それに、色々と迷いがあるみたい。ハーヴィさんも、澪紗さんも

……」

二人は心の中を見透かされているような気分だった。だが、不思議なことには不快な感じはしない。

「でも、それで良いと思うの。冒険なんて、初めから目標を決めてやるものじゃないから。迷いながら、答えを見つけて行くものだとわたしは考えているかな」

「もう、お母様だったらまたお客様に冒険譚を話しているの？」

茶菓子とティーポットを持って、ハヤテが戻ってきた。彼女は慣れた手つきで、四人分のティーカップに香茶を注ぎ、茶菓子を差し出した。

「ごめんなさい、ちょっと懐かしくなっちゃって」

うふふ、と柔らかな笑みを見せるチトセ。

親子のやりとりを見ていると、とても仲が良いことを窺わせる。

「でも、ご両親は反対しなかったの？ 確かに冒険者は夢があるけれど、安全な職に就いてほしいと思っていなかったのかしら」

「いや、親父は俺が生まれる前に、お袋は俺を生んですぐに亡くなったんで」

「ごめんなさい、わたしったら嫌なことを……」

「大丈夫ですよ。親の顔は知らないけど、親父の友達に引き取ってもらって、特に不自由なく育ったんで。それに、今はこいつもいるんで、悲しくはないです」

そう言って、ハーヴィは澪紗にちらりと視線を移した。

悲しくはない、というのは事実だ。バウアーに面倒を見て貰っていたし、街では喧嘩に明け暮れながらも楽しく過ごしていた。それに、親の顔を見たことがないため、ハーヴィは本当の家族というものが何なのかは解らなかった。だが、この親子の様子を見ると、家族がどんなものなのか、少し解った気がした。

「冒険を始める前も、よろず屋としてシエルクの周辺で活動してたんですよ。別に働かなくとも平気だったんですが、やっぱり自分の食い扶持は自分で稼ぎたくて。それで、あまり遠出はせず、せいぜい日帰りで帰れる範囲で出掛けてました。澪紗と出会ったのも、あの依頼の帰りです」

話せばもう少し長くなるのだが、澪紗のことを気遣って最低限の紹介で済ませる。

「長く付き合っているのね」

「ええ」

ティーカップを置いて、漣紗は頷いた。

ハーヴィと漣紗が出会ってから、実に五年の歳月が過ぎている。初めはお互いにぎこちないところがあつたのだが、今はこうしてお互いに信頼できる関係に至っている。

「冒険者かあ。私も目指してみたいけど、お兄様が騎士団に入っているのでは、お母様だけを残して家を開けるわけにはいけないから」
ハヤテは頼杖をついて、天井を見上げた。

没落しているとはいえ、やはり貴族である以上、下手に家を空けるわけにはいかないのだろう。ただでさえ、次期当主の候補であるシデンが、騎士団で働いているのだ。

「別に、わたしは気にしないわよ？」

言って、ハヤテに微笑むチトセ。

先代の当主が聞いたら悲しむのであろうが、チトセはお家の復興ということとは考えていなかった。西のルインスタイル共和国では民主的な政治が敷かれているし、メルクリア王国でも民衆の発言力が上がりつつある。勿論、形式として残すのは有りだが、貴族社会のあり方に疑問を持っているのだ。

それに、大陸中を旅してきた身であるからこそ言えるのだが、貴族社会というのは憧れの対象ではあっても、当事者からしてみれば堅苦しい以外の何物でもない。そう思ってしまうのは、チトセが冒険者という自由な職に就いていたのも理由の一つと言えよう。

だからこそ、自分の子供達には自由に生きて貰いたかった。今まで家を守ってきた先代には申し訳ないのだが、それがチトセの答えだ。

「いえ、わたしはお兄様の帰りを待ちます」

少し照れながらも、ハヤテはハッキリと言った。余程、兄であるシデンのことが好きなのだろう。

「うふふ。答えはゆっくり探していけばいいと思うわ。迷いながらでいいから……」

相変わらず微笑みながら——チトセは少し冷めた香茶を啜った。

答えはゆっくり探せばいい。迷いながらでいい。
この言葉は、ハーヴィと澪紗の心に深く刻まれた。

第12話 地神の神殿

ミルフエルトを発つて、二時間くらいの距離だろうか。

人里離れた小さな丘の上に、それは建っていた。

テラ神殿という名称だが、一つの古代都市というイメージの方が強い。ところどころに倒れた柱や崩れた建物が点在しており、肝心な神殿はその街の跡のような場所を抜けた先に、その形をしっかりと残して建っていた。

足場はあまり良いとは言えない。先に進むには、石畳の道を遮っている倒れた柱を越えねばならないし、一旦道を外れて、崩れかけた建物の中を抜けねばならない場所もある。

薄暗い神殿の中に入れば、この建造物が古代に建てられたものだということは明らかになる。壁のところどころに記された古代文字。アンノーンという種族のポケモンによって、記されているものらしいが、解読できる者は少ないという。

二人はハヤテの家に一泊した後、《地神グラードン》が祀られているというテラ神殿を訪れていた。

ミルフエルトからは然程離れてはいないものの、やはり《エリュシオン》の聖地でもあり、足場も悪いためか、人の姿が無い。時々、教徒が巡礼のために訪れるようだが、この辺りで地震が起きているという情報が広まっているからか、彼らの姿も見られない。

不安定な石畳を踏みしめながら、二人は長い廊下を警戒しながら進む。休憩所でアスライトに聞いた情報によると、黒衣の集団がまだ潜伏している可能性が高いというものを聞いたからだ。

もし遭遇して、相手に敵意があるようならば、戦うつもりでいる。しかし、あまり広い場所ではないため、戦うのには苦勞するだろう。戦うことになるようならば、広い場所に出てからであってほしいと、二人は思っている。

しかし、敵に遭遇することは無く、広くなった場所——祭壇の間

に到着した。

《エリユシオン》で祀られている神の石柱だけあって、豪勢な作りの祭壇だ。古代文字の刻まれた石がいくつも敷き詰められた段は幾段にも連なり、一番高くなっている場所には、黄金製の杯や燭台に囲まれて一体の巨大な像が佇んでいる。

何かの怪物を思わせるかのような像だ。二足歩行で手足の先には鋭い爪があり、首と腰、尻尾からは棘のようなものが突き出している。やや前傾である体勢と背中と手足を覆う鎧のような鱗は大型の爬虫類を連想させる。

この巨大な像が象っているものこそが、《地神グラードン》だ。聖典や伝説などで語られているイメージが、そのまま像となっているらしいが、結局それは創作上のものであるため、実際はどのようなものかは解らない。しかし、それを踏まえたとえでも、高い祭壇の上に佇む地神の像は、何処か神聖で威圧的だった。

「圧巻だな……。こいつがグラードンか」

《エリユシオン》の教徒でないハーヴィでさえ、そう思うほどのものだった。

「私達が今立っている大地を、創造したと言われているわね。陸をグラードンが造り、海をカイオーガが造った……。天地開闢の章に詳しく書かれているわ。聖典の序章、それもページを捲ってすぐの場所ね」

澪紗は頭の片隅にあった知識を、軽く曝け出した。

「よく知ってるな。俺は勉強嫌いだし、そういうのは疎くてな。日曜学校でも授業中に寝てたからな」

《エリユシオン》の教徒でなくとも、日曜学校の授業で軽く触れる範囲だ。そのため、聖典の天地開闢の章の触りを知っている者は珍しくないのだが――

「教徒ではないけど、聖典くらいなら軽く目を通したことがあるから。色々と勉強の足りないあなたに、もう少し詳しく話そうかしら？」

まるで相手の反応を楽しむかのように、漣紗はハーヴィに尋ねた。
「いや、やめてくれ。ぶっ倒れちまう」

元々、本をあまり読まず、堅苦しいことが苦手であるハーヴィにとつては、遠慮願いたいことであつた。尤も、漣紗もハーヴィがそのような人間であることを知っていたため、無理に教えようなどとは思っていない。

そもそも、二人は聖典の内容を勉強するためにこの地に來たのではない。

「さて、来てみたはいいが……」

辺りを見回すが、特におかしなところはない。倒れた柱や岩が見られるだけで、特に怪しい者がいるというわけではない。

勿論、そう簡単に見つかるわけではない。以前、貴族の令嬢の依頼で訪れた遺跡にはあからさまな仕掛けがあつたものの、そういったものは全体から見れば少数派である。

「こうなつたら、片っ端から香ばしい場所を調べるしかねえな」

面倒臭い。そう呟くも、ハーヴィは特に不快に思っている様子は無い。むしろ、何か面白そうなものを見つけられるかもしれないという期待が、彼の顔に滲み出ている。

「そうね……。でも、さつきから妙だと思わない？」

辺りをきよろきよろと見渡しながら、漣紗がハーヴィに問いかける。何かに警戒しているのか、兎のような長い耳もぴくぴくと動いている。

「ああ。明らかに、誰かの気配がある。誰かに監視されているな。妙に威圧的な感じがだが、襲ってくる様子はねえのか？」

姿は見えないものの、凄まじい程の視線を二人は察知していた。
「襲つてこないのがいんだけど……」

いつ襲われてもおかしくないような感覚に押しつぶされそうな状況だが、不思議と殺気は感じられない。ただ、こちらを虎視眈々と狙っているような視線だ。しかし、油断をした隙に襲われる可能性もゼロではないため、二人は集中を解かずに辺りを調べ始めた。

壁を見ると、アンノーンによる古代文字が目に入ってきた。元々、不可解な姿をしたポケモンではあるが、それが文字列となって並んでいるために、幾何学的な模様に見えてくる。

「わけわかんねー」

ハーヴィは壁の古代文字を読もうと思ったが、壁に目をやってすぐにやめる。見ているだけで頭痛がしてくるからだ。

「神々の均衡が崩れた時、世界は破滅へと……」

「っ！？」

後ろからの声に、ハーヴィは思わず飛び上がりそうになったが、その声が澪紗のものであることを悟ると、その場に座り込んでしまった。

「まったく、脅かすなつての……」

ハーヴィは胸を撫で下ろし、深く息を吐いた。

「ごめんなさい、なんか貴方が知リたそうにしていたから」

少し意地の悪そうな笑みを見せる澪紗。

「真面目に解読しようなんて思ってねえよ。それより、何で読めるんだ？」

「情報屋に聞いただけよ。もっと詳しく訳すなら、まだまだ勉強しないと駄目だけど」

情報屋というのは、昨日休憩所で出会ったドンカラスの青年だろう。情報屋というだけあって、その辺りの解読方法などは、ほぼ知っているのかもしれない。恐らく、澪紗は彼からその情報も仕入れたのだろうが、大まかな訳とはいえ、短期間で古代文字を覚えてしまっただけ、かなり冴えている者であることが窺える。

「ほんと、お前には驚かされるよ」

今までの依頼で、ハーヴィは澪紗に度々驚かされている。戦闘は勿論だが、このような知識を必要とする場面で彼女が活躍することが多いのだ。この手のものに疎いハーヴィとしては助かっているのだが、それと同時に畏怖にも似た感情を抱いていた。

「お互いさまよ」

ふふっ、と漑紗は僅かに目を細めて微笑んだ。

「それもそうだな」

ハーヴィは立ち上がり、再び祭壇の間の調査を始めた。

「さて、調査再開と行こうか」

「そうね」

まだ何者かの視線があつた。

（え？ この感覚って……）

漑紗は鋭い眼つきで、周囲を見渡し始めた。先程よりも、耳が小刻みに動いている。

「どした？」

「気配が増えた？ それに、この感覚……」

漑紗は、確かに気配を感じ取っていた。だが、今までの緊迫した空気に麻痺したのか、その正体を掴めずにいた。

そして——、もうひとつの気配を捉えていたのだ。

「……………」

口元に手を当てて、無言で周囲を見渡す漑紗。

「おい、どうしたんだよ？」

「あ、いえ……」

どうやら、暫くの間我を失っていたらしい。ハーヴィの言葉で、

漑紗は平静を取り戻した。

「これだけ怪しい場所なんだ。何か変なのがいるのは間違いねえよ。警戒するのは結構だが、あまりピリピリしすぎていても、いざという時にすぐに動けねえぞ？」

「……………」

恐らく、ハーヴィは気付いていないだろう。初めに感じ取った視線はともかく、今感じ取った気配はほんの僅かなものだ。それこそ、全神経を研ぎ澄まさなければ、感じ取れない程だ。

「……そうね。ごめんなさい」

確かに、ハーヴィの言うとおりだ。下手に緊張を解かずには、非常時にすぐに動くことは難しい。頭では解つていても、緊張を強

めすぎると、身体への伝達が遅れて、結果として行動を起こすのにラグが生じてしまうのだ。

色々と気になることがあったが、漣紗はハーヴィの言葉に従うことにした。

「ま、気にすんなよ。いつでも戦えるようにだけして、適当に行こうぜ」

ハーヴィと漣紗は周囲の適度に警戒をしながら、気になる場所を少しずつ探っていった。いつでも戦闘に移れるように、ハーヴィはグラディウスを抜刀し、漣紗は自分の周囲に小さな氷塊を浮遊させている。

壁や石畳の隅を片っ端から剣で突いたり、手で押したりしながら調べたりした。一応古代の遺跡で重要な場所であるため、その度に漣紗に注意された。

「怪しいところは……まさかな」

唯一調べていない場所――

《地神グラードン》を象った像の配置されている祭壇だ。

有り得ない。そのような解り易い場所に、仕掛けを置くようなことがあろうか。

だが、何かがあると確信したかのような表情で、ハーヴィは祭壇に向けて歩き始めた。

「そんな解りやすい場所に、何か隠されているなんて――」

漣紗が否定する間もなく、ハーヴィは祭壇の近くを調べ始めていた。

もし、《エリユシオン》の教徒に見られていたら、シャレにならない。メルクリア王国は《エリユシオン》とのつながりが深いため、許可なしにこのようなことをすれば、それこそ厳罰ものだ。下手すれば、邪教徒や盗賊として処罰されてもおかしくない。

「ちよつと、ハーヴィ！」

流石にこれはまずいと思ったのか、漣紗はハーヴィを止めるべく祭壇へと走っていった。

彼は像の裏側を調べているようで、彼女もそこに周りうとしたが
《地神グラードン》の像の向こう側から、何かが崩れ落ちるような
音が響いた。

「え……？」

嫌な予感がした。

澪紗は急いでグラードンの像の裏側へと向かった。だが、そこに
ハーヴィの姿はなく、地面に大きな穴が開いているだけだった。

「何てこと……」

恐らく、足場がかなり老朽化していたのだろう。古代の神殿のた
め、土台が弱まってしまっているのは無理もない。

澪紗は身を乗り出して、大穴を覗いた。下の様子を窺うことは出
来たが、かなりの深さがあることが窺える。下では、ハーヴィが腰
を擦りながら蹲っていた。高度はあったものの無事だったようで、
澪紗は深い溜息をついた。

「ちよつと、ハーヴィ！ 大丈夫？」

「心配すんな。ちよつと腰を打ったが、大したことねえよ」

天井の穴から、見下ろしてきた澪紗に、ハーヴィは声を張り上げ
て答えた。安心していうような仕草を見せているとはいえ、言動か
ら相当な心配をしていることが窺えた。

事実、目立った外傷はなく、何の支障もない。しかし、問題はど
うやって戻るかということだ。このまま神殿の地下で朽ち果てるよ
うなことになるのは、流石のハーヴィもごめんだと思っている。

「いてて……。いきなり足場が抜けるとは思ってもなかったぜ……」

落ちた時に腰を強打したようだが、幸い折れてはいないようだ。

ハーヴィは打ったところを擦りながら、何とか立ち上がる。

「それにしても、どうなつてんだ此処は……？ あー、いてえ……」

老朽化が進んでいたのかもしれないが、祭壇の間の下にこのよう
なフロアがあることを、ハーヴィは予想していなかった。

気になることはあるが、澪紗と分断されてしまったことが気掛か

りだ。この状況で戦闘になるのが、一番まずい。

「おい、漣紗。そっちになんかロープみたいなものあるか？」

何としてでも、この場から元の場所に帰るのが先決だ。

天井に向けて、大声を出す。出来ることなら、このまま落ちた穴から戻りたかった。

「悪いけど、何も無いわよ……。それに、そんなことしている余裕なんてないわ」

その言葉を残し、ふと漣紗の姿が消えた。

「漣紗……？」

そう、考えられることは一つだけだった。

神殿に足を踏み入れた時から感じられた視線。

そして、漣紗が周囲を強く警戒していたこと。

「ちいっ！」

漣紗の言つとおり、もっと警戒すべきだったのか――

ハーヴィは己の浅はかさを呪い、近くの瓦礫を思いきり蹴飛ばした。

第13話 炎の狂戦士

先ほどから感じていた視線は、やはり気のせいではなかったことを、澪紗は悟った。

地下のフロアに落ちたハーヴィを救出する方法を探そうと思っていたが、そのような余裕など今の彼女には無かった。その視線の主が、姿を現したからだ。

手元に冷気を宿らせて、その者を睨みつける。グレイシアの特徴の出た耳と尻尾もピンと立ち、極度の緊張が澪紗の神経を研ぎ澄ましていることが、彼女自身もよく理解していた。

間違いない。ずっと感じていた気配のひとつは、こいつだ——視線の先にいるのは、黒い毛皮のコートに身を包んだ、ガラの悪そうな青年だ。だらしなく着こなしたコートの下には、色白ではあるが、引き締まった肉体が見える。

見た目は人間のように思える。しかし、首の後ろからは赤々とした炎が噴き出しており、襟飾りのような形を成している。このことから、彼がバクフーンという種族の亜人種であることが窺える。

小さく鋭い瞳には、狂気とも言えるようなものが宿っており、その混濁とした瞳は澪紗へと向けられ、口元も感情で歪んでいる。

まずい——

戦闘は避けられないだろう。澪紗としては、無駄な戦いなどしたくない。しかし、相手に宿るものは狂気そのものであり、例えこちらに戦う意思が無いことを伝えても、許しはしないに違いない。

戦いたくない理由は、体力の温存以外にもある。

そう、属性だ。

バクフーンが操るのは、熱気や火炎といった力だ。それに対し、グレイシアである澪紗は、氷の力を操るため、相性が非常に悪いのだ。真正面から、それもお互いの能力を駆使した戦いとなれば、彼女が勝つ確率は絶望的である。

だが、弱みを見せてはならない。漑紗は凜とした表情で、バクフーンの青年を見据えた。

「ククク……、そんなに怖い顔すんなよ、嬢ちゃん」

そう言つて、バクフーンの男は腰から獲物を抜き取り、両手に構えた。すると、拳の先に肉厚の刃が真つ直ぐと突き出た。短剣のように思えるが、握る部分が鐔と平行に作られており、ちょうど拳の先に刃がくるような造りになっている。

ジャマダハルと呼ばれる武器だ。拳を前に突き出すだけで絶大な破壊力を出すことのできる武器だが、その分、自分の手を痛めやすいために扱いが難しいと言われている。そんな武器を好んで使っているのだから、己に余程の自身があるに違いない。

メルクリア王国では、あまり見られない武器だ。主に、ディヴァーン帝国の砂漠地帯で見られる武器だが——相手の出身など気にしている暇など無かった。

「さあ、楽しもうぜ？」

ジャマダハルの刀身をぺろりと舐めると、バクフーンの男は漑紗に飛びかかってきた。すかさず彼女は相手を氷塊で牽制しつつ短剣を抜刀し、相手の一撃を刀身で受けて、そのまま勢いを殺ぐ。しかし、相手は両手に得物を手にしているため、次々と刃が襲いかかってくる。

接近戦は然程苦ではない。今まで何度か、ハーヴィと剣の手合わせもしてきたため、人並みにはこなせることを漑紗は自負していた。「何だよ何だよ、それが本気なのかよお、ああッ!？」

それは憤怒なのか、悦楽なのか——

何とも言えない表情を露わにしながら、バクフーンの青年が叫ぶ。「くうっ——!」

素早い動きでありながらも、一撃が重い。短剣で攻撃を受ける度に、全身に重圧がかかる。

受け流しきれなかった刀身が、漑紗の頬を掠め、赤い傷跡を残した。種族の違い、また腕力の違いもあつてか、全ての攻撃を完全に

受け流すのは、やはり厳しい。しかも、相手の様子を見ると、実力の半分も出していないのだろう。

このまま攻撃を受けて体力を削られては、ただでさえ低い勝利の可能性も無くなってしまう。澪紗の戦闘力は決して低くはない——むしろかなり高いのだが——相手が悪すぎる。戦闘において重要なのは、戦闘力や経験も勿論ではあるが、相性も大きく影響してくるからだ。

（まずいわね。接近戦でもこれだけの力を持っているなんて。あまり、余力を残そうだななんて考えるべきではない……か）

「駄目だ。お前つまんねー」

バクフーンは攻撃を止めると、澪紗と距離を広げた。

「だから……、とっとと死ねッ！ 灰にしてやるぜッ！」

狂気じみた瞳が見開かれ、肌を焦がすかのような熱気とともに、渦巻く火焰がバクフーンの手先から放たれた。

赤く光る炎は澪紗の周囲を包みこみ、彼女の逃げ場を完全に遮断してしまった。渦巻く炎は徐々にその輪の形を狭め、ゆっくりと澪紗へと迫っていく。

炎の直撃はまだ受けていないものの、高熱を帯びた風が肌をチリチリと焼く。このままでは、業火に吞まれるのも時間の問題だろう。しかし、澪紗は諦めたわけではなかった。そもそも、このような場所で朽ちるつもりなどないし、相手が全力でかかってくるのならば、叩き伏せるしかない——そう考えていた。

「クツクツク……灰になりなァッ！」

恐らく、相手は属性の優越や己の力を過信しているため、火焰の渦の外側から傍観しているだけに達意しない。勝機があるとするならば、そこに如何にして付け込むかが重要になってくる。そのためには、まず炎を突破しなければならぬのだが、澪紗は既にその方法を実行しようとしていた。

彼女の周りに、冷気を帯びた風が渦巻く。強力な冷気を帯びているのか、ところどころにキラキラと氷の粒が輝いているのが解る。

炎に対して、氷そのもので挑むのは無謀だが、冷氣の場合はその限りではない。実質、冷氣を使った技には少なからず氷の魔力が宿っているものの、その実態は氷そのものではなく風が主だ。強力な風を起こせば、炎に対して挑むことは不可能ではない。しかし、風と炎の相性は、良くもあり悪くもある。風向きなどを間違えれば、自分自身の首を絞めることになりかねないからだ。

漑紗は炎の内側から、逆向きの冷氣の風を起こして対抗した。こうなれば、単純な魔力同士のぶつかり合いだ。

「ククツ、やったか……」

火焰の渦が狭まり、獲物に到達した。辺りに黒煙が立ち込める。

全力で放った技だ。これで倒せない筈がない。バクフーンの青年は、悦楽に浸っていた。

だが――

「そう簡単に……斃れないわ……」

「なんだとッ!？」

斃すには至っていないかった。ダメージを与えたのは間違いないが、仕留めた筈の獲物が、ふらついた様子もなく立っているのだ。

「でも、あなたの技、結構効いたわよ……」

炎を打ち破ることはできたが、無傷というわけにはいかなかった。戦闘に支障はないものの、服のところどころが焼け、そこから痛々しい傷が顔を覗かせている。

バクフーンの青年は、漑紗がまさか技を打ち破るとは思っていなかったように、驚愕を隠せずにいた。

「畜生ッ、この死に損ないがッ!」

冷静さを失ったのか、バクフーンは次々と直線状に炎を撃つてくる。どれも強力なものであるのに、は変わりがないものの、正確さを大きく欠いている。そのため、俊敏な動きがあまり得意ではない漑紗にとっても、回避するのは容易かった。

こちらから攻めなければ戦いに勝つことはできない。しかし、やはり相手が炎で挑んでくる以上、冷静さを失っているとはいえ勝つ

のは難しいだろう。

それならば、策を用いて戦い、属性での相手のアドバンテージを打ち消せばいい。そう判断した漣紗は強く念じ、己の冷気を一気に解放した。

ちらちらと白いものが、祭壇の間に舞い始める。その白いものは徐々に勢いを増し、強い風を伴って吹きつけた。バクフーンはそれが雪であることにすぐに気付いたが、特に気にせずに攻撃を続ける。「ハハハハハッ！ もがけ、もがけ、もがけエッ！」

気が狂ったかのように、次々と炎を連射するバクフーン。狙いなどは定めておらず、ただ闇雲に乱発している。しかし、彼はすぐに異変に気付いた。

「ハハハハハ……ハ……？」

漣紗の姿が見えない。今まで手当たり次第に炎を撃っていたが、手ごたえもなかったため、仕留めたわけではないだろう。

辺りを見渡すと、強い雪が降っている。

まさか――

「チイツ、くだらねえ小細工をしゃがって！」

グレイシアという種族は、雪が降るとその姿をとらえるのが難しくなると云われている。漣紗はその特性を生かし、雪を降らせることによって姿を隠したのだろう。

逃げたのか――いや、気配はまだ近くにある。だが、吹き荒ぶ雪のせいで、己の五感が鈍っていることに、バクフーン自身は気づいていた。

こうなれば、今までのように手当たり次第攻撃するしかない。そう判断すると、再び火炎を放とうと、彼は手を構えたが――

背後からの一撃だった。鋭い冷気が背中に突き刺さり、全身が凍りつくかのような感覚に見舞われる。すぐにバクフーンは振り返り、攻撃が飛んできた方向に炎を放つが、手応えがまったく感じられない。

属性で有利とはいえ、氷や冷気による攻撃を完全に防げるわけで

はない。当然、当たれば痛みはあるわけで、それが蓄積していけば、いずれ致命傷となる。だが、今のバクフーンに打開策はなく、ただ手当たり次第に炎を放射することしかできなかった。

「ぐ……かはぁッ……」

遠距離からの攻撃を受けるたびに、呻き声を上げるバクフーン。

しかし、苦痛で顔をゆがませるわけでもなく、ただ単純に攻撃を繰り返すだけだ。

いや、顔は歪んでいた。

苦痛による歪みではなく――

狂気だ。

そう。この青年を支配するのは、狂気だけだ。

「ぐはぁ！ おもしれえ！ おもしれえぞッ！ 俺サマの血が滾るッ！ フハッハハハハハハハハハハアアアアアアッ！」

笑っている。常人からすれば、気が触れてしまったかのように思える笑い方だ。

恐らく、このバクフーンの青年は、何者かと戦うことを生甲斐としているのかもしれない。どちらにしろ、あまり関わりたくない相手だと、澪紗は思った。

そんな厄介な相手を再起不能にすべく、澪紗は更なる攻撃を加えた。手元に冷気の球を宿らせ、そこから直線状に青白く光る光線を放つ。そして、そのまま降っている雪を利用して身を隠し、今度は氷で作られた刃を拡散させた。

「頭は悪そうだけど、厄介な相手ね……」

このまま何とか押し切りたいものの、相手もなかなか引き下らない。狙いは滅茶苦茶とはいえ、炎の軌道を気にせずに戦うわけにはいかない。如何に雪を利用して身を隠しているとはいえ、澪紗は己の力を過信してはいないのだ。

また、可能であるならば、接近して相手の喉元をダガーで搔っ切り、勝負をつけたかった。しかし、炎による攻撃が激しいため、接近できないというのも事実だった。それならば、少しずつでも、遠

距離からダメージを蓄積させていったほうが安全であるし、確實だ。しかし、次の攻撃を加えようとしたときに、異変は起きた。

「え……？」

雪が雨に変わっていた。熱気により雨になったのかと思ったが、それを上回る冷気を操り雪を降らせていたため、その筈がない。では、相手が雨を降らせる術を使ったのかということになるが、バクフーンが雨を操るなどといった話は聞いたことがない。

相手のバクフーンも突然雪から雨に変わったことに戸惑いを覚え、攻撃を中断していた。仮に攻撃をしていたとしても、この雨の中で炎の技を使つたとしても、十分な威力は発揮できないだろう。

澪紗はすぐに我に返り、相手が攻撃を中断した隙を突き、冷気的光線を放った。狙いも定めたため、これで終わらせられる――
筈だつた。

冷気を帯びた光線は、バクフーンの目の前で四散し、完全に無力化されてしまった。

「チイツ、邪魔してんじゃねえよッ！」

バクフーンの青年は、後ろを振り返って悪態づいた。

澪紗はすかさず攻撃を放つが、冷気的光線も、氷の刃も、バクフーンの目の前に展開されている見えない壁のようなものに無効化されてしまう。それならば、と雪を降らせようとするも、雨を降らせている者の魔力が強いためか、周囲の天候を変えることすら出来なかった。

「そこまです。退きなさい、ダイン。あなたのパートナーから、連れ戻すように言われているわ」

バクフーンの後ろから、水色のドレスに身を包んだ一人の女が現れた。まるで、水が人の形を象つたかのような、そんな出で立ちだ。
「な……」

澪紗は、彼女を見て驚愕を隠せずにいた。

ウェーブのかかった青い髪に、それと同じような色の美しい瞳。

耳元には鰭のようなものが突き出しており、スカートの裾からも魚

の尾鰭とみられるようなものが僅かに見える。身体全体は華奢な感じで、鰭のようなものの存在もあってか、人魚を連想させるものがある。

シャワーズという種族、その亜人種であることを、漣紗はすぐに悟った。

「嘘……」

何が起きているのか、漣紗は自分自身でも解らなかった。

ただ、解ることは――

今、目の前にいる亜人種のシャワーズは、自分のよく知った相手であり――

「ねえ……さん……？」

「……………」

「姉さんの……？」

今までずっと探していた相手――唯一の相手――に、問いかける漣紗。

「……死にたくなければ、此処から立ち去りなさい。あなたは……いえ、あなた達は何も分かっていない……」

だが、帰ってきた言葉は肯定でも否定でもなく――

「そんな……、姉さんなんでしょう!？」

普段の自分なら有り得ないだろう。思わず感情的になり、大きな声を出してしまっている。そして、シャワーズの女に向けて、思わず走り出していた。

シャワーズは冷ややかな――しかし、何処か哀しげな瞳で、漣紗を見つめた。

そして――

手元から、水の弾丸を、漣紗へと向けて放った。

「ああああああああつ――!」

本来なら、命中精度も高い技ではないことを、漣紗は解っていた。しかし、今の彼女は冷静さを欠いており、その技を回避する余裕などなかった。正面から水の弾丸を受け、弾き飛ばされて、壁に叩き

つけられてしまう。

「くはうつ……うつ……」

全身に走る痛み。傷は負ってはいないものの、衝撃と激痛で動くことが出来ない。

「ダイーン。あなたも上の命令を無視しないように。これ以上繰り返すようでは、あなたを肅清しなければならない」

「うるせえッ！ いつも上から目線で——があッ!？」

喚き散らそうとするバクフーンに、シャワーズの女は至近距離で水の弾丸を直撃させた。バクフーンはそのまま気を失い、がくりと崩れ落ちた。

痛みに喘ぎ蹲っている澪紗を余所に、シャワーズの女は気絶したバクフーンを背負い、その場から去って行った。

「姉……さん……」

残された澪紗は、ただ姉のことを想いながら、呻くだけだった。

第14話 大地の思念

雨が止んだ後、吹き抜けの天井から青空が顔を覗かせた。

ああ、やっぱり――

さっきの雨は、姉さんの術だったんだ。

それならば、自分の術が打ち消されてしまったのも納得できる――
不思議と、澪紗は冷静な気持ちになっていた。

「ほんと……いつも容赦ないんだから……。痛っ……」

水の弾丸の直撃を食らい、壁に全身を叩きつけられたのだ。ダメー
ジも相当なもので、身体を動かそうとすると激痛が走る。しかし、
折れたような感覚はなく、戦闘になったとしても大きな支障は無い
だろう。

しかし、攻撃を食らってからだいぶ経つと言うのに、なかなか痛
みが消えない。このことから、相当な威力であったことが、澪紗は
身をもって思い知らされた。

「こうしてなんていられない……」

暫く休みたかったが、そうはいかない。下に落ちてしまったハ―
ヴィのことも気になるし、このような場所でいつまでも単独行動を
していては危険だ。

澪紗は自分の身体に鞭打ち、なんとか立ち上がった。

穴に落ちてから、どれくらいの時間が経過しただろうか――

何としても地上に戻りたいが、なかなか出口を見つけることが
出来ない。

無理もない。初めて来る場所であるうえ、突発的な事故に巻き込
まれ、このような事態に陥ったのだ。このような状況に陥り、冷静
かつ正確な判断で、的確な答えを導き出せる者は、そうはいないだ
ろう。

そして、何よりも――

「くっそ……漣紗……」

自分のことより、唯一無二のパートナーのことを思う。彼女のことであるため、戦いで死ぬようなことはないと信じているが、やはり心配である。戦いに巻き込まれていることは、間違いないだろう。漣紗の戦闘力の高さは、ハーヴィもよく解っている。

そんなことを考えながらも、ハーヴィは薄暗い通路を進んでいく。祭壇の間の地下も、何やら人工的に作られたものようだ。原形を留めていないものが多いが――古代のポケモンを象った石像や燭台がところどころに配置されており、この場所も神殿の一角であることが窺える。

このように、神殿や遺跡の地下に、未だ掘り起こされたことのないような場所があるというのは、珍しいことではない。しかし、調査がつけられていないものの、地盤の悪さや場所の辺鄙などを理由に、なかなか進展していないのが現状だ。それでも、敵襲がないとは限らない。ハーヴィは剣を抜き、壁に背にしながら、慎重に進んでいった。

神殿の地下は、薄暗いものの歩くのに苦労するほどの暗さではなかった。というのも、何やら正体不明な青白い光が全体を包んでおり、それを灯りとして進むことが出来たからだ。

「やつぱり、いやがったか……」

警戒していて正解だったと、ハーヴィは思った。曲がり角の奥から、何者かが一人、こちらに向かって歩いてくる。相手は武器を持っているようで、殺気も放っているため、戦闘は避けられないだろう。このような狭い場所での戦闘は、あまりしたくないというのが彼の本音だが、相手がその気ならば仕方がない。

しかし、何者かがいたということは、ハーヴィにとっては良い情報でもあった。人がいるということは、何かしらの方法で此处に来たということに違いないからだ。話が通じる相手の場合、出口を訪ねればいいし、そうでない場合は力ずくでも聞き出せばいい。

可能ならば、無駄な戦闘は避けたい。そう判断したハーヴィは一旦剣を納めて、曲がり角からそのまま身を曝すことにする。

「何者だ、貴様っ！」

予想通りの反応だ。例え、相手が有無を言わずに剣を構えて突っ込んできたとしても、ハーヴィには充分対応する余裕があったのだが。

まず、ハーヴィは相手の問いに答えることにした。

「ああ……《エリュシオン》の教徒なんですけど、巡礼に来ていたらちと上の神殿の床が抜けちゃってですね……ははは……。相棒とも離れ離れになっちゃったんですよね。もう、此処がなんだかサッパリで……」

口調からして自分らしくないな、とハーヴィは思った。《エリュシオン》の教徒は清楚で礼儀正しい者が多いと聞くため、慣れない敬語を使っているのだが、かえってぎこちなくなってしまうていた。神殿の床が抜けたというのは真実であるが、《エリュシオン》教徒であることは真っ赤な嘘だ。教徒を騙るのは本来なら罪になるのだが、この状況を打破するにはこれ以外方法が無いと、彼は判断したのだ。

しかし、相手は冷たい視線でハーヴィを睨み、言った。

「……なるほど、ならば我々の敵ということだな！」

黒衣に身を包んでいるため顔は解らないが——、声から判断すると、若い男だろう。彼はハーヴィを敵と判断するや否や、腰から大きく反った細身の剣——シャムシール——を抜刀し、ハーヴィへと斬りかかってきた。

充分な間合いがあったため、対応するのは容易かった。ハーヴィはすぐにグラディウスを抜刀し、相手の攻撃を刀身で受け流す。膂力は然程強くないが、狙いは的確だった。受け流し損なえば、シャムシールの刀身は真っ直ぐとハーヴィの喉に達していただろう。

元々、シャムシールはその大きく反った形状から想像できるように、刺突よりも撫で斬ることに適している剣だ。このように、突き

よりも斬りを主としている剣は、点よりも線で相手を捕らえるため、左右の動きよりも前後の動きが重要になってくる。ハーヴィは前後のステップを交えながら、相手の攻撃を一つずつ確実に受け流していく。

剣の特徴を生かした、型にはまった戦い方だ。護身用に独学で鍛えたハーヴィとは違い、一つ一つの動きが安定している。曲刀を使う流派は、オウランとデイヴァーンでよく見られるが、撫で斬りを主としているシャムシールを使うことから、相手の素性はともかく、デイヴァーン帝国の流派の一つであることが解る。

強い――

だが、負けるような相手ではないし、ハーヴィには充分勝つ自信があった。

ハーヴィは後退しつつ、相手の攻撃を受け流していく。傍から見れば、防戦一方のように思えるものの、彼には作戦があった。力押しでも勝てなくはないが、なるべく自分も傷を負わずに、戦いを終わらせたかったのだ。そして、何よりも相手を殺してしまうのが、彼にとっては一番困ることだった。

「悪く……思うなよっ！」

「!？」

丁度、瓦礫の欠片があったために、ハーヴィは思い切りそれを蹴り上げる。相手はすかさずそれを防ごうとするが出来ず、額に食らってしまった。傷は浅いものの、瓦礫の欠片が当たったところからは、血が滲み出ている。

相手も流石に予想していなかったのか、思わず痛みに呻き、額を押さえる。その隙をハーヴィは逃さずに、まず剣を弾いて叩き落として拾うと、相手の喉元に切っ先を突き付けた。

「俺の勝ちだな」

「チッ、卑怯な奴め……。お前は《エリュシオン》教徒ではないな。奴らなら、お前のような奇策を用いた戦いはしない筈だ」

顔は見えないものの、口調からは無念さと憎しみがひしひしと伝

わってくる。

「喧嘩に卑怯もクソも無いだろ。ま、教徒つてのは嘘だけだな」

切っ先を突き付けたまま、ハーヴィは言葉を続ける。

「お前が此処にいるってことは、別のところから入ってきたんだろ？ その場所を教えてもらえるとありがたいんだが」

「……」

ハーヴィの問いに対して、男は無言だった。反撃の機会を狙っているのではない、ハーヴィは切っ先をさらに喉元に近づける。また、武器は取り上げているものの、何処かに暗器を隠し持っているかもしれない。そのため、いつでも反撃に応じられるように、ハーヴィは警戒を解かず、再び男に問いかけた。

「おい、頼むよ。俺だって手荒なことはしたくない——」

次の瞬間、男が動いた。一瞬の隙を突き、懐から細身の短刀を取り出したのだ。

反撃を予想していたために対応はすぐに出来たものの、男が次にとった行動はハーヴィにとって想定外のものだった。

「バカッ、お前何を——！」

短刀をそのまま自分に向けて投げるのではない、投擲による攻撃を防御すべく、剣を手前に出したのだが——

「情けなどいらん。それに、偽りの神を信じるお前に、話すことなどない——」

男は短刀の切っ先を、自らの喉元に突き刺した。

「ガッ、ゴボボボ……！ ガハッ！」

動脈も切断されているのだろう。男の喉元からは、噴水のように赤く生温かい液体が噴き出す。

「何考えてんだ——！」

まさか、相手が自刃するとは思ってもいなかった。何とか処置をしようと思うものの、今のハーヴィにはその手段はなく、突然の相手の行動に戸惑いを隠せずにいた。その間にも、傷口からはドクドクと血液が流れ出ている。

「がふつ……。邪神……ぎ……な……よみ……え……」

途切れ途切れの言葉——それも何を言っているのか解らない。血を吐きながら、懸命に言っているものの、それが一体何を意味するのか、ハーヴィには理解できなかった。ただ、それがハーヴィへと向けられているような言葉ではないことは彼にも解った。

解読不能な言葉を言い終えると、男は最期に血を吐きだし、そのまま事切れた。

ハーヴィは相手の顔を見るべく、黒い布を外す。すると、そこには喉元を貫いた苦痛とは思えないほどの、安らかな顔がそこにはあった。年齢はまだ若く、自分と大して変わらないだろう。

「莫迦野郎が——」

ハーヴィはそう呟くと、死んだ男の手を胸の前で合わせた。

今まで、何度も敵を斬ってきた身とはいえ、何処か後味が悪かった。しかし、この後味の悪さを何かに思い切りぶつけたかったが、いつまでもこうしてはいられない。そう切り替えると、ハーヴィはグラディウスを鞘に納め、出口を探すべく再び歩き始めた。

「結局、聞き逃しちまったな」

出口の場所を聞き逃したことも心残りだが、今のハーヴィにとっては、男が死に際に残した言葉が引がかかって仕方がなかった。そもそも、自ら命を絶つようなことをする必要があったのか——それも気になった。

まずは、この場から出なければ——

そう思った時だった。

地面がガタガタと揺れ、その震動が全身に伝わってきた。——いや、地面だけではなく、壁や天井も揺れており、上からパラパラと砂埃が落ちてくる。

「地震か……。こんなとこに生き埋めとか、冗談でも笑えねえよ」
揺れは大きくはないものの、かなり昔に作られた建物だ。万が一ということも有り得る。また、今は地下にいるため、もし建物が崩れようものなら、このまま生き埋めになってしまっだろう。そう考

えただけで、冷や汗が出るほどだ。

頼むから揺れに耐えてくれ――

そう思いながら、ハーヴィは通路を進んでいった。

あてもなく進んでいくと、やがて何やら広くなっている場所に辿り着いた。そこは、上にあった祭壇の間のような造りになっており、天井も高くなっている。しかし、青白い光で視界は悪くないものの、やはり地下である以上、地上とは少し異なる印象を受ける。

地上にあったような巨大な像は無く、ただ祭壇だけが安置されている。しかし、それでも地上と同じように、神聖な雰囲気に含まれている。

「チツ……。なんか、ヤバいここに足を踏み入れちゃったみたいだな……」

このまま引き返したほうがいいのだろうが、足が動かなかった。疲労や怪我で動かないのではなく、得体の知れぬ――見えざる重圧のようなものが、自分の身体をその場に縛り付けていることが、ハーヴィには感じられた。

迂闊に聖地を調べたバチが当たったかと、ハーヴィは思った。本来、彼はそのようなことをあまり考えない性質ではあるが、今回ばかりはそう言っていられないようだ。

今、自分の感情の殆どを支配しているのは、恐怖だ。それは、身体が動かせない要因の一つであるのかもしれない。そう思うと、情けなくなってくる。

「マジでヤバいな……」

敵に襲われているわけではないが、このまま動けずにいるという状況も好ましくない。

どうしたものか――

状況を如何に打破するか考えようとしたとき、ハーヴィに何者かが語りかけてきた。

「やれやれ、男のくせにこの程度のプレッシャーに負けるなんて、情けないね」

頭の中に響く、少しハスキーな声。声の質からすると、若い女だろう。しかし、辺りを見渡してもそれらしい者はおるか、人っ子一人見当たらない。

「ああ、アタシはアンタの脳味噌の中に語りかけてんだ。探したつていやしないよ」

「ついに幻聴が聞こえてきたか。マジで、シャレになんねえな」

「つたく、少しは現実を見たらどうだい？」

「っ！？ 何だこれはッ——！？」

突然、頭に激痛が走る。

この痛みは幻ではない。現実のものだ。

「ふん、痛いだろ？ 今、アタシの力の一部をダメージに変換して、アンタに送ったんだ」

「っ……ワケ……わかんねえっての……」

「やめてほしきや、大人しくアタシの話を聞きな」

静かながらも迫力のある声で、正体不明の女はハーヴィイに言った。このまま痛みが続いていてもたまらないので、状況が掴めないまま、ハーヴィイは女の声に従うことにする。

「まずは、自己紹介だ。アタシは、グラードン。この世界じゃ聖書に出てくる神様って崇められてるみたいだけど、そんな大層なものじゃないさ。大地と太陽の力を持つてるってのは、本当だけどね」

一体、こいつは何を言ってるんだ——

姿は見えないもののいきなり意識に入り込み、「私は神です」といった内容のことを堂々と言っているのだ。頭のネジが二、三本どころか軽く十本以上外れているんじゃないかとハーヴィイは思った。

「今、失礼なこと考えてただろ？ 頭のネジが十本以上飛んでるだつて？」

どうやら、頭の中に響く声は、本物のようだ。

「悪かったな……」

「ま、いきなり話しかけたアタシにも非があったね。そこは謝ってくよ。でだ。早速本題に入るよ」

どうやら、自分には選択肢は無いらしい。

不本意であったものの、ハーヴィは頭の中に響く自称グランドンの女の声に従うことにした。

第15話 神の眷族

地上の神殿に像が建てられていたことから、この地に《地神グラードン》が祭られていることは事実のようだ。それも、遙か昔――ロストテクノロジーというものが栄えていた時代からあったという。大戦時には何度か戦火に曝されたらしく、特に邪神大戦の時には、《タルタロス》の教徒が大半して押し寄せたらしい。

尤も、その時グラードンはただ傍観者として戦いの行方を見ていただけらしい。戦いの行方は人間達に任せ、ただ見守っていたのだという。それは、自分のような大きな力を持つ者が介入すれば、それこそ地形を変えてしまうほどの被害が出てしまうからだそうだ。

ただ、『神』と呼ばれる存在がこれほど身近に実在していたことは、ハーヴィにとつては驚愕せざるを得ないことだった。

「で、その神様とやらが俺に何の用なんだ？ 早く解放してほしいんだけどな」

少し面倒くさそうに、ハーヴィは自分の意識の中に入り込んできているグラードンへと尋ねる。彼としては、早く用件を済ませて、漣紗と合流したかった。しかし、何かしら情報を掴めるのは間違いないため、ハーヴィは彼女に従うことにした。

勿論、このまま逆らうという手もある。だが、神々というものが存在するのならば、自分の力で対抗するのはまず不可能であるし、そもそも斬り捨てるべき相手が姿を見せていない。

「アンタ、《神の眷族》に関わっているだろ？」

ハスキーな声、しかし、そこには真剣さがあった。

「おい、ちょっと待て。ワケわかんねえっての。そもそも、その《神の眷族》って何なんだよ」

「……その様子だと、自覚は無いみたいだね。まあ、いいさ」

グラードン曰く、《神の眷族》とは、神に近い力を持ったポケモン達のこと、二十二人からなり、種族や生い立ちなどは関係せず

に発現するのだという。また、外見からはそれらの特徴は解らず、本人に自覚があるかどうかも定かではないらしい。

ハーヴィはその《神の眷族》に関わる者だとグラードンは話しているが、彼は彼女の言っていることがなかなか信じられなかった。

「んな伝説みたいなこと言われてもな……」

しかし、何処か引つかかるところがあった。

「《女教皇》——種族はグレイシアか。なるほど、まだ安定してないみたいだけど、間違いない」

グラードンの言葉に驚愕し、ハーヴィは表情を歪める。

グレイシアという、ただでさえ希少な存在だ。決して良いとは言えない予感が、彼の脳裏をよぎった。

「お前、何を言ってるんだよ……!?!」

敵意は無いが、自然とハーヴィの手はグラディウスの柄にかかられていた。その場にグラードンの姿は無く、斬りかかることはできない。たとえ、その場に彼女の姿があったとしても、自分の力で勝てるとは思っていなかったが——自分が未知の世界へと踏み入れようとしていることに、彼は怖れに似たような感情を抱いていた。彼のこの動作は、本能によるものだった。

偶然である可能性あるのだが、会ってもいないのに、自分の相棒の種族を言い当てたのだ。《エリュシオン》の一柱として崇められているあたり、このグラードンという神はただ者ではないと、ハーヴィは嫌でも思い知らされた。しかし、なかなか認めることが出来ず、彼は彼女に対し、問い返すことにする。

「ああ、確かに澪紗は俺の相棒だ。だが、それがどうしたってんだ？ ……もし、澪紗に手を出すってんなら、たとえ神様だろうが許さねえよ」

静かに、淡々と——

ハーヴィはグラードンに対して言った。

彼の表情は、現状を受け入れようとするほど歓迎的なものではなく、ただでさえ理解しがたいことを話してくるグラードンに対する

不快感が滲み出ていた。

「ふん、別に手出しなんてしないよ。ただ、忠告しようと思ってね……。命が惜しけりゃ、そいつとは縁を切りな」

「悪いが、それは出来ねえよ」

ある程度返ってくる答えは想像できたので、ハーヴィは即答した。
「神様だか眷族だか何だか知らないけどよ、あいつは俺の唯一の相棒なんだ。くだらねえ忠告の一つや二つで縁を切れって言われても解りましたとは言えねえな」

まるで相手を嘲笑するかのようにつける。

「まあ、アンタがその気なら、アタシは口出ししないさ。ただ、《タルタロス》の動向には気をつけな」

ふふん、と笑いながら、グラードンは言った。

彼女自身、ハーヴィがどうなるかと知ったことではなかった。

「どういふ……いや、いいか……。それより、気になることがあるんだ。この辺りで起こっている地震と日照り……お前の仕業なんだろう、グラードンさんよ」

《タルタロス》の名を聞き、ハーヴィは不安にも似た感情を抱いたが、すぐにそれを振り払った。知ったところで、やることは変わらない。そう考えているからだ。

「大した奴だね、よく解ったじゃないか」

特に悪びれた様子もなく、グラードンはハーヴィの問いに対して答えた。

「最近、アタシの寢床であるこの場所を荒らす莫迦共がいてね。そいつらを倒すべく、ちよつと力を使ってるんだよ。どいつも返り討ちにしているけど、その時の影響で、周りに地震やら日照りの余波がいつてるみたいだ。いちいち、細かいことなんて気にしていいられないからね」

特におかしくない意見だ、と思った。確かに、戦争をする際に、女子供を巻き込まないように戦うなんて考えない。それと同じことだろう。ましてや、神々にとって人間など、ちつばけな存在に過ぎ

ないのだろうから。

もしこれで周辺に大きな被害が起きていたら、ハーヴィも憤りを覚えていた。だが、現状そのような被害は出ていないし、此处で感情的にはなりたくなかった。

「なるほどな……」

そして、推測していた通り、農業地帯で起こっている地震と日照りは、グラードンの仕業だった。彼女が言うには、周りの生活に影響が出るほどの力を出していないという。もし、彼女が本気を出せば、辺り一帯が地の底に沈んでしまうらしい。

「アンタもその莫迦の一員かと思っただけど、そうではないみたいだね。純粹に、ただ好奇心だけで来たみたいだ」

「ま、元々宛ても無く旅をしていただけだからな」

「やれやれ、違う意味での莫迦か……。でも、そういう莫迦は嫌いじゃないさ。本来ならアタシは深く介入しないつもりだけど、気に入った。もうひとつ忠告しておいてやるよ」

随分と友好的なために少し調子が狂いそうだったが、ハーヴィはグラードンの忠告を有り難く聞くことにする。

「何だ？」

「《神の眷族》の他の奴らに会ったら、気をつけな。特に、《星》と《力》にはね」

「どんな奴だろうと、俺の相棒に手を出す奴は許さねえよ。それに、あいつはそう簡単にやられるほど弱くないっての」

「頼もしいね」

自信満々に答えるハーヴィを不快に思った様子もなく、むしろ満足そうにグラードンは頷いた。

しかし、すぐに彼女は気配を察知し、悪態づいた。

「ちっ、莫迦が来たか。寝ようと思ってたけど、そうもいかないかい」

「何だ？」

「《タルタロス》の馬鹿共だよ。まだ地上にいるみたいだけど……」

「つたく、休む暇もありやしない。誰かが戦ってるみたいだね」
「待てよ。俺が片付ける」

「勇敢なのも良いけど、大丈夫なのかい？」

「変に暴れて、でかい地震でも起こされたら困るからな。それに、地上には相棒がいるしな」

＊

空中に描かれた方陣から、幾筋もの青白い光線が放射される。その光線は黒衣の者に当たるや否や、その者を瞬時に氷像へと変化させた。直線的ではあるが、相手の急所を確実に捕らえた冷気の帯は、次々と敵を凍結させていく。

一人一人は大した強さではないが、やはり先程の戦闘の疲れもあってか、長く戦うことはできないだろう。しかし、それでも——グレイシアの少女、澪紗の顔には、弱みとみられるようなものは一切浮かんでいない。

ただ、やはり自分の最大のパートナーが気掛かりだ。彼のことであるから、このような場所で倒れるようなことは無い。ただ、先程相まみえた、姉のような強者と対峙しているとしたら——？

嫌な予感が頭を過ったが、すぐに澪紗はその考えを振り払う。そして、冷気の光線を潜り抜けてきた一人の敵に対し、真っ直ぐと短剣を突きだし、喉元を搔つ切った。一撃で急所を銀色の刃に抉られたその者は、ごぼごぼと口元から血の泡を垂れ流しながら、そのまま絶命した。

これで、すでに十人、いや、二十人以上は倒れていた。倒した人数を数えるのを途中でやめたために正確な数字は解らないが、かなりの敵を倒してきたのは間違いない。

集めた情報や姉との対峙により、黒衣の者達の大まかな正体は掴めてきた。ただ、自分の姉が、この世界では忌み嫌われている《タルタロス》の一員となっていたことが、未だ信じられなかった。

（やっぱり、これが私の運命なの？）

今まで戦ってきた相手は、確実に自分を狙っていた。その理由は、漣紗自身もよく理解していた。それが、自分の運命だということもしかし、そんな運命を受け入れられずに、ただ宛ても無く逃げ出したが、結局は何も変わりはないかった。

それならば、受け入れて戦えるところまで戦おうと立ち向かうことにしたが、結局残るのは焦燥感だけだった。ただ毎日のように戦いを繰り返し、他の眷族からの身を守る。ただそれだけだった。

いや、違う。今は、心の支えとなる人がいる。

度重なる戦いで衰弱し、命を終えようとしていた時に会った一人の少年。今は青年となっているが、彼がいるではないか。

素直ではなく、皮肉や冗談ばかり言う奴だ。それでも、漣紗は彼の優しさを理解していた。一緒にいて楽しいし、馬鹿らしくも充実した日々を共に過ごしてきた。心から信頼できる相手でもある。

でも、何故だろう――？

彼なら信頼できるのに――些細な悩みは打ち明けてきたつもりなのに、自分の存在について全てを話せないのは。

「くっ……」

左腕に走る鈍い痛み。目をやると、左服の袖の部分が破れ、そこから傷口が顔を覗かせていた。

戦いの中で、考え事をしていたために集中を欠いたらしい。傷口は浅く、戦闘に然したる障害はないが、己の不甲斐なさに漣紗は怒りにも似た感情を覚えた。

（私としたことが、戦いの中で集中を欠くなんて……）

斬りかけてきた相手が間合いを取る前に、漣紗は至近距離で氷の弾丸をぶつける。氷の弾丸の直撃を顔面に受けた敵は、吹き飛ばされて動かなくなった。

しかし、集中力は取り戻せたものの、全身に疲労がたまっていた。亜人種のバクフーンとの戦闘もあり、今も多くの敵を相手にしているため、無理もない。大きな術を使えるのは、あと一度が限度だが、

それで全てを決められるという保障はない。それならば、弱めの術でも少しずつ放っていく方が確実だろう。しかし、疲労している身であるため、長期戦は好ましくない。

「よお、待たせたな」

背後から、肉の引き裂かれる音と断末魔が響く。地面に何かが転がり落ちたのを聞いて振り向くと、そこには見慣れた青年の姿があった。

少し癖のある黒髪に、幼さの残る顔。全体的に細い身体で、何処か飄々とした雰囲気醸し出している。右手にはグラディウスと呼ばれる小振りの片手剣が握られており、視線は真っ直ぐと澪紗に向けられていた。

「ハーヴィ……」

「珍しく苦戦してんな」

「これだけの数を相手にしているのよ？ それより、一体どうやって……」

「あー、話すとややこしいんだよな。先に片付けようぜ」

ハーヴィは後ろから斬りかかってきた敵に裏拳を入れ、剣の柄で殴り倒した。

荒削りではあるが、ハーヴィの剣術は目を見張るものがあつた。体術を織り交ぜているのは、

シエルクで暮らしていたころ、路地裏などでならず者や友人たちと喧嘩に明け暮れていた頃の名残だろう。剣術はその延長で覚えたもののため、完全に我流である。しかし、我流とは思えないほど、実戦的なものであることが窺える。

ハーヴィの参戦により、澪紗も士気が上がったのか、疲労を感じさせない戦いぶりを見せた。距離を保ちながら冷気の光線や氷の弾丸を駆使し、一人ずつ確実に相手を仕留めていく。

戦力が増したため、敵を駆逐するのに然程時間がかからなかった。気がつくと、二人の周りに立っている者は、一人もいなかった。

「さてと、《神の眷族》さんとやら」

剣を大きく振って血を払い、鞘に納めると、ハーヴィは澪紗に視線を向けて言った。

「何処で聞いたの？」

ハーヴィの問いに、澪紗はただ淡々としていた。怒りや驚愕といった感情はなく、ただ真っ直ぐと彼の視線を受け止める。自分が他の者とは異なるポケモンであることを、既に悟られているのではないかということを、彼女自身考えていたため、彼の問いは特に恐れるものではなかった。

もし、それで彼が自分のことを見限るなら、それで良い。そのまま事実を受け入れるつもりだった。自分の運命に巻き込む人が、少なくなるのならば――

それでも、心のどこかでそれを恐れていた。

「まあ、頭のネジが二、三本ぶっ飛んでると思われるかもしれねえけど、聞いてくれ。さっき地下に落ちたよな。んで、奥の方でグラードンに会ったんだよな。いや、会ったというより、俺の意識に語りかけてきたつてところか。……あー、自分で言っというてよく解んねえけど、とにかくそうなんだ」

今でも先程のことがなかなか整理できないため、ハーヴィはぼりぼりと頭を掻きながら言った。

「そこで色々と話を聞いたんだよ。《タルタロス》がどうだとか、《神の眷族》がどうだとか」

「……」

「けどな、どんな奴だろうと、お前は俺の相棒だよ」

澪紗の肩に手を置き、ハーヴィはにやりと笑みを浮かべた。予想外の彼の行動に、澪紗は思わずきょとんとしてしまう。

「おいおい、どうしたんだよ？ 惚れちまったか？」

「莫迦……」

少し顔を赤らめ、澪紗はハーヴィの手を振り払った。

「……でも、ありがとう」

「別に礼を言われることなんてしてないけどな」

「これからどうするの?」

「とりあえず、宿に戻ろうぜ。今後のことは、そこで決めりゃいいさ」

「さて、お手並み拝見といこうか」

無形の空間の中で、グラードンは不敵な笑みを浮かべて呟いた。

「相変わらずだな、グラードン」

そんな彼女の意識に、別の者の声が語りかける。コントラバスの音色のような、深く、低く――落ち着いた男声の声だ。声の質からは若さが窺えるが、若さ故の未熟さは微塵も感じられず、知的な人物像を彷彿させる。

「誰かと思ったら、引き籠りのカイオーガじゃないか。海の底で寝てんのかと思ったよ」

「《神の眷族》が動き始めたとなれば、寝ているわけにもいかぬかな。それに、眷族の力を集めようとしている《タルタロス》の動きも気になる。既に《星》と《節制》が、奴らに加担しているらしい」

「《星》が奴らに加担してるのは知ってたけど、まさか《節制》がねえ」

「どちらにしろ、我々はただ傍観者として見守るのみ。直接の介入は出来ぬよう、誓約がかけられているからな。力を発揮できるのは――」

「自分の身を守る時のみ、か。やれやれ、難儀なものさね」

第15話 神の眷族（後書き）

なんという中二設定。この設定は間違いなく流行らない。

《神の眷族》の設定ですが、その手のモノに詳しい方ならすぐにピンと来たかと思われますが、タロットの大アルカナから取っております。

各ポケモンのイメージに合わないかもしれませんが、俺の脳内の設定で決めているため、ご了承ください。

第16話 見えない行き先（前書き）

やっと第三章です。よろしくお願いします。
章タイトルほど大規模な話ではないですが、楽しんでいただけたら
なと思います。

第16話 見えない行き先

青白い月明かりが、窓から差し込んでいる。今夜は満月のためか、灯りが無くても部屋の中は明るい。飾り気のない部屋ではあるが、全体を包み込む優しい光が床や壁に幻想的な影絵を作り出している。時刻は午後十時を回ったところか。街を娼婦やゴロツキ達が闊歩し始めるには、少し早い時間帯だろう。また、多くの者は寝るための準備をしているだろうし、幼い子供なら既に夢の中にいるはずだ。特にやることが無かったのか、ベッドに横になっていたハーヴィは起き上がると、窓を開けた。宿の二階にある部屋から見渡せるのは、向かいの家の壁や狭い路地裏というつまらないものだけだ。夜の冷たい風が部屋に吹き込む前に、彼はすぐに窓を閉めた。

ふと、隣のベッドに視線を移す。そこには、亜人種のグレイシアの少女——澪紗が寝息を立てていた。

グレイシア特有の水色の細長い耳と尻尾は力なく垂れており、少し寝相が悪いためか、片腕がベッドから垂れ下がっている。普段は幼さを強調する切り揃えられた髪は乱れており、今の彼女は何処か艶やかに見えた。ハーヴィも男であるため、寝ている彼女から発せられる色気に思わず生唾を飲んでしまうが、すぐに理性を保ち、垂れ下がった片腕を布団の中に入れてやった。

（いつもは色気とかないんだけど……）

澪紗の体型はあまり女らしくない。しかし、子供のような体型と言うには成長が進んでおり、一言でいえば発展途上といったところだ。

常日頃から同じ部屋で過ごしてきたが、やはり性別が異なる以上、どうしても意識してしまうところがある。実際、自分達の関係は、ただの相棒ではないだろう。言ってみれば、友達以上恋人未満といったところだろうか——

それに、数日前に起こったことを整理すると、どうしても彼女を

意識せざるを得なかった。異性としてではなく、彼女が普通とは違う存在であることを知ったためだ。

（つたく、一人で抱え込みやがって……）

だが、自分が力になれるかどうか考えるとどうだろうか。力になるうと思っても、出来ないかもしれない。何故なら、澪紗は自分とは次元の違う存在だ。グランドンに聞いた話をすべて信じるとすれば、一人の人間に過ぎない自分が、《神の眷族》という未知の存在の力になれるかと問われれば、肯定するのは難しいだろう。

それに、戦いなどにおいて、自分が守られていることの方が多い。悪く言えば、澪紗の足を引っ張っているということだ。しかし、それでも彼女は自分といることを選び、今までこうやって共に過ごしてきた。

（偉そうなと言えたもんじゃねえよな、俺も）

自分の不甲斐なさを自嘲し、ため息混じりに呟く。

戦いにおいて、ハーヴィは決して立ち回れていないわけではない。まだ修行が足りないとは分かっているが、それなりの剣術は身につけているし、戦いで貢献できていることは自覚している。しかし、決定的な違い——人間とポケモンという、越えられない壁はどうしようもない。

「ま、考えたところで無駄か」

どちらにしろ、自分がやるべきことは解っている。

「……眠れねえし、ちよつと飲みに行くか」

前向きに考えたが、一向に眠気は襲ってこなかった。今日一日くらい、起きていても支障はないだろう——そう判断したハーヴィは、近くの酒場に飲みに行くことにした。

途中で澪紗が起きた時のことを考え、机の上に置き書きを見えやすいように置く。紙には、「飲んでる」の一言しか書いてないものの、問題ないだろう。夜中に飲みに行くことは、旅に出る前もよくやっていたからだ。

護身用のグラディウスをベルトに掛ければ、出かける準備万端だ。

ハーヴィはこそそと部屋を出て、宿屋の廊下もなるべく音を立てずに抜けて行った。

外に出ると、冷たい夜風が頬を撫でた。凍えるほどではないが、何か一枚着てきた方が良かったかもしれないと軽い後悔をする。しかし、酒場までは歩いて五、六分の距離のため、然したる問題も無いだろう。

夜の街を歩くことは慣れていたが、今日は様子が違った。まだ夜の活気が出る時間帯になっていないとはいえ、あまりにも静かなのだ。そして、何処か物々しい。街を闊歩しているのはゴロツキや娼婦などではなく、プレートメイルとサーコートを着込んだ兵士達だからだ。腰に帯びたブロードソードを見ると解るが、その者達は王国軍の中枢である《天龍の盾》ドラグーン・シルドだった。

ハーヴィは軽く舌打ちをし、刺激しない程度に彼らを睨みつけた。王国の軍隊に対しては、あまり良い思い出が無い。少し前には、盗賊と誤解されて監獄にぶち込まれ、旅に出る前にも何度か世話になったことが多かったからだ。後者は自業自得なのだが、やはりそれでも気分の良いものではない。

そんなことを思いながら、路地裏にある寂れた酒場に足を踏み入れる。客の入りはそれなりといったところで、特別混んでいるわけでもない。ハーヴィはカウンターの空席を見つけ、そこに腰をかけた。

「らっしやい、注文は？」

初老のマスターが、グラスを拭きながら尋ねた。

「モヒート。あと、つまみに何か甘いものを頼む」

「おいおい、随分とつけてんな」

周りの客層と比べると、やはり青さが見られる注文なのだろうか。初老のマスターは鼻を鳴らすと、グラスにクラッシュドアイスとミントの葉を入れ、ゆつくりとアルコールを注いでいった。

「ああ、もっとキツイのをいきたいけど、明日の仕事に影響が出る

とまずいからな」

ハーヴィも強い酒を飲みたかったが、あまりそのような気分ではなかった。モヤモヤとした気分を吹き飛ばしたいのだが、此処で酔いつぶれてしまつては元も子もない。

「まあ、それなら仕方ねえわな。仕事は何やってんだい？」

小皿にチョコレートスティックを盛りつけながら、声をかけてくる初老のマスター。ぶっきら棒な人間だと思つていたが、客との会話は欠かさないタイプのようだとハーヴィは思った。

「よろず屋……まあ、いまは冒険者つてどこか。自分で言うのもなんだけどな」

何気ない会話。プライベートな会話とはいえ、特に知られて困るようなことではない。自分達が旅を始めて間もないことや、仕事の捗り具合、儲けなどなど——酒場ではよくある光景である。

尤も、ハーヴィはこのような他愛のない話をし、安い酒を煽るために酒場に來たわけではない。

「——まあ、そんなところさ。ところで、最近王都が物々しいが、何かあつたのか？ それに、妙な集団が動き始めてるつて噂も聞いている」

真剣な眼つきを、初老のマスターへと向ける。

マスターはハーヴィを何処にでもいそうな若造といった感じでしか見ていなかったが、彼の突然の質問に思わずグラスを落としそうになった。今まで何度も多くの客と話してきたが、彼ほど洞察力に優れた人間を殆ど見たことが無かつたからだ。

「王都に住んでるアンタなら、なんか解つてるんだろ？」

「駆け出しの冒険者とは思つたが、大したもんだ」

そう言うマスターは、モヒートが注がれたグラスとチョコレートスティックが盛られた皿を差し出した。

「サンキュ」

軽く礼を言い、ハーヴィは注文の品を受け取った。

喉が渴いていたので、早速モヒートを一口飲んだ。喉をミントの

清涼感とアルコールの刺激が通り抜けていく。

「色々あってな……。あまり大きい声じゃ言えねえが、ヴェルセリエス家のお嬢様が失踪したらしい」

マスターは店の端の方で飲んでいた軍人たちをちらりと見ると、声のトーンを落として言った。

貴族社会が根強く残るメルクリアでは、下手に庶民が貴族の事件などに首を突っ込むと、捕まる可能性があるのだ。ハーヴィは身を以て経験していたのでよく解った。

「ああ、でもあそこのお嬢様が抜け出すのって、よくあったことなんじゃないか？」

亜人種のロズレイドを共にした、一人の金髪美少女を思い出した。トレジャーハンターとやらを自称していたが、あまりの軽率さも思い出し、ハーヴィはチョコステイクを喉に詰まらせそうになった。フィンと名乗っていたが、実名はエルフィーナといった。王位継承権もあり、武家の名門ヴェルセリエス家の一人娘だ。そのネームバリューに恥じぬ剣術も身につけており、もし正当な試合で彼女と戦ったとしたら、ハーヴィに勝つ自信はあまりなかった。勿論、実戦ではなく試合での話であるのだが、狩俵に彼女と戦うことになったとしても、苦戦は免れないと思っている。

「それが、国内を探しても見つからないらしいんだよ。そうになると他国に逃げたって可能性が大きいだろうな」

実際のところ、マスターはあまりこの事件には興味が無いのだろう。声の抑揚も無く、ただ淡々と自らの推測を語った。

「オウランに行ったとしたら、危ねえだろうな。あそこは妙にキナ臭えからな。ま、上っ面は平和だが、何処の国も《タルタロス》とかいう胡散臭い連中どもが動き始めてるし、何処も変わらねえ……。近いうちに邪神大戦が再び起きるかもしれないって話も聞くからな。俺達のような一般市民が嘆いたところで、何にもならないが」

憂えたように、初老のマスターは深いため息をついた。

オウラン連邦は、《狂乱せし獅子》の異名を持つ強国だ。かつて

は大陸東部——メルクリアの一部を支配する大国であった。メルクリア王国のカムイラも、かつてはオウランの支配下にあったため、その文化が根強く残っているのだ。

しかし、その分内乱も激しく、五国戦争の際は、早いうちから大陸からその勢力を退けられている。現在は大きな内乱は無いものの、三つの勢力が互いに牽制し合うことで均衡を保っている状況だ。

「東国オウラン……か」

そう呟いて、グラスのモヒートを一口飲む。

特に目ぼしい情報はないか——

宛ても無く旅もすることは難しいなとハーヴィは深いため息をついた。

「いいねえ、若いうちはどんどん悩みなさい」

「っ——」

いきなり肩を叩かれ、思わずハーヴィは噎せそうになった。隣に目をやると、そこにはポケモンを連れた中年の男が、いつの間にか座っていた。

いや、中年かどうかは解らない。見方によっては若くも見えるし、老けても見える。眼つきは若々しいが、漆黒の髪の毛は後ろで束ねられており、顎には無精髭が生えている。一見、その辺りの冴えない男にも見えるが、意外なことに彼が来ているのは、緋色のサーコート——《天龍の盾》の正装である。

だが、着こなしが非常にだらしない。その上、雰囲気も軍人のそれはなく、どちらかというとカジノなどで見かけそうなイメージだ。ハーヴィは騎士らしくない騎士を一人知っていたが、彼とは違う方向でずれている——それがこの男だった。

「マスター、この悩める青年にマティーニを辛めで作ってやってー」

「あいよ」

「おい、ちょっと待てよ、おっさん」

いきなり割り込んできた男にハーヴィは抗議しようとしたが、再び男は彼の肩を叩き始めた。

「オレの奢りだから、心配なーし。ほら青年、さつさとグラスを空けるー！」

そういう問題じゃないだろ、と突っ込みたかったが、下手に反撃に出るよりは、此処はあえて相手のペースに任せた方が楽だろう。そう考えたハーヴィは、忌々しげに溜め息をつく、グラスを空けた。

「まったく、勝手な奴じゃ……。すまんの、若いの」

胡散臭い男の相棒だろう。黄金の美しい髪のに、同じく金色の瞳を持つ小柄な少女が、ハーヴィを挟む形で席についた。狐のような尖った耳に、九つの尾という妖あやしのような特徴は、キュウコンという種族のものだ。金髪には不釣り合いであろう巫女装束も、不思議と彼女が着ると釣り合っている。

体型は幼女そのものだが、何処か達観しているのを、ハーヴィは見逃さなかった。恐らく、見かけ以上に長く生きているに違いない。それはポケモンでは珍しいことではないが、このキュウコンの少女には、それが顕著に表れているのだ。

「……妾わらわの顔に何かついとるか？」

きょとんとした表情で首を傾げる少女。その仕草は、何処か可愛らしい。

「いや、何でもねえよ。ただ、俺の相棒と雰囲気似ていてな」

ハーヴィは差し出されたカクテルグラスを受け取り、一口飲んだ。すると、強めの刺激が舌から喉に掛けて走った。

「キツいけど、美味しいな」

「でしょー。おっさんは、もっと強めなのが好きだけどね」

まるで子供のように、胡散臭い男はにこにこ微笑んだ。本当に、底の知れない男だ。

「で、そのおっさんが俺に何の用なんだ？」

ハーヴィは不機嫌そうに、自称おっさんに尋ねた。

一人でゆっくり飲もうとしていたところに邪魔が入ったことに苛立ちながら、視線だけを男の方へと向ける。

「興味があるなら、行ってみるといいんじゃない？　悩むのもいいけどねー」

恐らく、内乱が激しいオウラン連邦についてだろう。

「……」

悪くはないかもしれない。過去に何度か他国について調べたことがあったが、オウラン連邦には三柱の現人神が存在すると云う噂を聞いたことがあった。あまり詳しくは知られていないが、《三聖獣》のことだという。

尤も、信仰されている宗教も違うし、《タルタロス》などの情報を掴むのは難しいだろう。しかし、それでも行ってみる価値はあるのかもしれない。

「まあ、考えておくさ……。でも、こっちも色々と大変だから、すぐには決められねえよ」

色々と冒険したいが、やはり一番優先したいのは相棒のことだ。

「眷族の一人、《女教皇》に関わる者が……。何れ、刃を交えることになるかもね」

「……おっさん、お前」

男の言葉を全てを聞き取ることは出来なかったが、彼も眷族について何か知っているのだろう。ただ、あまり信用しない方がいい相手だということが解る。

暫くアルコールで自分を落ち着かせてから、一呼吸置いて彼は敢えて聞いてみることにする。

「……何か知ってるだろ？」

返事が無い――？

不審に思い、再び胡散臭い男の方へと視線を移したが――いつの間にか消えたのだろうか、そこには胡散臭い男の姿はなく、彼の相棒であるキュウコンの少女が、反対隣りに座っているだけだった。

「お前、一体なん……」

「《運命の輪》は、ただ見守るのみじゃ」

九尾の少女は、ハーヴィの言葉を遮るように、古風な口調で言っ

た。

キュウコンは、ポケモンの中でも長寿な種族だと云われている。幼女のような外見からは解らないが、かなり長い時を、黄金の双眸に焼き付けてきたのだろうか。古風な口調もそうであるが、彼女の雰囲気は、何処か憂いを帯びており、達観しているように思えた。

「《運命の輪》……？」

抽象的な言葉だ。一体何を意味しているのだろうか？

「お主は、眷族について知りたいのじゃろ？　じゃが、妾の口からは話せぬ」

言つて、焼酎の水割りを一口飲むキュウコンの少女。長く生きていただけあつてか、嗜好も渋いのだろうか。そんなどうでもいいことを思いつつも、ハーヴィの疑問は消えなかった。

「話せないってのはどういうことなんだ？」

「炎が凍りついたり、雨が大地から降ったりせぬのと同じ事じゃ」

「理^{ことわり}みたいなものか？」

「うむ」

決まりごと。誓約。そのような単純な言葉で片付くものではない。しかし、炎が凍らず、雨が大地から空へ向けて降らないのは、この世で当り前のことである。もし、そのようなことがあつたとしたなら、この世の中は成り立たない。ただ、なんとなくではあるが理解できた。

「……じゃが、ある程度の忠告はできる」

黄金の瞳を、ハーヴィへと向ける。

「悪いことは云わぬ。我等とはあまり関わらぬ方が良い」

「何故——」

「それ以上は言えぬ」

なるほど、それも決まりごとか。

《神の眷族》という得体の知れぬ存在に、一般人に過ぎない自分が関わらない方が身のためなのかもしれない。少し前にグライドンも、同じような忠告をしたのを思い出した。

しかし、それでも――

「誰に言われようと、あいつは俺の相棒だ」

静かにハーヴィは言った。

「ふん、勝手にするがよい。決めるのはお主じゃからな」

キュウコンの少女は、特にハーヴィを止める様子も無く、席を立ちあがった。

「ただ……」

「何だよ、まだあるのか？」

これ以上の忠告はウンザリだと思いながらも、ハーヴィは尋ねた。
「それがお主の選んだ道なら、あやつのことを頼んだぞ。ああ見えて、あやつはまだ未熟じゃ。その時が来るまで支えてやってくれ……」

その言葉を最後に、キュウコンの少女は青白い炎とともにその場から姿を消した。

「言われなくても支えるっての……」

ハーヴィはそう呟くと、静かに酒を飲み始めた。

第16話 見えない行き先（後書き）

キユウコン擬人化〃巫女装束&古風な口調ですよね、やっぱり。
一応、異論は認めます。

第17話 港町カムイラ

不安もあつたが、城を抜け出してきたことに後悔はなかった。

庶民は、貴族の生活に憧れるものである。何故なら、庶民が汗水を垂らし、やつとのことで手に入るような物を、貴族はいとも簡単に手に入れるか、もしくはそれを当り前のように持つているなんてことは珍しくない。

エルフィーナ「ヴェルセリエスも、その貴族の一人、それも貴族の中でも上流に位置する、いわば社会の勝ち組であつた。しかし、彼女はその貴族の生活を抜け出し、今こうして旅をしていた。

羨望の対象となる貴族だが、実際それほど幸せなものではない。庶民から見れば贅沢な悩みかもしれないが、階級が高ければ高いほど、プライベートの時間というものを取りづらくなる。政略結婚のための会談や、勉強や武術などの訓練と、何れ政治に関わる身のため、嫌でも束縛されてしまうのだ。ましてや、彼女のように王位継承権を持つ身となれば、それがより顕著になってくる。

結局、誰もが他人の立場を羨ましく思っている。それが、この世に生まれてきた者の性なのだろう。

王都グラウンドルトから東に三日。カムイラの宿屋で、二人は休息を取っていた。

「それにしても、これ程上手くいくなんて……」

鏡を見て、縦に巻いている金髪を整えながら、エルフィーナはベッドに腰掛けている銀髪の少女に声をかけた。

ツインテールで身体つきも小柄なため、一見幼く見える。しかし、顔つきは騎士のような気高さがあり、赤と青のオッドアイからも気品が感じられる。

髪留めと腕のガントレットに飾られた赤と青の薔薇。この銀髪の女性は、ロズレイドの亜人種だ。名前を、ジャンヌと言い、エルフィーナの良きパートナーでもあり、剣術の師匠でもある。

「しかし、本当によろしかったのですか？」

淡々とした口調で、ジャンヌは髪の毛を整えているエルフィーナに向けて言った。

元々、城を抜け出すことを、彼女は賛成していなかった。というのも、貴族と言う立場でもあり、忠誠を誓っているエルフィーナを危険な目に遭わせたくないからだ。しかし、エルフィーナの主張を聞いてやりたいという思いもあり、ようやく今に至ったのだが――それでも、城を抜け出してきたことには、不安が残っていた。

「ええ。あんな堅苦しい毎日なんて、うんざりなんです」

髪の手入れを終え、エルフィーナは振り返って言った。

決意は固いな、とジャンヌは彼女の様子を見て、微笑を浮かべる。どちらにしろ、自分のやることはただ一つ、この人について行くということだ。それが、自分の使命でもあり――

（何れ、他の者と争わずに済む方法を見つけねばな……）

「どうしたのですか、ジャンヌ」

「あ、いえ。少し考え事を。この後、何処に行くべきか……」

少し慌てるも、ジャンヌはすぐに我に帰り答えた。

「そうですね……。どうしましょう？」

「エルフィーナ様にお任せします。自分で行ってみたい場所を見つけることも、トレジャーハンターとして必要なことだと私は考えております」

忠誠は誓っているが、同時に彼女を甘やかすぎないように――。最終的に、自分のことは自分で決めるように、ジャンヌはエルフィーナへと日々告げてきた。

「オウラン連邦……。この大陸には無いような宝が眠っていると聞いています。危険なのは解っていますが……」

オウラン連邦は、現在は大きな内乱は無いが、三つの勢力がいつぶつかり合ってもおかしくない状況が続いている。治安もあまり良くないため、軽い気持ちで行けるような場所ではない。

「行ってみますか？」

「……はい」

*

それは、始めは他人事のように思えた。

ハーヴィー・アステールにとっては特に驚くようなことではなかった。被害が自分に来ているわけではないため、「そんなことがあったのか」と、その程度のことしか思わなかった。

ヴェルセリエス家の娘が失踪した事件が起こってから、一週間以上が経っていた。以前からお転婆姫として有名な人物であり、度々軍隊も動くことがあったのだが、どうやら今回はワケが違うらしい。今までは、王都の周辺——例え遠くても、地方都市で発見されて保護されているのだが、今回は国の至る所を探しても見つからないのだという。

それでも、一介の旅人に過ぎない彼にとっては、どうでもいい事件——一応、彼女は国の要人であるため、そのようなことを大っぴらには言えないのだが、軽く日常のひとつとして受け流す程度のものであった。

全く気にならないと言えば、嘘になる。やたらと世間知らずで、トレジャーハンターを自称していた彼女とは、少しではあるが面識があったからだ。今頃何をしているのだろうかくらいは思っている。しかし——

「まさか、依頼されるなんてな……。まったく、面倒くせえな」

「なんだかんだいって、受けたのね」

港町カムイラ——

メルクリア王国東端の都市で、外海への玄関ともなっている重要な都市だ。

かつてオウランが支配していた地域でもあり、その文化が残っているためか、メルクリアの中でも異国情緒を醸し出している。瓦造

りの屋根や、地元民の丈の長い装束、山海の素材を生かした薄味の料理は、まさにオウラン連邦特有のものである。

そんな異国情緒溢れる街の酒場で、ハーヴィと零紗は遅めの昼食を取っていた。

「軍神が直々においでなさったわけだ。俺には断る勇氣なんてねえよ。……正直、あの時は娘さんの件で殺されるかと思って、冷や冷やしたほどだぜ？」

王都グランドルトに滞在していた頃——今から二日ほど前の話だ。酒場から帰り、一夜を過ごした翌朝に、宿屋に一人の男がハーヴィ達を訪ねてきたのだ。

赤いサーコートにブロードソードという出で立ちから、彼が《^{ドラ}天龍の盾》の者であり、有名な者であることは、すぐに解った。細身ではあるが筋肉質な男性で、堂々たる武人の覇氣が感じられ、そのプレッシャーに押されそうになったのを、ハーヴィは覚えていた。

一騎当千の武人——マルス・ヴェルセリエスその人だ。邪神大戦で活躍した英雄の一人であり、その名を知らぬ者は大陸にはいないといってもいい。

そんな有名人に頼まれては、流石のハーヴィでも断れない。尤も、彼に断る勇氣があつたとしても、英雄の頼みを断るほど、自分自身の器が小さいとは思っていない。

「でも、娘思いのいいお父様じゃないかしら」

「確かに娘思いだけだよ、やっぱりあの年齢にもなつて拘束されりゃあ、逃げ出したくなるのも解るぜ？ それに、公務ばかりであまり相手をしてやれていないみたいだしな」

《天龍の盾》の騎士団長ともなれば、多忙な毎日をごすこととなる。そのため、エルフィーナが幼い頃から、あまり相手をしてやることができず、彼女の相手をしていたのは、家のメイドや執事、部下の騎士であつた。そう考えると、親の愛情を大いに貰つたとは言えないだろう。

また、肉親が英雄であるということも、本人にとっては大きな重

荷となっているに違いない。親が偉大であれば偉大であるほど、その子に対する期待というものも大きくなる。親が偉大であるから子供も偉大かといえば、そうとは言いいきれない。努力をすれば、親のように、あるいは親を超えることも、一〇〇パーセントではないが可能ではある。しかし、期待はプレッシャーとなりその者に押し掛かるため、それから逃げ出したくもなるだろう。

自由気ままに生きてきたハーヴィにとっては、無関係なことだ。貴族の生活をしてみたいとか、親が英雄だから自分も名声を得られるとか、そのようなことは殆ど考えたことがない。また、自分の生活に不満も無く、他人を羨望の眼差しで見たこともあまりない。自分自身が優れていると思うわけではないが、それなりに幸せな日々を過ごしているためか、然したる不満はなかった。しかし、誰もが彼のように前向きに生きられるわけではない。

「しかし、どうしたもんか……」

一部の者に情報が漏れているとはいえ、国の要人に関する事件は、民衆に公にされることはあまりない。というのも、一般人が無闇に関わると、下手すれば監獄にぶちこまれてしまうこともあるためだ。同じような理由で、たとえ情報を持っていた者がいても、簡単に話すようなことはまずないだろう。そうになると、自然と情報量も減り、今回のような搜索の依頼を遂行するのは難しくなる。

それでも、大体の目処はついていた。数少ない情報の中に、東の方で貴族のような二人組の女が旅をしているというものがあつた。そのうちの一人は、亜人種のポケモンだったという。その二人が、オウラン行きの船に乗ったという情報もある。

身分の高い者——それも女性が、少ない護衛で旅をすることはあまりない。特に、嵐や海賊に遭遇する可能性があり、逃げ場のない船旅ともなれば尚更だ。

「オウランに渡ったのは確実だろうな。恐らく俺達に依頼した時みたいに名前を偽って、一昨日あたりの船に乗った可能性がでかいけどよ……」

「その肝心な船に乗れないわけね」

「ああ。手形が必要ってのは解るが……」

ハーヴィと漣紗は、カムイラの港で情報を集めていたのだが、オウラン連邦に渡るためには、手形が必要であった。

国境を超える場合、然程珍しいことではない。そのため、多くの冒険者や商人達は、それを得るための手続きを行うのだ。各国間の交流が以前より盛んである今は、その手続きは然程面倒なものではなく、身分や目的などを明かせば、容易く手に入れることができる。

しかし、今回はワケが違った。

「発行に最低一ヶ月はかかるとか、ふざけ過ぎだろ。すぐに発行してもらえる手形もあるが、それだと値段がな……」

どうやら、オウラン連邦側が入国を規制しているのだという。内乱がいつ起こってもおかしくない状況のため、外部からの者を入れたくないのだろう。事実、冒険者や一般の商人といった者達がオウランに入国どころか船に乗ることすらできずにいるらしく、そのような者達が棧橋で愚痴っているのを、先程確認してきたばかりだ。

また、高い金を払えば、すぐに発行してもらうこともできるのだが、信じられないような値段がつけられており、現在の手持ちでは到底買えるような物ではなかった。当然、掛けで買うこともできず、依頼料を貰っても赤字になるほどの値段であった。

「ってか、国のお偉いさんは何やってんだ？ あんな目立つお嬢様くらい簡単に見つけられないのかよ」

少し苛立ちを覚え、ハーヴィはグラスの氷を口に放り込み、ガリガリと噛み砕いた。

「無理もないわね。此処カムイラはメルクリア領だけど、自治都市みたいなものだから、あまり国の支配が行きとどいていないから」

「よく知ってんな」

「学校の授業で……いえ、どうせあなたのことから寝ていたんでしょね」

漣紗は半分呆れながら、溜め息をついた。

「悪かったな」

ハーヴィは澪紗の言葉を特に不快に思ったわけでもなく、ただ適当に受け流した。

「とにかく、どうやって船に乗るかだよな。此処はいつそのこと、強行突破で……」

「……怒るわよ」

静かに、しかしどこか突き刺さるような口調で咎める澪紗。

「冗談だつて」

「あなたが強行突破って言うと、冗談に聞こえないわ」

尤も、半分は本気で言っていることだ。しかし、それはあくまでも最終的な手段であり、初めから強行突破という無策なことをするつもりはない。また、成功する確率は非常に低いものだろうし、リスクも大きい。それに、自分の身だけではなく澪紗も危険な目に遭わせてしまう。それは出来るだけ避けたいことだ。

「正規の手続きで手に入れるってのは、まず無理だな。時間がかかりすぎるし、その間に放蕩なお嬢様に何かあったらマズい。それなら直接買つか闇ルートしかねえが……」

勿論、正規に手に入れるわけではないため、法に触れる行為だ。しかし、真正面から強行突破するよりはリスクは格段に小さい。だが、正規の物ほどではないが値が張り、また、偽物を掴まされる可能性もある。もし、偽物であることがばれようものなら、それこそ即監獄行きだろう。

「お金の代わりになるものがあれば、譲ってもらえるかしら？」

「金の代わりか……」

今日では、商品は金銭で取引されることが多い。しかし、情報や物などを対価として有効な場合もあり、冒険者の間では、むしろそちらの方が主流である。

「聞いてみる価値はあるな。店に行ってみるか」

「ええ」

街のはずれにある寂れた店。

陳列棚には、薬や携帯食料、護身用武器といった、冒険者向けの商品が多数揃えられている。しかし、品ぞろえは良いもののあまり整理はされておらず、よく解らない商品も置かれている。

客はハーヴィと澪紗の二人以外、誰もいない。商売を続けていられるのだろうかと疑問に思いながらも、ハーヴィはカウンター越しにいる女主人に尋ねた。

「お姉さん、今日もいい天気だね」

お姉さんと言うにはやや微妙な風貌——老けているわけではないのだが、相手の機嫌を取るために、お世辞を織り交ぜて話を繰り出す。

「ああ、だけど閑古鳥が鳴いてるよ。あんたらも冷やかに来たのかい？」

客がいらないのを見れば解るように、商売はあまり繁盛していないようだ。そのためか、女主人は不機嫌そうに応えた。

これは交渉は難しそうだと思いつながらも、ハーヴィは諦める気など無かった。

「おいおい、端っ^{ハナ}から決めつけんなよ。ちょっとくらい話でもさせてくれたっていいだろ？　美しいお姉さん」

背筋から冷気を感じたが、ハーヴィは構わずに続けた。

「ふん、まあ話くらい聞いてやるさ」

「おお、ありがたいね。お姉さんさ、お金以外で取引とかやってるかい？」

「あまりやりたくはないけど、このご時世じゃそうは言ってられないからね」

金以外での取引が出来るというだけでも、大きな進展だ。

それならば、話が早い。

「率直に聞け、お姉さん。オウラン行きの手形二人分の対価になる物は何だ？」

「ふん、同じようなことを聞いてくる奴が何人もいたが、あんなとこに行つてどうするんだい？」

「その質問は取引に必要なことかい、お姉さん」

相手が根っからの商人なら、そのような質問はしないだろう。商人にとつて重要なのは対価と言ふ結果であり、目的や過程などは重視すべきものではないからだ。それを確かめるべく、ハーヴィはあえて質問を質問で返す。

なるべく、相手に主導権を握らせないようにしなければ、交渉は難しいだろう。交渉の仕方によつて、値段は下がるが、下手をすれば逆に吊り上げられてしまうこともある。

「優れた商人なら、いちいち他人の事情に首は突つ込まないよな。もし、俺が国から公にできないような特殊な任務を受けているとしたらどうする？ 自治都市とはいえ、国の支配がまったく行きとどいていないわけじゃないだろうからな」

国の要人という言葉聞いたためか、女主人は思わず息を飲んだ。当然、ハーヴィはそれが狙い――相手に主導権を握らせず、ペースをこちら側に引き寄せるためだ。悪く言えば脅しているのだが、交渉においては珍しいことではない。

「ふん、負けたよ。良いだろう、手形二人分は手配してやるよ。だが、タダつてわけにはいかないよ」

「それで充分さ。で、肝心な対価は何だ？」

「此処から半時ほどの距離に、多くの冒険者が足を踏み入れている遺跡があるんだ。そこで、エリュシオンに関わる宝物を取つてきてくれれば、手形と交換してやるさ」

「いいのか、盗掘紛いのことだぜ？」

勿論、やめる気などない。

相手が本当の商人かどうか試すためだ。もし、此処でビビっているようなら、取つてきたとしても売つてはくれないだろう。

「実行するのはアンタだからね。それに、これでも安めにしておいてるつもりだけだね」

「……オーケー、承知した」

第17話 港町カムイラ（後書き）

陸上での移動手段ですが、だいたい馬……もといギャロップを使うことが多いです。

鬣で燃えないかって？ 知るか。

他にも、カイリューの運び屋もいるのですが、より速い分少し割高。また、空路のためリスクも上がります。

ああ、勿論ポケモン以外の生物もいますよ。我々の住んでいる地球にいるような動物ですね。

という裏設定があつたりなかったり。

設定資料的なものも作りたいけど、どうしようかな。本文中に設定を全部書くと、くどくなってしまうんですね。

第18話 古の宝物庫1（前書き）

もうちょっと一話を長く書きたいのですが、自分の力ではこの程度の長さが限界です。

第18話 古の宝物庫1

カムイラを出発してから半時。太陽の位置を見ると、時刻は午後三時を回った頃だろうか。

森林地帯を抜けた先に、ボロボロの建物が聳え立っていた。此処も、かつての文明が栄えていた頃の遺跡なのだろう。

名前がつけられていないところから、重要性を持つような場所ではないのだろう。しかし、入口の壁には《エリュシオン》の紋章が刻まれていることから、かつては巡礼地のひとつとして機能していたのかもしれない。

《エリュシオン》としては不本意なのだろうが、度重なる戦いや止められない老朽化で、このように神殿を破棄してしまうことも珍しくない。

「どうやら、此処で間違いないみたいだな」

胸の辺りまでの高さの草叢を掻きわけ、廃墟の前の小さな広場に出る。

遠くからは大したものではなかったが、このように近くで見ると、意外に高い建造物であることが解る。塔というにはやや低いかもしれないが、その廃墟は縦に大きく作られていた。

大まかな形状は、円錐の頂上を切り取ったような形だ。ところどころに、不規則に窓がある、バルコニーと見られるようなものも設置されていることが解る。

「ちよつと、気持ちは解るけど急ぎすぎよ」

ハーヴィより背が低い澪紗は、草叢を掻きわけるのに必死だった。チクチクと肌に触れる草に悪戦苦闘しながらも、何とか彼に追いつくことが出来た。ブラウスにロングスカートという服装も、このような草地では障害になっているのだろう。やっとの思いで追い付いた彼女は、服についた葉や土を、手で払った。

「ああ、悪い……。怪我とかしてないか？」

ハーヴィもペースを考えずに進んでいたことを自覚していたのか、申し訳なさそうに澪紗を氣遣った。

見たところ、怪我はないようなので、彼は一先ず安堵のため息をついた。

「大丈夫。でも、少し警戒した方がいいわよ」

澪紗は真剣な表情で言った。ハーヴィは彼女の言葉に、無言で頷く。

街から近いとはいえ、人の目が届きにくいことは確かだ。戦闘は避けられないだろうし、慎重に進むに越したことはない。

「しかし、こんなところに本当に《エリュシオン》の宝物なんかが眠ってんのか？　これだけ街に近いと、既に掘り尽くされてそうな感じもするけどな」

「これは——」

澪紗は何かに気付き、壁に歩み寄った。そこには、テラ神殿の壁にあったものと同じような、アンノーンと呼ばれる種族のポケモンにより記された古代文字が刻まれていた。

彼女はその場に留まり、文字列を読み始めた。

「神々の宝物、此処に封ず……せし者……い……れる……？」

「おい、澪紗」

前も同じようなことがあった。以前は、テラ神殿での出来事だが、突然、澪紗が壁の古代文字を読み始めたのだ。

古代文字を解読できる者は少ない。というのも、今日では解読方法が廃れており、資料もほとんど残っていないからだ。しかし、不思議と違和感はなかった。まだ解らないことが多いものの、彼女が《神の眷族》と呼ばれている者達の一人であることを知ったためであるから——

「ああ、ごめんなさい。壁に古代文字が刻まれていたから」

「あ、ああ。そういうことか……」

知らず知らずのうちに澪紗を畏れているのだろうか？

いや、そんなはずはない。例えば彼女がどんな存在だろうと、いつ

までも共にいようと誓った仲である。しかし、それでもやはり何処かで――

「なんか解ったか？」

良からぬ想いが頭の中に渦巻き始めたのを振り払うべく、誤魔化しながらハーヴィは澪紗に問うた。

「どうやら、何かの宝物庫のようね。でも、それ以外は文字が削れていて解らないわ」

彼女の言うとおり、壁の文字列は、ところどころ破損あるいは風化しており、何を書いてあったのか解らない状況になっている。

「宝物庫ねえ。その割には随分とデカいし、無防備じゃねえか。ま、とにかく行ってみるしかないな」

扉は破壊されてしまっているのか、入口はぼっかりと開いていた。この時点で、多くの宝物は既に持ち出されてしまっていると考えてもおかしくはないだろう。

「よし、行くぞ」

ハーヴィが足を踏み入れようとした瞬間だった。

彼は気付かなかったが、人間より優れた五感を持つ澪紗は、上方で光る何かを見逃さなかった。

「ちいっ――！」

何かが爆ぜる音。それは、自分達を目掛けて放たれたものであることを、澪紗は見逃さなかった。

澪紗は強く念じ、ハーヴィの前に不可視の障壁を発生させる。一部の攻撃――特に、物理的に作用するものを無力化させる力場を作り出す術だ。すると、不可視の障壁に何かがあたったのか、耳を劈くような音が響き、放たれたそれは、そのまま垂直に地面に落下した。

「銃弾か……。気付かなくて悪い、澪紗」

地面に落下したのを見ると、小さな金属製の弾が転がっていた。もし、澪紗がいなければ、彼の脳天はこの小さな弾に打ち抜かれていただろう。

「今のは仕方ないわ。でも、まさか上から狙い撃ちにされるなんて……」

澪紗は、バルコニーの辺りにチラリと見えた黒い影を見逃さなかった。

高速で詠唱し、周囲の温度を低下させる。澪紗は周囲の空気中の水分を凍結させ、無数の氷の刃を作り出す。それを、バルコニーに見えた黒い影に向けて、一気に放った。

威力の高い技ではないが、相手を牽制させるのには充分だろう。音速で放たれた氷の刃は、黒い影を捕らえた——かのように思えた。無数の氷の刃は、黒い影を捕らえる前に、何処からか発生した赤い炎により融解し、消滅してしまった。しかし、澪紗は特に驚いた様子も無く、いつでも次の技が放てるように、再び氷の刃を発生させた。

「やっぱり、ポケモンを連れているわね。それも、炎の使い手が……」

相手が炎の属性であることは考えていなかったが、ポケモンを従えていることは想定範囲内だった。

すぐに追撃を仕掛けようとしたが、黒い影の姿は、バルコニーから消えていた。

「逃げられたみたいね。ハーヴィ、解つてると思うけど、ここは——ちよつと!？」

澪紗は、自分が前衛として、ハーヴィを守りながら進むことを提案しようとしたのだが、彼は鞘からグラディウスを抜刀し、ずかずかと建物の中へと入っていった。

そんなハーヴィの行動に半分苛立ちを覚え、澪紗はむすつとした表情で彼を追いかける。

「ちよつと、襲撃されたばかりなのよ？ もっと慎重に——」

「高くついたよなあ、澪紗」

グラディウスのヒルトの部分に肩に乗せ、ハーヴィは振り返ってニヤリと笑みを浮かべた。

表向きは笑っているように見えたが、内心、彼も苛立ちを覚えていた。無理もないだろう、誰であろうと、突然見知らぬ者に奇襲を受ければ、それこそ平静を装うのは難しい。特に、彼のような「売られた喧嘩は買う」タイプであれば尚更だ。

「莫迦……。怪我しても知らないわよ」

呆れながらも、澪紗は再び周囲に攻撃を無力化させる力場を発生させた。銃弾のような飛び道具は勿論、大抵の物理的な攻撃はほぼ阻めるだろう。

何だかんだ言って、彼女はハーヴィのことをしっかりと理解していた。

「あまり過信しないで」

「解ってるって」

廃墟の中に入ると、意外に広く作られていることが解る。宝物庫と言うよりは、小さな城だろうか。何力所にも設置されている扉から、内部構造が複雑であることを窺わせる。

「中に入ってみると、随分と広いんだな。片っ端から調べるしかねえな。二手に分かれた方が効率は良いかもしれないけど……」

「単独行動は避けた方が良いわね」

先程の奇襲のこともある。搜索の効率を上げるためとはいえ、下手に単独行動をしようものなら、命を落としかねないだろう。澪紗ならともかく、生身の人間であるハーヴィが、上級のポケモンに遭遇しようものなら、まず太刀打ちすることは出来ない。

まず、二人は右側の通路の最も手前にある扉を開けた。その先は廊下になっており、ところどころに燭台が設置されている。長さは然程ないようで、先に階段があるのを確認することが出来た。しかし、途中に大きな穴が開いており、その穴の向こう側に行くことは不可能だろう。

「飛び越せ……。ないよな」

身の丈の二倍はある穴だ。運動神経はそれなりに自信はあるが、自分の脚力で飛び越すのは無理だと判断した。

穴から下の様子を見たが、何も見えない。試しに近くにあつた小石をそこに投げ込んだが、音が聞こえないため、かなりの深さがあることが解る。もし此処に落ちたら、タダではすまないだろうし、戻ってくることは不可能だろう。テラ神殿でもこのような穴に落ちたことがあるため、ハーヴィはゾツとしながら、そこから引き返すことを選んだ。

「飛び込まないのね」

少し意地悪な笑みを浮かべ、澪紗はからかった。

「そこまで莫迦じゃねえよ。さ、次行くぞ」

通路を引き返し、再び一階の広間へと戻った時だった。

何かが爆ぜる音とともに、ハーヴィ達を覆う不可視の壁に衝撃が走った。その直後に、ハーヴィを目掛けて、黒い影が得物を構えて飛びかかってきた。

ハーヴィはすぐにグレイウスを構え、その影の攻撃を受け止めて弾き飛ばす。影は軽々と空中で受け身を取り、彼との間合いを取った。

相手は二人。そのうち、一人はポケモンだ。

飛びかかってきたのは人間の方で、身長は一六〇センチメートル弱といったところか。まさに黒い影という表現が相応しい格好をしていた。

腰まで伸ばされた漆黒の髪は右側に黒い薔薇を模したコサージュ。その下には、黒いリボンが結ばれている。反対側には、黒いリボンがあしらわれたドレスハット。服装も黒を基調としたもので、ゴシック・ロリータのワンピースを着ており、ニーソックスとそれを止めるガーターベルト、そして小さな革靴も黒で統一されている。

その可愛い服装から、少女であることが解る。しかし、その顔立ちが可愛いというよりも美しいという表現の方が相応しく、アイスブルーの瞳は真っ直ぐとハーヴィに向けられている。

ポケモンの方は、カールした黄金の髪をポニーテールに結んでおり、可愛い顔立ちをしている。身長は一五〇センチメートル弱

と小柄だ。クリーム色のコートにズボン、そして赤いスニーカー。
一見人間のように見えるが、手元に炎を浮かべていることから、ポケモンであるのは確実だ。

笑顔を浮かべているが、何処かしら怯えを感じさせるような表情をしていた。

「……帰って」

ゴシック・ロリータの少女は表情を変えずに、ぼそりと言った。

クールと言うよりは、無感情といった言葉の方が近いだろう。漣紗もクールではあるが、彼女とは異なり、この少女は何処か人形を連想させるかのような雰囲気醸し出している。また、ゴシック・ロリータという格好も、それをより助長している。

「ガキのお使いじゃねえんだ。帰れと言われて「はい解りました」ってワケには行かねえんだよ、こっちは」

「……なら、消えて……！」

そう言うつと、ゴスロリの少女はギラリと光る刀身を振りかざし、ハーヴィに斬りかかってきた。

「漣紗、ポケモンの方は任せたぜ」

「ええ」

そう言うつと、ハーヴィは地面を強く蹴り、ゴスロリの少女へと向けて間合いを詰めて行った。

相手が持つているのは、刀と呼ばれる得物だ。細身で大きく反っている形状は、シミターやサーベルといった剣を連想させるが、これは東の大国、オウランで使われているもので、この辺りでは珍しいものだ。恐るべき切れ味を持っており、金属を両断するのも容易いという。戯曲や小説においては「ニホントウ」と呼ばれることもあるが、過去に「ニホン」という国がこのアルセリアに存在したかどうかは資料にも載っていないため、この際どうでもいい。

そうなると、相手の攻撃を迂闊に受けるのは厳しいだろう。如何にグラディウスが分厚い刀身を持っているとはいえ、刃を斬り落とされないという保障はない。それならば、相手の攻撃は受けずに避

けた方が賢いだろう。

体勢を低くし、前転を織り交ぜて相手の攻撃を回避する。そしてハーヴィは相手の背後に回り込み、腕を目掛けてグラディウスの刀身を振り下ろした。

この状況からならば、容易に急所を狙えた筈だ。しかし、何故、彼はわざわざ腕を狙ってきたのだろうか——そう思いながらも、少女は懷から小振りなナイフを取り出し、ハーヴィの首元を目掛けて投げた。

「うおっと」

頭を横にずらし、ナイフを間一髪避ける。少女はその隙を突いて、刀を地面と水平に構え、心臓を目掛けて突いてきた。

「させねえよ……！」

ハーヴィはそのまま身体を横にひねり、ローキックを放った。その攻撃に少女は対応しきれず、バランスを崩し、膝を突いてしまった。

「悪い、大丈夫か？」

ハーヴィはグラディウスを納め、少女に手を差し伸ばした。しかし、彼女は再び懷からナイフを取り出し、ハーヴィへと向けて投げる。これには彼も対応できなかったのか、肩口に刀身がかすり、そこに鈍い痛みが走った。

「……甘い。敵に情けをかけるなんて」

少女は再び間合いを取り、刀を構えなおした。

確かに、少女の言うとおり甘かった。此処で降参してくると思っただが、どうやら戦意は失っていないらしい。

「っ痛……」

「ハーヴィ——！」

少女のポケモンと戦っていた澪紗は、彼が傷を負ったのを見て、思わず声を上げた。

「戦いの最中に余所見だなんて、余裕だねっ」

「っ——！」

澪紗の隙を突き、相手は炎の弾丸を次々と放ってきた。すかさず澪紗は障壁を発生させ、それらの攻撃を弾いた。

今まで見てきた技を見ると、相手の種族はロコンであることが解る。髪の色が黄金なのは、色違いと呼ばれる特異体である故か。純粹な炎属性のポケモンであり、未知の可能性を秘めている種族だ。キュウコンの下位種とはいえ、妖術を用いた戦い方は健在であり、彼女から放たれる妖しげな光を直視すれば、正気を失い兼ねない。

「澪紗、俺は平気だ。だが――」

「ええ、解ってるわ」

ハーヴィの言葉を最後まで聞かなかったが、彼が何を言いたいのかは充分理解できた。先程、ちらりと見た彼の戦いぶりを見ても、それが顕著に出ていた。

殺すな――

今までの相手とはワケが違うことを彼女も解っていた。

「ほんと、いつも無茶な頼みばかりね」

呆れつつも、澪紗はハーヴィの言葉に従うことにする。

「悪いけど、少し大人しくしてもらっわ」

澪紗は地面に掌を突きだし、強く念じた。すると、そこから氷がツタのように伸びてゆき、相手のロコンの足に絡みついていた。

「うっ、何この技！？　こんなの見たことないよっ――」

相当な力で封じているのだろうか、また、あまりにも強力な氷の魔力が込められているためか。ロコンはそれを熱で引き剥がそうとするが悪戦苦闘しているようだ。

一方、ハーヴィは怪我を負いながらも、少女と互角以上に戦っていた。

顔に疲れは出ておらず、傷を負っていることを感じさせない戦いぶりである。しかし、多彩な得物の前に、なかなか思うように進展していないみたいだ。

だが、助けは要らないだろうと澪紗は判断した。自信過剰なところはあがるが、自分で平気と言っている間は、ハーヴィを助ける必要

性はほぼ無い——彼がそのような人間であることを長年共に過ごしてきて理解しているからだ。

「女の子相手にこういうことはしたくねえが……」

ハーヴィは地面に転がる小石を蹴り上げた。

長きに渡り放置されていた場所のためか、それと同時に埃も舞い上がった。しかし、少女は怯まずに埃と小石が舞う中を突き進んできた、

「すげえ根性だな。だが、狙い通りってわけだ」

埃を抜けた先に、ハーヴィの姿は無く——

少女の背後に回っていたハーヴィは、彼女の首を腕で固定し、グラディウスの刀身をギリギリのところまで止めた。少女は腕を振りほどこうとしたり、また、足で蹴りを入れたりしたが、やはり性差や体格差もあってか、全てが無駄に終わった。

「……何でトドメを……」

「刺す必要なんてねえだろ。そっちもワケアリっぱいからな。初めの射撃はともかく、刀に殺意が乗ってない」

そう言くと、ハーヴィは少女を開放し、グラディウスを鞘に納めた。

「斬りかかってこないのか？ 俺としては、もう遠慮願いたいところだが」

「……もういいの。……でも、あなたみたいな人、初めて」

少女も戦意はもう無いようで、刀を鞘に納めた。

第18話 古の宝物庫1（後書き）

舞台のイメージがだいたい中世〜近世ファンタジーのため、ボールなどの道具は存在せず、ポケモントレーナーという概念がありません。そのため、街の外を出歩く者はいっ襲われても対応できるように、人間でもある程度の戦闘力を身につけているのが当たり前です。つたりします。

その辺りの設定などは、後々出していけたらなと思っております。

第19話 古の宝物庫2

「……わたしは椿黒花」
ツバキクロカ

ゴシック・ロリータのワンピースに身を包んだ少女は、そう名乗った。

オウラン風の名前——姓の後に名が来ていることから、オウラン出身であることが解る。また、使用している刀と呼ばれる武器も、オウラン連邦特有のものである。

「なるほどね、そっちも足止めを食らってたわけか」

鞘に納められたグラディウスを片手でジャグリングしながら、襲われたことを気にした様子も無く、クロ力に尋ねた。

「……あの、肩……ごめんなさい」

刀身が掠っただけのため大した傷ではなく、止血も消毒もしているのだが、クロ力はちらちらとハーヴィの肩を見てきた。自分がつけた傷のため、少し気まずいのだろう。小さな声でぼそりと謝る。

「ああ、気にすんな。大したことねえさ」

ハーヴィは特に気にした様子も無く、少し大袈裟に肩を回した。正直、まだ痛むものの、後遺症になるようなものでもないし、この後戦闘があっても然したる支障にはならないからだ。この程度の傷なら、かつて喧嘩をしていた頃には嫌というほど傷つけられたし、依頼を受けている時も、何度も怪我を負っている。

剣のジャグリングを止めて、彼は慣れた動作でそれをベルトに戻した。そして、クロ力の方を向き直り、口を開く。

「それにしても、お前が王国の情報部《暗黒の瞳》ドゥンケル・アウゲの一員とはな。でもよ、そういうのを一介の冒険者に過ぎない俺達に明かしてもいいのか？」

《暗黒の瞳》は、ドラグーン・シルド《天龍の盾》やリヒテン・フリュウゲル《聖光の翼》に並ぶ、王国の精鋭部隊だ。しかし、あまり表だった行動はせず、主な仕事は諜報活動や暗殺といった、悪く言えば汚れたものが多い。

その実態は謎に包まれている。情報部という立場であるのが表向きの理由だが、秘密裏に調査や監視を行うためというのが事実だ。本人から名乗ることはほとんどないため、身近な人物が《暗黒の瞳》に属しているということも有り得る。つまり、知らず知らずのうちに監視をされているということも珍しくないのだ。尤も、多くの者はそれに気付かずには過ごしているのだが。

「……大丈夫。既にあなたのことは既に聞いているから」
ハーヴィの問いに、クロカは淡々とした口調で答えた。

「聞いているってのは、そっちもお嬢様の搜索か」
無言のまま頷くクロカ。

「……合格。あなたの力なら、オウランに渡っても問題ない」
「まんまと試されたってわけか」
そう言つて、ハーヴィは肩を竦めた。

確かに、彼女の戦いぶりを見ていても、殺意がほとんど感じられなかった。それでも、相当な使い手であるのは間違いないだろう。素人ならば、刀という扱いの難しい武器で、手加減しながら戦うことなどできない。

「……悪かったと思っている」
反省しているのだろう。クロカは少し気まずそうに、俯いてしまふ。

「別に気にしてねえよ」
この先待ちかまえているであろう危険に比べれば、然したるものでもない。

「……ただ、あなたは少し甘い」
「ああ、そうだな」

クロカの指摘に、ハーヴィは素直に頷いた。
自分が味方だったからいいものの、ハーヴィがあ場で情けをかけたことを、クロカは疑問に思っているのだ。本来ならば、躊躇なく斬り捨てる。また、命を奪わずとも、深手を負わせて行動不能にするのが定石だ。自分達が今までそうしてきたように。

「……気を付けて。あなたのやり方が通用する相手ばかりではない」
「肝に銘じておくさ。それより、合格を貰ったわけだし、宝物とやらを頂いて帰ろうぜ」

「……それなら大丈夫」

クロ力は相変わらず淡々とした口調で、懷から小さな宝珠のようなものを取り出した。そして、それをハーヴィと澪紗に向けて、放り投げた。二人は慣れた手つきで、宝珠のような物を片手で受け止める。

「綺麗ね。これってもしかして……」

澪紗は受け取った宝珠のような物を天に翳した。

光を受けなくても、それは明るい輝きを放っていた。青白い、まるで月明かりのような神秘的な光を放っているが、何処か古臭さも帯びている。何かの宝石のようにも思えるが、それにしてはやや純度に欠けるのだ。

これとは別のものだが、澪紗は似たような魔力を持った宝珠を見たことがあった。しかし、記憶が曖昧なためか、それをなかなか思い出せない。

「そう。特定のポケモンの力を引き出すためのものだよ。今の技術だとなかなか作れないけど、ここの宝物庫の奥に眠っていたの」

クロ力の傍らで、ロコンの少女——心が明るい笑顔（スマイル）を浮かべながら、得意そうに話した。

「かつては、『月の石』って呼ばれていたみたい。その名の通り、月の力を秘めているの。残念だけど、今はもう、ポケモンの力を引き出すほどの魔力は残っていないみたい。でも、貴重なのは事実だから、かなりの価値はある筈だよ」

「詳しいんだな、ちっこいの」

「むうう、私はちっちゃくないもん！」

身長が低いことを気にしているのか、心はぷーっと頬を膨らませてしまった。その姿は何処か微笑ましく、感情表現に乏しいクロ力も、優しいな笑みを浮かべている。

「……これでオウランに渡れる筈」

「だな。あとは道具屋の主人が手形と交換してくれりゃ……ん？」
何かがいる。

遠くの通路の奥に光る何かを、ハーヴィは見逃さなかった。

その光は自分達——いや、クロカに向けられているものだという
ことは、すぐに気付いた。

「危ねえッ——！」

次の瞬間、彼はクロカのもとに飛び出し、彼女の身体を突き飛ばした。

「……何を……ッ!？」

突き飛ばされてバランスを崩しかけるクロカだが、すぐに受け身を取る。しかし、流石の彼女も、いきなり突き飛ばされたのだから戸惑いを隠せないようだ。

(チッ、俺は無理か……)

そして——

ハーヴィの身体に、妖しい輝きを帯びた光が直撃した。

「ぐあああッ——!!」

突然のことであつたために、受け身など取れる筈がなく、ハーヴィはそのまま吹き飛ばされ、壁に強く叩きつけられてしまった。

「ハーヴィッ——！」

澁紗が悲痛な叫びを上げ、ハーヴィのもとに駆け寄ろうとする。
しかし、

「来るなッ、俺は……平気だ……！」

全身に激痛が走る。もしかしたら、骨の二本や三本が折れている
かもしれない。

ハーヴィは軋む身体に喝を入れ、グラディウスを杖代わりに、ふ
らつきながら何とか立ち上がる。

「ああ……クソ痛え……。ったく、か弱い俺になんつーことを……」
「ちよつと、大丈夫!？」

本人は余裕ぶっているが、ダメージは相当大きいに違いない。そ

れに、人間の身でありながら光線の直撃を受けたのだ。立ち上がる
ことすら、ままならない筈である。

「ああ、心配……すんな。お前がさっき張ってくれた障壁が生きて
いたみたいで……助かったぜ……あー痛え……」

「……ごめんなさい……わたしを」

狙われていた自分を庇ってくれたのだろう。クロ力は申し訳なさ
そうに俯く。

「だから……気にすんなって。ただ、ちと戦うのは厳しそうだ……。
不本意だが、任せたぜ」

全身が痛みにより痺れているのが解った。何度か飛び跳ねたり、
腕を振り回そうとしたが、思うように動かすことが出来ない。この
状況で前線に立とうものなら、戦力になるどころか逆に足を引っ張
ってしまうに違いない。

ハーヴィは軽く舌打ちし、ふらつきながら後ろの壁に身を預けた。
「き、来たみたいだよっ！」

敵の姿を捕らえた心が、三人に向けて叫ぶ。彼女の声に呼応し、
クロ力は鞘から刀を抜き中段に構え、澪紗は手元に冷気の魔力を宿
らせた。

相手の姿を見るや否や、クロ力は軽く舌打ちをした。

「どうしよう、クロ力……。さっき倒したと思ったのに……」

怯えを孕んだ表情で、クロ力をちらりとみる心。それに対し、ク
ロ力は黙ったまま首を横に振った。

「敵影確認——」

一体の敵が姿を現す。

光沢を帯びた、癖のないセミロングの赤髪。全身を覆うのは、身
体にフィットした青と赤を基調としたボディースーツ。胸と腰には、
硬質な何かで作られているであろう鎧のような物が装着されている。
細身で小柄の体型は、少女そのものだ。可愛らしくもあり、その服
装が不釣り合いに見える。

だが——

大きく見開かれた黄色の瞳には、光がまったく宿っていない。瞬きもせず、ただジツと――無表情のままこちら側を見つめている。

「危険度C――現戦力を維持シ、殲滅ヲ続行シマス」

無機質で無感情な口調。淡々と紡がれる言葉にさえ、生気が宿っていない。

虚ろ――

クロカも感情表現に乏しい方ではあるが、この赤髪の少女には、感情というものが一切感じられない。まさに、「人形」という言葉が相応しいだろう。

「何なんだ……こいつ……」

息を荒げながら、後方で待機しているハーヴィが呟く。未だ受けたダメージが回復しないことと、自分の不甲斐なさに苛立ちを覚えるも、それを何とか抑え込む。此処で感情を露わにしていれば、前線にいる三人の集中力を乱しかねないからだ。

今までこのような相手を見たことが無い。ポケモンであるのは間違いないだろうが、それにしてもこの少女は、あまりにも「異質」であるのだ。

「聞いたことあるわ。ロストテクノロジー――今より遙かに優れた文明が栄えていた頃に、人間の力により生み出されたポケモンがいたという――」

「……そう……ポリゴンと呼ばれる種族……その上位種、ポリゴンZ」

澪紗の言葉をそのまま続けるかのように、クロカは呟いた。

「なるほどな。この宝物庫の……番人つてところか……。入口にあった古代文字……妙にきな臭えと思ったが……っ痛……」

やはり、そう簡単には取らせてはくれないか――

回復しない身体に苛立ちながらも、ハーヴィは苦笑を浮かべる。

「目標捕捉――電磁砲装填準備完了――」

ポリゴンZ――そう呼ばれた少女のカタチをした人形の手に、雷撃を放つ球が集束していく。

腕が向けられているのは、クロ力だ。彼女を目掛けて、雷の球が放たれた。

進む雷を纏った球体は、その場の空間を切り裂かんばかりの勢いで、クロ力へと向かっていく。

完璧と言っているほどの精度だ。とても、生物がこなせるような業ではない。雷の球は、クロ力の身体を確実に捉えていた。

刹那――

「させない！」

ロコンの少女はクロ力の前に割って入る。

当然、クロ力のパートナーである心が、相手の攻撃を許す筈がない。

心は雷球に対抗し、次々と火球を放っていった。一発の威力は弱いものの、放たれた火球は相手の攻撃の威力を弱め、やがては完全に無力化し、雷の魔力を帯びたそれは空しく四散した。

相手の技は強力だが、連射性に欠けていることを、澪紗は見逃さなかった。発射後の隙を突き、澪紗はポリゴンZへの攻撃を試みる。オーロラのような輝きを放つ光線を、人形の少女へと向けて放つ。

相手の技の威力をそぎ落とす力を秘めた技だ。強力な攻撃力を目の当たりにしているため、まずは相手を弱体化すべく、この技を選んだのだ。

オーロラの輝きは、ポリゴンZを捉え、冷氣と共に彼女の身体に強く打ちつけた。しかし、元々威力が低いため、大きな損害は与えられていない。

「……くっ」

ポリゴンZの攻撃は、全てクロ力に向けられていた。しかし、まだ幼い少女でありながら《暗黒の瞳》に選ばれているだけあつてか、危なげのない動作で攻撃を回避していく。パートナーのロコンのサポートもあつてのことだが、それでも場数を踏んできたことが窺える程だ。

クロ力が囷となり、回避及び守備のサポートを心が行っている間、

澪紗は少しずつ着実に、相手の攻撃力を削ぎ落しながら、冷気による攻撃を続けている。

「おかしい……。かなりのダメージが蓄積している筈なのに……」
一回の攻撃によるダメージは小さいが、かなりの回数を当て続けている。当然、攻撃の加減が出来るような相手ではないため、持てる力の全てをぶつけているのだが、一向に相手は怯まず、疲労した様子も見せない。威力は低いとはいえ、身を貫くような冷気を帯びていることは確かだ。それでも、相手は表情一つ変えずにいる。もしかしたら、一切痛みを感じていないのかもしれない。これも、人工的に生み出された故の産物なのだろうか――

しかし、攻撃力を殺がれているのは事実のようで、相手の技の精度はかなり落ちてきている。そのため、囷を務めているクロ力の回避にも、徐々に余裕が出てきていた。

「もしかして……」

攻撃を一旦止め、相手の魔力の流れに注目する。

先程までは、ポリゴンZからは何の属性の力も感じられなかった。それは、元の個体が属性を持っていない種族だからである。

しかし、今はどうだろうか――？

「間違いないわ……。私と同じ魔力を持っている……」

基本的に、同じ属性がぶつかった場合、その威力は半減されてしまう。

例えば、炎を纏っている相手に炎による攻撃をしても、大きな結果は得られない。一部の炎の属性を持つポケモンは炎を吸収することもあるため、場合によってはダメージを与えどころか強化してしまうこともある。

今の相手にはダメージが通っており、流石に無効化はされていないようだ――それでも、属性が同じ故か、効果的なダメージが通っていないのは事実だ。

「自分の身体を、受けた攻撃と同じ属性の魔力に変換しているのね」
想像を絶する能力に、澪紗は唇を噛んだ。

瞬間的な適応力——普通では考えられない力だ。しかし、かつての文明ならば、そのような個体を生みだすことなど容易かったのだろう。

「……なるほど。……心」

「目標捕捉——シグナルビームチャージ完了」

ポリゴンZの虚ろな瞳から放たれた光線を滑り込むような動作で回避し、クロカは心に目で合図を送った。心はこくりと頷き、二人の間に割って入る。

「これで決めるよ」

心は小さい身体ながらも、轟々たる火炎を纏ってポリゴンZをキツと睨みつけた。そこには怯えが見え隠れしているが、可愛らしい瞳には闘志が宿っていた。

そして、腰からクロカが持っているものと同じ形状——細身で三日月のような鋭さを持つ、刀と呼ばれる武器を抜く。その低い身長もあってか、ギラリと光る刀身が強調されている。

「いつけええええええつ！」

可愛らしくも堂々とした雄叫びを上げ、心は刀を振りかざした。しかし、そのまま斬り込まずに、その場で三回。身体の小ささをカバーするためか、跳躍を織り交ぜ、空を斬った。

一見、素振りをしているようにしか見えなかったが——

「凄……あまり受けたくない技ね」

刀が描いた軌跡に、赤く燃える業火が現れる。東国で使われている字のひとつである「大」を模した炎だ。その業火は瞬く間にポリゴンZを包みこみ、彼女の身体を焼いていく。

氷の属性に適応していた彼女にとって、この一撃は決定打となった。燃え盛る業火が消え去った頃には、戦力は残されておらず、そのまま壊れた人形のように地面にドサリと崩れ落ちた。

「機能——停止——スリープモード二移行シマス」

相変わらず無機質な声——

黄色の瞳を大きく見開いたまま、ポリゴンZはその場に倒れたま

ま、動きを止めた。

第19話 古の宝物庫2（後書き）

ポリゴンZの擬人化イメージは、ルーンフォークやエクスマキナの
なものだったり。

第20話 オウランへの船旅

過去に何度か船は見たことがあったが、流石に外海へと出ているものは規模が異なった。

デッキの上には何本もの縄が張り巡らされ、空高く建てられたマストが三本並んでいる。船首には金属で補強されたラムが突き出ており、掲げられた旗には「サクラ」と呼ばれる花と細身の刀——オウラン連邦の紋章と、交差した槍と翼——メルクリア王国の紋章が刻まれている。

舷側には一定の距離ごとにバリスタが装備されており、上部にはカタパルトが設置されている。これ程の重装備をしているのは、外海がいかに危険な場所であるかを物語っているように見える。

事実、蛮族が住むと言われている北の領域では、未だ血で血を洗うような戦いが繰り広げられているという。そこは国家と言う単位はなく、《エリュシオン》や《タルタロス》、《三聖獣信仰》などの宗教の概念も無い。そのような地域と隣接するルインスティル共和国では、無法地帯と化しているその地域をどうすべきか、今でも様々な議論が交わされているらしい。尤も、その場所とは巨大な山脈で分け隔てられており、彼らの本拠地もその北にあるヴァース諸島にあるため、侵略されるようなことはないのだが——

治安が悪いとはいえ、オウラン連邦は大陸の諸国と然程変わらない生活レベルは保っている。それでもこのような重装備な船舶が利用されていることから、大陸の外がどれ程恐れられているか、推測することが出来る。

しかし、行き先の情勢の悪さを感じさせないほど、船旅は非常に快適だった。

透き通るような空に、深い紺色の海。潮風が肌を撫で、不規則に聞こえてくる波音が、今このように船旅をしていることを実感させてくれる——

筈なのだが――

「おい、俺はもう平気なんだけど。いつまで寝てればいいんだよ。せめて外に出させるよ」

安い船室――最低限の家具だけが揃えられている、質素な部屋だ。粗末なベッドに横になったハーヴィは不満そうに、傍らで腕を組んで自分を見下ろしてくる漣紗に言った。

クロ力を庇ってポリゴンZの光線の直撃を受け、かなりのダメージを負ってしまったため、このように寝かせられているのだが――ハーヴィとしては、まだ身体は軋むように痛むものの、もう立ち上がっても平気であると感じていた。

「完全に治るまで、安静にして。潮風に当たると身体に悪いわ」

静かではあるが、漣紗の言葉には圧力があるのが解った。

「……怒ってる……よな……」

大体の理由は解ったが――ベッドから上半身を起こし、ハーヴィは漣紗に尋ねる。

「ええ、とても」

静かな口調ではあるが、漣紗はきつい視線でハーヴィを睨みつけていることから、相当怒っているのが解る。

「莫迦……」

「まあな、俺は莫迦だよ」

少し自嘲気味に言うハーヴィ。

「……けどよ、簡単にくたばりやしねえよ。せつかく旅を始めたんだ、つまらねえとこで終わっちまうなんてごめんだからな」

「そういうつもりで怒ったわけじゃないんだけど……ふん、まあいいわ」

漣紗は深いため息をつき、客室から出て行った。

一人残されたハーヴィは再びベッドに身を投げ出し、天井を見上げる。

「……ったく、何でお互いにこういうところは……」

愛想が感じられないものの、漣紗が自分のことを心配していてく

れているのは良く解った。しかし、それに対してなかなか素直になれない自分があり、それが煩わしかった。

また、彼女に心配をかけてしまつて申し訳ないと思っている。だが、それでも強がつてしまい、素の自分がだせていない。

多くのことをそれなりにソツなくこなせる自信はあつたが、どうもこのようなことになるとう器用になれない。我ながら、損な性格をしているなど、ハーヴィは心の中で自らを蔑む。

「……寝るか」

ハーヴィが寝静まつた頃、漣紗はデッキに出ていた。

特にやることはなく、ただ適当に歩き回つていただけである。

デッキには、ちらほらと人の姿が見られたが、客と見られるような者の姿はほとんどなく、船乗りの姿ばかりが見受けられた。また、客でもデッキにいるのは、何かしらの武装をした者だけであり、外海がどれだけ警戒されている場所なのかを実感させられる。

船尾の方では、クロカが心をギュツと抱きしめ、頬ずりをしているのが窺えた。相当気持ちいいのか、柔らかな笑顔を浮かべており、心は少し恥ずかしそうに顔を赤らめている。微笑ましい光景ではあるが、想像の仕方によっては少し赤面せざるを得ないようにも見える。

むさ苦しい男ばかりのため少々浮いているようにも見えるが、そのむさ苦しい男である船乗り達は、それぞれの仕事に追われているため、船上での情事に目を向ける余裕はないようだ。誰もが、慌ただしく走り回っている。

漣紗は邪魔にならぬよう、端の方で縁に掴まつた。潮風が彼女の髪をふわりと靡かせる。憂いを帯びた表情もあつてか、彼女の様子は何処か哀しそうだった。まだ少女と言われてもおかしくないほどの出で立ちだが、白いブラウスと紺のロングスカートという服装もあつてか、落ち着いた大人の女性のようにも見える。

空を見上げると、眩い陽光が目に入ってくる。風の強さも程良く、まさに順風満帆といったところか。この様子なら、一週間もあればオウランに着くだろう。

「姉さん……」

やはり、自分の姉のことが気掛かりで仕方が無かった。

また会えるのだろうか――？

でも、会えたとしても、再会の喜びを分かち合えるとは限らない。テラ神殿で姉の姿を見たものの、姉は自分に向けて攻撃を仕掛けてきた。技の威力は加減されていたとはいえ、決して友好的と言えるような態度ではなかった。

それでも、逢いたい。

《神の眷族》などという運命に囚われず、平和に過ごしていたあの頃が懐かしいから――

「なあなあ、カノジヨ！ 寂しそうな顔してたけど、何かあったのかい？ 何なら、俺と一緒に部屋で楽しいことしようぜ？ この俺と一緒にニヤンニヤンすれば、最高の気分になれるぜ」

物思いに耽っていたのだが、それは妙に軽い口調の男によって止められた。澪紗は不満そうな顔を露骨に表わしながら、その男の方へと振り返る。

ノリはハーヴィに近いのかもしれないが、彼以上に軽く、チャラチャラとしている。

癖の多いライトブルーの髪で、耳元には魚のような鰭が生えており、額の辺りには、先端が三つに分かれた髪飾りのようなものがつけられている。ギャラドスという種族に見られる特徴だ。

金属の小札（ウレド）をつなぎ合わせた、鈍い光沢を放つ鱗のような形状の鎧――スケイルアーマーに身を包み、健康そうな引き締まった腕は剥き出しになっている。

体格は全体的に細身で、顔立ちも周りのむさ苦しい男達と比べると、かなり美しく整っており、赤く切れ長の瞳からは、ギャラドスという獰猛なポケモンの種族を表現したかのような気の強さと共に

重圧のようなものが放たれている。口元からは八重歯がチラリと顔を覗かせており、それが全体の重圧を押さえているかのようにも思えた。

背中には、身の丈ほどある大剣——ツヴァイハンダーが担がれており、その得物からも彼の力強さを感じさせるものがあつた。

「私以外にもいたみたいね……。何の用かしら、《皇帝》——いえ、フューリ」

亜人種のギヤラドスに向けて、漣紗は普段の淡々とした口調で冷たく問いかけた。

「相変わらずつれないよなあ、漣紗ちゃん。ま、そういうところも可愛いんだけどね。こうやって再会したんだしさ、もっと喜んだ方がいいじゃないか？」

少し悲しげに身をくねくねと動かすギヤラドスの青年フューリ。

美形なので多少マシといえはマシなのだが、男であるフューリがやっている以上、やはり気持ち悪い。

「あなたこそ。人の神経を逆撫するような態度は、相変わらずね」

「まあ、そう邪険にしないでくれよ。こっちは偶然お前の魔力を感じたんだからさ」

フューリはそう言いながら、漣紗の横に立って空を見上げた。

「《節制》——いや、漣羅^{れいら}のことか？」

「ええ……」

漣紗は自分の感情を押し殺し、静かに頷く。

「そつか……。見付かるといいな。悪い、言葉が見つかんねえや」

「いいの、これは私の問題だから」

フューリもあまり器用な性格ではないということを、漣紗は知っていた。単純で真つ直ぐな莫迦な奴ではあつたが、彼は彼なりに自分のことを気遣ってくれているのだらう。

「はは、お前はいつもそれだよな。あまり素っ気ないと、相棒の男に嫌われちまうぜ？」

「氷漬けにされたいの？」

「冗談じゃねえ。さーて、こつちも仕事に戻らねえと、相棒に——
いつてえ!？」

ガツンと、フューリの脳天に拳骨が炸裂した。

「仕事をサボってお客様にナンパとは、いい度胸じゃないか……ん、
どう思うフューリ？」

「いいじゃねえか！　ちよつと可愛い姉ちゃんと話してただけだろ
ッ——つてえな！」

今度は脛に蹴りが炸裂し、その場でぴょんぴょんと跳ねるフューリ。相当痛かったのだろう。

「グレイシアのお嬢さん。ウチの馬鹿が迷惑かけたみたいね。変なことされてないかい？」

「いえ、別に気にしていないわ」

そこには、フューリを殴った女性が、立っていた。

色白の肌に、細くサラサラとしたベリーロングの金髪。体型も大人の女性といった感じで、瑠璃色の軍服の上からでも大きな胸がその存在感を主張している。

頭には黒の羽根付き帽子をかぶっており、ベルトには海上でよく使われる武器——小振りで刃が肉厚なため斬ることに特化した、カットラスという片刃剣が装備されている。そして、左目は髑髏模様が描かれた眼帯で覆っており、その姿は海賊のようにも見える。

「ああ、失礼。私は船乗りギルド《蒼き波濤》^{フラウェ・ウエレ}の長、シノ・サフィルス。オウランに着くまでの間、よろしくね。《海神カイオーガ》に誓って、無事送り届けるよ」

《海神カイオーガ》——《エリュシオン》の一柱とされているが、元々は船乗り達の間で信仰されていたという、海の神である。今でも、多くの船乗りたちは、船旅の安全を願い、この神を信仰している者も多い。

この世界の大海を創造した神と伝えられており、陸地を創造したという《地神グラードン》とは、天地開闢の時代に激しい戦いを繰り広げられたとされているが、それは全て《エリュシオン》の聖典

に記されているものであり、真実は定かではない。

「おい、シノ！ 北西からこっちに向かってくる船が一隻。武装してるみたいだぜー」

仕事に戻っていたフューリが、望遠鏡を掲げながら、メインマストからシノに向けて叫んだ。

「んー、あのセンスの悪い旗は……北の馬鹿共だなー。あー、なんか小舟をこっちに向かわせてるし、乗ってる奴らも武装してる。どうする、シノ？」

「はあー、懲りない連中だねホント。よし、もう少し引き付けて！」
シノが指示を出すと、船は速度を落とし始め、バリスタが装備された船側を徐々に相手側の船へと向けて行った。

「一体何が……？」

澪紗は怪訝そうに、シノに尋ねた。

「ヴァーズの蛮族さ。元々痩せた土地だから、こうやって略奪行為でもしないと、生きていけないらしいね。かといって、奴らの好きにさせる気なんて、毛頭ないけど」

そう言って、シノは不敵な笑みを浮かべた。

風上はこちら側だ。弱風における海戦の場合、風上の方が戦術的に優位に立つことが出来る。

それを知らずか、相手は本船から小舟を何艘も出し、こちら側へと攻めてくるのが解った。戦いにおいては素人なのか——いや、時代遅れなのだろう。射撃装備を搭載した帆船同士の海戦においては、このような小舟はすぐに沈められてしまう。それに、たとえ射撃の雨を掻い潜ったとしても、敵船に上るまでの高さがあるため、その間に攻撃を受ける可能性もあるのだ。

「ヴァーズの海賊も堕ちたな！ 左舷バリスタ、射撃準備！」

シノは船全体に行きとどかんばかりの大声で叫び、それに従い、船乗りたちが手近なバリスタのもとにつき、矢を装填し始める。

「撃てッ！」

シノの声が響くと同時に、左舷からバリスタから一斉に極太の矢

が放たれた。

連射性に欠けるものの、このような設置型の兵器は、一発の威力が高い。発射される矢も極太であるため、小舟に直撃すれば、一発で粉碎し沈めてしまうだけの威力はある。

放たれた矢は相手の小舟が密集した場所に降り注ぎ、次々とそれらを沈めていった。威力は勿論のこと正確性も高く、射程や命中性などが、すべて計算されているのが解る。一方、敵の射撃は命中性もなく、射程も短い。そのためか、こちら側にはほとんど届かず、逆に自分達の味方の小舟に当たってしまっている。また、彼らは風下にいるためか、射撃による戦闘のデイスアドバンテージを負っている。

しかし、それでも敵の海賊たちは降り注ぐ矢や巨石に怯まず、喊声を上げながら小舟を漕ぎつけてきた。周りで仲間が倒れても、顔色一つ変えていない。

戦い方や装備も劣悪ではあるが、彼らには恐れというものがなかった。

「おい、どうする？ 勇気だけは落ちちゃいねえみたいだぜー？」

メインマストから、フューリが叫ぶ。

彼も射撃を担当しているようで、狙いを定めながら水の弾丸を次々と放っている。

水とはいえ、その力を一点に集束すれば岩も砕く威力となるため、彼の放つ技も次々と敵の舟を沈めている。更に、メインマストという高い場所から撃っていることで、威力が更に付加されている。

「まあ、適当に叩いておけば撤退はするだろうさ。どうせ、痺れを切らしてこっちに突貫してくるに決まっている。そうしたら、歓迎してやるまでさ」

「大丈夫なの？」

「ああ、問題ないさ。こう見えても、海賊相手に何年もやってる奴らだからね」

《蒼き波濤》の歴史は、数多くある船乗りギルドの中でも古い。そ

の実態はギルドというよりも傭兵団で、商船の護衛として活躍することが多かった。また、かつての大戦時ではメルクリア王国に雇われ、カムイラ地方の海域からオウラン連邦の海軍を退けたこともある。現在は、何処の国にも属しておらず、外海の治安維持が主な仕事である。

「さて、近づいてきたみたいだね。あんたは戦えるかい？」

「ええ」

「お客さんに働いてもらうのは申し訳ないけど、ちょっと手伝っておくれ」

第20話 オウランへの船旅（後書き）

やたらと「ヴ」が多いのが気になりました。なんというノムリッシユ。

どうも中二っぽくなってしまっんですよねえ。

バリスタはちょっと時代遅れなんじゃないかというツツコミもありそうですが、一応大砲もあるんですよ。ですが、高価な装備のために、一介のギルドが持ち合わせられるものではなかったりします。それに、ポケモンがいれば大砲が無くとも充分な火力になるので。

第21話 英雄の言葉（前書き）

まだ第三章の序盤中の序盤という……
展開が遅くて申し訳ありません。

第21話 英雄の言葉

「なんか外が騒がしいな。気持ち良く寝てたつてのに」

澪紗の言葉に甘えて、船室にてハーヴィは仮眠をとっていた。しかし、突然外が騒がしくなったため、目が覚めてしまったのだ。

外海にはよく海族が現れるという話を聞いたことがあった。北の海域で暴れ回っているというヴァーズの蛮族が、度々商船を襲うという事件がメルクリア国内でも何度か報告されている。

もしかしたら、この船にも襲撃してきたのかもしれない――

「やっぱり、安全な船旅ってわけにはいかねえよな……」

溜息をつきつつ、ハーヴィはベッドから起き上がろうとした。だが――

「うぐっ――」

全身に激痛が駆け巡った。

「畜生……身体が思うように動かねえ……」

宝物庫で襲ってきたポリゴンZの光線の直撃を受けたのが原因なのは間違いない。今まではたいしたことが無いように振舞っていたが、やはり相当なダメージを食らっていた。

何とか立ち上がることは出来たのだが、剣を持って戦うとなるとそれは不可能なことだろう。その場でとび跳ねたり、腕を回したりしても、その度に痛みが走る。この状態で戦ったら、逆に周囲の士気を乱しかねない。

それでも――

「澪紗……」

自分のパートナーのことを案じるハーヴィ。澪紗の力は決して弱いものではなく、彼女一人でも戦いぬくだけの实力があると思っている。

それでも、気掛かりだった。数日前に、テラ神殿で自分達の身に起きたことを考えると――

「駄目だよ。それだけの傷なんだ、安静にしていな」

船室から出ようとしたら、一人の女性と出くわした。

瑠璃色の軍服に身を包んだ美女だ。左目を髑髏模様の眼帯で覆っており、頭には同じく髑髏が描かれた航海帽子を被っている。そして、腰には獲物のカッタラス。どう見ても海賊にしか見えない女性だ。

確か、名をシノ・サフィルスといったか。ハーヴィもその名を今までに何度か耳にしており、《蒼き波濤》^{ブラウェ・ヴェレ}というギルドを束ねているというのは、冒険者——特に海域を旅する者達の間では有名である。十七年前の邪神大戦でも活躍しており、《タルタロス》の船を何艘も沈めた英雄として名高い。四十近い今でもその威光は衰えておらず、外海の平和を守っている。

「そういうわけには……っ痛!？」

シノの説得を撥ね退けようとしたが、彼女に小突かれてハーヴィはその場に蹲った。

「軽く小突いただけでそのザマじゃあ、足手まといだね。それなりに場数は踏んでいるようだけど、私からしたらまだまだヒョッコさ」

「……何しやがる……っ……」

シノを目の前にしてから、ハーヴィは自分でも緊張しているのが解った。恐怖や畏怖はないものの、何処か身体を締め付けられるような感覚に見舞われていた。

やはり、英雄と謳われている人物は違う——

それでも、ハーヴィは何とか平静を保とうと努めていた。

「恐らく、仲間を庇ってポケモンの技を食らったってところか。ホント、莫迦な奴だね」

「お見通し……か」

何処か自嘲気味に、ハーヴィは呟いた。そして、船室から出るのを諦めて、ベッドに腰掛ける。

「別に良いだろ。あんたには関係の無いことだ」

「そうもいかないのさ。あの子と運命を共にするなら……ね」

シノの視線が、僅かに鋭くなるのをハーヴィは見逃さなかった。そして、彼女の発した言葉だ。意味深ではあるが、何処か引つかかるような感じがした。

「何を言ってるんだよ」

ハーヴィは怪訝そうに、シノに問いかけた。

「《神の眷族》……。こちらに関わる者なら、耳にしたことがあると思うけどね」

シノの言葉を聞いて、ハーヴィは確信した。彼女が、自分と霧紗の関係のことを言っていること、そして、彼女もまた《神の眷族》に関わる者であるということ。

数日前に、テラ神殿で《地神グラードン》の意識が語りかけてきたことを思い出した。

《神の眷族》とは迂闊に関わるな――

そのようなことを言っていたのは、明確に覚えていた。だが、誰がどう言おうと、霧紗と運命を共にすることは決めている。

「答えはあんた自身が見つけていくだけだ。こちらに関わると、平凡な生は望めないけどね」

特に関係を否定するわけでもなく、シノはそう告げた。

「ただ、これだけは言える。仲間を守るために身を挺す、それは結構なことだよ。でもね、どれだけ強い信念があろうと、死んだらそこまでだ。あの子と運命を共にするならば、それはしっかり心に留めておきな」

シノの言葉が、ハーヴィに重たく圧し掛かった。

彼女の言うとおりだ。たとえ、どれだけ信念があっても死んでしまえば何もかも無へと帰す。今まで何度も無茶をしてきたハーヴィにとっては、耳が痛い言葉であった。

「まあ、あんたはまだ若いからね。多少無茶をするくらいが丁度いいのかもしれない。でも、あんたが傷付いて悲しむヤツがいるってことも解ってくれ」

暫くの沈黙の後――

「ああ、解った……」

ハーヴィは静かに頷いた。

「その……《神の眷族》について、詳しく教えてくれないか？」

「それは出来ない相談だね。実のところ、私も詳しいことは解っていないんだ。《運命の輪》や《世界》、奴らと関わる者ならあるいは……。まあ、どちらにしろ、生半可な気持ちで関われる存在じゃないってことだよ」

「そうか……」

「さっきも言った通り、答えは自分で見つけていくものさ。たとえ眷族に関わってないとしても、冒険者つてのはそういうものだろ。決められた道を歩んでいては、冒険者なんて言えないからね」

同じようなことを聞いたことがあった。シエルクでバウアーのもとで暮らしていた頃、店に訪れた吟遊詩人が謳っていたサーガだ。タイトルは覚えていないが、旋律と歌詞を口ずさめる程度には覚えている。

「さて……、そろそろ外の様子を見に行かないとね。指揮官がいつまでもサボっているわけにはいかないからね。くれぐれも、船室からは出ないように。ヴァーズの奴らは、あんたのお仲間と私達プロに任せておきな」

シノはそう言つと、大きく背伸びをして航海帽子を直した。そして、腰にあるカトラスを抜刀すると、颯爽と船室から出ていった。ハーヴィも彼女の後をつけようとしたが、やはりまだ全身に痛みが残っていた。シノの忠告が無ければ躊躇することなく外に出たのだが、今の自分が行っても足手まといにしなければならないことを悟り、深い溜息をついてベッドに身を投げ出した。

「どうしたもんかな……」

オウランに着く頃には、傷は完治しているだろう。だが、こうして船室に引き籠っているのも暇で仕方が無かった。

「……………ん？」

船室の隅に、本棚が置いてあるのが目に入った。とはいってもほ

とんど本は置かれておらず、古びた表紙のものが数冊横になつていくらしいの粗末なものだ。

普段、あまり本は読まないハーヴィであつたが、暇をつぶすには丁度いいかもしれないと思い、本棚に置いてあつた一冊の分厚い本を取った。

「古代文字……解読法……？　へえ……」

表紙の文字は掠れていたが、そう読むことが出来た。

ハーヴィはテラ神殿の壁に書かれていた文字のことを思い出した。その時はさっぱり読めなかったのだが、もしかしたらこの本を読めば少しは解るようになるかもしれない。そう思った彼は、本のペーシをゆつくりと捲った。

「……………」

ページには、テラ神殿や《エリュシオン》の宝物庫にあつたアンノーンと呼ばれるポケモンによつて書かれた古代文字と同じような文字と、その訳が書かれていた。多少の形の違いはあるが、何かしらの関連があるのは間違いないだろう。

例文——やはり《エリュシオン》に纏わるものがほとんどだが——の下には現代語、それも共通語で訳が記されており、勉強が苦手なハーヴィでも比較的簡単に読むことが出来た。

「そもそも、古代文字つてのが二十八種類しかないワケか。そのうち二種類が記号だから、実質二十六種類。待てよ、これって俺達が普段使っているアルファベットと同じ数じゃないか？　そう考えると、少しはやり易くなりそうだが……ああ、やっぱり文法とかが変わってくるよな、そりゃあ……………」

ぶつぶつと独りごちながら、ハーヴィはページを捲っていった。

どうやら、冒険者の間で使われていた文献らしい。今では解読法が廃れてしまっているが、一部の熟練の冒険者は、解読法を後世に伝えるべく書き残しているようだ。

「つまり、これはE L Y S I O N……エリュシオン……か。単語単位なら、何とか解りそうだ」

少しではあるが、ハーヴィはアンノーンによる古代文字について理解することが出来た。本に書かれている例文を何度も小声で復唱しながら、ページを捲っていく。

だが――

「……………」

普段から勉強をしていなかったハーヴィの集中力では、そう長く続かないワケで。

勉強を始めて三十分足らずで、彼は再び眠りへと落ちていた。

*

「ハーヴィ」

「んあ……？」

どうやら、本を開いたまま寝ていたらしい。何者かに声をかけられて、ハーヴィはゆっくりと目を開けた。

「澪紗か……早いな」

「早いつて……。とつくに日が暮れてるんだけど。それより、昼間から何も食べていないでしょう？ 軽いものだけど、持って来たわよ」

暗がりの中に、うつすらとトレイを持った澪紗の姿が浮かんだ。

トレイの上には、黒パンと果実、そして水筒が二つずつ乗っていた。彼女は食料が乗っているトレイを粗末なテーブルの上に置くと、ハーヴィの方へと向き直った。

ハーヴィは眠い目をこすり船室の窓の外に目をやると、空がすっかり黒く染まっていた。窓からは、うつすらと月明かりが差し込んでいる。

澪紗の姿を見ると、服が乱れているのが解った。目立った傷は負っていないようだ、彼女が戦闘に巻き込まれたのは間違いないだろう。

「悪いな……。俺が寝ている間に、大変だっただろ？」

「気にしないで。ヴァーズの蛮族と聞いたから手強いかと思ったけど、たいした相手じゃなかったから。それに、怪我人を戦わせるわけにはいかないでしょう」

ふふっ、と落ち着いた微笑みを見せる澪紗。月光に照らされる彼女は、何処か幻想的に見える。ハーヴィは思わず、彼女の表情に見惚れてしまった。

「どうしたの？」

「いや、何でもねえよ」

恥じらいを隠すために、ハーヴィは俯きながらベッドから降りた。まだ痛みはあるものの、だいぶ収まってきているのが解る。オウランに着く頃には、戦闘も問題なく行えるだろう。

「それより、着替えるよ。俺は外に出てるから。それと、疲れてるなら寝ておけ」

「潮風に当たると……って、ちょっと！ もう……、本当に莫迦ね」

最後まで話を聞かずに船室を出ていったハーヴィに、澪紗は深い溜息をついた。恐らくは、自分に気を遣ってくれているのだろう。

やはり、相変わらずだ。要領が良さそうに見えて、いつも周りばかりを優先する――

結局は、彼もまた不器用な人間なのだ。自分と同じように――

（私も人のことを言えたものじゃないわね……）

汚れた服を着ているわけにもいかない。澪紗はハーヴィの言葉に甘え、着替えることにした。

布の擦れる音。澪紗はゆっくりと、衣服を脱ぎ始めた。

華奢な肢体が月光に曝される。背中には、グレイシアに見られる菱形の蒼い痣のようなものが浮かんでいる。そして、腰からは青い体毛に覆われた可愛らしいポが伸びている。頭から伸びる兔のような耳も相俟ってか、彼女が人間ではなくポケモンであることを窺わせる。

澪紗は着替えを終えると、夜食の乗せられたトレーを持って、甲板へと向かった。

既に誰もが寝静まっているのか、途中で誰にも出くわすことがなかった。客として乗っている者が少ないというのもあるだろう。《蒼き波濤》の者達も、捕らえたヴァーズの海賊の監視や、船の動力確保に忙しいのだろう。

甲板に出ると、案の定ハーヴィが船の縁に手をかけて夜空を見上げていた。傷を負っている身のため、潮風に当たらないように忠告していたのだが、最早何を言っても無駄だろう。

海上を駆け巡る風は、相変わらず穏やかな追い風であった。ヴァーズの海賊の襲撃があったとはいえ、順風満帆と言えるだろう。

夜空を見上げると、星々が美しくも不気味な煌めきを放っていた。まるで、これから——行き先であるオウランで何かが起こるのを暗示しているかのよう。

「ハーヴィ」

「着替え終わったか……って、いつもお前地味な服装だよな」

淡い色のブラウスとロングスカートという澪紗の服装を見て、ハーヴィは苦笑した。

「悪かったわね」

何処かばつが悪そうに、澪紗は俯く。

「いや、別に否定するわけじゃねえよ。ただ、お前は可愛いんだし、もうちょっと派手なのを着たら似合うんじゃないかって思っただけだ。何でも、オウラン連邦の服ってのは結構可愛いらしいぜ。何なら、何着か買ってやるよ」

「駄目よ。私達は観光でオウランに行くわけじゃないんだから」

「ハハッ、手厳しいな……」

少し気を紛らわせるつもりで言ったのだが、素が真面目な澪紗には通用しないらしい。

彼女が特別な存在であるのは解っている。それでも、ハーヴィはずっと接していくことを心に誓ったばかりだ。だからこそ、自然に付き合っていきたかった。

「それじゃあ、飯にしようか。ずっと寝てたから、腹が減っちゃまっ

た」

「ふふつ、そうしましょう」

メインマストから、談笑しながら食事をしているハーヴィと漣紗を見下ろす影があった。亜人種のギャラドス——フューリと、彼のパートナーであるシノの姿だ。

「なあ、オレ達の使命について告げなくていいのか？ オレ——《皇帝》は、あいつと敵対しているわけじゃないし、忠告することくらいは出来るぜ？」

フューリは何処か物悲しげな表情でシノに尋ねた。彼女はその言葉に、無言で首を横に振る。

「だよなあ。オレ達と関わると、過酷な運命は避けられねえつてのに。つたく、難儀なもんだぜ、《神の眷族》つてのは」

ある程度予測の来ていた答えだが、フューリは大袈裟に項垂れて見せた。

「当事者が言えた言葉かい。まあ、私もそれを承知で関わってるんだけどね」

シノもまた、何処か憂いを帯びた表情で、二人の若者達を見下ろしている。

「で、シノちゃんは今更だけど何でオレと関わろうとしたの？ アレか、オレに惚れたって……ってえ！？」

この期に及んで茶化そうとするフューリに、シノの蹴りが入った。向こう脛にヒットしたらしく、フューリはその場に蹲ってしまった。「私は今の仕事に誇りを持っているよ。でも、このアルセリアで何かが起ころうとしている今、《蒼き波濤》なんていう小さな枠の中に留まっているわけにはいかない。そう思っているのさ。私も、あの青年とある意味似たような存在なのかもしれないね」

第21話 英雄の言葉（後書き）

この話は、実は新しく書いたものです。というのも、あまりにもキングクリムゾンな状態だったので……。

シノの年齢設定ですが、38歳です。ババア……ではないと思う。肝っ玉母さんのキャラを書きたかったけど、難しいね。

名前の由来とかもあるのですが、これは別に設定資料的なものを作ってそこに載せていこうかなと思っております。気が向いたらですが。

第22話 古き聖獣の国（前書き）

無事にオウランに到着したハーヴィ達。
彼らは港町ガサキで、情報収集を始めた。

第22話 古き聖獣の国

オウラン連邦は、インフィニティア大陸東部に浮かぶ島国である。面積は狭いものの国力は高く、かつての五国大戦では大陸に進行し、メルクリアの湾岸都市を陥落させ、王都周辺まで勢力を伸ばしたことがある。特に、「サムライ」と呼ばれる者達の刀を使った剣術は多くのメルクリア兵を苦しめたという。現在、大陸で使われている刀も、元々はオウラン連邦で古くから使われていた武器である。尤も、そのオウラン連邦も五国大戦の中期からは大陸から姿を消すこととなる。強国ではあるが内部にいくつもの小国が乱立していたために内乱が激しく、自滅するかたちで大陸から撤退していったのだ。今日では内乱こそ起きていないものの、三つの勢力が均衡を保ったうえで成り立っているため、不安定なのだ。

敵対関係にあるわけではないのだが、それはオウラン連邦で信仰されている宗教に関係している。オウランでは、《三聖獣》と呼ばれる神々を奉っており、それぞれ三つの区域で異なる神を祀りあげているのだ。元々はすべてを等しく信仰する者であったが、やがては信仰が薄れ、あるいは解釈が変化し、《三聖獣信仰》も一種のステータスにまでなり下がっている。

そして、《タルタロス》の影響だ。邪神大戦には直接的には参加していなかったオウラン連邦だが、かの邪教団が最近になって、活動を始めたという噂が流れ始めていた。元々、排他的な国風のため、そういった者達の介入を防ぐために入国を規制していたというものもある。それでも治安は安定していないのが現状だ。また、オウランの中央にあるオオトリ中央行政区を治める《虹翼神ホウオウ》の容体も悪化しているという噂もあり、不安要素が絶えない。

オウラン連邦水の地区・港町ガサキ――

南西部の半島に位置する、大きな港町ガサキ。入国規制がされているとはいえ、流石は港町といったところか。まだ陽が昇り始めたばかりだというのに、ガサキの町は多くの者達で賑わっていた。

カムイラ以上に、異国情緒の溢れる街だ。多くの家は軒並み低く作られ、屋根は瓦造りだ。道を行く人々の服装も、大陸ではあまり見られないような格好だ。「キモノ」と呼ばれているもので、丈が長く腰のあたりに帯を巻いているのが解る。どちらもカムイラで見たまのだが、それ以上に本格的なのが解る。ハーヴィは王都を出る前日にキュウコンの幼女を見たことがあったが、彼女もまたオウラ風衣装に身を包んでいたことを思い出した。

大陸とは明らかに文化の異なる国のためか、ハーヴィ達は明らかに浮いていた。というのも、治安の関係か異国の者があまり訪れていないため、彼らのような冒険者は非常に珍しい客なのだ。

途中でヴァーズの海族の襲撃があったものの、風と天候に恵まれたため、カムイラを出て一週間でオウラン連邦に到着することが出来た。

見慣れぬ土地のため、街で何度も迷いそうになった。また、治安の悪さもあり、ゴロツキなどに喧嘩を売られたり、密入国者と疑われたりと、様々なトラブルに悩まされた。しかし、何とか入国手続きを終えることができた。

「いやー、面倒だったけどすげえな。いつもはシエルクの周辺でしか活動してなかったけど、こうやって異国の地を訪れることになるなんてな」

ハーヴィは目を輝かせながら、周囲の景観を見渡した。一度、カムイラで同じようなものを見ているとはいえ、冒険者となったハーヴィにとっては何もかもが新鮮であった。

「観光で来たわけじゃないのよ。そこは自覚して」

子供のようにはしゃぐハーヴィに、澪紗は呆れながら溜息をついた。それでも、彼女も異国の地が物珍しいのか、時々長い耳をピクピクと動かしている。

「凄いでしょ。オウランで作られた工芸品も、大陸に輸入されているんだよ。私とクロカが使っている刀も、熟練の鍛冶師が門外不出の技で鍛えているんだ」

えっへん、と言わんばかりの表情で、亜人種のロコン——心が胸を張る。

「へえ。詳しいんだな、ちっこいの」

「むうう、私はちっちゃくないもん……」

「んなこと気にすんなよ。それより、クロカと心はオウラン出身なのか？」

「……そう。……幼い頃に、オウランのセイリヨウの孤児院に捨てられた」

ハーヴィに身長が小さいと言われて頬を膨らませている心に代わって、クロカが相変わらず淡淡とした口調で答えた。

「悪い、変なこと聞いちゃった」

何かしら事情があったのは間違いないが、それでも親に捨てられるというのは決して子供にとって良い思い出ではないだろう。知らなかったとはいえ、立ち入ったことを聞いてしまったことを、ハーヴィは気まずそうに詫びた。

「……別に気にしていない」

「うん。私はクロカと一緒にだから、寂しくなんかないよ」

「そっか」

心はともかく、クロカは何処かやりにくい相手だとハーヴィは思った。

かつて漣紗と出会った時も同じような感じだったか——

いや、彼女の場合でも、クロカよりは感情豊かだった。クールに振舞っているが、実際はあまり直接的に表情に出さないだけに過ぎないのだ。これは違う意味でも大変な仕事になりそうだと、ハーヴィは内心不安に思った。

「まずは、情報収集ね。人が多く集まる場所ならば……」

気まずい空気になったところに、漣紗が助け船を出した。

エルフィーナとジャンヌの搜索が、今回の任務である。あの出で立ちだから特徴は掴みやすいが、二人を一国の中から探すのは至難の業だ。そのためにも、情報収集は必須事項である。

「となると、酒場か喫茶——」

「……冒険者ギルドが、すぐ近くにある」

「……………あ、そう」

オウランのスイーツに有りつこうとしたハーヴィだったが、クロカの出した案に却下されてしまった。無論、彼女には却下する気などなかったのだが。

「ハーヴィ、解つてると思うけど、観光じゃないから」

「へいへい」

向かう先は、冒険者ギルドだ。如何に閉鎖的な国とはいえ、冒険者に国境というものは存在しない。蛮族が住むと言われているヴァーズにもギルドが存在するのだから、多少治安の悪いオウランに存在してもおかしくないのだ。

街の一角に、ひと際目立った——というより周囲の景観から浮いている建物があった。大陸では珍しくない石造りの建造物なのだが、周囲の瓦屋根の家屋から見れば明らかにその存在は異質なものだ。オウラン連邦冒険者ギルドのガサキ支部である。エルフィーナがトレジャーハンターとして活動しているのならば、此处に立ち寄っているのは間違いない。そう判断したハーヴィ達は、ギルドの建物の中に足を踏み入れた。

「うわ、やっぱり異国の地って感じだな」

ギルドの内部の様子を見て、ハーヴィは思わず声を漏らした。

まず、冒険者達の装備だ。明らかに自分達とは異なり、大陸のものとはことなつた武器や防具を身につけているのが解る。代表的なのは、やはり刀だろう。クロカ達が装備しているような武器を持った冒険者達が大半を占めている。

そして、雰囲気だ。外観は大陸風の建物であったが、内部の調度品や工芸品を見ると、オウラン風のものが多い。また、一部の冒険

者は靴を脱いで畳に上がり、そこで囲炉裏を囲って談笑しているのが窺える。

「ん？ 珍しい客が来たでござるな」

「ふむ。異国の地から来た者であろう。女子おなこ二人は我がオウランの剣士の出で立ちをしておるが……」

珍しいものを見るかのように、奇異の視線を向ける冒険者達。しかし、一行はそんな視線を気にせずに、ギルドの受付へと向かった。受付には、眠たそうな表情の青年が頼杖をついていた。彼の足元では、原型のガーディとポチエナが身体を擦りつけてじやれているが見える。

「んー、あんたら大陸から来た奴らか？ この時期に珍しいな」

「まあ、ちよつと人探してな」

ハーヴィは依頼内容が書かれた羊皮紙を取り出し、自らも説明をした。一応、国の要人の搜索のため、本名は出さずに大まかな内容に留めている。

「依頼を受けて、人探しねえ。如何にオウラン連邦が狭いとはいえ、随分と面倒なことを……。こら、毛が付くからやめなさいって言うてるでしょー」

受付の青年は、眠そうな声でじやれるガーディとポチエナを追いかつた。

「やれやれ。捨てられていたのを拾ったら、随分と懐いちゃったな」
何処か寂しげに苦笑する青年。

（捨てる？ 信じらんねえな）

先程のクロカと心の境遇もあつてか、ハーヴィは複雑な気持ちに苛まれた。どんな理由であれ、そのようなことが許される筈が無い。しかし、人それぞれ事情があるのだらう。自分が首を突っ込むことではない。

だから、せめて自分は――

「ああ、ごめんよ。本題に入ろうかー」

「んあ、頼む」

眠そうな青年の声で、ハーヴィは我に返った。

「大陸からの冒険者が少ないのも事実なんだけど、此処最近それなりにデカい動きがあつてね。目立った感じの冒険者が六人つてところかな。国籍や外見、何処まで行つたかまでは把握してないけど、この街から外に出ているのは確かな筈だよ」

目立った冒険者の中に、エルフィーナとジャンヌがいる可能性は高いと言えるだろう。だが、他の四人というのも気掛かりだ。今回の任務に関わってくるような存在なのだろうか。

「あとは、妙な集団が活動を始めたってことかな。オウランには《三聖獣信仰》ってのが……今はだいたい信仰も薄れてきちゃってるけど、それとは異なる宗教が立ち上がったっていう噂が出ていてね。その調査のために、何人かの冒険者が派遣されたけど音沙汰が無いんだ。大陸でもその集団が活動しているって噂だし、何か良からぬことが起ころうとしてるじゃないかね。オオトリを治める《虹翼神ホウオウ》様の容態も悪いって聞くし……まあ、行政についてはオレ達冒険者が関わるようなことじゃないんだけど」

妙な集団が《タルタロス》であるのは間違いないだろう。

ちなみに、《タルタロス》の存在は知られてはいるが、その詳細を知る者は少ない。というのも、十七年前の邪神大戦で解散したと思っっている者が多いからである。そのため、如何に冒険者ギルドといえど、実態を把握できていないこともあるのだ。

「何か色々と面倒なことになりそうだな」

「やれやれ、と肩を竦めるハーヴィ。」

「ええ。今回の仕事は難航しそうね」

澪紗もそうつぶやくが、特に表情に出した様子はない。クロカと心は、受付の青年が言っていたことを、羊皮紙にメモしている。

「どうやら、これ以上有力な情報は掴めそうにない。」

「ああ、待ってくれ。情報ならば、このガサキの先にあるウラナミって街ならば、何かしら情報を掴めるかもしれない」

何かを思い出したかのように、受付の青年が告げた。

「なるほどな。それじゃあ、一先ずそこを目指してみるとするか」

装備の確認や情報を纏めるために、ガサキを出立するのは翌日の早朝ということとなった。

夜が更けた頃、ハーヴィは宿を抜け出して街中を歩いていた。港町とはいえ、夜は静まりかえっていた。昼の喧騒とはうってかわって、波の音と虫の音が聞こえてくる。空には、僅かに欠けた月が輝いている。

向かう先は酒場だ。夕食は終えていたのだが、ハーヴィにとっては少し物足りなかった。また、少しでもいいので、酒を飲みたい気分だったのだ。勿論、明日からの仕事に影響が出てはいけなかったので、節度は守るつもりだが。

路地裏に足を踏み入れると、何人かの酔っ払いが地面に横たわっていた。ゴロツキと考えるような男や、着物を肌蹴させた女が客引きをしている様子も窺えた。

（こういうところは、大陸と大差ねえんだな）

手ごろな店を探すべく、ハーヴィはアルコールや食物の入り混じったような臭いが漂う路地裏を進んでいった。途中で罵声を浴びせられたり、客引きに捕まりそうになったりしたが、それに構わずに店を探した。

「その若いの、ちょっと付き合ってくれんかえ？」

しわがれたような声。声質から、かなりの歳を重ねた老婆であるのが解る。

これは驚いた。まさか、オウランでは老婆も身体を売っているのだろうか――

だが、ハーヴィにはそのような趣向はないし、変な店に入ってばったくらわれるのはごめんだった。若い頃――といっても数年前、澪紗と会うまでは、たまに娼婦を抱いていたが、現在はそのようなことに金を使うのがバカバカしかった。

「無視をするでない」

再び老婆が声をかけてきた。おまけに、服の裾を掴まれているのが解る。

恐ろしい国だ。ここまで老婆が身体を売ろうとしてくるのか。ハーヴィは老婆を追い払うために、振り返った。

「あのな、婆さん。俺はそこまで女に困ってなんか……」

そこにいたのは、娼婦ではなかった。フード付きの外套に身を包んだ、得体の知れぬ者だ。

よく見ると、その者の近くには小さなテーブルが置いてあった。テーブルの近くには、「占い一回二百アウル」と書かれているのが確認できる。

ああ、別の意味でヤバい奴だったか――

「婆さん。俺はそういう占いとか胡散臭いのは信じねえんだよ。それに、そんなことに金を使うなんて莫迦みたいだからな」

「金ならいらんぞ。お前を見ていたら、何となく占ってみたくなっただけだからの。どうじゃ、少しわしに付き合っはくれんか？」

（ま、いいか。後から請求されたら、役人に突き出してやりやいいワケだしな）

特に急いでいるわけでもないの、ハーヴィは老婆の勧誘に付き合うことにした。面倒だと思いつつも、小さなテーブルの前に置いてある粗末な椅子に腰かけ、老婆と向き合った。

「何を占うんだ？」

「なに、ちよつとしたお告げみたいなモノじゃ。ふえっふえっふえ

……」

胡散臭い笑い声を上げながら、老婆は懷からカードの束を取り出した。

縦に細長い札で、様々な絵柄が描かれているのが解る。裏側には、奇妙な紋章――十個の円を線で結んだ――が刻み込まれている。

老婆はカードをシャッフルすると、裏側のままハーヴィの前に突き出した。

「お前も切るのじゃ。ふえっふえっふえ……」

「……………」

恐らくは、不正をさせないためだろう。占いに不正も何も無いと思っただ、ハーヴィは無言のままカードをシャッフルし、老婆のもとに戻る。

老婆はカードを受け取ると、その中から一枚を選び、テーブルの上に伏せた。

「開くぞ」

老婆は震える手で一枚のカードを展開した。

「……《節制》の逆位置か。随分と難儀な結果じゃな。ふえっふえっふえ……」

カードを指差しながら、老婆が告げた。

そのカードには、翼の生えた人物が二つの杯を持っており、片方からもう片方へと水を注いでいる絵が描かれている。それが、上下逆になった形で置かれている。これが何を意味しているのか、ハーヴィにはまったく理解できなかった。

「ふえっふえっふえ。お前も明るく振舞っているようだが、心の奥底では悩んでいるようじゃ。そして、このカードが暗示する未来……そう遠くは無いが、嬉しくない報せもあるじゃろう」

バカバカしい。結局は、からかいたいただけなのではないだろうか。「ワケ解んねえけどよ。あんたが言うには、とりあえず俺にとって嫌なことが起こるってことなんだろう？」

「様々な解釈ができるからの。どう捉えるかはお前次第じゃ。ふえっふえっふえ……」

そうだ。だから、占いなんてものは信じられない。

「どうだろうと、俺は自分の好きなようにやるだけさ」

ハーヴィはそう言って立ち上がると、礼も云わずに老婆に背を向けた。

（つたく、時間の無駄だったぜ……）

第22話 古き聖獣の国（後書き）

展開が遅いのは仕様です。

なんかキャラのつながりが薄いかなって思ったんで、会話を多めに入れてみたんですが、やはり自分のスキルではそれを上手く表現することができませんでした。

タロットの知識は、ぶっちゃけありません。

幼馴染に出来る人がいるけど、態々こんな作品のために聞くのも悪いし、逆に複雑になって俺の脳味噌がオーバーヒートする可能性もあるのです。

大アルカナなんて、某人間賛歌で知ったようなものですし。

……念のため言っておきますが、当作品に出てくる《神の眷族》はスタンドとは何の関係もありません。

第23話 束の間の観光

ハーヴィ達は、湖畔の町ウラナミへと到着した。

港町のガサキとは異なり、豊かな田園風景が広がっている。しかし、都市としては大きなもので、ガサキ以上に多くの建造物が建ち並んでいるのが窺える。近くに大きな湖が存在するため多くの人が集まり、規模の大きな街が形成されたのだ。水源の近くに大都市が出来るのは、当然のことと言えよう。

ウラナミは清く広大な湖があることで、オウランだけではなく大陸でも有名な都市だ。以前は観光都市として栄えていたのだが、現在は治安の悪化もあって客が減少傾向にある。海外からの入国規制も影響しているであろう。それでも、オウラン第三の都市ともいえるこの街の活気は衰えていない。

故に、当然人通りも多い。このまま四人固まって行動しては、情報収集の効率が悪いということで、二手に分かれることにした。また、クロ力達は何やら気になることがあるとのことらしい。恐らくは、エルフィーナの搜索とは別の仕事を引き受けているのだろう。

慣れない土地のために迷子になってしまうことも考えられるため、予め集合場所を決めておいた。また、ガサキの冒険者ギルドで地図も手に入れているため、心配することはないだろう。気を付けるのは、スリやゴロツキだけだ。

大通りにはいくつもの露店が建ち並び、食品やアクセサリーを売っているのが窺える。

「いらつしゃい、その若いお二人さん。美味しいどら焼きでも買わないかい？」

威勢の良い男の声が、ハーヴィと澪紗にかけられた。

ハーヴィは声が響いた方向に視線を向けると、小麦色に焼かれたどら焼きが売られていた。どれも焼き立てのようで、甘い香りを孕んだ湯気が立ち上っている。

「へえ、美味そうじゃん。一個どれくらいなんだ？」

興味深そうに、ハーヴィは露店の店主にたずねた。

「ウチのは特別だからな！　一個二百アウル……といたいだが、若いお二人さんのためにまけてやろう。一個百五十アウルでどうだ！？」

大陸とほぼ変わらない値段だ。治安が悪いために経済状況も乱れていると思ったのだが、そういうわけではないらしい。小腹も空いていたので丁度いい、そう思ったハーヴィは懷から財布を出そうとしたが、それは傍らから伸びてきた細い腕によって止められた。

「ハーヴィ、言ったでしょう？　私達は観光に来たわけじゃないの」

澪紗はハーヴィを咎めようとしたのだが――

きゅうううう――

澪紗のお腹から、可愛らしい音が鳴り響いた。それを聞き逃さなかったハーヴィは、ニヤニヤと意地の悪そうな笑みを浮かべながら、彼女の頭の上に手を置いた。

「食いながらも情報収集はできるだろ。それに、二人きりになったんだし、素直になろうな。ってわけで、二個頼む」

「あいよ！」

店主は笑顔を浮かべながら、ハーヴィから硬貨を受け取り、焼き立てのどら焼き二個を渡した。

「ほらよ」

「ん……」

少し照れているのか、澪紗は俯きながらどら焼きを受け取った。

（私のことは……大丈夫なのに……）

澪紗は薄々気付いていた。ハーヴィが自分が普通ではない存在でありながらも普通に接し、気遣ってくれていること。しかし、なかなか素直になれずに隠しているということ――

――自分も、彼の前では素直になれていないということ。

（そつだよな。焦っても仕方ねえんだよ。こいつの最終的な目的のために）

そして、ハーヴィも焦る自分を抑えていた。船で海賊の襲撃に遭った時は、自分は寝ているだけで何もできなかったのが悔しくて仕方が無かった。そのため、すぐにでも依頼をこなして、動けなかった分を取り返さなければならぬ——そんな気持ちに苛まれていたのだらう。

しかし、焦ったところでどうにもならない。もし下手に突っ走ってまた大きな怪我を負おうものなら、それこそ本末転倒である。まずは行動せねばという考えは間違っていないものの、やはり度が過ぎれば、それは大きな失策を招くことが大いにあり得るのだ。

「さて……」

ハーヴィは再び建ち並ぶ露店に視線を移した。

薄紗に咎められることは承知だったが、異国の土地というものはハーヴィにとっては新鮮なもので、どうしても目移りしてしまうのだ。

「いらつしやい」

次に声をかけてきたのは、小柄な老婆だ。かなりの歳を重ねているのか背骨は曲がっており、顔には皺が目立つ。それでも醜さは無く、何処か優しそうな雰囲気を出している。店の仕事が無い日は、孫や子供と充実した日々を過ごしているのかもしれない。

店の規模は、周りの露店と比べるとだいぶ小さい。他の店は台の上に商品を並べているのだが、この老婆の店は地面に敷いたシートの上に商品を並べている。

主な商品はアクセサリーだ。様々な色の宝石が埋め込まれたペンダントや指輪が置かれている。

普通、この手のものは値段が張る。上流階級の者達が煌びやかな宝石で自らを着飾るように、装飾品は一種のステータスとしても働くため、それは仕方がないことだ。勿論、庶民的なものもあるのだが、衣服や下着などと比べると、少し割高な傾向がある。しかし、この店で売っているアクセサリーは信じられない程安い。他の露店で売っているような菓子や軽食よりも、少し割高な程度だ。

「どうだい、グレイシアのお嬢ちゃん」

老婆が声をかけたのは、漣紗のようだ。

ちようどどら焼きを食べ終わった漣紗は、老婆へと視線を向けるも、気まずそうに俯いた。

「いえ、私は……」

実は、漣紗もアクセサリーには興味があつた。しかし、遊びで来たワケではないということと、ハーヴィに対して苦勞をかけたくなという思いで、躊躇していたのだ。勿論、ハーヴィはそんな漣紗を見抜いていた。

「遠慮すんなよ。さつきも言つただろ。それに、俺も何か惹かれるものがあつたからな」

「もう……」

まだ迷っている漣紗を差し置いて、ハーヴィはアクセサリーのひとつを手につつた。赤い煌めきを放つ石が嵌めこまれたネックレスだ。特に派手な装飾が施されているわけではないが、何処か魅力的な趣があつた。

「ああ、それは『星の欠片』だよ」

老婆は微笑みながら、ハーヴィが手に取つたネックレスの石について答えた。

「『星の欠片』？ 聞いたことねえな」

「昔からお守りとして使われていた石さ。本当に星のものかは解らない……伝説でそう言われているだけかもしれないけれど、綺麗な石だろう？」

「ええ、とても神秘的だわ」

漣紗も無意識のうちに『星の欠片』の煌めきに惹きこまれていた。宝石としての価値は無いのだろう。値段を見ても五百アウルと、格安なのが解る。しかし、それでも大陸の宝石店が売っているようなものよりも神秘的に見えた。

「よし、これをくれ」

他のアクセサリーを見たが、特にめばしいものはないようだ。ハ

ーヴィは手に取ったネックレスの代金を、老婆へと手渡した。

「ちよつと、ハーヴィー！ 私は……」

「いいからいいから。遠慮すんな」

顔を真っ赤に染めて、澪紗はハーヴィーに抗議しようとしたが、既にハーヴィーはアクセサリーの購入を終えていた。二人が恋人同士に見えたのだろうか、露店の老婆は微笑ましそうな視線を向けている。「ありがとね。最近は観光客が少なくて、こういうのはあまり売れなくてねえ……」

「やっぱり、オウランの情勢が関係しているのか？」

「そうだねえ……。この国に黒衣の集団——確か、《タルタロス》って言ったっけね。十七年前に暗躍した邪教団が、再び動き始めたっていう噂が流れ始めてるんだよ……。噂で終わってほしいもんだけどねえ」

ハーヴィーと澪紗は、老婆の言葉に思わず目を見合わせた。

やはり、黒衣の集団というのは《タルタロス》で間違いないだろう。まだ決まったワケではないが、より情報が確実なものとなってきた。

「お二人は冒険者だろう？ あまり悪いことは言わないさ、なるべく街の外にはいかない方がよいよ……。特に、三聖獣様の聖地にはね。昔は良かったけど、信仰心の薄れた今じゃあ寂れ切ってるし、危険だからねえ……」

何処か物悲しそうな表情で、老婆は溜息をついた。今のオウラン連邦の情勢を憂えているのだろう。

「あら……ごめんよ。くだらない話をしたようだねえ」

「いや、別に気にしてねえよ。色々大変なんだな、この国も……」

「それより、その『星の欠片』はお嬢ちゃんにあげないのかい？」

「おっと、そうだった。俺が身につけても仕方ねえからな、こういうのは」

ハーヴィーは老婆に言われるまま、澪紗の首にネックレスをかけた。流石に此処で手を振り払うワケにはいかないため、彼女はしぶしぶ

と受け入れるしかなかった。

「いいじゃねえか。似合ってるぜ、漣紗」

ハーヴィはネックレスを身に付けた漣紗の姿を見て、ニヤリと笑みを浮かべた。淡い色のブラウスの上に、赤い煌めきを放つ石が美しく映えている。

「……………」

無言のままそつばを向く漣紗。

（あっちゃー。欲しそうにしてたから買ってやったけど、しくじったかなあ…………）

ちよつとやり過ぎたか、とハーヴィは気まずそうに頭をポリポリとかいた。

「えーと…………、あー、悪い。長いした。それじゃあな、世話になっただぜ」

ハーヴィは老婆にぎこちない挨拶をすると、漣紗の背中をそつと押して再び歩き始めた。漣紗は少し俯きながら、彼の後に続いた。（何故、あなたはそんなに優しくするの？ 出会った時も、私のことも何の警戒もせずに…………）

少し歩いた後に、小さな茶屋の前にあつたベンチに腰掛けた。此処が、クロ力達との待ち合わせに指定していた場所だ。

つい観光気分になってしまったが、役に立ちそうな情報を集めることができた。ハーヴィはどら焼きを片手に、懷から取り出したメモを取った羊皮紙に視線を移した。彼の傍らでは、漣紗が緑茶をゆつくりと啜っている。

「んで、さつき仕入れた情報だ。どうやら、『水獣神スイクン』が封じられているという洞窟に行った、メルクリア国籍の冒険者がいるらしい。そいつらは、女二人組。うち一人が亜人種のポケモンで、種族はロズレイドときたわけだ。エルフィーナさんとジャンヌさんで間違いないだろ。んで、肝心の場所はスイレイ大森林の奥にある

って聞いたが、そこに行くにはまず、ミカミノ山脈を越えねえといけないわけか……」

メルクリア王国の外に出たことが無いため、オウランの土地勘はあまり持っていない。地図は手に入れたものの、この依頼は相当難航しそうだ。ハーヴィは思っていた。

また、仕入れた情報の中には、『タルタロス』と思われる者達が、オウラン連邦内でも動き始めているというものもあった。テラ神殿で『地神グランド』の忠告を受けたが、彼らの動向にも気をつけなければならぬだろう。

ちらりと澪紗に視線を移すと、彼女の双眸と合ってしまった。ハーヴィは少し恥ずかしそうに、再び羊皮紙へと視線を戻したが――
「私のことは大丈夫だから」

普段通りの落ち着いた口調で、澪紗は言った。機嫌は直っているのだろうが、ハーヴィにとっては澪紗の口調が何処か冷たく感じた。澪紗はハーヴィから視線を背けると、ゆっくりと緑茶を啜り始めた。

「山脈の規模は大したこと無いみたいだな。二日もあれば超えられるだろ。問題は、胡散臭い連中だよな。『タルタロス』の奴ら、何を企んでんだ？」

「……邪神の復活」

「つ――！　って、クロカか。脅かさないでくれよ」

いきなり前方から聞こえてきた声に一瞬背筋が凍るような思いがしたが、つい最近知り合った仲である彼女の顔を見て、ハーヴィはほっと胸を撫で下ろした。

「凄いなあ、そんなに情報集めたんだ」

クロカのパートナーであるロコンの心は、横から身を乗り出してハーヴィの持っている羊皮紙を覗きこんだ。

「まあな。そっちは何か良い情報はあったのか？　なんか、邪神がどうのこうのって……」

「もしかして、『邪神ギラティナ』のこと？」

澪紗の言葉に、クロカは無言のまま頷く。

「なんか、話がでかくなってきたな……」

ハーヴィは邪神のことを聞いて、肩を竦めた。

神々のこととなれば、自分の知るところではないだろう。しかし、澪紗が《神の眷族》と呼ばれる存在であることを知ったため、自分には無関係だと割り切るわけにはいかない。何れは、真剣に向き合っ
ていかなければならない問題なのだ。

「詳しいことはまだ解らないんだ。でも、《タルタロス》の奴らが良からぬことを企んでいるのは事実だよ。だから……」

心は口元に手を当てて、考え込む。

「……わたし達には、もうひとつ任務がある」

「任務？」

ハーヴィは、クロカが《暗黒の瞳》であることを思い出した。人形のような美しい容姿を見てると忘れがちではあるが、彼女はれっきとしたメルクリアの軍人だ。

エルフィーナの搜索以外に、何の任務を受けてきたのだろうか——
今までの話から推測すると、《タルタロス》絡みの可能性が高い。それならば、自分達も放っておくわけにはいかないだろう。そうだとすれば、その件についてもさらに詳しく調べなければならない。

しかし——

「ハーヴィ、今の私達の仕事は何？」

澪紗は真剣な顔つきで、ハーヴィに問う。

「わ、解ってるけどよ……」

「私のことは大丈夫って言ってるでしょう」

「ああ……」

強がっているわけではないだろう。ただ、お互いにこのようなところで不器用なだけなのだ。

澪紗の言葉に圧されて、ハーヴィは曖昧な返事をして頷いた。

「私達は、《タルタロス》の動向を探って、変な動きを見せたら殲滅するんだ」

「他に情報はあるかしら？」

「オウランの首都オオトリの情勢に関する情報だけど、これはオウラン連邦の問題だから、私達が介入する余地はなさそう。《虹翼神ホウオウ》というのがどんな存在か気になるけどね」

ハーヴィは色々と思うことがあったが、会話に混ざれずにいた。

「手分けして、それぞれの仕事についての方が良さそうね」

「……わたしも、そう思っている」

「みんな強いから、戦力は大丈夫だと思うよ」

それぞれの仕事についての方が、効率は良いだろう。

少し不満もあったが、ハーヴィは周りの意見を受け入れることにした。

「解った。お前達が《タルタロス》の動向を探り、俺達がお嬢様の搜索ってワケだな」

言って、ハーヴィは立ち上がって、どら焼きと緑茶を一気に流し込んだ。

「さて、それじゃあ行くとするか」

第23話 束の間の観光（後書き）

ファンタジージャンルなのに、ファンタジーっぽさが出せないのは、俺の力量が無いからです。すみません。

第24話 焦りと迷いと探究心（前書き）

ようやく戦闘が書ける。

まあ、表現力皆無なんですけどね。

第24話 焦りと迷いと探究心

ミカミノ山脈中腹部、ミカミノ旧街道。

小規模な山岳地帯で、旅をする場合でも特に気を付けなければならぬような場所ではない。強いて言えば、段差が多くやや足場が悪いところだろうか。どちらにしろ、旅人にとっては単なる通り道にしか過ぎない、そんな場所だ。

尤も、その旧街道という名の通り、現在は通る者が少ない。多くの者は、山の麓を大きく迂回する新街道を通るためである。何故なら、麓の街道は多くの商人達が店を出しており、周囲の街とのアクセスもしやすいためだ。その分、この道を通れば目的地に着くには時間がかかるものの、やはり途中に休憩所などがあるため、また、道中で物の売買なども行えるためか、敢えて遠回りの新街道を通るのだ。

しかし、今のハーヴィ達にとって、そのような物は必要なかった。今の彼らの目的は、行方不明者の搜索であり、新街道にある娯楽を堪能している暇などない。だから、彼らは山を越える旧街道を選び、歩いていった。

そんな寂れた街道には、自分達以外にも通行人がいたようだ。それも、あまり関わりたくない——そして、友好的ではない相手が。「甘く見てんじゃねえよっ！」

肉食獣の咆哮を思わせるかのような喊声。そして、一閃。

生を奪う白銀の刃が、敵の身体を真っ直ぐと薙ぎ払う。急所を裂かれた敵は動かぬ肉塊と化し、地面に崩れ落ちて転がった。

ある程度の想定はしていたとはいえ、足止めを食らうのは、あまりいい気分ではない。軽い苛立ちを覚えながらも、斬りかかってきた敵の鳩尾に蹴りを入れる。蹴りを入れられた敵は弾き飛ばされ、岩壁に打ち付けられて動きを止めた。

まずは、二人。

仕留めたのを確認し、その場から大地を蹴って近くの高台へと飛び移る。次の瞬間、立っていた場所に鋭利な刃が降り注いだ。ナイフの類が投擲されたのだろう。

相手の注意を自分へと引き付けるために、動きを止めるわけにはいかない。グレイウススの柄を肩に乗せ、余裕の表情を見せて、ハーヴィは指で敵を挑発する。単純な思考なのか、あるいは場数をあまり踏んでいないのか――三人の黒衣の者達は、刃物を掲げてハーヴィへと向けて突進する。三人でかかれれば倒せると思っていたのだろう。だが――

「……！」

彼らは、自分達の背中が急激に冷え込んだような感覚に見舞われた。その凍り付くかのような寒さはやがて痛みへと変わり、背中から貫通して腹をぶち破った光線を見て、ようやく事態を把握する。しかし、把握した時にはもう遅く、急激な温度低下と激痛によるショックで、反撃の出る間も無く絶命した。

倒された者達の背後には、宙に法陣を描いた澪紗が立っていた。技の余波が残っているのか、彼女の周囲の空気は冷え込んでおり、地面には僅かながらも氷の破片が散乱している。

しかし、これで終わりではなかった。

「澪紗、上だ！」

ハーヴィは敵の気配を察知し、澪紗に向かって叫ぶ。だが、彼女は落ち着いており、その場から動こうともせず、ただ目を閉じてジツとしていた。

彼が叫ばずとも、澪紗は既に気配に気付いていた。ポケモンは人間よりも遙かに五感が優れているため、索敵能力に関しては問題ないだろう。彼女は気付かなかったわけでも、反応が遅れたわけでもない。ただ、攻撃の瞬間を待っているだけだ。

こちらの攻撃に気付いていないだろうと思い、空から急降下してくるポケモンが二体。

髪の毛のようにも思える後ろに長く伸ばされた鶏冠を持ったポケ

モン、ピジョット。そして、レイピアの切っ先のような鋭い嘴を持ったポケモン、オンドリル。どちらも、黒衣の者達と共に行動していたポケモンで、主が倒されたことにより怒りを感じているようで、主の仇を討つべく、二人に向けて高速で急降下してきた。

射程内に入ったのを確認すると、澪紗は二体の怪鳥に向けて、荒ぶる風を起こした。その風は氷や雪を帯びており、ピジョットとオンドリルは、全身が凍てつくような感覚に見舞われた。

翼を持つ者にとって、冷氣や雷撃などの天変地異の力は天敵となる。ましてや、飛行能力以外の特異な力を持たないこの二体にとっては、吹き荒ぶ雪風は相当な苦痛であろう。それでも怯まずに急降下を止めないあたり、ある程度の力はあるのだろうが、それでも生命力まではついてこれず、やがては羽根が凍りつき、地面に墜落してしまった。最早戦う力は残されておらず、ただ苦しそうにその場で呻いているだけだった。

「悪く思わないで」

澪紗は静かに呟くと、苦しんでいる二体の前で何やら詠唱を始めた。

そして――棺をあしらったかのようにも思える氷柱に、二体のポケモンを封じ込めた。

「終わったか」

ハーヴィはグラディウスについた血と脂を拭き取り、鞘に納め、高台から軽い身のこなしで飛び降り、澪紗のもとに駆け寄った。

「ったく、つまらないとこで時間食っちゃったな。思ったよりすぐ片付いたから、今日中にはスレイ大森林には着きそうだが」

「やっぱ、彼らも本気のようなね」

「こいつら……《タルタロス》の連中のことか」

ふと、《地神グラードン》の「《タルタロス》の動きには気をつける」という言葉を思い出す。彼らが良からぬことを企んでいるのは事実だろうが、それが何なのか解らない。また、彼としては《エリュシオン》なども胡散臭い存在であり、出来ることなら関わりた

くない相手だった。

《神の眷族》に干渉しようとしていると推測したが、どちらにしろハーヴィがやることは決まっていた。たとえ、どのような者が相手だろうと――

「何？ ジロジロ見て」

いつの間にか漣紗に視線が移っていたのだろうか――見られていたことを恥じているのか、彼女は少し不満そうに、ジト目でハーヴィを見つめ返す。

「ばっ、何でもねえよ」

ハーヴィは少し顔を赤らめて、漣紗から顔を背けた。

情けない――自分は何を恥じているのだろうか？

変なところで不器用であるところに苛立ちを覚える。

「とにかく、先に進むぞ。搜索は早めに済ませねえといけないからな」

何とか誤魔化し、ハーヴィは頭をぼりぼりと掻きながら足を進め始めた。

漣紗は肩を竦めて、彼の後をついて行く。

彼女も同じような思いだった。何処かで素直になれていないのか、ついハーヴィに対して不器用に振舞ってしまうことがある。

「私らしくないわね……」

「何か言ったか？」

「いいえ、何でもないわ」

何処か引つかかるような思いを抱きつつも、ハーヴィと漣紗の二人は、スレイ大森林へと向けて歩み始めた。

*

鬱蒼と茂る大森林――

天高く聳える木々は空を覆い尽くし、日の光が届かないためか、地面には深い緑色をした苔がびっしりと生えている。その苔に何度

も足を取られて転びそうになりながらも、少女はその森の奥へと進んでいった。

縦にロールした金髪は腰まで伸ばされており、やや釣り目気味の瞳は木々に生い茂る葉より澄んだ色をしている。顔立ちも整っており、貴族の令嬢のように見える。

女性としては、まあ平均的であろう身体の上には、淡いピンク色のタバードに、白いタイツ。その上から旅人が着込むようなマントを羽織っている。武器も装備しているようで、ヒルトに複雑な構造の装飾が施されており、細身の剣がベルトから吊るされている。

一見、遊歴中の女騎士のようにも思えるのだが――

「うう、むむむ……」

懷から地図を取り出し、くるくるとまわし、自分の首も左右に傾けながら、呻く。少し悩ましい声を出しながら呻いているため、もし近くに誰かが通ろうものなら、よからぬ勘違いを起こしそうではある。その様子は、とてもではないが騎士とも貴族とも思えないほど可愛らしい。

もう一人、やや小柄な少女が半ば呆れた表情で、縦ロールの金髪の娘を見ていた。

ツインテールの白銀の髪は幼さこそ感じさせるものの、鋭い赤と青のオッドアイから発せられる覇気は、まさに騎士のものである。

緑色のノースリーブのシャツに、黄緑色のプリーツスカート、そしてニーソックス。色っぽさを感じさせるが、淫らな雰囲気が無い。彼女もまた、護身用のためか、ベルトに細身の剣を帯びている。鞘の形状は金髪の娘のものとは異なるため、別の系統の得物であるのだろう。

縦ロールの金髪の少女とは異なり、彼女は外見の装飾や顔付きだけでなく、雰囲気そのものが凛としていた。頼りがいがある。そのような表現も相応しいかもしれない。

そして――、両手のガントレットを彩るのは、美しく咲き誇る赤と青の薔薇。それを見れば、彼女が亜人種のロズレイドであること

は、誰もが気付くであろう。

「うう、おかしいです……。ジャンヌ……これはもしかして……」
金髪の娘は何度も地図に描かれている道を見るが——そもそも今二人がいる場所は、とてもではないが道と言えるようなものではな
く——

つまり——、

「エルフィーナ様……」

ロズレイドの少女——ジャンヌは、がくりと頭を下げた深いため息をついた。

「ごめんなさい……」

そう、迷ったのである。

王都を出てから二週間以上が経過。無事オウラン連邦に到着し、そこからオウラン領内の秘境の探検を始めたのだが、道に迷ってしまったのだ。元々不案内な土地であるというのも理由のひとつなのだが、天性の方向音痴であるため、正しい道を進んできたつもりが、知らぬ間に獣道に踏み入れてしまったようだ。

王都での堅苦しい生活にうんざりし、憧れていたトレジャーハンターを目指して旅を始め、オウラン連邦に到着したところまでは順調であった。そして、宝の情報を得て、オウラン連邦の秘境であるスレイ大森林の地に足を踏み入れたのだが——足を踏み入れて一時間足らずで、迷ってしまったのだ。

一応サバイバルの術は身につけているため、水や食料には困ってはいないのだが、いつまでもこのようなジメジメとした森林を歩いているのは、精神的にきついものがある。また、治安の悪さもあり、いつならず者などの類に襲われるかも知れない。特に、大陸で暗躍しているという謎の集団も、オウラン連邦内でよく目撃されるようになったという噂もある。

「まさかとは思うが——」

十七年前の出来事ではあるが、つい最近起きたことであるような感覚——忘れることのできない悲劇に、ジャンヌは苛まれた。

宗教観の違いによる戦争は、この歴史上で、幾度となく繰り返されてきている。異なる神々を信ずることは勿論、神託や聖典の解釈の違いからも争いは起こる。初めは僅かな亀裂であったとしても、それは徐々に大きくなり、やがては世界を巻き込んでしまうのである。

《地神グラードン》や《海神カイオーガ》、《綺羅星ジラーチ》、《時渡りセレビィ》など、現在の聖典に記されている神々は、元々はそれぞれ別々の信仰があつたのだ。しかし、いつからかそれらの信仰は薄れ、《創世神アルセウス》という未知の存在を信仰する^{エリュシオン}宗教に取り込まれていったのである。

今では広い地域で信仰されているとはいえ、他の神々まで取りこむのはどうなのだろうか――

「《正義》――か。私には、少々荷が重すぎるかもしれない……」
「ジャンヌ？　もしかして、怒ってるのですか？」

エルフィーナは申し訳なさそうに、ジャンヌを見つめた。

「あ、いえ。少し考え事をしていただけです」

自覚していなかったが、表情が強張っていたのかもしれない。ジャンヌは少し慌てながらも、普段の調子を取り戻す。

「そう……ですか……。でも、本当に……」

迷ってしまったことを申し訳なく思っているのだろう。エルフィーナは少し俯いて目を伏せた。

トレジャーハンターを名乗るには、まだまだ経験が浅いし、知らないことも多い。それに、このように迷っているのは、堂々と名乗ることが出来るようになるには、程遠いだろう。

そして――、今更ではあるのだが、不安な思いに苛まれる。

今頃、自分達を探すために、騎士の一個大隊が動いていてもおかしくないはずだ。特に、自分の父親が率いている《^{ドラグーン・シルド}天龍の盾》は、間違いないメルクリア内で動いている。しかし、如何に騎士団といえど、国境を越えてくることは無い筈だ。特に、大陸も不安定になりつつあるため、下手に軍隊を動かせば、他国を刺激しかねない。

それに、同じ領地とはいえ、自治権が与えられている港町カムイラに大規模な軍隊を派遣すれば、それこそ反乱の火種になる可能性も拭えない。

だが、もし彼らならどうだろう？

暗殺や諜報などを主な活動としている、情報部隊《ドゥンケル・アウゲ暗黒の瞳》が動いているとしたら――

「エルフィーナ様、あれを」

「何ですか？」

ジャンヌが何かを見つけたようだ。エルフィーナも彼女の視線を追い、その先に目を移す。

その先には大きな泉があり、対岸の岩肌に大きな穴が開いているのを確認することが出来た。天然の洞窟だろう。湿気が多くあまじりの光が当たらないためだろうか、周囲には緑色の苔がびっしりと生えている。

対岸には、泉の上にある飛び石を足場にすれば、何とか渡れそうである。

「《水獣神スイクン》の洞窟は、あれのことでは？」

街で聞いた情報と多少の違いはあるものの、ほぼ一致していた。

迷い続けたものの、何とか目的地に到着することはできたようだ。《水獣神スイクン》は、この地方で祭られているという神の石柱だ。五国戦争時代――オウランが王政だった頃は人々の信仰心も厚く、多くの人々が訪れていたと言われているが、今では多くの者の信仰心が薄れ、このように放置されているのだという。

その後、多くの盗賊や冒険者が宝物を求めて訪れたというが、無事に帰った者はいないらしい。

「行ってみましょう、ジャンヌ。何かあるかもしれません」

「はい。ですが、辺境の地のため、何が起こるか解りません。いつでも剣を抜けるよう、ご用心を」

洞窟の中は、想像したよりも湿気は無く、特に不快感はなかった。何処からか風が吹きつけてくるため、内部の空気が淀むようなこともないのだろう。

何かの力が作用しているのか、洞窟内は青白い光に包まれており、灯りが無くとも進むのに難儀することはなかった。とはいえ、思った以上に内部は複雑な構造をしており、探索はかなり難航していた。洞窟内の地図は無かったが、羊皮紙にマッピングをしながら進んでいるため、迷うようなことは無い筈だ。また、一度通った道には魔力で作り出した葉を置いてきている。勿論、これを提案したのはジャンヌである。

「凄いです、ジャンヌ。来た道が解るなんて」

感動しているのか、エルフィーナは胸元で手をポンと合わせて、羊皮紙に地図を描きこんでいるジャンヌを賞賛した。ジャンヌは苦笑を浮かべて、溜め息が出そうになるのを誤魔化した。

無事に洞窟に入ることが出来たのはいいものの、やはり不安だった。然程複雑な構造をしているわけではないのだが、森で迷ったことや、敵との遭遇を考えると用心しなければならない。

暫く通路を進むと、何やら広間のような場所が見えてきた。

奥の方には祭壇のようなものが作られており、周囲には火が灯された燭台が置かれている。その中央には、大きな像が堂々と佇んでおり、離れた場所からでも確固たる存在感を示している。

大まかにみると、四足の獣に見える。しかし、頭部には水晶を象ったかのような六角形の角のようなものが生えており、馬の鬣たてがみのようなものもある。そして、身体に纏った天女の羽衣を思わせるかのようなもの——《水獣神スイクン》を象ったものだ。

オウラン地方の伝説によると、風の化身であり、如何なる濁水をも一瞬で浄化してしまうという、水を司る神として崇められているという。

「誰かいますね……」

物陰に隠れて、広間の奥の様子を窺う。

そこには、黒衣を纏った者が二人ほど、《水獣神スイクン》の前で何かを話しているようだ。何とか、会話の内容は聞き取れそうであつたため、彼女達は黒衣の者達の様子を窺うことにした。

「シアン・ウツラノ溪谷での神殿の建設は如何ですか？」

黒衣の一人が、丁寧な口調でもう一人の者に尋ねる。声質は若い男性のもので、そよ風のように優しくだ。

「ああ、やはり場所が場所なだけあって、難航している。人間、ポケモン共に、既にガスで二十人は犠牲になっているみたいだ」

もう一人は、女性だった。しかし、男と比べると口調が何処か男性的で、声質もやや硬めといったところか。

「異界の神ギリティナの復活を望むダークライ様のためとはいえ、多くの者が犠牲になっているとは、悲しいものです。同志が斃れて行く間に、私は何もできないとは……」

男は悲しそうな、そして、消え入りそうな声で呟いた。

「仕方あるまい。これも、朽ち行くこの世界を救うためだ」

女は淡々と、しかし男を慰めながら言う。

「私達は、ただ聖典と異なる神を信ずるという理由だけで、《エリユシオン》の方々に糾弾されました。十七年前に蜂起しましたが、彼らの卑劣な手段の前に敗北し、壊滅寸前まで追い込まれています。今でこそ信仰自体は許されているものの、表立った行動はできず、世間からは蔑まされる日々……」

「そこで、我々の一部がお前達に味方しているわけさ。あまり悲観的になるな」

女は男の肩を叩き、励ました。

「しかし、何故貴女は？ 《神の眷族》は——」

「ふふん、眷族って言っても色々いるのさ。秩序を望む奴もいれば、混沌を望む奴もいる。私はただ、お前達——お前を気に入ってついていくことに決めたただけだからな」

「そうですか……」

何を言っているのだろうか——彼女の言葉に、男は言葉を詰まら

せてしまった。

「まあ、深く考えることはないさ。それより、盗み聞きとは感心しないな！」

女の手から放たれたのは、何やらどす黒い紫色の歪みを帯びた、刃のようなものだった。その歪みの刃は柱を一瞬で崩し、物陰に隠れていた二人はその場から離れざるを得なかった。

「あわわ、見つかったちゃいました……どうしましょう？」

「こうなったら、やるしかありません！」

気配を気取られたエルフィーナとジャンヌは覚悟を決め、武器に手をかけて黒衣の者たちの前に飛び出た。

第24話 焦りと迷いと探究心（後書き）

おい、バトルしろよと言われそうな内容ですみません。ボールとかそういうものがない世界なうえ、さらに擬人化要素もあいまってリアルファイトに発展しております。

なんか魔術的な描写（といっても、自分の表現力ではたいしたものじゃありませんが）があるのですが、特殊技〃魔法みたいなイメージがあります。無駄にカッコつけてますが、ただの冷凍ビームです。すいません。

第25話 暗躍する者達

荒々しい岩肌が凹凸を創りだした山岳地帯。そこには生というものがなく、本来ならば山々を彩る筈の木々や花々は無く、苔も一切生えていない。また、山々で活動する動物達の姿も見られない。ただ彼女達を除き、生ある者の姿が見受けられない。

岩の合間から噴き出す白い蒸気。辺りには、卵が腐敗したかのような異臭が立ち込めており、それがこの場所での生命活動を許していない。

地獄——そのような言葉が、此处には相応しいかもしれない。事実、オウラン地方の古い伝説では、此处を地獄に見立てた作り話がいくつも存在している。作り話とは言え、このような毒気に満ちた場所で暮らすのは、不可能なことであろう。

オウラン地方南部——シアン・ウツラノ溪谷。緑豊かなスイレイ大森林と対をなす、不毛の地である。かつては緑豊かだったと言われているが、内乱が激しかった時代に、今は亡き小国が此处で対峙し、多くの戦死者が出たのだという。その戦死者の怨念が溜まり渦巻いた結果、不毛の土地となってしまった伝説があるが、真実は定かではない。

その不毛な場所に、クロカと心は足を踏み入れていた。この場所では、《タルタロス》の神殿が建てられているという情報を手に入れたためである。

邪神大戦後、《タルタロス》は勢力を弱めたため、特にどの国も相手にされていなかった。しかし、彼らが良からぬ活動をしているとなれば、話は別である。その監視を兼ねて、二人は国境を越えてオウランの地までやってきたのだ。国内であるならばともかく、国境を超えとなれば、彼女のような《暗黒の瞳》の方が、正規の騎士達よりも動きやすいためだ。

立ち昇る臭気に口元を覆いながらも、二人は狭い山道を歩き始め

る。

「うう、此処つてあまり長居したくないね……」

ぼやいたところで何の解決もしないのだが——やはり、このような場所においては気分が優れなくなるのも当然だろう。硫黄の臭氣に顔を歪めながら、心はぼそりと愚痴をこぼした。

一方、クロ力は然程苦しんでいるような表情は見せていない。一応、この臭氣を不快に思っているものの、弱々しさはほとんど感じられない。あまり他人に弱みを見せまいとしているのだろうか——

「……大丈夫？」

クロ力は歩みを止めて、後をつける心に声をかけた。心は笑顔を見せて、無言のまま頷く。

過去に何度も危険な場所を共に訪れたことがあるため、特に問題は無いようだ。実際、この地より危険な場所で、暗殺の任務に就いていたことが何度かあった。そのため、精神的な面では、然したる心配は微塵もなかった。

問題は、体調だ。まだガスの濃度も薄いため、身体に害はないだろう。しかし、奥へ進めば進むほど濃度は濃くなるだろうし、そうすれば身体に影響が出始めるだろう。ガスが高濃度になれば、体調を崩してしまう。長時間滞在すれば、それこそ命に関わってくるに違いない。

そのためには、濃度の薄い——それでも長時間の滞在は危険だが、まずは野営する場所を見つけた方がよい。

「あ、あれは……」

心が指差した先——谷を隔てて少し離れた台地に、小さな作りかけの建造物が建てられていた。この場所からでも確認できるが、その場で人が動いているのが解る。中には倒れている者もいることから、相当過酷な労働であることが解るのだが——

その場所も、ガスの濃度が低いのだろう。こちらより標高は低いが、ガスの噴出地点からは遠く離れている。

「……間違いない」

情報はすべて正しかった。建物の壁に大きく刻まれた刻印は《タルタロス》のものである。

わざわざ、このような危険な場所に神殿を建てているのは、人目のつかぬ場所であり、拠点のひとつとして利用できるためだろう。それに、何かを謀る場合、このように人が訪れぬような場所を選ばない手は無い。

「此処ならガスも薄いし、野営できそうだね」

ガスの噴出地点から離れており、高い場所にあるためだろうか――多少の臭気はあるものの、有毒なガスの濃度は薄いようだ。長期の滞在は危険であるが、暫く相手の動向を探るには適しているだろう。

二人は荷物を下ろすと、野営の準備を始めた。

*

迂闊だった――

自分の浅はかさがだったのかもしれない――そう思いながら、エルフィーナはレイピアを強く握り、相手の攻撃を受け流しながら、攻めの機会を窺う。

相手も、自分と同じくレイピアを使っている。武器の構え方から、流派は異なるものであるが、洗練された動きであることは、長年訓練を受けてきた彼女は、すぐに解った。

ただ、なかなかこちらの攻撃が相手に通らない。

というのも、相手は左手にマンガOSHUという、受け流し用の短剣を持っており、それを使って巧みに攻撃を防いでくるのだ。このように二刀を使う流派は珍しくないものの、両手の連携を上手く活かした攻防一体の構えを打ち破るのは難しい。

エルフィーナが使用しているレイピアのヒルトは複雑な構造をしているため、そこに相手の切っ先を絡め取ることが出来れば、そのまま相手の剣を折ることが出来るのだが、その分相手の攻撃もシャ

ーブなためか、なかなか機会を掴めない。

「私達のことを口外されては困ります。不本意ですが、致し方ありません」

戦うべく黒衣を脱ぎ捨てた男は、声から想像できるような優男のような出で立ちだった。

繊細な細工を思わせるかのようなサラサラとした黒髪を背中まで伸ばしており、顔立ちも中性的だ。優しい双眸は、アメジストを思わせるかのような、澄んだ紫色だ。そのあまりにも美しい美貌から、もし街中で彼が歩いていようものなら、多くの女達の注目の的になるに違いない。

しかし、美しい風貌と静かで丁寧な口調の中には、燃え盛る闘志のようなものがあつた。覚悟を決めたかのような瞳——迷いは一切ないだろう。

「何故それ程の力を持ちながら、『タルタロス』という邪教に手を染めるのですか!？」

相手の攻撃の軌道を読みながら、エルフィーナが叫ぶ。

男のレイピアを護拳で防ぐと、エルフィーナは相手の防具の合間を狙って強く踏み込む。しかし、男はすぐに防御に転じ、マンガーシユで彼女の攻撃を弾いた。

「あなたには解らないでしょう。悲しいことですが……」

実力はほぼ互角といったところか——しかし、幾度となく人を殺めてきた剣であることは、エルフィーナには解っていた。狙いの一つ一つが身体の急所を捉えており、確実に死を運ぶべく鋭い刺突が次々と放たれてくる。

彼女の喉元を目掛けて、突きが放たれる。頭をひねり、何とか避けようとするが、僅かにタイミングが遅れた。白い首筋にレイピアの刃が掠り、細く赤い線を描く。

たいした痛みは無く、戦闘に支障が出るほどの傷ではなかった。訓練で傷を負うことなど、日常茶飯事であつたからだ。しかし、エルフィーナはすぐにバックステップを繰り返し、男と間合いを取っ

た。

「お見事……です」

傷口から僅かに流れる血を拭き取り、エルフィーナはレイピアを構え直す。

「いえ、あなたもなかなかの腕前をお持ちだと思います。何処かの貴族の令嬢とお見受けしますが、随分と訓練をされているようですね」

男もレイピアとマンガーシユの構えを崩さず、距離を保ったままエルフィーナを見据える。

「ですが、私は此処で退くわけにはいきません。——参ります」

静かに、しかし高らかに男はそう告げると――

男は地面を蹴り、エルフィーナへと向けて走り出した。

一方、ジャンヌも相手とほぼ互角の戦いを繰り広げていた。

「くうっ……。何故、眷族のお前が《タルタロス》などに――！」
次々と放たれてくる黒い歪を帯びた刃を避け、間合いを詰めて行く。

外套を脱いで露わになったのは、褐色肌の女だった。黒のタンクトップに、タイトなジーンズ。意図的に臍を見せるためなのか、腰の辺りが露出している。出るところは出ており、引き締まっているところは引き締まっている――非常に艶かしい身体をした女性だ。癖のあるセミロングの髪に、トパーズを思わせるかのような色をした鋭い瞳。美しいというより、格好いいという言葉が、彼女には相応しいだろう。

亜人種のポケモンである。種族はヘルガーだ。その証拠に、頭からは大きく反りかえった角が、腰からは先端が尖った悪魔のような尻尾が生えている。

「ふふっ……。私はただ、相棒のことを気に入っ、共に行動をしているだけだ。お前もそうなんだろう、ジャンヌ」

「戯れ言を！ マリーシア、貴様は何を見てきたというのだ？ 邪神大戦の時の《タルタロス》の暴虐を見ていなかったわけではある

まい！」

ジャンヌは揺らめく炎のように波打った刃が特徴的な剣——フランクを掲げ、ヘルガーの女、マリーシアへと斬りかかった。対するマリーシアは、ジャンビーヤという大きく湾曲した刃を持つ短刀を両手に構えて、ジャンヌの攻撃を防御していく。

接近戦は厳しい——そう判断したジャンヌは一度間合いを取り、自分の周囲に光球を発生させた。そして、前方にフランクを振るうと、光球は弾丸のように放たれ、マリーシアは術を交えつつも、光球を回避していく。回避されて地面や壁に当たった光球は四散した。

マリスも負けじと短刀を振るって炎を発生させた。地面に沿って突き進む火炎。ジャンヌは左右にステップし、地を走る火柱を回避する。

（くっ……、術での戦いとなると、流石に分が悪いか——）

木々の力を操るロズレイドであるジャンヌにとって、炎の使い手はあまり敵にいたくない相手だった。生命エネルギーなどを孕む植物の力は強力なものの、その分デリケートで、急激な温度変化に対しては脆い。特に、木々を焼き尽くして灰にしてしまう炎は、天敵と言ってもいい。

しかし、白兵戦に持ち込むべく接近するにしても、近距離で炎を撃たれてしまうと回避は出来ないだろう。相手の様子を窺いながら、ジャンヌは戦術を練り始めた。

「ふふん、面白いな。相手との属性の相性が悪くても、立ち向かってくるか」

マリーシアは余裕の笑みを見せながら、次々と火焰を放ってくる。回避するのは容易いが、少し離れた場所で戦っているエルフィーナのことも気掛かりであるため、いつまでも戦いを長引かせるわけにはいかないだろう。

これならいけるか——？

ジャンヌは相手の術の合間を突いて、法陣を描くと自分の周囲に

妖しい輝きを帯びた葉を漂わせた。先程は目印代わりに置いてきたが、本来はこのように攻撃に使うものだ。尤も、威力は低いものの、牽制するには充分な術である。

輝く葉はジャンヌの周囲を不規則な軌道で旋回し始める。それを見たマリーシアは一度攻撃を止めて、相手の葉の動きを追い始めた。「この術は、お前でも打ち破れまい」

「ふふん、敢えて火に対し木々の力を借りるか……。面白いな、受けてやろう！」

不規則な軌道を描いて飛来する葉を焼き尽くすべく、マリーシアは火焰を放つ。しかし、葉は火焰に掠りもせず、空しく天井や壁に辺り消滅。何度も撃ち落とすべく術を唱えたが、結果は同じだった。やがて葉はマリーシアの元に届き、不可解な動きをしながら、彼女の身体に打ち付けた。防御しようとしたが、特殊な力が宿っているためか、防ぐことが出来なかったのだ。

「むうつ、子供だましの技を。あまり私を舐めるなよッ——！」

自分の周囲に火柱を発生させることにより、何とか身に付きまとう輝く葉を焼き尽くす。あまりダメージを与えられていないのか、マリーシアは特に疲弊した様子は無い。ただ、身体のところどころが裂けて、そこに浅い傷が出来ている程度だった。

優れた命中性を誇る技だが、威力が低いのが難点だろう。しかし、相性が悪いことも、ダメージをあまり与えられないことも、すべてジャンヌの想定内の範囲内だった。何故ならば、彼女には別の目的があったからである。

「ふん、どうやら大した技じゃないみたいだな。多少受けてしまったが、それ程強いというわけでもない。お前の力はこの程度か？」マリーシアは余裕の表情を見せ、頬から滴る血を舐めると、ジャンビーヤを構えた。

「気付いていないようだな、マリーシア」

「何だと？ 減らず口を……。くっ、これは!？」

技を出そうとした瞬間、マリーシアの身体がぐくと崩れそうに

なった。倒れまいと何とか足に力を入れて留まったものの、彼女は片膝をついてしまった。

全身にびりびりと走る電撃のような感覚。身体を動かそうとしても、思うように動かない。

「お前……まさか……」

「そうだ。騎士としてあまり使いたい技ではないが……、エルフィーナ様のためにも此処で倒れるわけにはいかぬからな。先程の技に、神経系の毒を仕込ませてもらった」

「ふふっ……、なるほどな。面白い……」

植物の持つている毒素には、様々な効果を持つものがある。その中で、相手の神経に作用するものを、ジャンヌは先程の技の中に仕込ませたのだ。

麻痺しながらも、マリーシアはジャンヌに対して不敵な笑みを浮かべた。苦痛ではあるが、彼女はこの戦いを楽しんでいるのだ。しかし、マリーシアの表情が一変し、忌々しげな表情を見せた。彼女の視線は、通路の奥へと向けられている。

「ちいつ、誰か来たか。戦いに水を差されるのはいい気分じゃないが、仕方ない。スレイン！」

マリーシアは苦痛に耐えながら、エルフィーナとレイピアを交えている男に向けて叫ぶ。男——スレインはマリーシアの言葉を聞き取ると、すぐに身を引いて、エルフィーナとの間合いを大きく取った。

「おいおい……。早速見つけてみたら、取り込み中かよ？」

「途中に魔力を帯びた葉っぱが落ちていたから、もしかと思ったけど……」

通路から現れた二人に、広間で刃を交えていた四人の視線が一気に集中する。

癖のある黒髪を肩まで伸ばした青年と、真っ直ぐ切り揃えた青い髪に兎のような長い耳を持った——亜人種のグレイシアの少女だ。

「あ、あなた達は……！？ ハーヴィさん、澪紗さん！」

エルフィーナが驚いたような表情を見せる。

少し前——といっても、ほぼひと月ほど前のことだが、自分達が依頼したよろず屋の姿がそこにあったのだ。まさか、このような国境を越えた地で再会するとは思ってもいなかったのだ。

「さてさて、お転婆なお嬢様をお迎えに来たわけだが——こりゃどうしたもんかね」

そう言いながらも、ハーヴィは鞘からグラディウスを抜刀して構えた。澪紗も彼の後ろで氷の刃を作り出し、周囲に浮遊させる。

「まさか、加勢されるとは。厳しいかもしれませんが、やるしかないです」

スレインは唇を強く噛み、レイピアを握り直した。しかし——

「いや、此処は一度退くべきだ。今の私では、眷族を二人も相手にするのはきつい」

「引き際ですか……。もう少しであれを試せそうなのですが」

「此処に拘らなくても良いだろう。この地にはまだ、二柱の神が祀られているからな。何よりも、我々は此処で散るわけにはいかないそうだろう、スレイン」

そう言つと、マリーシアはふら付きながらも立ち上がった。

「待て、逃がすか！」

マリーシアを逃がすまいと、ジャンヌはフランベルクを構えて、大地を蹴った。

「悪いが、この勝負は預けるぞッ！」

「くう、これは……！」

マリーシアが何かを地面に投げると、広間に白い煙が立ち込めた。白い煙は辺りを覆い尽くし、その場に居たものの視界を完全に覆い尽くした。ハーヴィ達は相手の攻撃に備えて、武器で身を守るような体勢を取った。

しかし、先程言っていたように、相手には既に戦う気は無かったようだ。スレインとマリーシアの姿は、そこから忽然と消えていた。「何か知らねえけど、片付いたってことでいいみたいだな。……さ

「と、お嬢さん達」

グラディウスを鞘に納めて、ハーヴィはエルフィーナとジャンヌに視線を向けた。

「親御さん——マルスⅡヴェルセリエス様から依頼を受けていてね。搜索願ってヤツだ」

懷から出した依頼書の写しを、二人に突きつけた。

第25話 暗躍する者達（後書き）

何か妙な武器が出てますが、どれも実在したものです。レイピアやマンガローシュはRPGなどをプレイされている方ならご存知だと思いますが、フランベルクやジャンビーヤってかなりマニアックだからなあ。

第26話 聖獣達の願い

遠距離からの狙撃——それが、開戦の狼煙だった。

神殿の周囲にも、何ヶ所か高台があったためか、そこから攻撃を仕掛けるのは容易かった。

クロ力はまず、神殿の建設の指揮を取っているであろう人物を、狙撃用の銃で狙い撃ち、全体の士気を低下させることを狙った。その思惑は想像以上の成果を上げ、《タルタロス》の信者達の指揮系統は完全に混乱していた。

その混乱が生じたところに乗り込み、クロ力と心は次々と敵をなぎ倒している。

赤く咲き乱れる血飛沫。クロ力は、短刀を逆手に持ち斬りかかってきた敵を、手に持った刀でバツサリと斬り伏せる。そのまま、斬ったものを踏み台代わりにし、隙を突いてきた敵を刀の柄で殴り、怯んだところを狙って首を刈り取った。

立ち上がる火柱。身を焼き焦がす炎に悶えながら、数人の信者が断末魔の叫びを上げる。心は相手との距離を保ちながら、次々と仇なす者を焼き払っている。接近された相手に対しては、刃に火焰を点した刀で、応戦していく。

「なんか、変な感じがする……」

心は、溪谷に足を踏み入れた時から妙な感覚に見舞われていた。大地から吹き上げる毒ガスの影響で気分が悪くなっているわけではなく、何か強大な力を持つ者の気配を感じていたのだ。

同時に、この場所に纏わる伝説を思い出す。集めた情報の中にもあったが、このシアン・ウツラノ溪谷は、とある神によって支配されていたところだという。しかし、連邦内の内乱で荒れ果てて、この地にあった神を祀った祠も崩れてしまったらしい。

その神の名は――

「まさかとは思うけど……きゃっ！」

刹那――

激しい地鳴りと共に、視界が揺れ始めた。断崖からは小石が転がり始め、地面には亀裂が入る。

かなり大きな揺れだ。建設中の神殿はギシギシと軋み、上部を支えていた木材が落下しだす。

「……地震？……いや、違う」

クロ力は残り少なくなった敵への追撃を一度止め、血のついた刀身を拭き取って鞘に納めた。

このまま此処にいては危ない――彼女も、大地が揺らぎ始めてから、尋常ならざる気配を感じ取っていた。

大地に生じた亀裂は徐々に大きくなり、その亀裂に飲みこまれていく者もいる。この場合は危険だと察知したクロ力と心は、一時撤退することに決める。

「なんかヤバイよ、これ……！」

揺れは一層激しくなり、岩壁から崩れ落ちてくる石には大粒のものが混じり始める。また、地表から噴き出すガスも一層激しくなった。降り注いできた石を避けて、あるいは刀で弾き、とにかく二人は走った。

突然、足元が陥没し始める。しかし、二人の反応に遅れは無かった。すぐにその場から跳躍し、高台へと飛び移り、距離を取った。すると、その陥没し始めた場所は大地の揺れと共に、大きく下へと崩れた。彼女達を追いかけていた信者達は、そのまま地の底へと共に落下していった。

なくなった足場を見下ろすと、底に赤く滾る溶岩が顔を覗かせていた。立ち昇る臭気と熱気に、思わず彼女達は顔を覆った。

「……間一髪」

「あわわわ……」

ようやく、揺れが収まった。

流石にこのような事態までは予測できなかったのか、クロ力と心はその場にぺたんと腰をおろしてしまふ。

「やっぱり、曰くつきの場所だったね。」

「……伝説には聞いていたけど」

大きく開いた亀裂の向こう側――

「本当にいるなんて」

白い煙に包まれていた獣が、姿を現した。獅子を思わせるかのような風貌の獣だ。

全身を覆う茶色の体毛に、背中から生えた灰色の鬣。足首には金属の輪のような装飾があり、額には黄色の髪飾りのようなものが生えている。口元には、神々しさと威厳を表すかのような、淡い灰色の口髭をたくわえている。

《炎獣神エンティ》――オウラン連邦の伝説に伝わる、神の一柱である。

火山を司る神で、噴火と共に姿を現すと云われている。また、彼の大地を揺るがすかのような咆哮は、世界の何処かで火山の噴火をおこす力があるとも云われている。

「あー、もう。最近騒がしすぎだったんだ、もう。まったく、ホント何なんだよ、もう」

不機嫌そうな、低めの声。話し方も何処か不満を感じているようなものがある。

肉食獣を思わせるかのような鋭い眼光は、真っ直ぐとクロ力と心に向けられている。彼女達は状況を察知するとすぐに立ち上がり、武器の切っ先を獅子――エンティへと向けた。想定外の事態にもすぐには持ち直せるあたり、彼女たちが如何に場数を踏んできたかが窺える。

「だああああ、待て待て待て待て！ 刀しまえよ、刀！ まったく、危ねえな、もう！」

初めは、それが《炎獣神エンティ》の言葉だとは思わなかった。しかし、明らかにその声は、彼から発せられているものだ。それを証拠に、口元がもこもこと動いている。威厳がある風貌なもの、何処か若者らしい崩れた口調は、あまりにも不釣り合いである。

どうやら敵意は無いようだ——そう判断した二人は、それぞれの持っている刀を鞘へと納めた。

「あー、やっと物騒なモンしまったか。っておい、何だよその変なモノを見るかのような目は？　もう、ほんとに何なんだよもう……。あー、もう」

そう言つて、ぶつぶつと愚痴をこぼし始める。あまりに意外な神の態度に、クロ力と心は思わずキョトンとしてしまった。

「見りゃ解ると思うが、オレはエンテイ。人間どもが勝手に伝説をでっち上げて、この地方じゃエライ神様つてことになってるが、そんな大それたもんじゃねえさ。神格も神々の中じゃあ下の方だからな。ま、確かに一応は「あっちの世界」の住人だけだな……。あ、ちよつと待つてろ」

刹那——《炎獣神エンテイ》の身体が、強い光に包まれた。光は徐々に人の形へと変化していき、やがて姿を現す。そこに現れたのは、猛々しい雰囲気青年だった。

逆立てた髪に、胸元あたりまで伸ばされているもみあげ。切れ長の鋭い鳶色の双眸。筋骨隆々とした、板金のような身体の上に直接毛皮のコートのようなものを羽織り、膝丈の下衣を履いている。得物なのだろうか、トライデントという先端が三つに分かれた槍が握られており、その姿は狩りに出かける前の獵師のようにも見える。しかし、エンテイの特徴のひとつであった立派な髭は生えておらず、猛々しさはあるものの炎の帝王のような威厳はまったく残っていなかった。

何というか、話し方が無気力なため、それが威厳を殺いでしまっているのかもしれない。

「この姿のが楽だからな。それに、お前達もこっちのが話しやすいだろ」

「あ、あのさ……。私達おいてけぼりなんだけど……」

心が苦笑を浮かべて、エンテイに言った。いきなり、伝説上の存在が目の前に現れて、勝手に話を進められているのだから、無理も

ない。

「あー、悪い。説明すんのめんどいなもう……でも、しないとダメだよなもう」

耳の穴をかつぽじりながら、エンティは話を始めた。

「オレ達みたいな神つてのは、この地上とは違う——まあ、何ていったら解らねえが、あの世っていうか、こっちは普通にいけるような場所じゃねえとこに住んでるんだ」

人間やポケモン達——つまり地上に生息する者たちがいるのがこの世界。しかし、それとは別に、神々が暮らす世界があるのだという。

「……神界？……聖典に記されているけど」

何かを思い出したのか、クロカが呟いた。

過去の任務で、《エリユシオン》の総本山での情報収集があったのだが、神々が住む世界の文献があったことは、記憶に新しい。

「あー、その神界だが、普通はこっちと行き来出来ないんだ。普通はな」

彼曰く、現世と神界は、異なる空間に位置しているらしい。つまり、大陸の秘境や遙か空の彼方あるいは地下深くにあるというわけではないために、現世で暮らす者が神界に足を踏み入れるということとは、まず不可能なのだ。しかし、今は現世と神界の間に歪みが生じているらしく、現世から神界に何者かが干渉しているのだという。それは恐らく、《タルタロス》の者たちだろう。

「あー、それでだ。自分で言うのもバカみたいだが、オレ達の力が強大つてのは解るよな」

エンティの言葉に、クロカと心は頷いた。

大地を揺るがし、周囲の熱気を操るだけの力を見せつけられたのだ。また、地中から僅かではあるが、溶岩も呼びだしている。此処で肯定をしないわけにはいかないだろう。

「《タルタロス》の奴らを追っ払ってもらっておきながら、さらに頼みごとをするってのは図々しいかもしれないが……率直に言わせ

てもらう。お前らはこちらに関わる者じゃないが、それに準ずる力を持っているみたいだからな」

一瞬エンテイの表情が曇り、真剣な表情を見せる。今までの、何処が無気力な青年のようなイメージは無くなっており、威厳こそないが鋭い顔付きになっている。

「オレの姉貴……いや、《雷獣神ライコウ》を救ってくれ」

*

「で、お前は誰なんだ？ 俺達はお話し中でね、出来れば邪魔をしないでほしいんだが」

話の途中で何者かの気配を感じ取って、祭壇の方を見ると、そこには一人の少女が立っていた。

ふわりとした紫色の髪は、恐らく身長より長いだろう。床に後ろ髪を引いている。額には、水晶を象ったサークレットがはめられており、何処か神秘的な雰囲気を出しているのだが――

身長は一二〇センチメートル弱――少女というよりは、幼女である。素肌の上にさらしと淡い青色の袴を直接身につけているため、思わず赤面してしまうような格好なのだが――お世辞にも色気のない体型のためか、色気はほとんどない。鼻の下を伸ばすような者はごく一部だろう。

つまり、十歳にも満たない幼女が、無理やり色気を出そうとしている感じが見え見えなのだ。微笑ましいのを通り越し、ある意味滑稽である。

「もう、見れば解るでしょ！ あたしは《水獣神スイクン》よ！ オマエたちが話しやすいように、ちゃんと人間の姿になってあげてるのに失礼しちゃう！」

両腰に手を当てて、きゃんきゃんと可愛らしい声で怒りだす長髪の幼女。その姿は、健気に敵に吠える子犬のようだ。その場にいた四人は、思わず言葉を失ってしまった。

《水獣神スイクン》——北風と水を司る神と云われており、如何に淀んだ水も瞬時で浄化してしまう力を秘めているらしい。しかし、そんな神様がこのような幼女だと、拍子抜けしてしまうのも仕方ない。

「ふふーん、みんなあたしの凄さを聞いて、言葉も出ないんでしょ！」

幼女は得意そうに、まな板のような胸を前に突き出した。

四人はやはり無言。ただ、ジツと——《水獣神スイクン》と名乗る幼女を、少し呆れたような表情で見つめている。

「おい、そのオマエ！ オマエよ、オマエ！ その冴えない野郎よ！ 何ジロジロ見てんのよ、このロリコン！ いい気になってんじゃないわよ！」

ビシツとハーヴィに指差すスイクン。仕草のひとつひとつには威厳の欠片も無く、可愛らしい。

しかし、可愛さを見事に打ち消してしまっているのが、小さな口から銃弾のように発せられる悪口だ。特に、ハーヴィに向けられているものが多く、彼の眉間がびくびくと動いている。

「……なあ、澪紗。この調子こいてるクソガキ、殴り飛ばしていいか？」

ハーヴィの頭の中で、何かがぷつりと切れたのか——彼は、コキコキと手の骨を鳴らし始めた。

流石の彼も、こつも年下にしか見えない、それも十歳に見えないような子供に暴言を吐かれては、我慢するのも厳しかった。無理矢理笑顔を作っているが、眼が笑っていない。本気でスイクンに殴りかかるうとしているような眼だ。

「大人気ないからやめなさい。……まあ、この子、かなり強い力を持つてるから、やろうとしても無駄だと思うわ。返り討ちに遭うのがオチよ」

生意気な小娘を相手にも、澪紗はクールだった。本気で殴りかかろうとしているハーヴィを手で制止し、淡々と圧倒的な力の違いを

彼に教える。それを聞いたハーヴィは、軽く舌打ちをして拳を下ろした。

「そうだもん！ あたし強いから、そのロリコンなんて一撃で倒しちゃうんだから！ あたしの前に跪け、ロリコン！」

調子に乗り始めたのか、スイクンはハーヴィに向けて「あつかんべー」だの「バーカバーカ」だの「ロリコン野郎」だの、暴言を次々と浴びせ始めた。

しかし、対するハーヴィも黙っていない。

「ほー、そうかいそうかい。凄いでちゅね、《水獣神スイクン》ちゃま。もし君がナイスバディなお姉さんだったら、奴隷になつてあげても良かったんだけどねえ」

眉間に皺を寄せながらも、ワザと赤ちゃん言葉を使い、皮肉るハーヴィ。相当効いたのか、対するスイクンは「むゝ」と唸りながら頬つぺたを膨らませている。

「ハーヴィさん……」

力で勝てないなら口喧嘩——大人気ないハーヴィに、思わずエルフィーナは苦笑を浮かべた。

「ま、まあ、とにかく……。彼女も事情があるのだろう。……こほん、《水獣神スイクン》殿、この場にいらしたということは、我々に用があるのだろう？」

あまりのグダグダさにうんざりしていたジャンヌは、何とかスイクンのご機嫌を取る。

「むー、用があるというより、何か周りが騒がしくて叩き起こされたのよ。んで、来てみたらオマエ達がいたの。せっかく《タルタロス》の奴を倒そうと思ったのに、人違いなんて」

ぶすつとした顔で、スイクンは四人に不満をぶつけた。

彼女が言うには、何やら彼女達の住む神界というところに、何者かが干渉しているらしい。

「《タルタロス》の奴らよ。あいつら、あたし達の力を使って、何かを企んでいるの」

「なんか雲行きが怪しくなってきたな。奴らが何をしようとしてるかは解らねえが」

ハーヴィは深刻になりつつ事態に、腕を組んで考え込み始めた。

「ホントそうよ！ お姉ちゃんも変になっちゃうし……。もう、本当に何なのよ……」

「……お姉ちゃん？」

一体誰のことなのだろう——気になった澪紗が尋ねる。

「んつとね、《雷獣神ライコウ》のことよ。あたしより強いし、ホウオウ様にも気に入られてるの。凄いお姉ちゃんなのよ」

えへんと、得意げに語るスイクン。

「でもね、そのお姉ちゃんが変になっちゃたの。よく解らないんだけど、なんか闇の力みたいなのをお姉ちゃんから感じて……」

今までの威勢は何処にいったのか、いきなりスイクンはしゅんとして、俯いてしまった。

「既に、奴らの手に堕ちてるって考えた方が賢明だろうな」

あまりにも冷たく、絶望的な考え方だろう。ハーヴィは自分でも解っていたが、変な希望を持つよりはマシだと思っていた。それにとえ悪い予感的中したとしても、それを取り返せばいい——そう考えていた。しかし、スイクンも気付いているのだろう。それならば、下手に慰めるよりは、現実的な答え方をした方が良い。

「おい、おチビ。《雷獣神ライコウ》が祀られてる場所を教えな」

「な、何よ。オマエに何が出来るってのよ……」

顔を上げて、スイクンは何処か気まずそうに言った。

「決まってるんだろ？ お前の姉貴ってのを助ける」

自分でも何を言っているのか解らなかった。

まず、今自分の身に起きていること自体が信じがたいことなのだ。過去にテラ神殿でグードンの意識が語りかけてきたことはあったが、またこのように神と言われる存在が、それも今回はしっかりと姿を現して、目の前にいるのだ。

会って間もない神——それも、生意気な小娘に対して、何を言っ

ているのだろうか？　しかし、気が付いたら、彼女の悩みを聞いてやるうという態度を取っていたのだ。

「此処から北東、センリナ平原よ。あまり距離はないから、三日もあれば行けるはず」

「そうかい、情報ありがとな。……悪いな、帰る前に寄り道する羽目になりそうだ、お嬢様がた」

ふと、依頼を受けている身であることを思い出す。

流石にマズいか——そう思ったので、自分の私用で寄り道することの許可を得ることも兼ねて、エルフィーナとジャンヌに尋ねる。

「わ、私は構いません。どちらかというと、あまり帰りたくないの……。お父様の依頼ならば、仕方ありませんが……」

「私は、エルフィーナ様のお供をするまで。異論はない」

連れ戻されるのが先延ばしになっただけではあるが、二人は特に反対する気はないようだ。むしろ、新たな地に行くことが出来るためなのか、何やら楽しみにしていそうである。

「ってわけだが、漣紗」

「ほんと、お人好しだし自分勝手ね。でも、いいわ。今回は、他人事じゃないみたいだから……」

漣紗は一瞬悲しそうな表情を見せて、苦笑した。

「さて、それじゃおチビ。俺らがさっさと片付けてくるから、待ってろよ」

「誰がチビよ！　このロリコン！」

第26話 聖獣達の願い（後書き）

そついやロリキャラいなかったなーってことで作られたのが、この
スイクンの設定。スイクン好きの方、誠に申し訳ありません。

第27話 辿り着く先にあるものは

一夜を過ごしたのち、一行はセンリナ平原を目指して歩いていった。人通りの多い街道のためか、この辺りはオウランでも比較的治安が良いようだ。とはいえ、何度かスリと思われる者に遭遇したため、ハーヴィはその者達を体術で撃退している。

そして、ちょうど今、エルフィーナに近づき手を伸ばしてきた男が、ハーヴィによって道端へと蹴り飛ばされた。あまり強く蹴った覚えはないのだが、男は頭から茂みへと突っ込んでいった。

「本当に手癖の悪い奴ばかりだな、この国は。それと、もう少し周りを警戒してくれエルフィーナさん。そのザマじゃあ、冒険者なんてやってられないぞ」

「すみません……」

途中の茶店で買った鯛焼きを食べながら、頭から茂みに突っ込み足を出してピクピクと痙攣しているスリを見て愚痴をこぼした。港についた頃よりはからまれなくなったものの、大陸と比べると、どうも警備が行き届いていないようである。

彼の少し後ろで、あまりにも大胆な行動を見ていた漣紗は、やれやれと嘆息をもらした。

「ふむ。ハーヴィ殿は、体術も身につけているのか。今まで多くの敵と相見えてきたが、見たことの無い型だ。彼は何処であのような体術を身につけたのだ？」

裏拳と蹴撃により撃退したハーヴィを見て、ジャン又は興味深そうに漣紗に尋ねた。エルフィーナの供でもあり、武人でもある彼女にとっては、彼の戦い方は興味深いのだろう。

「彼は街にいた頃……かなり昔から、ゴロツキ達と喧嘩をしていただけよ」

半ば呆れたように答える漣紗。乱暴者として有名だった彼の少年時代を思い出し、肩を竦める。

「なるほど、つまり我流ということか。しかし、喧嘩とはいえ、当時の経験が今に生かされているのではないか？ 莫迦に出来たものではないな」

「それもそうね。私は白兵戦はあまり得意ではないけれど、そのような経験があるのと無いのでは、いざ戦いになった時に違いが出てくるのも解るわ」

だからこそ、多くの戦士達は日々の鍛錬を欠かさないのである。旅先で戦闘が避けられない冒険者にも言えることだろう。

ハーヴィの場合は旅に出ることを想定していなかったとはいえ、街で喧嘩に明け暮れていたことが、こうやって今も戦えることに貢献しているのだ。娯楽の一つでしかなかったのだが、結果的には役に立っていた。

「でも、いつもボロボロになった彼を手当てしていたのは私なのよ。無茶しないでほしいわ……」

「ふふっ……。何だかんだ言って、彼のことを想っているのだな」

「ええ。私も偉そうなことは言えないけど……」

「私もだ」

お互いに苦笑する少女達。共に過ごしてきた者との絆が深まるのは、当然のことと言えよう。

何気ない会話が一段落したところで、前を歩く二人には聞こえないように話を切り換える。それは、《神の眷族》に関することだ。

まだ年端もいかぬ少女にしか見えない二人だが、その小柄な身体には、鉛よりも重いものが押し掛かっていた。

「……すまないな、私はエルフィーナ様を……」

一部とはいえ、既に自分のことを知られている澪紗は気にすることとはなかったのだが、ジャンヌはそういうわけにはいかなかった。

「ええ。気にしないで」

澪紗は頷いて、声のボリュームを落とした。元々あまり声が大きい方ではないため、ここまでの小声で話せば、少し離れて前を歩いているエルフィーナに聞かれることはないだろう。

「すまない……」

自分が普通のポケモン達とは異なる存在——《神の眷族》であることを知られば、彼女を戦禍に巻き込んでしまっただろう。城で暮らしているだけならともかく、このように外界に触れるようになっていけば尚更である。

「隠したところで、何れは知られてしまいかもしれない。その時は……」

だが、まだその時ではない——それに、可能ならばいつまでも、自分の正体を隠し、《神の眷族》という運命から逃れるつもりでいる。そうすれば、エルフィーナを巻き込むようなことはないだろう。既に戦いに巻き込ませていると言われれば、反論は出来ない。この旅でも、幾度も危険な目に遭っている。特に、スイクンの洞窟での出来事は、彼女にとっては未だ信じ難いことだろう。しかし、もし自分のこととなれば、彼女は身を張ってくるに違いない。それだけは、どうしても避けたかった。

眷族同士の戦いは、それほど甘くないものであるから——

「他の眷族が許してくれればいいんだけど、甘くないわね」

《神の眷族》は強い力を持つため、牽制し合う関係にあるのだが——やはり、中にはより強い力を求めようと、戦いを挑んでくる者もいるのだ。もしそうなれば、戦うか朽ちるか、選択肢は二つしかない。事実、《タルタロス》に与している眷族が暗躍している。そのため、もし彼らと対峙することになれば、激しい戦いは避けられないだろう。

それに、眷族でなくとも、力を手に入れるために挑んでくる者も少なからずいる。こちらの場合は、そのまま返り討ちにするのは容易いのだが——

「売られた喧嘩は、買うしかない……か」

「ええ。それが私達の運命ね」

そう言って、澪紗は一人考え始めた。

運命——そのような言葉で片付けていいのだろうか？

もし、自分に戦いを挑んできた相手が、自分の大切な人だったら
どうするのか――

（姉さん……。どうしてなの？）

《神の眷族》の二人が後方で会話をしているのを余所に、ハーヴィ
とエルフィーナの二人も、彼らの間で別の会話をしていた。

「しかし、意外だな。連れ戻すように言われて来たが、あっさりと
承諾してくれるとは思わなかったぜ？」

しっかりと口の中のを飲みこんでから話し始めるハーヴィ。
隣を歩いている淡い桃色のサーコートを着た金髪の少女――エル
フィーナに視線を向ける。彼女は一瞬どこか寂しそうな顔をしたが

「お父様には、逆らえませんか。依頼書を見させていただきまし
たが、確かにあれはお父様の字でした。今まで私を連れ戻したのは、
騎士団長やメイド長だったのですが、お父様が直接依頼されたのな
ら、逆らうことは出来ません」

「慕っているんだな、親父さんを」

何だかんだ言って、やはり親には反抗しきれないのだろう。よく、
十代半ばの少年少女は非行に走ることが多いが、結局は親の顔を思
い出して、完全に悪に染まることが出来ない。それと同じことなの
だろう。

ハーヴィは依頼書に添えられていた手紙を少し見てしまったのだ
が、そこにはエルフィーナの父親――マルスが、如何に心配してい
たかが書かれていた。子供のことを心配しない親は、いないものな
のだろう。

「はい。でも、ちょっと悔しいというか、重いというか」

その気持ちは解る――そう言いそうになったが、ハーヴィは何と
か言葉を飲み込んだ。

エルフィーナの場合は、親に逆らいたいという気持ちはではないの
だ。彼女の父親は、邪神大戦で活躍した英雄でもあり、そのような
父を持っているからこそ、周りから期待されていたのだろう。また、

親が偉大であればあるほど、そのような偉大な人物になるように、周囲からは厳しく教育される。それが、彼女にとって、大きな重荷となっていたに違いない。

「そっか」

ただ、頷くことしかできなかった。

箱入りのお嬢様だとは思っていたが、彼女も彼女で大きな苦勞をしていたのだ。

それに比べ、自分はどうかだろうか？　ただ自由気ままに旅を続けている身であり、不満に思うようなことはほとんどない。そのような自分が励ましたところで、エルフィーナにとっては何の気休めにもならないに決まっている。

しかし――

「でもよ、エルフィーナさんは旅をしたいんだろ？」

気が付いたら、尋ねていた。

「……………」

無言。しかし、それは肯定を意味しているのを、ハーヴィは解っていた。

「各地の遺跡のお宝を探す……ガキの夢みたいにバカみたいだが、俺はそういうのは好きだな。ずっと城の中で暮らしているより、健康的で良いと思うぜ？」

自分も同じようなものだ。日頃の生活を退屈に思っ、旅を始める――自分でもバカだと思っっているが、それが悪いことだとは微塵も思っっていない。それが、結果的に澪紗の力になるという、曖昧ではあるが大きな動機及び目的に繋がったからだ。

「旅をしたって気持ちには、親父さんに話つけたのか？」

「いいえ。でも、話したところでお父様が認めてくださるかどうかわからない……………」

どうせ、許してくれやしない。何故なら、自分は武家の一人娘であり、いずれは政治や軍事に関わっていかなければならない身だから――

そう言おうとしたところで、ハーヴィが口を開く。

「旅をしたいって気持ちはマジなんだろ？」

「はい」

即答するエルフィーナ。旅をしたいという理由にどんなものがあるのかは知らないが、決意は固いようである。

「この旅では、今まで見たことの無いものが沢山ありました。《水獣神スイクン》の洞窟での出来事は、今でも信じ難いことですが……、そのようなものを求めていくのもいいかなと」

普通、城の中で何一つ危険にさらされずに生きてきた身なら、目の前に神の一柱が現れるということ自体が信じられず、恐れを抱いているだろう。それ以前に、その辺りのならず者からまれたただけでも、震え上がってしまうに違いない。

「それに、私はもつと外の世界のことを知りたいので。世界が何者かによって脅かされている今、のうのと城の中で暮らすというのは耐えられません」

しかし、彼女は違った。敵に遭遇しても恐れずに立ち向かい、危険だと解っている場所にも恐れずに向かっていく。それは、外界を知りたいという強い意志からきているのだろうか――

「一度、親父さんに話してみろよ。やる前から決めつけないでさ」
歩いているうちに、人通りが見られなくなっていた。

だいぶ街から離れ、今はほとんど使われていない街道へと入ったためだ。サクラキ街道からはいくつかの細かい道に分かれているが、そこに出ると今までの風景が嘘のように、整備のされていない道に出してしまうのだ。

というのも、新しい街道が出てきてから、そのような獣道とも言える場所を通る者はほとんどいないわけで。かつては人通りは多かったのかもしれないが、今は見る影もない。

場所によつては、いつ崩れてもおかしくないような崖や、いつ落ちてもおかしくないようなつり橋もある。そのような場所に冷や汗をかきながらも、一行は旧街道を進んでいった。

少々骨の折れる旅路ではあるが、あたりの風景を見たり、仲間同士で会話をしたりしていれば、そのようなことは気にならなかった。

*

夕暮れに染まる小さな町――

丁度、家庭を仕切る者達が、夕食の準備に取り掛かる頃。彼女達は、その小さな酒場で、ひっそりと暇を持て余していた。

街道の途中にある名も無い町で、小さな店が点在する程度の規模だ。人通りもほとんどなく、住んでいる者も少ないだろう。せいぜい、旅人が中間地点として休息を取る程度のもので、大して重要な拠点と言える程のものでもない。

だからこそ、彼女達にとっては都合が良いのだ。尤も、既に「仕事」は終わっており、特にやることもないため、このように暇を持て余しているだけなのだ。

一人は悪魔のような角と尻尾を持つ者――亜人種のヘルガー、マリーシア。褐色の肌に大きな胸が、非常に煽情的な女性だ。もし夜遅い時間帯に町を歩いていたら、多くの男達は娼婦と見間違えてしまっただろう。

スイクンの洞窟から出た後、相棒のスレインと共に町まで戻ってきたところだ。しかし、今この場にいるのはスレインではなく、別の者だった。

「どうした？ さつきからジツとしてるが、腹でも壊したか？」

「いいえ。ただ、妙な気配を感じたので」

マリーシアがからかうように声をかけた相手は特に気を悪くした様子も無く、淡々とした口調で答えた。

美しい女性だ。背丈は百六十センチ台半ばといったところか。全体的に華奢な身体つきで、色白で優しい顔付きをしている。こちららはマリーシアとは対照的で、煽情的なイメージはない。色気がないというわけではないのだが、それを表に誇示しておらず、どちら

かというとはんなりとして、清楚な印象がある。

緩いウェーブのかかった青い長髪に、サファイアのような澄んだ双眸。耳元からは、鰭のようなものが突き出している。丈が長く、涼しげな水色のドレスの裾からは、魚の尾鰭のようなものが伸びている。亜人種のシャワーズだ。

「《神の眷族》ですね。私達以外にも、神々の遺跡を探っている者がいるようです」

「ああ、悪いな。そのことなんだが……」

手元にあるグラスに焼酎を注ぎながら、マリーシアは気まずそうに口を開く。

少し前に対峙した相手のことを思い出す。かつて、眷族として目覚めてから袂を分かつことになった者だ。

思わぬ形で再会し、自分達の目的のために戦うこととなったが、途中で邪魔が入ったために撤退せざるを得なくなったのだ。尤も、あまり戦いたくない相手でもあったのだが――

「うふふつ……。解っていますよ、マリーシア。貴女が《正義》と戦っている間に、《女教皇》が割り込んできたことは」

シャワーズの女は、優しい微笑みを浮かべて言った。その言葉に、マリーシアは噓せそうになったが、なんとか口に含んだ焼酎を流し込んだ。

「やれやれ、お見通しってわけだな。恐れ入るよ。それで、仕事をミスった使えない私を制裁でもするのか？ それなら、受けて立つぞ」

軽く溜め息をつき、肩をすくめる。

マリーシアの言葉は半分冗談であったが、半分は本気だ。しかし、彼女は黙って制裁などされる気はなかった。

「とんでもないです。貴女にはまだまだ、やっていただくことが沢山ありますから」

はんなりとした雰囲気を漂わせながら、シャワーズはにこりと微笑んだ。

「さて……、私はあの子にお灸をすえなければなりません。貴女は、大陸に戻るんですよね」

「ああ。相棒が目を付けた勢力があるみたいだからな」

「なるほど。メルクリアとフルーレ連合で暗躍しているというあの……」

「お見通し、か。流石だな、《節制》」

懐から葉巻を取り出し、指先から火を出して先端に灯した。炎を操るヘルガーである彼女にとって、この程度の芸当は容易いことである。

「では、御機嫌よう。また会いましょう」

「ん……」

席を立ちあがって店を出ていくシャワーズを、マリーシアは葉巻をくわえたまま、軽く手をふって見送った。

暫く香りを楽しんだ後、彼女は含んだ煙を一気に吐き出した。

「ふー。お前は何考えてるのか解らないよ、れいら零羅」

第27話 辿り着く先にあるものは（後書き）

ジャンヌの《神の眷族》の設定はもつと先に出そうと思ったんですけどねえ。どのアルカナにするか結構悩んだのは此処だけの話。

おにゃのこキャラが多いのに華が無いのは、自分の力量不足のためです。申し訳ありません。

第28話 雷神が眠る平原

草原一帯に降り頻る雷雨。 迸る煌めきが雨を照らし、白銀色に染める。

天から降り注ぐ白銀の水滴は、まるで滝のように大地を絶え間なく打ち付けている。

元々、センリナ大平原は年間の降水量がオウラン連邦の中でもかなり多い。

そのためか、かつては巡礼者や観光者のために整備されていた遊歩道も長きにわたって雨に曝されてきたためか劣化しており、今は見る影もなく朽ち果てている。

今や、《雷獣神ライコウ》が祀られていたという地も、ただ草木だけが生い茂るだけの殺風景な場所と成り果てていた。それはどの場所にも云えることだが、人々の信仰心が薄れ始めてから、神々の祀られている地というものは、忘れ去られていく運命にあるようだ。それでも、完全に朽ち果ててしまわないのは、少数ながらも神々という存在を信仰している、あるいは存在がいることを知っている者がいるためだろうか――

――くだらない。

ただ、彼女――れいら 零羅はそう思った。

「神々なんて、くだらない存在……」

降り頻る雨に濡れた瑠璃色の髪を掻き上げ、零羅は嘆息を漏らした。身体が雨に濡れていることも相俟ってか、その仕草は何処か煽情的だ。しかし、それでいて淫らさはなく、

神々――実に単純で抽象的な言葉だ。だからこそ、その概念は難しく、特に信仰心の無い者にとっては「何かは知らないが、大きな存在」、「いるかどうか解らない」などといった答えが返ってくるだろうし、信仰が強い者に尋ねれば「我々の心の中にいる」、「信じることによって存在する」などの答えが返ってくるだろう。中に

は、「恐れ多いから無闇に神と口にするな」と激怒する者もいるに違いない。

どちらにしろ、神々がどのような存在であるのかを誰もが解るように説明することのできる者など、この世の中にはいやしない。単純で抽象的なものほど、言葉という手段で説明するのは難しいのである。

忌々しげに思うも、それを顔には出さずに、零羅は振り返る。

そこには、彼女と同じくらいであろう年齢と思しき女性が立っていた。

緩やかに内側へとウェーブのかかった銀髪に、獣を思わせるかのような鋭利な赤い瞳。美しい女性だが、美しさの中に優しさを孕む零羅とは異なり、この女性は鋭さを持っている。美しさのベクトルが、彼女とは異なる方向へと向いているのだ。

雨の降る草原に立つ二人の女性——高名な画家が描いた名画のひとつとしてあってもおかしくないような、何処か幻想的な光景がそこにはあった。

「……ああ、くだらん」

女性らしくない口調で、銀髪の女は応えた。

遠目では解らないが、彼女は傷だらけであった。身を包む虎柄のローブと紫色のマントはズスタに引き裂かれ、ところどころから白い肌が露出し、僅かながらも出血している。彼女はガクリと膝をついていた。

多くの者は、その惨さに、思わず目を背けてしまうかもしれない。しかし、それを以てしても、彼女の内には「神々しさ」というものが、輝きを帯びている。

何故ならば——

「で、貴様はそのくだらん存在である私を捉え、何をしたい？ 我々に匹敵するような強大な力を持つ《神の眷族》たるお前が、これ以上のものを望むとは思えんが」

《雷獣神ライコウ》——それが、彼女だ。

傷だらけになりながらも、彼女の覇気は失われていなかった。

「黙りなさい」

漣羅は淡々と応え、水の弾丸をライコウに至近距離で直撃させた。水の弾丸を受けた雷神は、数メートル程吹き飛ばされ、聳え立つ石碑に叩きつけられた。そして、そのままズルズルと崩れ落ち、地面に倒れ伏した。

「ぐっ、これ程の力を……放てるとはな……。流石は眷族といったところか……」

流石に至近距離で受けたのは堪えたのか、苦痛に顔を歪め、よるめきながら、《雷獣神ライコウ》は立ち上がった。

しかし、対峙する女——漣羅へと向けられているのは、憤怒でも憎悪でもなかった。

ただ、何処か哀れむような悲しげな視線を、向けている。

「お前達が何を望んでいるかは知らんが……、莫迦な真似はやめるんだな。自分の身が惜しいのならば、この世界のシステムを壊そうなどと思わないことだ……」

「強がっていられるのも今のうちです。アレに抵抗するのもやつとでしょう？」

そう言つと、漣羅は《雷獣神ライコウ》に背を向けて、歩き始めた。

もう、この場所に用はない。既に、アレは《雷獣神ライコウ》に埋め込んであるから。まずは、見せしめだ。くだらないシステムを壊すための一手に過ぎないが、他の神々を動かすためにも、欠かせない一手だ。それに——

（もし、あの子がまた何かをしようとしても、恐怖を植え付けることが出来る……）

決して、あの子が憎いわけではない。

愛している。

たった一人の、大切な肉親である。

だからこそ、巻き込ませたくない。そのためならば、どのような

手を使おうとも構わなかった。

「《神の眷族》……、そんなのに選定されなければ良かったのに……」

決められたシナリオなんて認めたくない。だから、あえて手を染めた。

この世界では邪教とされている、《タルタロス》に――

シャワーズの女が立ち去った後、雷を司る神は、草原の真ん中に聳える石碑に寄り掛かり、未だ勢いの収まる気配の無い雨に打たれていた。

どうやら、かなりの力を消耗しているらしい。降り頻る雨が、自分の体力を鑢のように削り取っていくかのような感覚。全身の傷が疼き、それが何とか自分の意識を繋ぎ止めている。

「……奴らは無事なようだな。波動は良好、特に危機に瀕している様子はないか」

満身創痍ではあったが、彼女は穏やかな笑みを浮かべていた。

しかし、二人を救うためだったとはいえ、多少浅はかだったかもしれない。

「ぐっ……、流石にもう……耐えられないか……」

全身に襲いかかる、どす黒い衝動。

「《タルタロス》の連中め、ふざけたものを……。私を斃したところで、システムは止められぬというのに……」

どす黒い衝動が何なのか、彼女は解っていた。

止めることもできたが、あいつらを守るためには、受け入れるしかなかった。

「だが、これも奴のシナリオに過ぎないのだろうな……。まあいい、それならば……」

*

道が途切れ、その先には広大な大草原が広がっていた。

新緑の絨毯が敷き詰められたかのようなその場所は、そのまま身を投げ出せば、さぞ気持ちよく寝られることであろう。しかし、残念なことに草原に着く少し前辺りから、雨が降り始め、今は土砂降りとなっている。

水に濡れて肌に張り付く服の感触を忌わしく思いながらも、一行はセンリナ平原へと足を踏み入れ、今回の目的地である《雷獣神ライコウ》が祀られていると云う石碑を目指していた。

「凄い降りだな……。みんな大丈夫か？」

フードを被つても、雨が斜め上から打ち付けるため、腕で額の辺りを覆いながら、ハーヴィは後続の者達に確認を取った。彼の問いに少女達は無言であったが、特に問題はないようである。

口数が減つたのは、雨のためではない。

全身に襲いかかる重圧。それが、ハーヴィ達に会話をさせる気力を奪っていた。

《地神グラードン》や《水獣神スイクン》の時もそうだったが、神々の祀られていた地に足を踏み入れると、同じような感覚に見舞われていた。尤も、《地神グラードン》の時ほどの重圧はないものの、気を抜くほどの余裕はなかった。

「あれか……」

視線の先には、何やら無造作に積まれた石があった。

不規則に造られており、それは一種の抽象的な芸術作品のようにも思える。自然の一部と言えはそれまでもしれないが、明らかに周りに広がる草原と比べると、この場所だけが「浮いている」のだ。そう。此処が、ハーヴィ達の目的地であった。

しかし――

「何かを感じるけど……遠い？ いいえ、この場所で間違いないわ」
澪紗は何処かもどかしそうに呟いた。

ポケモンは五感は勿論、所謂第六感というものも人間よりも遙かに優れている。例えば、人間の間では未だ謎とされている「波動」

といった力も、そのひとつである。しかし、それを以てしても、《雷獣神ライコウ》の存在を確認することは出来なかった。

「そっちは神々に関する情報を手に入れていないのか？」

雨に打たれる石碑に手を置きながら、ハーヴィはクロカと心に声をかけた。

彼女達とは別行動だったのだが、どうやら最終的な目的は一致していたようだ。道中で合流してから、今に至っている。どうやら、彼女達は山岳地帯にあった《タルタロス》の基地に攻め入った時に、《炎獣神エンテイ》に遭遇したらしい。

「……ごめんなさい。場所しか聞いていない」

「うん。元々、私達は《タルタロス》の調査とお嬢様の保護だけが目的だったから……」

申し訳なさそうに俯くクロカと心。

「別に気にすることなんてねえよ。こっちもついでに來たわけだからな。だが、問題はだ」

そう。如何に神々と呼ばれている者達の頼みとはいえ、結局は私用に過ぎない。ハーヴィ達がオウラン連邦を訪れた真の目的は、エルフィーナとジャンヌの搜索である。既にそれは完了しているため、あとは王都まで送り届けるだけなのだ。

既に身柄を保護しているため、無駄なことは避けるのが普通だ。だが、こうして今、二人を私用に付き合わせてしまっている。二人の身に危険が迫った場合、下手をすれば命を落とすようなこともあり得るのだ。もし、そのようなことがあれば、国家に関わる問題となるのは間違いない。

そして、クロカと心のことも気掛かりだ。戦闘に関しては問題ないが、神々という未知の存在に挑めるかと言えば、そうとは限らない。

「なあ、お前らさ」

「お付き合いしますよ、ハーヴィさん」

此処で待っている、と言おうとしたところで、それはエルフィー

ナの言葉によって遮られた。

「あのな、俺は」

「心配するな、ハーヴィ殿。エルフィーナ様は私がお守りする」

「……………」

どうやら、最後まで付いてくる気らしい。実際、エルフィーナとジャンヌの戦闘力は高いし、ハーヴィはもし手合わせした場合には、勝つのは難しいと思っている。敵と遭遇したことを考えても、その点問題は無いだろう。

「で、クロカと心はどうなんだ？ 付いてくるのは間違いないだろうけど」

ハーヴィの問いに、二人は無言で頷いた。

彼女達は彼女達で、何かしら調べることがあるのだろう。今まで何気なく接してきたが、やはり仕事——どのような物なのか、詳細は不明だが——で来ていることを、改めて認識させられた。それと同時に、ハーヴィは《ドウンケル・アウゲ暗黒の瞳》という存在に、恐怖にも似た感情を覚えた。

「まあ、仕方ねえわな。俺がみんなを守ればいい——」

「くれぐれも」

ハーヴィが言い切ろうとしたところで、澪紗が彼の言葉を遮る。

「勝手な行動や無茶な戦い方はしないこと。いいわね」

「解ってるよ。それじゃあ、とっとと調べようぜ。お、コレって確か……………」

ハーヴィの触れている石碑には、アンノーンという種族のポケモンによって記された、『古代文字』が刻まれていた。現在使われている言語の元となったものとされているが、これを解読できる者は少ない。

「んーと…………、雷雲を司る聖獣、此処に祀る…………あとは掠れてるか」

「ハーヴィ？ あなた、古代文字読めたの？」

少し驚いたように、澪紗が彼の元に歩み寄ってきた。彼女はハーヴィが読んだであろう石碑の古代文字を目で追い始める。

「ええ、その通りね。あなたのことから、適当なことを言っていると思っただけだ」

「俺を何だと思ってんだよ。基礎的なところだけ勉強したんだぞ。船に乗ってる時、ちよつとだけな」

「そう言えば、何か本を読んでたわね。そのまま突っ伏していたけど」

本来、古代文字を覚えるには、相当な勉強をしなければ覚えられない。時代によって解釈の仕方も異なるうえ、ひとつの文字にいくつもの意味があるものも珍しくないため、一日二日で覚え切れるようなものではないのだ。

短期間で覚えることが出来たのは、彼が非常に要領のいい人間であるためだろうか――

「文字の基礎的な読みと、簡単な文法や単語くらいしか解らないけどな」

そう言って、ハーヴィは雨に濡れた前髪を掻き上げる。

「とにかく、早いとこそその《雷獣神ライコウ》ってのを見つけないとな。このままじゃ、妙なプレッシャーに押し潰されちまう」

身体に異変はないが、精神を削られていくかのような感覚がある。痛みは無いが不快感は強く、あまり長時間この場所には居たくないというのが本音である。だが、何か――特に漣紗に関すること――が解るかもしれないのだから、そうも言ってられない。

と、その時。

「ふぎゅっ！」

その場の緊張した雰囲気をぶち破るかのような、間抜けな声。その声の主に、視線が一斉に集中した。

石碑の周りをふらふらと歩きながら、ことの成り行きを見ていた――はずであろうエルフィーナだ。転んだらしく、思い切り顔面から地面に突っ伏している。その時に老朽化した石碑に触れていたらしく、豪快に崩していた。もし、考古学者や神学者がこの場面を見たら、激怒するどころか失神してしまうかもしれない。

「エルフィーナ様……」

「……神の石碑が」

「派手にやったね……」

「これは……」

「お嬢さん……やったな……」

物凄く気まずい雰囲気だろう。

「あ、あの、すみません」

起き上がって泥を払い、エルフィーナはぺこぺこ頭を下げた。

次に、彼女の視線に移ったのは、自分が崩してしまった石碑であつて――

「あああああ！ 私ですよ、これ……！」

自分がとんでもないことをやらかしてしまったことに気づき、エルフィーナは慌て始める。

一部とはいえ、見事に石碑が崩落してしまったのだ。彼女の転倒によって。

「その……どうしましょう……？」

「どうする？ そりや行くに決まってるだろ、なあみんな。お嬢さんも決めてただろ？」

ハーヴィはニツと笑い、周りの者達に尋ねる。彼女達も何処か可笑しそうに、頷いた。

「ナイスだぜ、エルフィーナさん」

ハーヴィ達の様子を見て、ようやくエルフィーナは状況を理解した。

ボロボロに崩れた石碑。その下には、人が一人通ることが出来るであろう縦穴が、ぼっかりと口を開けていた。

手詰まりの状況から、道が開けたのだ。偶然とはいえ、それも転倒という事故であつたとはいえ、エルフィーナの手によって。

しかし、この時の一行には解らなかった。穴の奥で眠る電光の牙の恐怖を。

その場所を言葉で説明するのは、難しい。

抽象的な言葉ではあるが、『亜空間』や『異界』——そのような言葉が相応しいことは、その場所を見れば誰もが頷くに違いない。

尤も、誰もがその場所を容易に見ることが出来ればの話ではあるが。

テーブルほどの大きさの土台に嵌められている水晶球。それを見ながら、赤き地神は、ふふん、と笑みを漏らした。

「なかなか面白い状況になってきてるじゃないか。そう思わないかい、カイオーガ」

「やれやれ、《雷獣神ライコウ》が堕ち、自体は深刻になりつつあるというのに、呑気なものだな、君は」

向かいに立っている青き海神は、肩を竦めて、嘆息を漏らす。

「だが、神の石柱が《タルタロス》の手に堕ちたというのに、未だ誓約は外されない。動こうと思っても動けないのが現状だな。やれやれ……」

「溜息ばかりついて、湿っぽいたらありやしないね、アンタは」

「憂えているのだよ、現状を。私としては、このような状況で呑気でいられる君の方が信じられないよ」

「こういう状況だからさ。陸を見てみると、人間やポケモン達の生き様ってのを楽しめるからね。アンタも、海を守っている身なら解るんじゃないか？ 今のギルドの長は、随分と信仰熱心だと聞くけど」

「さあな……。私はただ、大いなる意志に従っているだけだ」

「ふん、まあいいさ。動けない間は、眷族やそれに関わる奴らの動きを見守ろうじゃないか」

第29話 二人が望むもの

道が開き、内部を探索できるようになったまではよかった。

雷雲を司る神——《雷獣神ライコウ》を求め、セシリナ平原を訪れた。他の三聖獣から頼まれていた依頼を遂行するのが目的だ。

しかし、一行を大きなアクシデントが襲った。

「……まったく、ボロくなってるんだから改修工事くらいしたらどうだ？」

打ち付けた腰を擦りながら、ハーヴィは忌々しげに壁を蹴飛ばした。相当老朽化が進んでいるのか、軽く蹴っただけだというのに、彼に蹴られた壁は容易に穴があいてしまった。

「もう少し慎重に進むべきだったわね」

澪紗は事前に受け身を取ったため、少し服が汚れた程度で済んだようだ。

テラ神殿であつたように、床が抜けたのである。その結果、先頭を進んでいたハーヴィと澪紗が落下し、パーティが分断されてしまったのだ。

「さて、どうすんだ？ 見事に落ちたわけだが、俺は此处を墓にする気はないぜ？」

「構造を見る限り、何処かに戻れる場所があるはずよ」

未知の場所で、戦力が分断するという事態はあまり好ましいとは言えない。

クロ力をはじめ、彼女達の強さは目を見張るものがある。しかし、環境が異なれば、その力をフルに発揮することは難しくなる。未知の土地での戦争で一騎当千の騎士があつさりと討たれてしまうことがあるように、下手をすれば、実力の半分どころか三割を出せないということもある。

それでも、不慮の事故とはいえ、二人は冷静だった。信頼しているのだ。彼女達を。

特に戦闘に影響するような怪我は無い。それを確認すると、落ちたフロアの探索を始めた。

「……ところで、さっきの一撃の力はどんなもんだった？」

耐えられないほどではないが、左腕が痺れるように痛む。ハーヴィの服の袖が破け、皮製のガントレットも見事に使い物にならなくなっており、そこから肌が露出していた。その肌の部分は、何かに焼かれたかのように、赤々と爛れている。

それでも、特に強がる様子も無く、淡々と澪紗に尋ねる。

日頃から彼女から無茶をすると言われていたが、咄嗟に庇っていたらしい。

「力は私の十倍はあるわ。直撃を受ければ、板金鎧プレートメイルくらいなら軽く貫けるんじゃないかしら？」

「それなら、如何にボロ屋とはいえ、床をぶち抜かれるのも無理ないか」

単に、床が老朽化によって抜けたわけではなかった。

突然、天井から青白い電撃が降り注ぎ、地面を穿ったのだ。

それはまさに、電光石火の速度であつたため、避け切れる筈も無く、先頭を歩いていたハーヴィと澪紗は、そのまま落下してしまつたのだ。ハーヴィは、その電撃の余波から澪紗を庇おうとして、腕を負傷してしまつたのだ。

「……あなたの腕は鎧よりも頑丈なのね。たいしたものだわ」

呆れたように、澪紗はハーヴィの負傷した腕を掴んだ。隠していたが、お見通しだった。

「いつ——！？」

「言っておくけど、次庇ったら怒るわよ……莫迦」

澪紗はそう言うと、麻のバックパックから包帯を取り出した。然程深い傷ではないが、化膿を防ぐことと、戦闘の際に衝撃を防ぐために、それをハーヴィの腕に慣れた手つきで巻いていった。

ハーヴィは周りに心配をかけたくないと思って隠していたのだが、無駄だったようだ。

「いつも悪いな、澪紗」

申し訳なさそうに、ハーヴィは俯いた。澪紗に手当てをして貰うことは、今に始まったことではない。五年前に彼女と出会ってから、ハーヴィは毎日のように怪我をしていた。ある時はよろず屋の仕事で無茶をしたり、ある時は街の酒場やカジノで喧嘩をしたりと、生傷が絶えなかったのだ。その度に、澪紗は呆れながらも彼の手当てをしていた。

「そう思ってるのなら、もう無茶しないでほしいんだけど……あなたのことだから、何を言っても無駄でしょうね」

一通りの手当てを終えると、ハーヴィは予備のガントレットを手嵌めた。鈍い痛みが走るが、この程度の怪我はいつものことだ。準備が出来たのを確認すると、二人は探索を再開した。

何としてでも、分断された四人と合流しなければならぬ。だが、此処の地図は無いため、探索はそう容易なものではないだろう。

「参ったな。随分とでかそうだぜ？ 何かしら頼りになるモノがあればいいんだけどな」

分かれ道に差し掛かるたびに立ち止まって、羊皮紙に地図を描きこむ。そして、目印として使えそうな――携帯食料の包み紙を置いていく。非効率的だが、迷わないためには必要なことだ。だが、それも結局は気休めにしかないだろう。

ハーヴィが地図を描きこんでいる間に、澪紗は周囲の警戒を怠らなかつた。ポケモンである彼女の方が索敵能力に長けているためだ。「なあ、警戒しすぎじゃねえか？」

「……さっきから感じる強大な力だけど、何かと戦っているのかしら？」

澪紗は口元に手を当てて、何度も耳をピクピクと動かしながら、辺りを見渡した。何も聞こえるわけでもなく、何も見えるわけでもない。だが、一種の違和感があるのだ。

「どういうことだ？」

「センリナ平原に入った時から、あなたも重圧を感じていたでしょ

う？ その重圧を放っている何かが、より強い力を放っているのよ」
「そういや……、一向に収まる気配が無いもんな。押し潰されるつてワケじゃねえが、あまり長居していると、気がおかしくなりそうだぜ」

つまり、それはこの場が神々に関係のある場所であるということ
を明らかにしていた。

「待てよ。何かと戦つてる……？」

もし、そうだとしたら――

「おい、急ぐぞ澪紗！」

ハーヴィは羊皮紙を無理矢理懷に突っ込み、駆け出そうとした。

だが――

「待ちなさい、ハーヴィ」

澪紗はハーヴィの動きにすぐに反応し、彼を手で制した。

「あいつらがその強大な力――十中八九ライコウだろうが、そいつと戦つてたらどうすんだよ？ いくらあいつらが強くたって……」

「だからよ。確かに、最悪の事態も考えられるかもしれない。でも、此処で私達が冷静さを失っても始まらないわ。それこそ、向かう途中で敵の不意打ちに遭うことも考えられるのだから」

澪紗の言うとおりだ。碌に構造を覚えていないような遺跡を考えなしに動きまわるのは、自殺行為に等しい。《タルタロス》の者達の襲撃を受ける可能性もあるし、古代の遺跡ということで危険なトラップが仕掛けられていることも充分に考えられる。冷静さを失つて動けば、命を落とすことも有り得るのだ。

「畜生、何で俺はいつも……」

ハーヴィは自分の無力さに苛立っていた。

人並みに戦えるし、情報収集などの知的な場面でも、ある程度の貢献は出来ている。だが、いざとなった時に、いつも自分は動けずにいる。

こんな状態で、澪紗と共にいても大丈夫なのだろうか。彼女が過酷な――如何なるものかは解らないが――運命を背負っているとい

うことは、《地神グランドン》の意識や、《蒼き波濤》ブラウエ・ウエレのリーダー

であるシノ——彼女も自分と同じ眷族と関わる者だ——から聞いた。そして、その眷族と関わることは、平穏な人生を捨てることだということも。

「焦る気持ちも解るけど、落ち着いて。だいたいの方向は判断できそうだから……」

ハーヴィの心の内を見透かしたかのように、漣紗は彼を諭した。

「そう……だな……。悪かった」

ああ、まただ。こういったところで、心配させている。

ハーヴィは溜息をつき、懷にしまった羊皮紙を再び取り出した。無理矢理に詰めたためか、一部がくしゃくしゃになっていた。

「……こつちね。今のところ、ライコウの気配しかないけれど、念のため戦えるようにして」

「おう」

二人はそれぞれの得物を抜刀すると、慎重かつ迅速に進んでいった。

同じような構造が続いていくが、此処は漣紗に頼った方が確実にある。漣紗を前衛にして、ハーヴィはその後に続いていった。

「ま、今回は頼りにさせて貰うぜ」

特に敵と遭遇するわけでもなく、二人は順調に通路を進んでいった。

そして——

「っ……！？　嘘でしょう……」

広間へ出ようとしたところで、突然漣紗が立ち止まった。

「うわ、いきなり止まらないでくれよ」

ハーヴィはその場に躓きそうになったが、何とかその場に留まる。果然と立ち止まっている漣紗を不可解に思ったが、彼女の視線の先に何かがあるのは間違いないだろう。ハーヴィは片手剣を構えつつ、彼女の前に出た。

「何だよ……これ……何なんだよ……」

そこに広がっていた光景は、実に凄惨なものだった。

床には数十人も人間とポケモンが転がっており、誰もが血を流していたり、四肢を吹き飛ばされたりしている。

装備を見たところ、何処かの軍隊を思わせるような格好だ。オウランの装備なのか、スケイルアーマーをアレンジしたかのようなものだ。

「ひでえな、これは……。見たところ、オウランの軍部の連中つてところか」

近くに倒れていた者の装備を見ると、桜と刀の紋章が刻まれているのが確認できた。これは、オウラン連邦の国章だ。つまり、彼らがオウランと関係のある者だというのは解ったが――

（国の奴らが動いているのか？ だとしたら、ヤバいな。クロカとエルフィーナの素性がバレると、色々と面倒なことになりそうだ）
ただでさえ治安が悪い中、他国の要人と軍部の連中が動いているとなると、紛争にはならないにしろ、国家間の関係が悪化してしまうことも考えられる。

一介の冒険者であるハーヴィにとって国際問題は知ったことではないのだが、それによって彼女達の身に何かがあることを考えると、そうも言っていられない。

だが、それよりも――

「おい……何なんだよ、何なんだよこれ……」

その場で何が起きているのか、理解できなかった。

「おい……どうなってるんだよ……」

ハーヴィの視線の先には、二人の女が対峙していた。

一人はよく知った氷の術の使い手――いや、唯一無二で、信頼できるパートナーである。

そして、もう一人は――

「以前言った筈よ。神々に関することには、首を突っ込まないでと……」

澪紗と対峙しているのは、海のような澄んだ青色の髪の水だった。

澪紗と顔つきが似ているが、まだ少女という言葉が相応しい澪紗に対し、その女は女性という言葉の方がしっくりとくる。華奢ではあるが、澪紗よりいくらか大人びて見えるのだ。

水色のドレスに身を包んでおり、まるで、水が人の形を作り出したかのような風貌だ。それが、彼女の涼しげで清楚な印象を表しているかのように見える。

そして――耳元から突き出ている魚のような鰭と、ワンピースの裾から顔を覗かせている尾鰭。

シャワーズ――そう呼ばれる種族に見られる特徴である。

グレイシアである澪紗とどこか雰囲気に近いのは、至極当然のことである。何故なら、グレイシアもシャワーズも、元々はイーブイというポケモンが力を得た存在であるからだ。

「姉さん……なんで《タルタロス》なんかに……？」

二人がどのような関係であるか、ハーヴィはすぐに理解した。

シャワーズの女性が澪紗の姉であり、澪紗が探していた相手であるということ。

「眷族に選定されてから、姉さんとも別れて、戦いばかりの日々だった……。でも、やっと逢えた……。なのに、どうして……。どうして《タルタロス》なんかに……」

声を震わせながら、澪紗はシャワーズの女性に向けて必死に訴えた。

「何も、解っていないのね。貴女は、そのような運命が嫌ではないの？」

シャワーズの女が言う運命とは、《神の眷族》に課せられたもののことだろう。

巨大な力を持つために、眷族同士は互いに牽制し合う関係にある。そして、ある時は自分の身を守るため、他の眷族を斃さなければならないこともあるのだ。

でも、自分の唯一の肉親と戦いたくはなかった。

「嫌よ……。でも、姉さんに逢うために、どんな相手でも殺めてき

た……。あの時もそうだったのに、何で姉さんは……」

「待てよ、俺を置いて勝手に話を進めるな」

苛立ちを覚えながら、ハーヴィは漣紗の前に割って入った。そして、片手剣をシャワーズの女へと突きつけた。ポケモン相手に敵うわけが無いのだが、威嚇する——いや、自分の弱さを見せないためにも、必要なことだ。

「……貴方が漣紗のパートナーね。私は漣羅^{れいら}。妹がお世話になっています」

腰の前に手を重ねて、シャワーズの女——漣羅はぺこりとお辞儀をした。礼儀正しいのだろうが、その行為はハーヴィにとって、慇懃無礼に思えた。

「名前なんて聞いてねえよ。こっちは色々と聞きたいことがあるんだよ。この惨状や、漣紗とあんたの関係、《神の眷族》や《タルタロス》のこと、他にも山ほどな」

「それは、まだ貴方の知ることではないわ。それに、ただその子と平穏に暮らすことを望むのならば、知る必要もないこと。……相当な覚悟はしているようだけど」

何処か哀しげな表情を浮かべつつも、漣羅は淡々と話す。

「漣紗。今回、此处で出会ったのは偶然かもしれない。でも、私達を詮索するのは、もうやめなさい。貴女がその人と、平穏な生を送りたいのなら……」

そう言葉を残すと、辺りに白い濃霧が立ち込め始めた。

霧はシャワーズの女の周囲から発生しており、これが彼女の術によるものであることは明らかだった。

「あ、おい……！」

「待って！ 待ってよ姉さん……！」

それ以上は語らず、シャワーズの女はその場から霧に溶け込むように、消えていった。

霧が晴れたのち、そこには二人が残されただけであった。

「……ごめんなさい、醜いところを見せてしまったみたい」

少し気まずそうに駆け寄ってきたハーヴィに対し、漣紗は何処か自嘲的に俯いた。

彼女にしては珍しいかもしれない。青い双眸に僅かに涙が浮かんでいる。

「醜くなんかねえよ。大切な人なんだろう？」

「でも……、なんかあなたをずっと騙していたみたいで……」

必死に堪えているのか、古びたバイオリンの音のように、声が掠れる。

騙していた——そして、隠していた。もし、自分の全てが知られてしまったら、ハーヴィを巻き込んでしまうかもしれないから——
「私……あなたと一緒にいるべきじゃないのかも……」

一瞬、漣紗が何を言っているのか、ハーヴィには理解できなかった。

何故？ 何故そのようなことを——

「だって……」

「一人で抱え込んでんじゃねえよ、莫迦。何度も言わせんなよ……」
そう言つと、ハーヴィは漣紗の背中に手を回し、そっと抱き寄せた。

「……ッ」

信じられないほど、弱々しかった。

僅かな衝撃で壊れてしまう氷細工のように——

僅かな熱で消えてしまう雪のように——

普段の頼りがいのある少女の面影はなく、絶対零度の術で敵を次々と打ち倒していく力があるのか、疑問に思ってしまうほどだ。

「前も言っただろ、お前は俺の……大切なパートナーだって……」
ハーヴィは暫くの間、漣紗を抱き寄せていた。

第29話 二人が望むもの（後書き）

この辺りは特に書き足すものはなかったという。

今回は弱みみたいなのを書きたかったんですが、どうもイマイチ。
次のお話はバリバリの戦闘です。

第30話 雷牙、劈く

今まで何度も強敵を相手にしてきたが、コレは格が違う。ジャン
又はただ、そう思っていた。

最大の誤算——それは、相手の力量を予想していなかったことだ
ろう。戦闘になることは、ある程度予想できた。だから、そのた
めに武器の手入れも怠らず、来るまでの間に技を磨いてきた。

しかし、相手が相手だった。

この相手は、強い。

強いが、一線を画しているのだ。今まで戦ってきた、どのような
強敵よりも。

「いいイイいああああああああああああアアアアアアア
アアアアあああッ——！」

轟音——いや、爆音とも取れるような咆哮。それが「彼女」から
発せられた声であることに気付くのは、時間を要した。その場の
空間そのものを揺るがさんばかりの大きな咆哮だ。それも大きいだ
けではなく、その場にいる者の肉体を引き裂くような鋭さも孕んで
いる。

その爆音が響くと同時に、「彼女」から雷撃が放たれた。ジャン
又は雷の軌道を読み取ると、すぐさまその場から飛び退いた。ジャン
ヌが立っていた場所に幾筋もの雷撃が降り注ぎ、耳を劈くような
轟音を立てて四散した。

「うぐっ……」

俊敏な動きを得意とするジャンヌでさえ雷の速度に対応するのは
難しく、完全に回避するまでには至らずに、雷撃の余波をその身に
受けてしまう。木々の力は雷撃を抑えるために致命傷にはならない
のが幸いか——

「ちいッ——！ 流石、雷雲の化身と呼ばれるだけはあるか」

再び、立っていた場所に、紫電の槍が降り注ぐ。

幸い、この場所の地盤は固いのか、床を穿たれるようなことはなかったが、直撃を食らえば大きなダメージは免れないだろう。余波を受けただけでも、痺れが全身を襲う。

まるで身体の一部のように雷を操るその姿は、雷獣神の名が相応しいだろう。

（むう、戦力が分散したのが厳しいか――）

いや、相手の攻撃を回避することを考えるなら、少人数で正解だったのかもしれない。人数が多ければ、その分味方のことを考えて行動しなければならないからだ。ポケモンである自分ならともかく、生身の人間がああ雷撃の直撃を受ければ、タダでは済まない。しかし、どちらにしろ、早めに決着を付けなければ、ジリ貧になるのは目に見えている。

「グ……が……ガああああアアアアアアアあああああああああああッ——！！」

再び咆哮する雷神。その咆哮は光と轟音と化し、紫電の槍を形成し、次々と放射された。ジャンヌは雷槍を回避すると、手元に法陣を描き、妖しい輝きを帯びた葉を発生させた。

不規則な軌道を描きつつ、輝く葉がライコウへと向かっていく。木々の力を宿したこの術は、その魔力と動き故に、回避するのが難しい。精度を高めている分威力は控えめになっているものの、この状況で大技を撃つよりは確実性を求めた方が良い。

妖艶な光を帯びた葉が旋回し、ライコウの身体を包みこむ。

だが――

耳を劈くような轟音と共にライコウの身体が光を帯び、次の瞬間にジャンヌの放った光の葉は全て消滅していた。

「そんな莫迦な……」

恐らく、いくらかのダメージは与えられているだろう。しかし、決定的なダメージとは程遠いうえ、雷による攻撃はまったく衰えていない。少しずつでもダメージを与えていければ問題ないだろう。だが、その前に自分の身体がもつかどうか解らない。

それに、自分以外にもこの場にはいるのだ。彼女達のことを気掛かりだった。

（私はまだ、眷族としての力がある。だが……）

ほんの一瞬、ジャンヌは後方を確認した。

「痛ッ——！　くう……、流石にきついかも……！」

後方では、心が相手の雷撃の余波を相殺しつつ、クロカとエルフィーナを守っていた。だが、防御系の術を多く持たぬ故に完全に抑えることは出来ておらず、鞭のようにしなる動きを見せる電撃が、彼女の身体を撃ちつけていく。

ある程度の威力は軽減されているが、長時間攻撃を受け続ければ、立っているのは厳しい。そうなれば、二人を守り抜くのも難しくなる。

状況は芳しくない——いや、危機的だろう。

神と呼ばれる存在は、これ程のものなのか——その場にいる少女達には、この世のものではない存在に遭遇したことに對する畏怖とも焦りとも思えるような表情が浮かんでいる。

「はあ……はあ……。まずいな、このままでは……」

ジャンヌは攻撃を担当していたが、なかなか戦況を覆せずにした。こちら側からの攻撃は、相手に到達する前に雷撃に焼き払われ、毒素による技もあり効いている様子は無い。

しかし、自分は無傷というわけにはいかなかった。素早い動きを以てしても、相手の雷撃を完全に回避する手立てはない。そのため、身体のあるところどころが、雷の刃によって抉られ、痛々しい傷口を露わにしている。

「この状況が続けば立っていられぬ……か。どうしたものか——」
状況を打破する策を何とか探そうとしたその時——

「……………□……………」

ふと、雷撃の雨が止み、《雷獣神ライコウ》はがくりと膝を折った。

一体何が起きたのか——？

「ヤ……ク……、ニ……ゲ……」

様子がおかしかった。《雷獣神ライコウ》は虚ろな瞳を見開き、口を大きく開けながらガクガクと痙攣している。呼吸も上がっており、それと同時に、先程までの咆哮が嘘のような細い声で、途切れ途切れに言葉が紡がれる。

逃げる――

その場にいた少女達には、そう聞こえた。実際にそう言ったのか、あるいは単なる呻き声なのかは解らなかった。

いや――それを解釈する暇など、彼女達には無かった。

「ア……が……あああああああああああああッ――
！」

静寂は、ほんの十数秒に過ぎなかったのだ。

再び《雷獣神ライコウ》の双眸には狂気が宿り、手当たり次第に雷撃の雨を降らせる。

尋常な魔力ではない。雷が壁や床に直撃するたびに、その部屋全体を揺るがしているのだ。もし直撃を食らえば、人間であれば容易く粉碎されてしまうだろう。

「はあ……はあ……、三人とも……、逃げ……」

ジャンヌは完全に息が上がっていた。

身体の至る所が傷だらけで、雷の直撃を受けた右足を引きずっている。

「でも……！」

今までの戦いを見守っていたエルフィーナが、悲痛な叫びを上げる。ジャンヌが戦っている時は気付かなかったが、その間に彼女がこれだけの傷を受けているのを目の当たりにしたのだ。

「……私なら大丈夫……です……。時間を……稼ぎますの……で……
…。お逃げ……ください……」

息を上げながら、ジャンヌが答える。

「私も残る……。早く……防いでいるうちに……」

心も雷撃を相殺しつつ、前に出る。彼女もジャンヌほどではない

が、満身創痍だ。外傷は少ないものの、長時間技を出し続けているため、かなり疲労しているのが見受けられる。

そして、ジャンヌと心はそれぞれのパートナーにこりと微笑んだ。

「なりません！ そのようなこと、私が……！ うぐ——」

エルフィーナが前に出ようとした瞬間、彼女の身体が、がくりと落ちた。

彼女の鳩尾に、クロカの拳が入っていた。気絶させたのだ。

「……二人とも」

グツと唇を噛むクロカ。少し強かったのか、僅かにそこに血がにじむ。

「……絶対に生きて」

その言葉を残し、エルフィーナを抱えると、クロカは部屋を後にした。心とジャンヌが清々しい笑顔で頷いたのを、クロカは見逃さなかった。

冷酷——誰かがその場を見ていたら、そう思われるかもしれない。合理的な考え故にこのような選択を選んだのだとしても、冷酷だと思われてしまうかもしれない。

それでもいい。《暗黒の瞳》ドゥンケル・アウゲに属してから、冷酷だの不気味だの、そういった言葉は何度も聞いてきた。慣れているわけではないが、そのようなことを気にしては、自分の仕事は務まらないのだから。

「……あの笑顔……信じて……よかったのかな？」

今まで、人を簡単に信じるという行為を、クロカは理解できずにいた。

性格なのか、不幸な過去の境遇故なのか、それはクロカ自身にも解らなかった。

でも、今は信じた。いや、信じたかった。

「……お願い……絶対に……」

通り抜けてきた雷槍の余波を間一髪避けると、クロカは大地を蹴

って大きく跳躍した。

「はぁ……ちょっと難しい注文かも……」

二人の姿が見えなくなり、雷の射程外に行つたのを確認すると、心は障壁を解き、腰から三日月のように湾曲した細身の鋼鉄を抜いた。東国の武器、刀である。

「弱気だな……だが、確かに……」

ジャンヌも波刃の細剣を構え、《雷獣神ライコウ》を見据える。

どうやら、再び先程と同じようなことが起きているようだ。雷神の女は痙攣しながら、虚ろな瞳を見開いている。

「アが……ぐ……、ワ……タ……し……は……？」

二人は、《雷獣神ライコウ》の身に起こっている異変を、何となくではあるが察知していた。

方向性の定まらない攻撃や、狂気に満ちていた瞳。

そして、現在のように突然訪れる静寂。膝をつき、びくびくと痙攣している。

「何かに操られている……」

それが正しい答えなのかは解らない。それでも、大きな進展ではあるだろう。

尤も、この状況を打破できるかどうかとなれば、それはまた難しくなってくる。

実際、二人には体力があまり残されていなかった。今も、何とか気合いでその場に立っているような状況である。

「……だ……メ……、ハヤ……く、ニゲ……ろ……ッ！」

今度は、しっかりと聞き取ることが出来た。

そう――

《雷獣神ライコウ》は、何とか自我を保ちながら、少女達に言葉を伝えようとしていたのだ。

「逃げろと……云われてもな……足がそろそろ限界かもしれん……」

「でも、戦うとなると……」

事実、彼女達は雷撃の余波を幾度も受けてきたために、全身が痺れていた。

冷静な表情を崩さずにいたが、かなり危険である状況に焦燥感を覚えずにはいられなかった。

「どうするか——」

「どうしよう——」

同時に漏れた独りごとに、お互いに苦笑する。

すると、二人の中で何かが吹っ切れてしまったようだ。

「やるだけ……」

「やってみるしかないな」

ジャン又は剣の周囲に葉を宿らせ、心は刀に揺らめく炎を纏わせた。

同時に、《雷獣神ライコウ》の痙攣が止まる。

「はあああああッ——！」

「いつけえええッ——！」

「があああああああああああああああああああああああああッ——！」

眩い閃光と共に、爆音とも取れるような三人の咆哮が響いた。

ライコウの動きがより一層激しくなる。だが、こちらも周りを気にせずに戦うことが出来るようになったのだ。ジャン又はすぐにライコウを仕留めるべく全力で術を詠唱し、発動させた。

描かれた法陣から、輝きを帯びた無数の葉が放たれる。今までの何倍もの魔力を込めて放っている。その分相手へと届く葉も多くなり、確実にダメージが蓄積していく。

後顧の憂いが無くなったことにより、心も攻撃に転じることが出来た。ジャン又は攻撃によって出来た隙を狙って、刀を振るって火焰を放った。放たれた火焰は真っ直ぐと地面を這い、ライコウの身体を包みこんだ。

「あああああああああああああああああああああああああッ

——！」

それは苦痛による叫びなのか、解らなかった。それでも、確実にライコウの体力を削ることが出来ているのは事実だろう。だが、完全に仕留めてはならない。戦っていて相手の様子を見たところ、このライコウが自分の意思で動いているのではないことが解ったからだ。何者か——恐らくは《タルタロス》に関係する者達が、ライコウに何かの手段を使って操っているのだろう。

だが、やはりある程度のダメージを与えて戦う力を殺がなければならぬ。むしろ、相手が相手のため、下手に力を加減しては逆にこちら側が仕留められてしまう。だから、二人はもてる力の全てを出し切って戦っている。

それでも、決定的なダメージを与えるには至っていない。ジャン又と心の力は、決して弱くは無い。だが、相手が悪いのだ。神々という、一線を画すような存在であるのだから。

どちらにしろ、このまま戦っていても力でねじ伏せられるのは目に見えている。何とかして、こちら側からの術の威力を上げる方法は無いだろうか——

（そうだ。この方法なら私の炎も強くなるし、ジャン又も大技を使えるかも……）

足元に降り注いだ雷撃を紙一重のところ回避しながら、心は刀を納めて、その場から大きく後方へと飛び退いた。

「ジャン又、ごめん。ちょっとだけ、相手を引き付けられる？」

申し訳なさそうに、だが決意は固まったかのように、心はジャン又に向けて叫んだ。

「無理な注文……といたいところだが、そうも言ってられぬからな。任せてくれ」

フツと笑みを浮かべると、ジャン又はライコウへと突っ込んでいった。脚の感覚がなくなっていたが、そのようなことを気にしている暇など無い。苦痛に顔を歪めながらも、彼女は相手を引き付けるべく、術を詠唱していた。

部屋の中に、心地の良い香りが漂い始めた。それと同時に、心は身体の痺れが徐々に消えていくかのような感覚を覚える。

「ありがとう、助かるよ。もうちょっとでいけるよ！」

木々の力を宿した香りには、身体の異変を治す力があるという。それと同時に――

「よし。正気を失っているとはいえ、見事に引つ掛かってくれたよ。うだな」

ライコウは完全にジャンヌへと狙いを定めていた。癒しの力とは別に、相手を引き付けるような芳香を放っていたのだ。相手の闘争心を引き出すものだ。

しかし、それはほんの一時的なものに過ぎない。故に、その香りを放ち続けながら、ジャンヌは円を描くようにライコウの周囲を走りまわった。

その間にも、心の術は完成していた。

「よし、行くよ！」

心が天に手を掲げると、まるで太陽に照らされたかのように部屋の中が眩い光に包まれた。

疑似的な日光を作り出すことで、その場の空間を一時的に晴れ渡らす術だ。

「なるほど……。これなら、あの術をすぐに使える！」

強い日差しのもとでは、木々や炎の力を宿したポケモン達は優位に戦えるのだ。また、雷の精度も半減するため、二人にとって大きなアドバンテージとなる。

ジャンヌは刀身に強力な光を宿らせた。輝きを帯びた波刃の細剣フランベルクを真っ直ぐとライコウへと向けて、彼女は強く念じた。すると、刀身から陽光を思わせるかのような眩い光線が放たれ、それがライコウの身体を包みこんだ。

陽光の力を借りるため、本来ならば長い溜めを必要とする術だ。だが、今は心の術によって、部屋の中に疑似的な強い陽光が作り出されている。故に、溜めを要せずに術が放てたのだ。

「イイイイいやああああアアアアアアアあああああああ
ああッ——！」

絶叫するライコウに向けて、心が追い打ちをかける。

「ハアアアアアアアアアアッ——！」

咆哮と共に、心の全身が炎に包まれる。炎の属性を持つ彼女にとつては、逆に己の力となるものだ。そして、心の身体を包んでいた炎がライコウへと向けて放射された。赤く燃え盛る炎がライコウの全身を包み、轟音と共に小爆発を起こした。

「はあ……はあ……、決まったかな……？」

自分の力をフルに使う術のため、反動として自分の内に眠る魔力を弱めてしまう副作用がある。しかし、長期戦を望めるような状況ではないため、心は躊躇わずにこの術を使った。

「はあ……はあ……っ……、流石に無事では……いられまい……」
息を上げながら、二人は立ち昇る黒煙を見つめていた。

だが——

「ぐっ……」

「あうっ……」

ジャンヌと心は全力を出した後に、少しでも隙を見せてしまったことを後悔した。

黒煙の中から、ライコウが二人の姿を捉えてきたのだ。そして、ライコウの腕は、二人の首を強く握りしめていた。

「くっ……ぬかった……か……」

ジャンヌは何とか腕を振り解こうとしたが、それだけの体力は残っていないかった。

「あ……はう……くるひ……い……」

心も目に大粒の涙を浮かべながら、足をばたつかせている。だが、それも焼け石に水であった。

「あ……ああ……あああああああああああああああああ
あッ——！」

ライコウの瞳が一瞬光り、彼女の腕が眩い電光を帯びた。

そして――

腕を通じて、雷の牙が捕らえられた二人に襲いかかった。
最早、彼女達にそれを防ぐ手立ては無かった。

第30話 雷牙、劈く（後書き）

ふはー、書き足したら結構いった。
それでも話が短い。何故だ。

うーん、やっぱり技名は書いた方がいいのかな？
あえて表記しないスタイルで執筆してるんですが、解りにくいかも。

第31話 冷厳なる雪華

今まで何度も死地を潜り抜けてきた身とはいえ、流石にこの状況を打破するだけの力は、少女達には残されていなかった。

満身創痍——そのような言葉さえ生易しく聞こえてしまうほど、二人の状態はあまりにも惨たらしく哀れなものであった。

「あ……あつ……あぁ……ぐ……」

「ひつ……ひぁ……う……」

言葉にならない弱々しい呻き声が、空しく響く。

そこにあるのは、今までの覇気は微塵も感じられず、大いなる力の前に無惨に倒された、二人の敗者の姿だった。息はあるものの、瞳は見開いており、雷槍により身体のいたるところがズタズタに引き裂かれている。雷撃を受けたことによる痺れはまだ取れておらず、弱々しくヒクヒクと痙攣している。

最早、戦うどころか立ち上がる力さえ残されていなかった。

いや——、この場で少女達に立ち上がれという方が酷かもしれない。それほど、彼女達の受けた攻撃は計り知れないほど強力なものなのだ。

しかし、それでもなお、無様な姿を曝しながらも、少女達は立ち上がるうとしていた。

「っ……あ……つく……この……」

「や……ばい……、から……だ……が……うご……か……」

——やはり、身体が言うことを聞かなかった。

未だ握られている武器を杖代わりに立てようとしたが、そもそも腕が動かなかった。

感覚がないのだ。痛みも無く、ただ痺れだけが身体全体を支配していた。

「くすっ……ふふ……あはははははははは——あああああああああああぁあぁ——！」

哀れな二人の少女を屠るべく、銀髪の雷神は狂気に満ちた咆哮を上げた。

彼女——《雷獣神ライコウ》は何者かの力により操られている——それが解ったところで、今のジャンヌと心に打開策は残されていなかった。全てが、無駄に終わったのだ。

それでもなお立ち上がろうとするのは、自棄になっっているのでもなければ、最期の一矢を報いようとしているわけでもない。

約束したからだ。必ず、生きて帰る、と。

しかし、そんな想いは脆くも崩れ去ろうとしていた。

《雷獣神ライコウ》は高らかに手を振り上げ、手先に心臓の鼓動のような動きを見せる雷の球を集束させた。勿論、彼女の狙いは倒れている二人にトドメを刺すことであつた。尤も、自我を失っている彼女にその気があるのかどうかは解らないが——

もし直撃を受ければ、雷の衝撃と高温によって、身体は跡形もなく消し飛ばされるだろう。

雷撃が二人の少女を捉える——はずだつた。

「させないわよ」

刹那——

二人の目前で、激しい衝撃音と共に、雷撃は四方へと霧散した。

「悪いな、あの場で離脱する羽目になるとは思わなかつたぜ……」

「う……ハーヴィ……殿……？」

「零……紗……？」

途切れ途切れであつたが、二人は懸命にハーヴィ達の名を呼んだ。命に別状はないようだが、かなりの体力を消耗していることは、見るだけでも解るほどだつた。

しかし、この場で手当てをするのはあまりにも危険すぎる。まずは、すぐ近くで暴れ回っている脅威を取り除かなければならないだろう。

「あ……あああああああああああああああああああああ
ああああ——！！」

何度も咆哮しながら、部屋一帯に雷撃を放つ《雷獣神ライコウ》

神と謳われるだけあり、その破壊力は凄まじいものがあつた。しかし、その力は徐々に弱まってきているのを、ハーヴィと漣紗は見逃していなかった。

「なんか、苦しんでいるみたいだな……。正気を保てていないっていうか……」

「……ハーヴィ、あなたは二人を連れて地上へ逃げて。ライコウは、私が何とかするから」

グレイシアの少女は雷神を睨みつけたまま、ハーヴィにこの場から去るように告げる。

彼女が単独で神を止めようとしていることに、彼はすぐに気付いた。

「おい、お前さ……」

無茶だ——そう言おうと思ったところで、何とか留まる。

自分がこの場にいても、何の役にも立たない。下級のポケモンが相手ならともかく、相手は神と呼ばれている存在だ。人間の身では一瞬消し炭にされてしまうのは、火を見るより明らかだ。

「……解った。ただ、約束しろよ？」

そう言つと、ハーヴィはジャンヌを背負い、心を胸元に抱きかかえた。

二人分とはいえ、やはり華奢なためか、あるいは二人が消耗していたためにそう感じたのかは解らなかったが——驚くほど、少女達の身体は軽かった。

「なに？」

ライコウの雷撃が激しく、漣紗はハーヴィに向き直っている余裕はなかったため、背を向けたまま問い返す。

「無茶はするなよ……」

「ふふつ、あなたが言つても説得力が無いわよ」

「ははっ、それもそうか。……それじゃ、頼んだぜ！」

「……それじゃあ、始めましょうか」

自分を目掛けて放たれた雷槍を、冷気の風を発生させて遮断する。しかし、思った以上の魔力を孕んでいるためか、その余波が漣紗の頬を撃ちつけた。

それでも彼女は怯まずに、反撃に転じた。

神を相手に、大きな術を詠唱している余裕などない——そう悟ると、距離を取って無数の氷の針を発生させ、それをライコウへと向けて一斉に放つ。

氷によって作られた針は、驟雨の如くライコウへと降り注いだ。然程ダメージは与えられていないが、少しずつ確実に相手の戦力を殺ぐには十分な術であるといえよう。

神相手とはいえ、だいぶ戦いやすくなっていた。それは、先程までジャンヌと心がライコウの体力を削っていたのが大きな要因であろう。一切ダメージを与えられていないように見えたが、彼女達の戦果は想像以上に大きいものだった。最終的に敗れたとはいえ、漣紗は心の中で彼女達の奮闘に感謝をした。

続いて、漣紗は周囲の水蒸気を操り、部屋の中に雪を発生させた。地上ほどの効果が出せないものの、僅かでも「雪を降らせる」ことは、グレイシアである彼女にとっては重要なことなのだ。何故ならば、種族の特性上、氷や冷氣に関する天候において、優位に動くことが出来るからだ。

尤も、優位といっても、相手から発見されにくくなる程度のものだ。熟練の者であれば、その中からも確実に見つけ出し、仕留めにかかってくることも不可能ではない。しかし、自我を失っている状態のライコウには効いているようで、吹き荒ぶ雪の中、姿を消した漣紗の姿を発見できずにいた。

「今のうちに、相手の状況をしっかり見ておかないと……」

この状況から攻勢に転じれば、すぐに仕留めることも可能だろう。手当たり次第に雷撃を放っているため、相手の軌道を読むのは容易

く、高度な術を詠唱する余裕も充分に確保できている。

しかし、それでも澪紗は攻勢に転じようとしなかった。

目的は斃すことではなく、正気に戻すことであるからだ。そのためには、正気を失っている要因を探さなければならない。

——いや、大体の目処はついていた。

雪に隠れながらライコウの背後に回った結果、彼女の首筋に「何か」が埋め込まれているのを見つけたからだ。恐らく、これに違いない——

「ひぐつ……あ……あああああああああああああああ
あああつ！」

《雷獣神ライコウ》へと近づく前に、彼女の足元を氷の蔦で縛り付ける。これで、暫くの間身動きを取ることは出来ないだろう。

動きを封じられながらも、ライコウの攻撃は止まなかった。次々と落ちてくる雷を回避あるいは相殺しつつ、ライコウとの間合いを詰めていく澪紗。首筋に埋め込まれている何かを詳しく目視できる位置へと近づく。

首筋には、何かの生き物のような黒いものが、鼓動のように蠢いていた。また、それは首筋を中心に何やら根のような物を張っており、一種の植物の種のように思える。

「何なの……これ……」

一言で表現するならば、おぞましい、という言葉が相応しいだろう。

独特の動きを見せるその奇妙な黒い種は、この世のものではないだろう。澪紗はそれが何であるか、初めて見るものであったため解らなかった。

ただ、初めて見る彼女でも、これだけは言えた。

これは、駄目だ。

イケナイモノである、と。

刹那——、澪紗は自分の首元に強い圧迫感を覚えた。そして、自分が僅かでも集中を解いてしまったことを強く後悔する。

「つぐ……うう……く……あ……」

何が起こっているのか、その身を以て思い知った。

《雷獣神ライコウ》は漣紗の姿を捕捉し、振り返りざまに彼女の細い首を掴んだのだ。

幸い、相手の力はだいぶ弱まっているため、何とか息は出来るが——もしライコウが全力を出していたとしたら、窒息どころか首を圧し折られていてもおかしくない。そう思うと、漣紗は背筋が凍り付くような恐怖を覚えた。

「うぐっ……ゆだ……ん……した……わ……」

弱まっているとはいえ、このまま首を絞められ続ければ、何れはオチてしまう。

何とか振り解こうとするが、首を絞められて宙に持ち上げられた体勢では、思う存分に力を発揮することは出来ない。ましてや、腕っ節の弱い漣紗が無理な体勢から振り解くなど、無理な話であった。此処で身を委ねてはいけないと、意志を強く持つ。しかし、首締めは徐々に彼女の意識を削り落していった。

思考が働かない——追いつめられるだけで、こんなにもなるものなのだろうか——

自分の力の弱さを心の中で嘆く漣紗に、ライコウは更なる追い討ちをかける。

「っ——！」

ライコウの瞳が一瞬光り、彼女の腕から一斉に魔力が流れる。そして——

「くっ……きゃあああああああああああああああああああ
ああっ——！」

あまりの衝撃と激痛に、漣紗は思わず悲痛な叫び声を上げる。全身の血液が沸騰するかのような感覚。ライコウの腕から迸る電撃が漣紗の身体を駆け巡り、全身を、外側から、内側から、至る所から痛めつけていく。

「っ……ひぐっ……あ……うう……あ……くっ——！」

恐らく、ジャンヌと心も今の技によって倒されたに違いない。他の技より威力がケタ違いであることは、明らかだ。しかし、オチそうだった意識を、その強烈なダメージが何とか繋ぎ止めてくれた。何度も痙攣し、苦痛に顔を歪めながらも、澪紗は反撃に転ずる。

澪紗はライコウの腕に手を当てると、強く念じ始めた。

普段の力は発揮できないものの、これでよかった。何故ならば――
「はあ……はあ……あれを……仕留めれ……ば……」

澪紗の手が触れた場所が、僅かに凍り付く。そこから、氷が何かの生き物かのように、ライコウの腕を這っていった。

そう、目標は勿論――

「ぐぎつ、あああああああああああああああああああああ
ああつ――！」

氷のツタの先端が、ライコウの首筋に根を張っている黒い種子に触れると、彼女は耳を劈くかのような絶叫を上げた。そして、腕の力が緩んだ隙に、澪紗はライコウの腕を振り解く。しかし、ライコウが再び流してきた電撃を回避することは出来ず、直撃を食らってしまう。そのまま澪紗は、気を失うまではいかなかったが、地面に投げ出されてしまった。

「くはつ……ぐ……うう……」

しかし、無駄には終わらなかったようだ。

ライコウの首筋から、根を張っていた黒いモノは音を立てて地面に落ちる。すると、今まで絶叫を上げて暴れ回っていたライコウの動きが、嘘のように止まったのだ。

依然、黒いモノは奇妙な動きを見せていた。まるで何かを探し求めるかのように、根をシュルシュルと伸ばしてくるのが解る。

「え……嘘……？」

黒いモノが、その触手を自分に向けて伸ばしてくることに、澪紗は気付いた。

どのようなものであるか、それは今までのライコウの様子を見れば解った。

駄目だ。アレに捕まっては――

何とか起き上がるうとするが、相当な体力を消耗したためか、身体が動かなかった。また、術を放とうとするも、それだけの力も残されていなかった。

「冗談じゃ……ないわ……。あんなのに……」

しかし、黒いモノは澪紗の目前で、白い閃光と共に消失した。

「え……？」

何が起こったのか――確かめようと思ったが、澪紗の意識はそこで途切れた。

「眷族、《女教皇》……。お前の力が無ければ、私は完全に自壊していた。感謝する」

部屋の中に響く、勇ましい女の声。

雷雲を司る銀髪の雷神は、正常な意識を完全に取り戻した。

*

「うん、傷は治ったし、明日のお昼ごろまでには意識は戻ると思うよ」

ジャンヌと心の身体は、大きな水塊に包まれていた。この水塊はスイクンの術によるもので、傷ついた身体を徐々に治していくという、治癒系の術の一種である。一部の水の魔力を持つ者にしか使えない術のため、如何にスイクンが優れた存在であるかが解る。

彼女の言うとおり、二人の傷は完全に癒えていた。しかし、極度の疲労のためか意識は戻っておらず、水塊の中で深い眠りについていた。

「……よかった……ありがとう」

「ありがとうございます！」

安堵の表情を浮かべ、エルフィーナとクロ力は水の神に礼を言った。

「うつん、お姉ちゃんを助けに来てくれたんだし、お互い様だよ」

「……でも、わたし達は何も……」

彼女達は、そのような会話をしていただろうか――
気掛かりではあったが、今は自分のパートナーの方が気掛かりだった。

「つたく、無茶すんなって言ったじゃねえかよ莫迦が」

ハーヴィはおぶっているパートナーに愚痴をぶつけるが、返事は無かった。ただ聞こえてくるのは、気持ち良さそうな寝息だけだ。

「ありがとう。お前達の力が無ければ、私は完全に奴らに堕ちていた」

「あー、俺からも感謝しとく。姉貴を助けてくれて、ありがとな」
ハーヴィに向けて、炎の神と雷の神は、心から礼を言った。

「依頼のついでだったんだ。気にすんな。それより、お前達の身に何が起こってたんだ？」

色々と聞きたいことがあった。

「あー、話すと長くなるんだよなもう……」

エンティは面倒臭そうに、小指で耳の穴を穿りだす。

彼の話によると、《タルタロス》の者達が何やら神に対する反逆を企てているのだという。彼らは、その計画のひとつに利用されたらしい。

本来ならば、抵抗するどころか返り討ちにするだけの力は秘めているのだが、何やら《タルタロス》に手を貸している「神」がいるのだという。また、《神の眷族》の数人も彼らに協力しているため、今回のような事態に陥ってしまったらしい。

「そして、奴らは妙な兵器を作り出そうとしている。私を操っていたアレ……連中は、『破壊の遺伝子』と呼んでいるらしいが……。ロストテクノロジーが絡んでいることも考えられるか。まさかとは思うが、アレが使われているとなると、世界の情勢も危ういか……？」

胸元で腕を組んで、ぶつぶつと推測を始めるライコウ。

「ああ、悪い。お前に忠告したいことがあったのだが……無駄なよ
うだな」

ふと我に返り、ライコウはハーヴィを見て、嘆息をつく。

「忠告？」

「いや、お前と共にいる《神の眷族》——《女教皇》についてのこ
とだ。あまり関わるなと言ったところで、聞く気はないのだろうか
らな」

「その通り、聞く気なんかねえよ」

「ふふっ……。それで、お前達はこれからどうする？」

「さあな、決めてねえ」

目的はあった。

だが、それは言葉にするにはあまりにも抽象的で大雑把なものだ。
「……宛ても無く、よろず屋でもやりながら旅でもするさ」

第31話 冷厳なる雪華（後書き）

第三章がこれにて終了。やっぱり短い気がする。

一話の平均がだいたい5000〜6000字くらいなんですよねえ。字数がすべてではないとはいえ、もう少し頑張れないものか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0737u/>

Atonement

2011年7月30日03時20分発行